新潮文庫

コンタクト

下巻

カール・セーガン
池央耿／高見浩訳

新潮社版

4265

CamScannerでスキャン

目次

第二部　マシーン

第四章　パ ピ ロ ン……一一

第五章　調和振動子……四三

第六章　エルビウムの車知……七九

第七章　オゾンの長老たち……一一三

第八章　蟻 の 夢……一四一

第九章　超統一理論……一六一

第三部　銀河系

第一章　裸の特異点……一八七

第二章　グランド・セントラル・ステーション……二一一
第三章　因　果　律……二五九
第四章　ギルガメシュ……二九一
第五章　プログラム修正……三〇三
第六章　画家の署名……三三九
著者あとがき……三五四
訳者解説……三五七

主要登場人物

エリナ（エリー）・アロウェイ……地球外知的生物との交流を夢とし、その探査に情熱を注ぐ女流天文学者

デイヴィッド・ドラムリン…………エリーの師。地球外知的生物の探査（ＳＥＴＩ）活動の理論的支柱の一人

ピーター・ヴァレリアン……………エリーの先輩格の電波天文学者

ケネス（ケン）・ダヘーア…………米大統領科学担当顧問の生物学者

ヴェイゲイ・ルナチャルスキー……ソ連の代表的な電波天文学者

アボネバ・エダ………………………〝超統一理論〟を完成させた、ナイジェリアの天才的物理学者

デヴィ・スハヴァティ………………インド人分子生物学者

西喬木（シー・チャオム）…………中国人考古学者

パーマー・ジョス……………………米国キリスト教根本主義派（ファンダメンタリズム）の重鎮

ソル・ハッデン………………………ハイテク関連の最先端企業〈ハッデン・サイバネティックス〉の総帥

ラスカー大統領………………………〈メッセージ〉受信時の米国女性大統領

CamScannerでスキャン

第二部　マシーン（続）

CamScannerでスキャン

〈全能の教師〉は、宇宙の構造における科学の原理を示すことによって、人間に研究と模倣の重要性を教えた。〈彼〉は、〝われらがもの〟とわれわれが呼ぶこの天球の住民たちに対して、こう述べられたのではなかろうか――〝わたしは人間のすみかとして地球を創(つく)った。人間に科学と芸術を教えるために、星の輝く天空を与えた。こんどは人間が自分自身の慰藉(いしゃ)を見出(みいだ)し、わたしの寛大さを範にして、互いに慈(いつく)しみ合う番である〟。

――トマス・ペイン『理性の時代』(一七九四)

第四章　バビロン

CamScannerでスキャン

最も卑しむべき者たちを道連れとして、私はバビロンの大路を歩いた……

――アウグスティヌス『告白』第二巻第三章

CamScannerでスキャン

〈アーガス〉の中枢に位置する超大型コンピュータＣＲＡＹ21は、ヴェガから送られて来る毎日のデータを、初期に受信された信号のうち、これを羊皮紙の重ね書きに譬えれば、その第三層に当る記録と比較するようにプログラムされていた。具体的には、いつ果てるとも知れず、一見何の脈絡もない0と1の羅列と、それ以前の、同様に漠としたデータの集合が逐次、自動的に照合されたのである。これは、今もって解読されていない暗号文を文節に区切り、無数の文節を相互に突き合わせることによって、そこに言語法則を見出そうとする、気の遠くなるような統計作業の一過程だった。0と1の比較的短い組合わせで頻出するものが幾つかあった。分析家たちはそれらの組合わせを、前途に光明を祈る思いで「単語」と呼んだ。一方、何千ページもの間にただ一度しか登場しない組合わせもまた少なくなかった。こうした統計的暗号解読手法をエリーはハイスクール時代に学んで知悉していたが、国家安全局の情報部から提供されたサブルーチン、すなわち、通信情報のために特別に開発された独立プログラムは極めて水準の高いものだった。大統領命令によってはじめて〈アーガス〉での使用が許されることになったこのサブルーチンは、機密保持のため、精密な検査にかけら

れると自己破壊するように組み立てられていた。

かくも優れた人間の創造力が、他国の通信を盗み読むために費やされていると知って、エリーは暗澹とせざるを得なかった。地球を二分する米ソの対立は、このところ確かに緊張緩和に向っている。とはいえ、依然として対立が世界に暗い影を落している現実に変りはない。世界各国が軍事組織に莫大な予算を注ぎ込んでいるというだけの話ではない。各国の軍事予算は今や合わせて年間三兆ドルに迫り、それ自体、他にいくらでも数えることができる人類にとっての焦眉の急がおろそかにされる結果を招いているのみならず、なお悪いことに、かけがえのない多くの頭脳が兵器競争に駆り出されているのだ。

現在、世界中の科学者のほぼ半数が何らかの形で、地球上に約二百を数える軍事産業に雇われていると推定されている。それらの科学者たちは決して物理学や数学の博士課程の落ちこぼれではない。エリーの同僚の中には、教え子が兵器会社の研究所に引っ張られて餞の言葉に窮し、僅かに弟子が優秀な人材であることを思って自ら慰めている例もあった。「多少とも見どころがあれば、せめてスタンフォードから助教授の口くらいはかかるだろうに」ドラムリンがそんなふうに言うのをエリーは聞いたことがある。その複雑な心中は察してあまりあった。むろん、その性格や心情から、科学や数学の軍事的応用に生甲斐を見出す者もまたないではない。大規模な爆発を眺めて喜ぶ人種などはその例だろう。あるいは、生来喧嘩を好まない内気な少年が学校でさんざんいじめられ、その怨みが昂じて、長ずるにおよんで軍事に能力を発揮しようと考えるに至ったかもしれない。パズルを解く趣味が病膏肓に入っ

CamScannerでスキャン

て、古今未曾有の複雑な軍事暗号解読に執念を燃やす人間もいよう。政治的な動機も往々にして人を武力に駆り立てる。何十年も前の国際紛争、移民政策、戦時下の圧政、警察の弾圧、国家のプロパガンダ。軍事産業に携わる科学者たちの過去に、そうしたさまざまの軋轢がなかったとも限らない。動機は人それぞれで一概には論じられまいが、彼らの多くが非常に有能な科学者であることは間違いない。エリーはそれらの優れた能力が挙って人類の福祉と世界の平和に向けられることを念じてやまなかった。

彼女は不在中の分析の成果に目を通した。統計分析の資料は机上に山をなしていたにもかかわらず、〈メッセージ〉解読は一向に捗っていなかった。何とも、気が滅入ることである。

ケンの態度にエリーは傷つき、憤慨していた。やりきれない気持を訴えることのできる相手、それも、なろうことなら親しい女友だちがいればいいのだが、〈アーガス〉ではそんな付合いはなかったし、その種の私事に電話を使うことも躊躇われた。エリーはやっと週末の隙を盗んでオースチンへ出向き、大学時代の友人、ベッキー・エンンボーゲンに会った。ところが、いつもは痛烈な毒舌で容赦なく男を切って捨てるはずのベッキーが、意外にも、ケンについては穏やかだった。

「何といっても、あの人、大統領科学顧問でしょう。それに、今度のことは歴史はじまって以来、空前の大発見ですもの。あの人を責めるのは気の毒よ」ベッキーは言った。「そのうち、きっともと通りになるわよ」

もっとも、ベッキーは国立ニュートリノ観測所の開所式で一度会って以来、ケンに魅力を

感じている一人だったから、舌鋒も鈍りがちなのかもしれなかった。ケンの地位と権力を認める気にもなっていただろう。ケンが、もし、一介の分子生物学教授風情でエリーに惨めな思いをさせたとしたら、ベッキーは手心も加えず、徹底的に彼をこきおろしたに違いない。

パリから戻って以後、ダヘーアは抜きさしならぬ自分の立場を強調して、しきりに弁解に努めた。責任はあまりにも大きく重く、おまけに不馴れな政治上の難題も多々あって、神経が磨り減っていた、と彼は言った。アメリカ代表団の団長として、また、本会議の共同議長として、エリーとの関係が明るみに出ては体面にかかわることだ、とも言った。キッツは非協力的でおよそ頼むに足らず、ケンは会議中、ほんの数時間しか寝られない夜が続いた……。いちいちもっともなことながら、エリーにしてみれば、弁解も度が過ぎると聞くに堪えなかった。が、それはともかく、ひびが入ったまま、二人の関係は続いていた。

★

ウィリーはまたしても、真っ先に異変を知るめぐり合わせとなった。俗に墓場の見張番と呼ばれる、深夜から未明までの勤務時間中のことだった。後にふり返って、ウィリーはこのいち早くの発見を、NSA（国家安全局）のプログラムを与えられた超高速コンピュータの演算能力よりは、むしろ、ハッデンの手で新しく開発された文脈認識チップの機能に負うところ大であると述べている。それはさて措き、ヴェガが地平線に低く傾き、あと一時間もすれば夜が明けるという頃、コンピュータは極く控え目に警報を発した。ウィリーは小さく舌

打ちして、読みさしの本を脇へ置いた。最近出たばかりの、高速フーリエ変換分光学の解説書だった。顔を上げると、表示装置のスクリーンに見過しならぬ文字が並んでいた。

報告。通信文41617－41619。ビット不整合　0／2271。相関系数0・99＋

見る間にページ番号は41619から41620、41621と進んだ。警報以後も、画面の二進数字は目にも止まらぬ速さで流れ続けた。ページが進むにつれて相関系数は増大した。それは、コンピュータが照合する二つのデータ群の間に明らかな相関関係があることを意味していた。さらに二ページ待って、ウィリーはエリーのアパートと観測所を結ぶ直通電話に飛びついた。

熟睡していたエリーは一瞬自分がどこにいるのかわからなかったが、すぐに枕もとの明りをつけた。ウィリーの報告を聞き終えると、彼女は直ちに〈アーガス〉の幹部研究員を呼集するように指示し、ダヘーアも観測所内のどこかにいるはずだから、自分が捜すと言った。実は、捜すまでもなかったのだ。彼女は隣で眠っているケンの肩を揺すった。

「ケン、起きて。ふりだしへ返ったらしいわ」

「何だって？」

「〈メッセージ〉が、頭へ戻ったのよ。まだ、はっきりそうとわかったわけじゃあないけれ

ど、ウィリーがそう言っているの。わたし、今からすぐ行ってみるわ。あなた、十分くらい間を置いて、生物学本館から駆けつけたことにすれば？」

「ふりだしへ返るはずがないだろう。まだ解読の鍵は摑めていないじゃないか」

ケンの声を背後に聞き捨てて、エリーはアパートを飛び出した。

スクリーン上を、同じ組合わせの0と1の配列が二行に走っていた。今まさに受信されつつあるデータと、一年前に〈アーガス〉が受け取った通信文が即時に照合されているわけだった。齟齬があれば、コンピュータがたちどころに摘出するはずである。これまでのところ、二つのデータは完全に一致している。受信の誤脱も、送信エラーもないと判断してよかった。また、ヴェガと地球の間に小規模で密度の高い星間雲があって、時に信号を呑み込んだとしても、それは長い間に極く稀に起ることであって、通信文の内容にまで影響する気遣いはなさそうだった。〈アーガス〉は〈ワールド・メッセージ・コンソーシアム〉に参加している十数カ国の電波望遠鏡と実時間通信網で結ばれている。〈メッセージ〉反復の報は直ちに西回りに、カリフォルニア、ハワイ、南太平洋上の〈マーシャル・ニェジェーリン〉号、シドニーの観測基地に伝えられた。ヴェガがそれらの基地のどこかの守備範囲にある時に異変が発生したとすれば、同様に、〈アーガス〉は直ちにそのことを知らされたはずである。

解読の鍵が摑めないことが何とも歯痒く、苛立たしかったが、観測者たちを当惑させたのはそれだけではなかった。〈メッセージ〉の反復が発見された時、ページ番号は四〇〇〇〇台から、いきなり、一〇〇〇〇台へ飛んだのだ。〈アーガス〉はヴェガからの信号がはじめ

て地球に達すると、ほとんど同時にこれを受信した。この点は、まず間違いないところである。信号は極めて強かったから、小型の無指向性電波望遠鏡でも充分に捉えることができたろう。にもかかわらず、〈アーガス〉の望遠鏡がヴェガに向けられていた、まさにその瞬間に信号が届いたことは、驚くべき偶然と言わなくてはならない。が、それにしても、通信文が一〇〇〇ページ台からはじまるというのは、いったい何を意味しているのだろうか。それ以前の一〇〇〇ページは受信されなかったのだろうか。それとも、本のページを1からはじめるのは地球という、宇宙の片隅の遅れた文明の慣習にすぎないのか。あるいは、この一連の番号はページ数ではなく、何か別のものを意味する表示ではあるまいか。さもなければ――エリーは何よりもこれを恐れていたのだが――地球人の思考と異星人のそれの間には、何か根底的な、とうてい埋めようもない隔たりがあるのではなかろうか。もし、それが事実だとしたら、解読の鍵があると否とにかかわらず、〈メッセージ〉を理解する地球側の能力には自ずから限界があるという、はなはだ悲観的な結論に至らざるを得ない。

〈メッセージ〉は正確に反復され、欠落は残らず埋まった。しかし、解読の目処はまったく付かず、一語として意味を摑める言葉はなかった。信号を送り出している文明は何事につけ極めて用意周到である。それほど物に行き届いた異星人が、ついうっかりして解読の鍵を送り忘れたとは、まず考えられないことだった。オリンピックの映像や、〈マシーン〉内部の設計を見ただけでも、先方が地球に狙いを定めていることは明らかである。人類が〈メッセージ〉を解読するという前提もなしに、異星人がかくも複雑な内容を持つ厖大な情報を送信

して寄越すはずがない。だとすれば、地球人は何かを見落しているに違いない。ほどなく、羊皮紙で言えば第四層に当る情報がどこかに隠されているとする考え方が支配的となった。問題は、それがどこかということである。

十二面体の図版は全八巻の大型豪華本(コーヒーテーブル・ブック)の体裁で公刊され、いくばくもなく世界中に流布(るふ)した。地球上のいたるところで、人々は図版を眺(なが)めて絵解きを試みた。十二面体と、生物とおぼしきものの姿はとりわけ人々の関心をそそった。〈アーガス〉へは一般から数多く卓抜な解釈が寄せられ、分析家たちはそれらを仔細(しさい)に検討した。当然ながら、奇想天外な解釈も続出して、こちらは主として週刊誌上を大いに賑(にぎ)わせた。〈メッセージ〉の送り手が夢想だにしなかったであろうことに、十二面体の絵を種に大衆を食いものにしようという新手(あらて)の商売も雨後の筍(たけのこ)のように登場した。十二面体古代神秘教団なる新興宗教が名乗りを上げ、ある者は〈マシーン〉はUFOだと言い、またある者は予言者エゼキエルが見た輪だと言った。ブラジル在住のさるビジネスマンは天使から〈メッセージ〉と図版の意味を教えられたと言い、その啓示体験を自費出版して世界中に売りまくった。図版は数多く、いずれも謎(なぞ)に満ちたものだったため、ありとあらゆる宗教が星からの〈メッセージ〉に自分たちの聖像の提示を見出(みいだ)したとしても不思議はなかった。〈マシーン〉の全断面図は一見、菊の花を思わせる形で、これは特に日本人の熱狂を煽(あお)った。もし、どの図版にも人の顔を彷彿(ほうふつ)とさせるものがあったなら、救世主待望は発火点の狂乱に達したことだろう。

現に、驚くほど多数の人々がキリストの再臨を信じ、その時に備えて事業や商売を畳みは

じめていた。工業生産性は世界的に低下した。貧困の追放に役立てようと、全財産を擲つ者も少なくなかった。しかし、世界の終末は訪れず、無一物となった彼らは慈善団体や国の援助にすがらなくてはならなかった。慈善団体の多くがその財源を主として篤志家の寄付に頼っていたから、博愛主義者が自分自身の喜捨に助けられて細々と暮らす破目になる例も珍しくなかった。慈善団体や宗教団体の代表団が各国の政府首脳を訪れ、キリストの再臨までに地上から住血吸虫や饑餓を一掃しなければ、人類はどんな禍害に見舞われないとも限らないと訴えた。一方、もし本当にこの先十年、世界に狂乱の嵐が吹き荒れるなら、どさくさ紛れにひと儲けし、あるいは国家が利益を貪る千載一遇の好機とばかり、密かに謀議を凝らす者たちもいた。

一部では、もともと解読の鍵などありはしないと論じられていた。〈メッセージ〉は人類に、自分たちがいかに卑小な存在であるかを思い知らせるものであり、さもなければ、人類を狂気に駆り立てることを目的としているのだという解釈である。新聞の論説には、我々は自分たちが考えているほど知性が高くはないとする思潮が目立ち、国家から莫大な援助を受けていながら、この火急の事態を前になす術もない科学者たちへの批判も散見された。ヴェガ星人たちは人類を分不相応に買いかぶっていはしないかと懸念する向きもあった。宇宙には、すでにこれまでにも同じように接触を受けた先進文明が多く存在し、そのいずれもがたちどころに理解した何かがあるのではなかろうか。銀河系の歴史はじまってこの方、どの文明もが例外なく理解した何かがありながら、人類だけがそれを見逃しているのではなかろう

CamScannerでスキャン

か。一部の文明批評家たちは、宇宙における人類のこの不面目な姿を説くことにとかく熱心だった。それは、つまりは彼らがかねてから人間について語り続けて来たことだった。そんな中で、エリーは考えあぐねた末に、人の知恵を借りることにした。

★

一行は領主差向けの護衛の案内で、人目を避けて〈エンリル門〉から街に入った。調達局の警備官らは護衛の人数が増えたにもかかわらず、というよりは、むしろそのために、かえって浮かぬ顔だった。

日はまだ暮れきっていなかったが、舗装されていない街路には篝火や灯油ランプが点り、ここかしこに松明が揺れていた。オリーヴ油を商う店の前に、大人がすっぽり入れそうな耳付の大甕が二つ左右に並び、楔形文字の看板が掲げられていた。その近くの役所と思われる建物の壁は、古代アッシリアの王、アッシュールバニパルの時代のライオン狩りを描いた見事なバスレリーフに飾られていた。一行は〈アッシュール神殿〉の前の人込みを避けて大きく迂回した。エリーは松明に照らされて目を遮るものとてない大路の向うに、はじめて、階段を刻んだピラミッド型の寺院、〈ジグラト〉を見た。写真からは想像も付かない、実に息を呑むばかりの景観だった。見馴れぬラッパで勇壮な旋律を吹き鳴らしつつ、三人の男が一頭立ての馬車で駆け過ぎた。馭者はフリジアふうの頭巾をかぶっていた。創世記の教訓説話に材を取る中世絵画にも似て、〈ジグラト〉の天辺は低い黄昏の雲に隠れていた。一行は

〈イシュタール大路〉から脇へ折れ、横手の路地から〈ジグラト〉に入った。専用エレベーターに乗ると、案内役が「四十」と記された最上階のボタンを押した。算用数字は使われていなかった。そして、念を押すかのように、明滅するランプの小窓に「神々」の文字が浮かんだ。

ハッデン氏は間もなく会見に応じるが、その前に何か飲みものは、と言われてエリーはこの場所の風評を思い出し、いくらか気取って辞退した。目の下にバビロンの大都は拡がっていた。遠い過去の歴史に名を留めるバビロニアの帝都を復原したという街の眺めは、聞きしに勝る絶景だった。昼間は各地の博物館、学校、旅行代理店の仕立てた団体見学の観光バスが引きも切らずに〈イシュタール門〉に乗りつける。見物客たちはそこで時代劇の群衆まがいの衣裳を着せられ、一刻古都に遊ぶのだ。することに万事抜かりないハッデンは、昼間の見物客からの上がりをそっくり、ニューヨークとロングアイランドの慈善団体に寄付している。昼のバビロン見物は大いに人気を集めて、評判も高い。一つには、夜のバビロンを訪ねることなど夢にも考えない人々にとって、見物は高尚な楽しみであるからだ。いや、彼らとて、夢くらいは見るかもしれない。

夜のバビロンは大人の歓楽境と言われている。贅をつくした道具立てもさることながら、その規模といい、とりどりの趣向といい、このバビロンにくらべたら、ハンブルクのレーパーバーンなどははるかに見劣りがするほどである。今やバビロンはニューヨーク大都市圏最大の観光地であり、収益も群を抜いている。ハッデンがいかにしてニューヨーク州バビロン

市の有力者たちを説得し、市および州当局に陳情して売春規制法の緩和を実現させたかは周知のことである。マンハッタンの中心部から〈イシュタール門〉まで、直通電車で三十分。エリーは警備担当者の涙ながらの反対を押しきって、この電車で行くことにした。乗ってみると、夜のバビロンに向う遊興客の何と三分の一は女性だった。車内には落書き一つなく、強盗に襲われる心配もまずなかった。もっとも、ニューヨークの地下鉄網にくらべて白色雑音ははるかに少なく、その点はいささか物足りなかった。

ハッデンは米国工学アカデミーの会員だが、エリーの知る限り、会議に出席したことはただの一度もない。直接会うのも今日がはじめてである。とはいえ、何年か前に広告審議会がハッデンを社会的に葬ろうと策動したことがあって、彼の顔は全米にあまねく知れわたっている。当時、マスコミに載ったハッデンのふてぶてしい顔写真には売国奴のキャプションが添えられていたものだ。そんなわけで、エリーは気持の備えは充分なつもりでいたのだが、傾斜したガラスの壁越しにバビロンの夜景を眺めながら、とりとめもない夢想にふけっているところへ、背の低い小太りな男が現われて手招きをした時には、つい、ぎくりとした。

「やあ、これは失礼。わたしは人に恐がられる覚えはないのですがね」

びっくりするほど音楽的な声だった。実際、五度音程で朗唱するかのような話し方である。男は今さら名乗るまでもないという態度で、細めに開けたままのドアの方へ顎をしゃくった。みだりがわしい下心があろうはずもない。エリーは無言で隣の部屋に入った。

ハッデンは古代都市の精緻な模型を飾ったテーブルの前にエリーを案内した。バビロンほ

どの壮麗な趣きはなかった。
「ポンペイです」ハッデンは説明した。「この、競技場が目玉でしてね。ボクシングが規制されて、アメリカには健全な血を見るスポーツがなくなりました。血を見るのは大切なことです。アメリカ人の血管から毒気を取り除く効果がありますからね。サクラメントにポンペイを復元する計画で、設計も終えて、認可まで取ったところへ持って来て、この始末です」
「この始末、とおっしゃいますと?」
「剣奴の闘技はいかんというのですよ。古代ローマでは、奴隷に武装させて、闘技場で死ぬまで闘わせました。野獣と闘わせることもありました。それが剣奴の闘技ですが、つい先だって、サクラメントから連絡がありまして、カリフォルニアではこの闘技を禁止する法案が州議会に上程されているそうです。残酷な見世物はまかりならん、というんですが、一方で、州政府は新しい超高層ビルの建設を許可しています。ビルを一つ建てる間には、作業員が二人や三人、必ず死にますよ。労働組合も、建設会社も、それは承知です。石油会社や、ビバリー・ヒルズで肥え太った弁護士の事務所が入るビル一つ建てるだけのためにですよ。もちろん、剣奴の闘技をやれば死ぬ者も出るでしょう。わたしどもでは、ローマのレーティアーリウスに倣って、敵を絡め捕る網と三叉の槍で試合をさせることを考えています。この方が、剣よりも見た目がいい。いずれにしろ、州議会は物事の優先順位ということをまるで理解していません」
ハッデンは梟のような目つきをして笑い、エリーに飲みものを勧めた。彼女はそれを断わ

った。

「そうですか、〈マシーン〉のことで、わたしに話がおありだということですね。わたしも、〈マシーン〉のことで、あなたに話したいことがあります。お先に、どうぞ。〈メッセージ〉解読の鍵がどこにあるかの問題でしょう」

「わたくしども、今度のことについて見識をお持ちの方々にいろいろと御協力をお願いしておりますが、あなたは今までに何かと独創的な技術を開発なさっておいでですし、特に、〈メッセージ〉の反復を確認するに当っては、あなたの文脈認識チップが大きな役割を果したことでもありますから、あなたはヴェガ星人の立場で物を見ることがおできになるのではないか、解読の鍵について何らかの判断をお持ちではないか、とそんなふうに思いまして、お話をうかがいにまいりました。大変お忙しくていらっしゃることは存じております。お邪魔するのは心苦しいのですが……」

「ああ、いや、お気遣いにはおよびません。たしかに、わたしは非常に忙しい人間です。今、仕事を整理しようとしているところでしてね。というのは、生活をがらりと変える考えでおりまして……」

「千年至福に備えてですか?」エリーは彼が、S・R・ハッデン社やウォール街の証券会社、遺伝子工学研究所、ハッデン・サイバネティックス、それにバビロン等の資産を処分して貧しい人々に分け与えるところを想像した。

「いえいえ、わたしが考えているのはそのことではありません。〈メッセージ〉については

わたしも大いに関心があります。あれこれ想像をめぐらすのは楽しいことですな。意見を乞われるとは光栄です。図版は見ましたよ」ハッデンは市販された図版八巻を無造作に拡げたテーブルを指さした。「あの中には実に素晴らしいものがたくさんあります。しかし、解読の鍵が隠されているとは思えませんね。図版の中には、それはない。というより、どうしてあなたは〈メッセージ〉の中に鍵があるとお考えなのか、そこがわたしには理解できません。鍵は火星か冥王星か、あるいは、オールト彗星雲あたりにあって、今から何百年か先へ行って、やっと人間はそれを発見するということだってあり得るんじゃあありませんか。現時点では、とにかく、ここに極めて技術的に水準の高い〈マシーン〉がある、ということがわかっているだけです。設計図と、三万ページにおよぶ説明書もあります。しかし、仮にこれを読みこなせたとしたところで、今の地球の技術力で〈マシーン〉を造れるかどうか、これは何とも言えませんな。ですから、いずれは造らなくてはならない、という前提でこれから何世紀か時間をかけて、技術をその水準まで持って行けばいいのです。解読の鍵がないことは、われわれより後の世代の進歩を妨げる条件にはなりません。人類は何世代もかかって解決するべき一つの課題を与えられたのです。考えてみると、これはそんなに悪いことではありませんね。それどころか、大いに結構なことかもしれませんよ。鍵を見付けようとするのは間違いではありませんかね。鍵はない方がいいのかもしれない」

「いいえ、わたくしは今すぐにも鍵を見付けたいのです。向うはいつまでも待ってくれるとは限りません。地球から何の応答もないというので接触を絶たれてしまったら、後々まで悔い

を残すことになります。それだったら、はじめから接触がない方がまだましです」

「なるほど、あなたのおっしゃることにも一理ありますな。それはともかく、わたしも考えられる限りの可能性を検討してみましたよ。あまり脈のありそうもないものから、多少は見るべきところのあるものまで、いろいろです。脈のない方から行きましょうか。解読の鍵は〈メッセージ〉の中にあるけれども、データの伝送速度が大幅に違う、というのはどうですか。例えば、もう一種類、別の情報が一時間に一ビットで送られているとしたら……検出できますか？」

「確実にできます。もともと、受信機の長期のドリフトは定期的にチェックしていますから。それに、一時間に一ビットだとしたら、〈メッセージ〉が一巡する間の情報量は、せいぜい、一万……ええと、二万ビットそこそこでしょう」

「つまり、鍵が〈メッセージ〉にくらべてはるかに単純な内容でない限り、これは成り立たないということですね。ところが、あなたの考えでは、それはあり得ない。わたしも、そう思います。じゃあ、反対に、伝達速度が非常に速かったらどうですか？ 〈マシーン・メッセージ〉一ビット毎に、鍵となる情報のデータ百万ビットが隠されていないと言いきれますか？」

「でも、それだったら帯域幅が桁はずれに広くなりますから、すぐにわかるはずです」

「なるほど。となると、データはところどころに、ひとまとめに挿入されているはずですね。マイクロフィルムのような形を考えてごらんなさい。〈メッセージ〉が反復されているとこ

ろ……つまり、一巡して頭へ返るという意味の反復ではなしに、文中にある間隔を置いて同じ形が現われるという意味ですが、そこにマイクロフィルムの黒い小さな点(ドット)がある、と仮定するのです。これはわたしの想像ですが、われわれが日常使っている言葉で言えば、文章の途中に、フローチャート記号のボックス、あるいは、カッコのようなものがあって、その中に〝鍵〟と書かれている。そのすぐ後にドットが来るのです。そのドット中に、高速伝送された百万ビットの情報が含まれている、というのはどうでしょう。その種のボックスに当るものを捜してみる手はありますね」

「いえ、そういうものがあれば、とっくに見付かっているはずです」

「そうですか。それでは、位相変調はどうですか？　レーダーや宇宙船の遠隔通信で使われている変調方式ですよ。これなら、スペクトルがぼやけることはいっさいありません。おたくでは、フェーズ・コリレーターを使っていますか？」

「いいえ。でも、今のお話は参考になりますね。考えてみましょう」

「さて、そこで、多少手応(てごた)えのある発想ですが、わたしはこんなふうに考えています。仮に〈マシーン〉が建造されたとして、五人の人間が乗り込みますね。誰(だれ)かがボタンを押すと、五人はどこかへ行くはずです。行先(ゆきさき)がどこであるかは、この際、問題ではありません。それよりも、われわれにとってより重大な関心は、果して五人は帰って来るかどうか、という点にあります。ひょっとすると、帰って来(こ)ないかもしれない。わたしはね、〈マシーン〉はヴェガの生体蒐集者(しゅうしゅうしゃ)たちの手で開発されたのではないか、と思うのですよ。医学生だの、人

類学者だの、まあ、どういう立場であるかはともかく、地球人を何人か必要としているのです。だと言って、おいそれと地球へ出向いて来るわけには行きませんな。何かと手続きがいることだろうし、運輸当局の許可も取らなくてはならないでしょう。第一、労多くして功少なしです。しかし、地球へ向けて〈メッセージ〉を送るのは簡単なことです。そうすれば、地球人の方で、さんざん苦労して人間を五人送って寄越すという寸法ですよ。

切手コレクションと同じです。わたしも、子供の頃ずいぶん切手を集めましたが、誰だろうと相手構わず外国人に手紙を出せば、まずほとんどが返事をくれるものです。手紙の中身がどうだろうと、知ったことじゃありません。こっちがほしいのは切手だけなんですから。というわけで、どうやら、ヴェガには切手コレクターの仲間がいるらしい、とわたしは見ています。その連中が、気が向くと手紙を出すんですね。と、宇宙のあちこちから生きた標本が飛んで来るのです。あなたは、そのコレクションを見たいとは思いませんか？」

ハッデンはエリーの顔を覗き込み、にっと笑って話を続けた。「それと解読の鍵を見付けることと、どういう関係があるのか、とおっしゃりたいのでしょう。そうです。何の関係もありません。わたしの想像が間違っていた場合に、はじめて鍵が問題になるのです。わたしの見方が誤りで、もし五人が帰って来るのであれば、人類は宇宙を自由に飛行する技術を身に付けていなくてはならないでしょうな。ヴェガ星人がどんなに水準の高い技術を持っているにしても、〈マシーン〉を地球に着陸させるのは容易なことではありません。不確定要素が多すぎます。推進機構にしても、われわれの想像もおよばないシステムが使われているこ

とでしょう。〈マシーン〉が宇宙から戻って、地下数メートルのところに現われでもしたら、それだけで一巻の終りです。二十六光年という距離を考えたら、数メートルくらいは誤差のうちにも入りません。着陸は危険が大きすぎます。宇宙から戻った〈マシーン〉は、どこか地球に近いところに実体化する……つまり、降って湧いたように出現するはずですね。地上あるいは、地球の内部ということは考えられません。従って、ヴェガ星人としては、五人の乗員が宇宙空間で救出される保証がなくてはならない。すなわち、地球人が宇宙飛行の技術を持っていることを確認する必要があるわけです。ところが、向うは急いでいます。一九五七年の夜のニュースがヴェガに届くまで待ってはいられないのです。そこで、彼らはどうするか？〈メッセージ〉の一部を、宇宙空間でしか受信できないようにするのです。その一部というのが、すなわち鍵です。鍵が読み取れれば、それは宇宙飛行ができることを意味します。五人は安全に地球に帰還できる、ということです。そんなわけでわたしは、解読の鍵となる情報はマイクロ波スペクトルの酸素吸収線、ないしは、近赤外領域の周波数で送信されているのではないかと思います。いずれにしろ、地球の大気圏からかなり外へ出なくては探知できないスペクトル部分だろうと……」

「ハッブル望遠鏡で、ヴェガの紫外線から可視光線、近赤外にわたる領域を監視していますが、これまでのところ、何の発見もありません。ソ連では、ミリ波の干渉計を修復して、以後ひたすらヴェガだけを観測しています。こちらも、何一つこれと言った収穫はありません。もちろん、今後も観測は続けますが。他に、可能性は？」

「本当に、何も召し上がりませんか？　わたし自身はもともと酒をやりませんが、世の中、何事につけ酒ですから」

エリーは重ねて断わった。

「いえ、他に可能性は考えられません。そこで、今度はわたしの番ですね。実は、折り入ってあなたにお願いがあるのです。が、どうもわたしは人に物を頼むのが苦手でしてね。持って生れた性分というものは、年齢を取っても変りません。世間ではわたしのことを、金持ちで、風貌怪奇な因業爺いと思っていますな。人の弱味に付け込んでは儲けを企む金の亡者のように言われています。あなた自身、多かれ少なかれ、わたしをそんなふうに見ておいででしょう。いえ、わたしは人からどう思われようと、痛くも痒くもないのです。これからお話しすることを、おそらく、あなたはすでにお聞きおよびと思いますが、十分ばかり時間をいただいて、そもそものはじめからお話ししましょう。わたしという人間について、あなたには多少、知っていただきたいことがあります」

エリーは内心、身構える気持になった。折り入って頼みとは、いったいどんなことだろう。〈イシュタール神殿〉や、馬車を駆る戦士や、ハッテンにまつわるその他もろもろの放恣な空想はひとまず断ち切らなくてはならない。

すでに何年も前のことだが、ハッテンはテレビにコマーシャルが流れると自動的に受像機の音量を絞る装置を発明した。当初はまだ文脈認識回路を使ったものではなく、搬送波の振幅を検知するだけの単純な機構だった。スポンサーは提供する番組の本編よりも音量を上

げて、中身のないコマーシャルを放送する習慣だったから、ハッデンはそれを逆利用したのである。ハッデンの発明は口伝えに、たちまちにして世間に知れわたった。視聴者はこれを歓迎した。アメリカの一般大衆は一日平均六時間から八時間をテレビの前で過している。ハッデンの装置によって、土砂崩れのようなコマーシャル攻勢から解放されると知った視聴者たちは救われた思いでこの装置に飛びついた。広告業界が何ら有効な対策を講じる間もなく、〈アドニクス〉と名付けられた装置は急速に普及した。スポンサー企業とテレビ各局は搬送波を変更することで抵抗を試みたが、その都度ハッデンは装置に改造を加えてこれに応じた。のみならず、時には広告代理店や放送局がまだ考えもおよばない戦略をすら封じる回路を先回りして考案した。どうせ役に立たないとわかっている技術の開発に企業の株主たちが負担を強いられることを未然に防いでやったのだ、とハッデンは言った。〈アドニクス〉は飛ぶように売れ、ハッデンは定価をどんどん下げた。状況はさながら電子戦争の観を呈した。戦況はとみにハッデンに有利だった。

　広告業界は団結して、ハッデンを相手に訴訟を起した。広告業界とテレビ局が結託してハッデンに営業制限の制裁を加えようとする陰謀だった。業界は政治力に物を言わせて、ハッデンの略式却下申立てを無効にした。とはいえ、彼らの影響力もそれまでで、裁判それ自体を勝訴に持ち込むには至らなかった。この裁判を機に、ハッデンは関係法規をつぶさに研究し、ほどなく自身大株主の一人であるマディスン街のさる大手広告代理店を通じて、他ならぬ〈アドニクス〉のコマーシャルをテレビ局に持ち込んだ。数週間におよぶ喧しい論議の末

にコマーシャルの放映が拒否されると、今度はハッデンが三大ネットワークを相手取って訴訟を起し、営業制限の陰謀を立証した。ハッデンは史上空前と言われる示談金を受け取って和解に応じ、これによってテレビ局は手痛い打撃をこうむった。

むろん、一方にはコマーシャルを見るのが好きで、〈アドニクス〉の必要を認めない視聴者もいた。しかし、そのような人々はもともとが少数派であったばかりか、その数はさらに減少の一途を辿っていたのである。ハッデンはテレビ・コマーシャルを骨抜きにして財産を築いた。同時に、彼は少なからぬ敵を作った。

文脈認識チップが商品化される頃には、ハッデンは〈プリーチニクス〉なるサブ・モジュールを完成していた。これは付属品として先の〈アドニクス〉に接続するだけで、教条主義的な宗教番組がはじまると自動的に他のチャンネルに切り替える装置だった。視聴者はあらかじめ「再臨」「昇天」といったキーワードを装置に記憶させておけば、見たくもない番組をことごとく避けることができた。〈プリーチニクス〉は世の中の風潮を苦々しく思っている、しかし、かけがえのない少数派の視聴者にとっては、まさに神の恵みだった。ハッデンは次に〈ジャイヴニクス〉という、各国の大統領や首相が一般国民向けに空手形を連発するテレビ演説だけをカットする装置を開発するらしい、などとまことしやかな噂も一部では囁かれていた。

文脈認識チップをさらに改良するうちに、ハッデンはこの技術が、教育、科学、医療、軍事諜報、産業スパイ等々、広い分野に応用できることに思い至った。この問題は有名な「ハ

ッデン・サイバネティックス裁判」で決着を見ることになった。ハッデンの手で開発されたチップの一つは民生機器には過ぎるものと判断され、国家安全局の推輓（すいばん）により、文脈認識チップを生産する最新鋭の工場が枢要の技術者ともども政府の管理下に置かれることになったのだ。アメリカにとって、諜報戦でソ連を凌（しの）ぐことは何にもまして重要だった。ソ連側に国家機密を覗かれたらどうなると思うか、と言って国はハッデンを説得した。

ハッデンは国の言いなりになることを潔（いさぎよ）しとせず、国家機密とは何のかかわりもない分野に広く自分の技術を応用しようと心に誓った。アメリカは産業の国有化を図ろうとしている、と彼は政府を批判した。政府は資本主義を標榜（ひょうぼう）しながら、いざとなれば社会主義の顔を覗かせるのだということを、ハッデンは思い知らされたのだ。それはさておき、民間の需要は飽くことを知らず、ハッデンは法の許す限り、手もとに残された技術と設備を総動員して一般の求めに応じた。彼に言わせれば、これこそが古典的な資本主義のあり方だった。しかし、冷静な資本主義者たちの多くが、ハッデンは〈アドニクス〉ですでに行き過ぎを犯しており、アメリカの流儀に脅威を与えたのだとする見方に傾いていた。辛口の評論をもって知られるV・ペトロフは『プラウダ』紙上でこうしたアメリカの状況を資本主義の矛盾そのものと非難した。『ウォール・ストリート・ジャーナル』は、ロシア語で〝真実〟を意味する『プラウダ』が歪（ゆが）んだ論評を行うこと自体、共産主義の矛盾そのものであるといささか的をはずれた論駁（ろんばく）を試みた。

ハッデンは、国家による工場管理は上辺（うわべ）のことにすぎず、言うなれば八ツ当りであって、

本当は彼の広告批判、テレビ伝道批判が政府の逆鱗に触れたのだと受け取っていた。〈アドニクス〉も〈プリーチニクス〉も、資本主義的企業家精神の発露である、と彼はことあるごとに主張した。人に選択の自由を与えることこそが資本主義の本質ではないか。

「ですから、宣伝広告の排除が、すなわち選択の自由なんだ、とわたしは言ってやりました。企業はどこも宣伝広告に莫大な金を注ぎ込んでいますが、製品はどれを取ったって差なんぞありません。みな同じです。本当に違いがあるものなら、誰だって良いものを買いますよ。ところが、広告は消費者に、自分の判断を信じてはいかん、と教え込むのです。馬鹿になれ、と言っている。しかし、強力な国家は頭の良い国民を必要としています。だから、〈アドニクス〉は極めて愛国的な商品であるわけです。企業が宣伝広告の予算を研究開発に回せば、製品は良くなります。消費者にとっても、その方が有難い。新聞雑誌、ダイレクトメール業界は繁昌しますから、広告代理店は電波媒体を失っても埋合わせが付くでしょう。〈アドニクス〉のどこがいけないのか、わたしにはどうしても理解できません」

商業テレビネットワークを相手取った裁判は数知れないが、そうした訴訟よりも〈アドニクス〉ははるかに直接的にテレビ業界に打撃を与えた。一時期、大企業の元宣伝担当重役や、元某テレビ局の役員といった失業者たちが街にあふれ、活躍の場を失って尾羽打ち枯らした伝道家の一団がそれに加わって、ハッデンに対する怨嗟の声は、さながら吹き募る嵐だった。その後もハッデンを目の仇にして、いつか恨みを晴らそうと機を窺う者の数は増しこそすれ、一向に減る気配はない。聞くほどに、エリーはハッデンという男がすっかり気に入った。

「そんなこんなで、このあたりが潮時だと思っているのです。金は腐るほどあって、わたし個人ではとうてい使いきれません。家内はわたしを嫌って、今ではもう、顔も見たくないという態度です。右も左も敵ばかり。それでわたしは、最後に何か大きなこと、何か意味のあることをしたいのです。何百年か先へ行って、あの時代にハッデンというやつがいてくれたお蔭だと言われるような、何かそんなことをしておきたいのです」

「とおっしゃいますと……」

「わたしは〈マシーン〉を造りたいのです。はっきり言って、他に適任者はいません。サイバネティックスの技術に関する限り、わたしはどこの誰よりも経験豊富です。わたしは常に、商売になる実用的な技術を追求して来ました。その意味では、わたしはどこの大学よりも進んでいます。カーネギー・メロンも、マサチューセッツ工科大学も、わたしから見れば遅れているのです。スタンフォードもまた然り。サンタ・バーバラだって力不足です。〈マシーン〉の設計図を見て、一つはっきり言えることは、これは時代遅れの職人仕事ではとうてい追っつかないということです。それに、遺伝子工学の技術も必要でしょう。このことを、わたし以上に真剣に考えている人間はどこを捜してもいやあしません。わたしは自腹を切ってでも〈マシーン〉を造る意志があります」

「お気持はよくわかりますが、ハッデンさん、現実にその段階になったとして、〈マシーン〉の建造を誰に依頼するかについて、わたくしには何の決定権もありません。国際間の話し合いで決められることですし、それまでには、いろいろと政治上の駆け引きもあるでしょう。

こうしている今、パリでは〈マシーン〉を建造するべきか否かをめぐって議論が交わされている最中です。それもこれも、すべては〈メッセージ〉が解読されてからの話です」

「それを知らないわたしだとお思いですか？　わたしは別の方面からも手を回して、政府に希望を伝えています。そのためには金も使っているし、圧力をかけるようなこともしています。が、それはそれとして、わたしは天使の側から正当な理由に基づいて、ひと言お口添えを願いたいのですよ。おわかりですか？　そう、天使と言えば、あなたはパーマー・ジョスとビリー・ジョー・ランキンをかなり手厳しくやりこめましたね。マリアの羊水論争からこっち、わたしはあの二人があんなにうろたえたところを見たことがありません。ランキンに至っては、〈マシーン〉支持をめぐって自分の発言が故意に誤って引用されているなどと言い出す始末ですから。いやはや、どうも」

ハッデンはわざとらしく首をふって大仰に驚いてみせた。活動的な伝道家と〈プリーチニクス〉の発明者の間に久しい以前から敵対感情がわだかまっているであろうことは想像に難くなかった。エリーは何故か伝道家たちを弁護する気になった。

「二人とも、あなたが思っていらっしゃるよりずっと立派ですよ。パーマー・ジョスは、何と言うか、こう……とても深みがあります。あの人はいかさま師じゃありません」

「外面がいいだけじゃないという確信がおありですか？　お気に障ったら謝りますが、こういうことははっきりさせておく必要があるのです。自分の気持をうやむやにしておくのはよくありません。あの手の食わせ者を、わたしはいくらでも知っています。一皮剝けば、あ

の連中は皆ジャッカルですよ。信仰に惹かれる人間は大勢います。そういう人から見れば、宗教家は人柄が良いというだけではなしに、性的にも魅力があるのです。〈イシュタール神殿〉でどんなことが起きているか、一度覗いてごらんになるといいですよ」
エリーは身ぶるいする思いだった。「わたくし、やっぱり何か飲むものをいただこうかしら」
ペントハウスから見下ろすと、〈ジグラト〉の階段状の斜面は各層毎に花に埋もれていた。生花ばかりではなく、季節はずれを造花で補った区画もあった。古代世界七不思議の一つ、〈バビロンの空中庭園〉を再現したその段状花壇は、実に巧みな設計でハイヤット・ホテルに酷似することを避け得ていた。はるか下の方を、松明の行列が〈エンリル門〉に向っていた。上半身裸の屈強な男が四人、連台のようなものを担いで先頭に立っている。連台の御簾の陰に誰が乗っているのか、または何が隠されているのか、エリーは知る由もなかった。
「ギルガメシュを祀る儀式ですよ。シュメール神話に登場する伝説の王です」
「ええ、知っています」
「永遠の生命を求めた人物です」
ハッデンはさりげなく言い捨てて、時計に目をやった。
「シュメールの王たちは、〈ジグラト〉の頂きへ上がって神々の託宣を仰いだのです。特に崇められていたのは天の神アヌでした。それはそうと、当時シュメール人がヴェガのことを何と呼んでいたか、わたしは調べてみましたよ。ティランナ……天の命です。面白いことを

言ったものですな」

「いいえ、わたしなんぞ相手にもされずに、神託はあなたがたに下ったのですよ。九時にもう一度、ギルガメシュ行列があります」

「せっかくですけれど、そんなにゆっくりはしていられないんです。あの、一つだけお訊きしてよろしいかしら？　どうして、バビロンを？　それにポンペイも。あなたは、それこそ最先端の技術者でいらっしゃるでしょう。大きな会社をいくつもおはじめになって、広告業界を相手の土俵(グラウンド)で討ち滅ぼすということもなさった方ですね。ええ、文脈認識チップと国家機密をめぐる問題では苦い思いをなさったのはわかります。それにしても、あなたほどの方だったら、することは他にいくらでもあるんじゃありませんかしら。それを……何故？」

行列は遠く〈アッシュール神殿〉に行き着いた。

「どうして、もっと役に立つことをやらないのか、とおっしゃるんですか？」ハッデンは問い返した。「わたしは政府が看過(みすご)しているか、あるいは、てんから無視してかかっている社会的な必要を満たそうと努めているだけです。それが資本主義というものです。わたしは法に触れることはしていません。大勢の人間がここへ来て楽しんでいます。これは、社会がひっきりなしに生み出す狂気に対して、一種の安全弁の役を果していると思いますね。

いや、実はわたしも、はじめからそこまで考えを尽していたわけではないのです。何とも他愛(たわい)ない話でしてね。バビロンの発想が浮かんだ時のことは、今でもはっきり憶(おぼ)えています

よ。孫のジェイスンとディズニー・ワールドでミシシッピー河の船尾外輪船に乗っていた時のことです。ジェイスンはその頃、四つか五つでしたか。わたしはディズニー・ワールドの賢いやり方に舌を巻きました。というのは、あそこでは乗り物毎に切符を買わせるのを止めて、園内どこでも通用する一日券というものを発行しているのです。これで、例えば切符のもぎりの手間が省けますから、それだけでもかなり人件費の節約になりますな。ところが、もっと大きな問題がありましてね、それは何かというと、客は皆、自分たちの乗り物に対する関心を過大評価しているということですよ。だから、何でも乗れると思って、喜んで高い金を払う。実際は、そんなに乗れるものじゃあないんですが、それで充分満足するんですな。

　話が脇へそれましたが、その船で、わたしとジェイスンの隣に八つくらいの男の子が坐って、ぼんやり遠くを見ているのです。八つというのはわたしが見た感じで、あるいは、十くらいだったかもしれません。父親がしきりにあれこれ話しかけるんですが、子供の方はろくに返事もしません。その子は座席に立てかけた玩具のライフルをまさぐっていました。膝の間に銃身を挟んで、撫でるようにしているのです。子供にしてみれば、そうやってライフルをいじくっているのが楽しいのであって、うるさく話しかけられるのは迷惑なのです。ちょうど、向うに〈魔法の王国〉の塔や櫓が聳え立っていました。それを見て、わたしははたと膝を叩いたのです。わたしの言うことがおわかりですか？」

　ハッデンはダイエット・コーラを注いで、エリーとグラスを打ち合わせた。

「敵を面喰らわせることですよ」彼は上機嫌でグラスを上げた。「〈ヘイシュタール門〉までお

見送りさせましょう。〈エンリル門〉は行列で混雑しますから」

二組の護衛がどこからともなく姿を現わした。本日はこれまで、ということに違いなかったが、エリーの方でも長居をする気はなかった。

「位相変調と、酸素吸収線のことをお忘れなく。それから、解読の鍵についてわたしの考えが間違っていたにしても、これだけははっきりしています。〈マシーン〉を造れる人間は、わたしを措(お)いて他にいません」

〈イシュタール門〉は照明を浴びて夜空を背景に浮き上がっていた。壁面は生き物を象(かたど)った青い化粧タイルで飾られていた。考古学者はその生き物を竜(りゅう)であるとしている。

第五章　調和振動子

CamScannerでスキャン

懐疑こそは知性の貞操である。早まって貞操を捨て、あるいは見も知らぬ相手に身を任すのは恥ずべきことである。若年の間、冷静に、誇り高く、純潔を守ることに精神の尊厳はある。やがて時至り、心身成熟して分別が備わるにおよんで、はじめて人はそれと引換えに、忠誠と幸福を我がものとすることを得るのである。

——ジョージ・サンタヤーナ『懐疑主義と動物的信』第九巻

作戦任務は攪乱と破壊だった。敵は圧倒的に強大である。とはいえ、弱点は知れている。支配権を奪取し、敵方の物資を作戦任務のために転用することは可能である。すでに、使命を帯びた幾百万の活動分子が潜入している……。

大統領はくしゃみをして、テリ織のバスローブの脹れ上がったポケットから新しいティッシュペーパーを取り出した。化粧っ気はないが、かさかさに乾いた唇に、僅かにハッカ入りの膏油を塗っている。

「主治医は安静に寝ていないとビールス性肺炎になると言うのよ。抗生剤をくれるように言ったのだけれど、ビールスに効く抗生物質はないんですって。でも、どうしてわたしがビールスにやられているとわかるのかしら？」

ダヘーアが答えようとするのを大統領は気短に遮った。

「いいのよ、気にしないでちょうだい。ここでDNAだの、宿主の識別だのという話を聞かされたら、それだけで草臥れてしまって、肝腎な話を聞く根気がなくなるわ。ビールスが恐くないなら、もっと椅子をこっちへ寄せてくれないこと？」

「おそれいります、大統領。話というのは〈メッセージ〉解読の鍵についてですが、ここに報告書があります。〈メッセージ〉には、言わば補遺の形で、かなり大量の技術情報が含まれています。大統領もその内容には関心がおありと思いますが、ざっとかいつまんで申し上げますと、すでに、さしたる困難もなしに解読が進んでおりまして、そこに書かれていることも、かなりわかってまいりました。実に、心憎いばかりによくできた学習プログラムです。ただ感服の他はありません。これまでに、三千ばかりの語彙が解明されました」

「どうしてそういうことがあり得るのか、信じられない話だことね。数字の呼び方を教えるくらいなら、わかりますよ。点を打って、その下にONEと書くとかね。そのやり方で行けば、星の絵を描いて、STARと書き添えたら意味は伝わるわね。でも、動詞とか、過去形や仮定法となると、どうやって表現するのかしら」

「映像を使う手があります。動詞を説明するのに映像は最適ですよ。ですが、ほとんどは数字で用が足ります。抽象的な概念だって数字を使えば表現できますから。どうするかと言いますと、最初にいくつかの数字を示しまして、そのあとに言葉を置くのです。こちらは、まだその意味を知りません。紙に書いてお話ししましょう。例えば、こんなふうに数字と文字が並んでいるとしますね。この、文字の部分はヴェガ星人がわれわれに伝えようとしている記号に当ります」

ダヘーアは手近の紙片に一連の数字と文字を書きつけた。

1A1B2Z
1A2B3Z
1A7B8Z

「これをどう御覧になりますか？」
「わたしのハイスクールの成績表かしら。つまり、ドットとダッシュの組合わせがあって、その一つをAとすれば、別の組合わせがB、以下同様にC、D……と行くわけね？」
「その通りです。このうちの、数字についてはいいとして、問題はA、Bが何を意味するかです。これから何がわかりますか？」
「Aはプラス、Bはイコールを意味する、ということ？」
「結構ですね。ところが、それだけではまだZの意味がわかりませんね。そこへ、こんなのが出て来たとします」

1A2B4Y

「おわかりですか？」
「見当は付くわ。もう一つ、Yで終る例を挙げてちょうだい」

「ええ、わかったわ。最後の三字が一つの語彙ではないとすれば、Zは正しい、Yは誤りの意味ね」

「そうです、その通り。ビールスに感染して、南アフリカ問題で頭を痛めている大統領にしては御立派ですよ。このようにして、僅か数行の通信文で、ヴェガ星人はわれわれに四つの言葉を教えてくれたのです。プラス、イコール、正しい、誤り。実に便利な四つの言葉です。続いて割り算がありました。1割る0の答が、つまり、無限大を表わすヴェガ星人の言葉です。あるいは、単に不定を意味するのかもしれません。それから〝三角形の内角の和は二直角である〟という定理が述べられて、次いで、この定理は空間が平面であれば正しいけれども、空間が湾曲していたら誤りであるという注釈が付いているのです。このことから、〝もし……ならば〟という仮定表現がわかりますし……」

「空間が湾曲しているとは知らなかったわ。ケン、それはいったい、どういうことなの？どうして空間が湾曲したりするの？ ああ、いいのよ。気にしないで。今、わたしたちが直面している問題とはかかわりのないことですものね」

「それが、実は……」

「ソル・ハッデンの話では、解読の鍵をどこに求めるべきか、知恵を貸したんだそうね。そんな顔でわたしを見ないで、ダヘーア。わたしはどんな相手とだって話をするのよ」

「いえ、わたしは何も……ですから、その、ハッデン氏から多少の示唆があったことは事実ですが、他の科学者たちからも同じ提言はなされていたのです。アロウェイ博士がそれをつぶさに検討して行くうちに、中の一つが鍵に結びつきました。位相変調、あるいは、位相符号化という方式です」

「それも聞いたわ。で、事実その通りなの、ケン？　解読の鍵は〈メッセージ〉の中に、繰り返しの形で挿入されているの？　アロウェイが信号を探知して間もない頃に、解読の鍵の一部はすでに送信されていたそうだけれど」

「羊皮紙の重ね書きで言えば、第三層の〈マシーン〉の設計図のすぐあとに挿入されています」

「だとすると、今では各国とも鍵を読み取る技術を持っている、ということね？」

「読み取りにはフェーズ・コリレーターという装置が必要ですが、ええ、主だった国については、おっしゃる通りです」

「なら、ソ連は一年前に鍵を読み取っているかもしれないわね。そうでしょう？　あるいは、中国か日本が早々と解読を果していないとも限らないわ。どこかの国がすでに〈マシーン〉の建造を進めているとは考えられないかしら？」

「それはわたしも考えました。しかし、マーヴィン・ヤンはそういうことはあり得ないと言っています。衛星写真、電子諜報、現場の工作員、その他あらゆる情報を分析した結果からも、〈マシーン〉の建造に必要な大掛かりな工事が進められている形跡は見られません。そ

の点は間違いありません。どこも、一歩手前で足踏みしていたのです。解読の鍵が〈メッセージ〉の冒頭にあるはずだという考えに取り憑かれて、全体に分散されているとは誰も考えませんでしたから。〈メッセージ〉が一巡して、冒頭に鍵がないとわかって、はじめて別の可能性が浮上したのです。以後、解読作業はソビエトをはじめ各国と緊密な連絡のもとに進められています。今では、どこも抜け駆けはできない代りに、誰もが鍵を手にしている、ということです。アメリカの独走は考えられません」

「わたしはアメリカの独走を望んではいないわ。それは、どこの国についても同じよ。それはそれとして、〈メッセージ〉に話を戻しましょう。解読の鍵が摑めたことで、何が正しいか、何が誤りか、もし何々ならば、という表現や空間が湾曲していることなどがわかったわけね。でも、それでどうやって〈マシーン〉を建造するの？」

「お風邪だということでしたが、とても医者から安静を指示されている方とは思えませんね。すべては今おっしゃったことが基礎でしてね、ヴェガ星人が意思を伝えるやり方は常に同じです。例えば、元素の周期率表を掲げることによって、元素の名前が全部わかります。原子の概念や、原子核、陽子、中性子、電子についても共通の理解が成り立つわけです。それから、われわれが授業中によそ見をしないようにという配慮でしょうか、量子力学の基礎にも触れているのです。現に、これによって従来の理論の不足を補う新しい方向が見えて来ました。そうやって、こちらの関心を惹きつけておいて、ヴェガ星人は〈マシーン〉の建造に必要な材料について、詳しい説明に入っています。例えば、どういうわけか、エルビウムが二

トンいるのです。そこで、ありふれた岩石からいかにしてエルビウムを抽出するか、極めて卓抜な技術が紹介されています」
グヘーアは片手を上げて大統領を制した。「どうしてエルビウムが二トン必要かという質問は御勘弁願います。これについては誰も、見当も付かないのです」
「わたしが訊きたいのはそのことではないの。一トンという重さをどうやって伝えて来たのか、それを知りたいと思って」
「プランク定数を使って計算しています。プランク定数というのは……」
「いいの、いいの、その説明は。物理学者なら誰でも知っていることでしょう？　わたしは初耳だけれど、説明されたところで、どうせわかりはしないわ。ところで、初歩的な質問になるけれど、鍵がわかれば本当に〈メッセージ〉は解読できるの？〈マシーン〉の建造は可能かどうか、その点はどうなの？」
「可能である、とお答えしていいでしょう。鍵が見付かってから、まだほんの何週間かですが、すでに〈メッセージ〉の一章は疑問も残さず、あらかた内容が明らかにされています。これまでにわかった限りでは、第一章は精密巧緻な設計と、重複安全機構の説明です。重複安全性という点では、〈マシーン〉は実に驚くほどの配慮がなされています。大統領が是非にもとおっしゃるなら、木曜日の乗員選考会議までに〈マシーン〉の立体模型を用意しますよ。今のところまだ、〈マシーン〉がどう動くのか、どのような原理で作動するのか、まったくわかっておりません。それに、〈マシーン〉の部品とはどうしても考えにくい、ある種

の有機化合物も必要とされています。が、それはともかく、ほとんどの人間が〈マシーン〉の建造は可能だと考えています」

「ほとんど、ということは、そう考えない人もいるわけね?」

「ええ、ルナチャルスキーとソビエトの一部の学者は否定的ですし、ビリー・ジョー・ランキンは言うまでもなく頭から建造に反対です。他にも、〈マシーン〉は地球を破壊するとか、地軸の傾きを変えるとか、その種の懸念を抱いている人間はいます。それにしても、このことに携わっている科学者たちが一様に驚いたのは、〈マシーン〉建造の技術上の説明が実に周到で、微に入り細を穿っていること、もう一つは、同じことを説明するのに幾通りもの違った論法が用いられていることです」

「それで、エリナ・アロウェイはどう言っているの?」

「ヴェガ星人が地球を滅ぼす気なら、二十五年後には攻めて来るはずだ、というのが博士の意見です。二十五年では、地球は何一つ防衛対策を講じることができません。なにしろ、向うは地球よりもはるかに進んでいますから。それで、博士は、とにかく〈マシーン〉を建造するべきだと言うのです。環境破壊が心配なら、どこか僻地の、周囲に影響のない場所で建造すればいいというわけです。ドラムリン教授などは、パサデナの繁華街でやったって大事ないと言っていますがね。それどころか、教授は〈マシーン〉が建造されるなら、現場に付きっきりで作業を監視する意志があるとさえ言っているのです。〈マシーン〉が爆発を起したら、自分が真っ先に道連れだということを承知の上でですよ」

「ドラムリンというと、図版が〈マシーン〉の設計図だということを最初に解明した人ね？」
「いえ、そうではなくて、教授はただ……」
「木曜日の会議までに、関係資料には目を通しておくわ。他に、何かわたしに言うことがあって？」
「大統領は、ハッデンに〈マシーン〉の建造を委嘱することを深刻に考えておいでですか？」
「それは、わたしの一存ではどうにもならないことよ。今、パリで条約の交渉が進んでいるところだけれど、締結の運びとなれば、アメリカの決定権は四分の一よ。ソビエトも四分の一。中国と日本が共同で四分の一。残った他の国々があとの四分の一。大まかに言えば、そんなところだわね。〈マシーン〉の建造を希望している国は多いのよ。少なくとも、部品のどれかは受け持ちたい、と名乗りを上げている国も含めてね。国家的威信ということもあるし、景気拡大の効果にも繋がるでしょうしね。新しい知識を得られることも、国家のためには利益だわ。どこか一国が抜け駆けをするわけには行かない以上、アメリカとしては条約の決定に文句を言う筋はないわね。ハッデンが何かを請け負うことになっても不思議はないでしょう。何か不都合があるの？　ハッデンでは技術的に無理だと思うの？」
「いえ、技術の点では、まったく問題ありません。ただ、その……」
「他に話がなければ、ケン、次の木曜日にまた会いましょう。それまでに風邪が治っていれ

ばいいけれど

控えの間に退ってドアを閉じようとするダヘーアの背後で、大統領の偉大なるくしゃみが聞えた。棒を呑んだような姿勢で椅子に掛けていた当直の准尉は飛び上がった。足もとのブリーフケースには、核戦争の際の行動規準書が入っている。ダヘーアはしきりに何かを押えつけるような手つきをして准尉をなだめた。准尉はばつが悪そうににやりと笑った。

★

「あれがヴェガ？　こうやって大騒ぎしている星が、あれなの？」大統領はいささか拍子抜けの体で尋ねた。報道陣の写真撮影も終り、フラッシュやテレビのライトに眩んだ目がやっといくらか闇に馴れて来たところだった。海軍天文台の望遠鏡を真剣な表情で覗いている大統領の写真が翌日の全米各紙を飾ったが、これはちょっとした御愛敬だった。カメラマンたちが立ち去って目が馴れるまで、大統領は望遠鏡を覗いても、何も見えはしなかったのだ。

「どうしてあんなにゆらゆら揺れるの？」

「空気の乱れです、大統領」ダヘーアが説明した。「暖かい空気の流れが像を歪めるのです」

「朝食の席で、トースターを挟んでシーの顔を見るのと同じね。一度、顔が半分、溶けて流れてしまったように見えたことがあるわ」大統領は制服姿の天文台司令官と肩を並べて脇に控えている夫に聞えるように、懐かしげに声を張り上げた。

「うん。近頃は朝食のテーブルにトースターはないがね」大統領の夫君は人が好さそうな顔

で答えた。
シーモア・ラスカーはかつて国際婦人衣料労働者組合の上級役員を務めていた。数十年前、ニューヨーク・ガール・コート社の組合代表だった現大統領と知り合い、長引いた労働争議を通じて二人の間に恋が育った。現在の特異な立場を考えれば、円満な夫婦仲は賞讃に価する。
「トースターはなくてもいいけれど、このところ、シーと朝一緒に食事をすることもめったにないわね」大統領は眉を上げてちらりと夫君をふり返り、すぐにまた望遠鏡の接眼レンズに向き直った。「何だか、青みがかったアミーバのようね……ぐにゃぐにゃして」
厄介な乗員選考会議が済んで、大統領は気が晴ればれとしていた。風邪もほとんどよくなっていた。
「空気の乱れがなかったら、どうなの、ケン？　どんなふうに見えるの？」
「大気圏外のスペース・テレスコープで見るのとほとんど変りないでしょう。光の点が瞬きもせずに、くっきりと見えるはずです」
「ヴェガというのは、あの星がぽつんとあるだけなの？　惑星や輪はないのね。レーザー兵器の基地はどうかしら？」
「そういうものはありません、大統領。仮にあったとしても、小さくて暗いですから、相当大きな望遠鏡でも、まず見付からないでしょう」
「それはともかく、あなたがた科学者、技術者の皆が、自分たちのしていることをよくわき

まえていてくれなくてはね」大統領は声を潜めた。「なにしろ、見たこともないものにのめり込んでいるのだから」

ダヘーアは怪訝な顔をした。「わたしどもは三万一千ページにおよぶ通信文を読みこなしましたよ。図面もあるし、語彙の定義もはっきりしています。補足の資料も充分です」

「わたしに言わせれば、それは見るということとは別よ。結局のところ、何もかも手探りでしょう。世界中の科学者が同じデータを手にしているというだけで済む問題ではないの。その点は、わたしも理解しています。〈マシーン〉の設計図が明快で、疑問点がないということも、わたしはわかっているつもりよ。アメリカが撤退すれば、どこかが〈マシーン〉を完成するでしょう。そういうことを全部理解した上で、やはり、最後にある種の不安が残るのよ」

一行は海軍天文台構内の副大統領官邸に場所を移した。乗員選考については過去数週間にわたってパリで綿密な会談が重ねられ、各国の間に暫定的な合意が成り立っていた。アメリカとソ連は、各二名ずつ乗員を派遣することを主張した。このような問題に関しては、両大国は互いに頼りになる味方だった。とはいえ、〈ワールド・メッセージ・コンソーシアム〉に参加している他の国々を相手に、米ソの主張を貫くことはむずかしかった。かつては両大国が歩調を合わせれば、他の諸国をそれに従わせることも容易だったが、今ではなかなかそうは行かなくなっている。

〈マシーン〉建造は人類が打って一丸となって取り組む大事業であると喧伝され、〈ワール

ド・メッセージ・コンソーシアム〉の看板も〈ワールド・マシーン・コンソーシアム〉に掛け替えられようとしている。そうした情況を背景に、何らかの形で〈メッセージ〉解読に貢献した各国はいずれも、乗員の一人は自国から出したいと願っている。中国は控え目ながら、二十一世紀半ばには人口十五億に達し、国家の大計である産児制限によって一人っ子で育った若年層は、成長の暁にはそのような制限のない他国の青年にくらべて精神的に安定しているであろうという主張を展開した。五十年後の中国は、国際社会で今よりもはるかに重要な役割を担っているに違いなく、それから言っても、当然、乗員の席一つは中国に割り当てられるべきであるとする考え方は、今では〈メッセージ〉にも〈マシーン〉にもかかわりのない、傍観者の立場にある国々の指導者たちの間で、説得力がある主張と受け取られている。

ヨーロッパ諸国と日本は乗員派遣を辞退し、代りに〈マシーン〉の重要な部品の製作を担当したいと申し出た。その方が経済的に利するところが大きいという判断だった。結局、アメリカ、ソ連、中国、インドに乗員の席が割りふられ、残る一人は保留と決まった。この一つの空席をめぐって、各国の思惑がらみの主張が対立し、論議は錯綜した。人口、経済力、工業生産力、軍事力、現時点での政治的同盟関係、と考慮するべき条件は少なからず、はては人類の歴史を通じた各民族の得失までが引き合いに出された。

ブラジルとインドネシアは人口と地政学的バランスを根拠に第五の席を要求した。スウェーデンは政治的な対立が生じた場合の調停者の役柄を売り込んだ。エジプト、イラク、パキスタン、サウジアラビアは宗教的な平等を掲げて名乗りを上げた。一部には、第五の席は国

籍に捉われずに最も相応しい人材を求めるべきだという意見もあった。とまれ、今のところ第五の席は空白のまま、世界の注目を集めている状態である。

乗員の席を与えられた四カ国では、科学者集団と政府首脳が候補者を絞る作業に追われている。アメリカでも、国を挙げて議論が沸騰した。世論調査や人気投票が行われ、宗教団体の指導者、代表的なスポーツ選手、宇宙飛行士、名誉勲章受勲者、科学者、映画スター、元大統領夫人、テレビのトーク・ショウの司会者、ニュース・キャスター、連邦議員、政治的な野心を抱く億万長者、財団理事、カントリー&ウェスタンやロックンロールの歌手、大学総長、当代のミス・アメリカ等々が程度の差はあれそれぞれに広範な支持を集めた。

副大統領官邸が海軍天文台の敷地内に移されて以来の長い仕来りで、官邸の雑用いっさいは合衆国海軍現役のフィリピン人下士官たちが受け持っていた。胸に「合衆国副大統領」の縫い取りのある粋な紺のブレザーを着て、下士官たちは大統領の一行にコーヒーをもてなした。まる一日掛かりだった乗員選考会議の出席者たちは、何人かを除いてこの非公式な夜の集まりには招ばれていなかった。

シーモア・ラスカーは運命の気紛れで、アメリカ初の〝ファースト・ジェントルマン〟になった男である。彼は政治漫画家たちの好餌だった。彼はいたるところで陳腐な冗談の種にされ、前代未聞の体験をした男と皮肉られた。しかし、シーモアは悪びれることなく、卑屈にもならずに特異な立場の重みによく耐えた。その甲斐あって、今ではアメリカは、世界の半分を支配しようなどという大それた考えを抱く図太い女と結婚したシーモアを大目に見る

ようになっている。シーモア・ラスカーが副大統領夫人と十代の息子を笑い転げさせている間に、大統領はダヘーアを呼び寄せて隣の図書室へ席を移した。

「楽にしてちょうだい」大統領は言った。「今日は決定を下すべきこともないし、公式声明の草案を練ることもないわね。ここで、ちょっと復習をしておきたいと思うのよ。〈マシーン〉が果して何を目的とするものかはまだ誰にもわからないことだけれど、まず、ヴェガへ行くと考えて間違いないだろう、ということは言えるわね。それにしても、〈マシーン〉がどういう機構で宇宙を飛ぶのか、目的地までどのくらい時間がかかるか、これは予測もできないことでしょう。もう一度聞かせてちょうだい。ヴェガまではどれだけの距離があるの？」

「二十六光年です、大統領」

「〈マシーン〉が一種の宇宙船で、光の速さで飛ぶとしたら……ええ、わかっているわ。光の速さでは飛べないのね。光に近い速さと言えばいいんでしょう。話の腰を折らないで……とすると、行くだけで二十六年かかるわけだけれど、それは地球の時間で計算した場合の話ね。そうでしょう、ケン？」

「ええ、おっしゃる通りです。ただ、光速まで加速するのにほぼ一年、それから、ヴェガ系に近付いて減速するのに同じくらいかかるでしょうから、その分を足さなくてはなりません。ですが、宇宙船に乗っている者にとっては、そんなに時間はかからないのです。光速にどこまで近付けるかにもよりますが、まあ、二年かそこいらのことでしょう」

「生物学者にしては、あなた、天文学にも詳しいのね」
「これは、おそれいります、大統領。こういうことになって、多少はわたしも勉強いたしまして」
大統領はちょっとダヘーアの顔を窺(うかが)ってから話を続けた。「つまり、〈マシーン〉が限りなく光速に近付くとすれば、乗員の年齢は、あまり問題にはならないわけね。でも、もし、十年、二十年という時間がかかるとしたら……あるいは、もっとかかることだってあり得ないことではないのでしょう……その場合は、若い人を考えなくてはいけないわね。ところが、ソビエトはその点をまるで考慮していないのよ。アルハンゲルスキーかルナチャルスキーのどちらかになるようだけれど、二人とも六十代よ」
大統領は手にしたカードからたどたどしく名前を読み上げた。
「中国はもう、西(シー)に決まったようなものでしょう。あの人も六十代ね。ソビエトも中国も、あらゆる条件を考えて人を選んでいるはずでしょう。だったら、アメリカも六十代の人でいいのではないか、という気がしないでもないわ」
ダヘーアはドラムリンの顔を思い浮かべた。ドラムリンは今年ちょうど六十である。
「しかし、一方では……」彼は言いかけた。
「ええ、ええ、わかっているわ。インドの女医さんでしょう。彼女は四十代だわね……。それにしても、こんなおかしな話ってあるかしら。種目もわからずに、オリンピックに選手を送ろうとしているようなものですもの。どうして科学者にこだわる必要があるかしら。マハ

トマ・ガンジーを派遣すればいいのよ。さもなければ、イエス・キリストね。わかっているわよ、ダヘーア。これは、理想を言えばの話よ」
「種目がわからなかったら、十種競技のチャンピオンを派遣するのが無難でしょう」
「ところが、行ってみたら、チェスの選手権だったりしてね。あるいは、彫刻のコンクールか、弁論大会かもしれないわ。そうなったら、スポーツ選手じゃあ手も足も出ないわね。ええ、あなたの言いたいことはわかるわよ。地球外知的生物についてそれなりの見識があって、〈メッセージ〉の受信、解読に深くかかわった人物を選ぶべきだ、ということでしょう」
「そういう人材を選べば、少なくとも、ヴェガ星人の考え方がよくわかっているはずですし、向うがわれわれに何を期待しているかについても理解が早いと思います」
「その上、他の条件も満たす第一級の人材となると、それだけでもう、三人に絞られるわね」
大統領は再び手もとのメモを覗いた。
「アロウェイ。ドラムリン。それから、ええと……あの、ローマの将軍を気取っている人」
「ヴァレリアン博士です、大統領。ヴァレリアンというのは、たまたまそういう名前であって、自分からローマの将軍を気取っているわけではないと思いますが」
「ヴァレリアンは選考委員会の質問調査に答えようともしないわね。〈マシーン〉に乗る意志がないのは、奥さんと離ればなれになりたくないからでしょう。そうなのね？　いえ、非難しているのではないのよ。ヴァレリアンは頭の良い人よ。人間同士の関係を上手に保つこ

とを知っているんだわ。奥さんが病気だとか、何かそういった事情があるわけではないわね？」
「ええ。わたしの知る限りでは、健康そのものです」
「よかった。それを聞いて安心したわ。ヴァレリアンの奥さんに、わたし個人の名前で手紙を書いてちょうだい。天文学者に宇宙へ行く機会を諦めさせるなんて、よっぽど大した女性に違いない、といったような文面で。ただし、言葉は飾ってね、ダヘーア。わたしの狙いはわかるでしょう。何か引用するといいわ。詩はどうかしら。でも、あまり仰々しいのは駄目よ」大統領は人差指をふり立てた。「ヴァレリアン夫婦には見習うべきものがあるわ。今度、大統領主催の晩餐会に招待しましょう。再来週、ネパール国王がお見えだから、ちょうどいいわ」
ダヘーアはせわしげに指示を書き取った。帰宅したらすぐ、ホワイトハウスの社交担当秘書に電話しなくてはならない。他にも急ぎの連絡がある。この四時間余り、彼は電話をかける暇もなかった。
「そうすると、あとはアロウェイとドラムリンね。アロウェイの方が二十も若いけれど、ドラムリンはびっくりするほど達者よ。ハング・グライダーやスカイ・ダイヴィングをやるし、スキューバ・ダイヴィングもやるんですもの。それに、科学者としても有能でしょう。〈メッセージ〉の解読には、あの人の働きが大きかったし。あの人だったら、他のお年寄りとも話が合うのではないかしら。核兵器の仕事をしたことはないわね？　核兵器の開発に携わっ

た人を人類の代表として派遣するわけには行かないわ。

そこで、アロウェイだけれど、有能な科学者であるという点では誰にも引けを取らないわね。〈アーガス計画〉の指揮を執って来た人だから、〈メッセージ〉のことは隅から隅まで知りつくしているし、何よりも探究心が旺盛だわね。好奇心が強くて、視野が広いというもっぱらの評判よ。それに、若いアメリカを印象づけるという意味でも得難い人材ね」

大統領はちょっと言葉を切った。

「あなたは彼女に好意を持っているわね、ケン。何も悪いことはないわ。わたしも彼女は好きよ。ただ、アロウェイは時として始末におえないことがあるのよ。委員会の質問に対する彼女の答を、あなた、とっくり聴いて？」

「どの発言のことをおっしゃっておいでか、察しは付きます、大統領。しかし、選考委員会は延々八時間にわたって質問を続けましたからね。中には愚劣に感じられる質問もあって、そういう気持が態度に出たとしても無理からぬことだったと思います。ドラムリンにしても、それは同じでしょう。師匠譲りかもしれません。アロウェイは一時期ドラムリンの研究室に籍を置いていましたから」

「そうね、ドラムリンも不用意な発言をしているわね。とにかく、このビデオカセットに全部録ってあるから、まずアロウェイから聞いてみましょう。ボタンを押してちょうだい、ケン」

テレビの画面に、〈アーガス計画〉基地のオフィスでインタヴューに応じているエリーの

姿が映った。カフカの引用を記した黄ばんだ紙切れも背景に見えている。あれこれ考え合わせると、宇宙から何の信号も入って来なかった方がエリーのためには幸せだったかもしれない。エリーは頬がやつれ、目の下に隈ができている。その上、眉間にはダヘーアがかつて見た覚えもない縦皺が二本刻まれていた。ビデオに映ったエリーはいかにも草臥れきっていた。ダヘーアは罪悪感に胸を締めつけられる思いだった。

「世界的人口危機をどう思うかという質問ですね？」エリーは言った。「やたらに人間が増えることに賛成か反対か、ということですね？　ヴェガへ行ったら真っ先に質問されることだろうから、わたしが間違った答え方をしないように、あらかじめ、確かめておくわけね。じゃあ、お答えします。人口過剰は、わたしが同性愛や宗教的な理由による禁欲主義を支持する根拠です。特に、禁欲は歓迎すべきことです。遺伝的な狂信傾向を抑制しますから」

エリーはまるで凍りついたように、表情も動かさずに次の質問を待った。大統領はポーズ・ボタンを押した。

「たしかに、適切でない質問もあったことは認めるわ。それにしても、文字通り世界が一つになって共通の目的に立ち向おうとしている時に、指導的な立場にある人が人種偏見の権化だったというのは具合が悪いわね。アメリカとしては、〈マシーン〉への対応で発展途上国を味方に付けなくてはならないのよ。だから、今の質問にはそれなりの理由があるの。アロウェイの答は、ちょっと……思慮に欠けるのではなくて？　あなたの御贔屓のアロウェイ先生は、口に毒があるのよ。じゃあ、ドラムリンを聞いてみましょう」

紺地に白の水玉模様のボウ・タイをしたドラムリンは見事に陽焼けして、元気潑溂だった。
「そうです。人間は感情の動物です」ドラムリンは言った。「しかし、じゃあ一歩踏み込んで、感情とはいったい何ですか？　感情というのは、人間がまだ知性で物を判断することを身に付ける以前から備わっていた適応衝動ですよ。とは言うものの、ハイエナの群が牙を剝いて向って来たらどうなるか、これは考えればわかることでしょう。この状況を理解するのに、血管に何ccかのアドレナリンが流れなきゃあいかんということはありません。次の世代に対して、遺伝学的に貢献しなくてはならないことはわたしだって理解できます。そのために、テストステロンの助けを借りるまでのことはないのです。地球よりはるかに文明の進んだ宇宙人が感情に支配されるなどということが考えられますか？　わたしのことを、一部では血も涙もない、感情のかけらもない人間のように言っていますがね、本当に宇宙人を理解したいと思うなら、わたしが出向くしかないでしょう。わたし以上に宇宙人に近い人間は他にいません」
「大変なことになったわね」大統領は嘆息した。「一人は無神論者だし、もう一人は早々と自分がヴェガ星人になった気でいるのよ。どうして科学者を選ばなくてはならないの？　誰か、ごく当り前の人ではいけないの？　もちろん、わかった上で言っているのよ」大統領は慌てて言葉を足した。「科学者でなくてはならない理由は今さら考えるまでもないわ。〈メッセージ〉は科学そのものだし、科学の言葉で書かれているのですものね。地球人とヴェガ星人が分かち合える共通の知識と言ったら科学しかないわ。考えるまでもないどころか、これ

はとても大切なことね、ケン。よく覚えておかなくては」

「アロウェイは無神論者ではありません。不可知論者です。捉われた考え方をする人ではありません。教条に縛られないだけのことですよ。アロウェイは科学者として非常に有能だし、意志の強い人です。責任感もあります。おまけに、知識は該博です。周囲の情況から言って、アロウェイこそ、うってつけの人選だと思います」

「ケン、この仕事にかけるあなたの熱意は嬉しく思うわ。でも、一般の人たちが大きな不安を抱いていることも事実よ。これまでだって、大勢の人々が強い不安に耐えて来たのよ。それを知らないわたしではないわ。現に、わたしが直接会って話をした人たちの半数は〈マシーン〉の建造に疑問を持っているのよ。どうしても後へは退けないなら、乗員には絶対に間違いのない人を選んでほしいという声も耳にしているわ。アロウェイは、たしかに、あなたの言う通り大変優れた人ではあるけれど、絶対に間違いのない人かというと、必ずしもそうは言えないのよ。わたしに対して、議会や、地球至上主義者の団体や、党の中央委員会や、教会関係から、いろいろな圧力がかかっているわ。例のカリフォルニア会談で、アロウェイはパーマー・ジョスの認識を新たにさせたけれど、ビリー・ジョー・ランキンの心証をひどく害したようね。ランキンが昨日、わたしに電話して来て、こう言うのよ。〝ミズ・プレジデント……〟ランキンはミズという呼び方を嫌っていることを隠そうともしなかったわ。〝ミズ・プレジデント。〈マシーン〉は神のもとへ行くか、悪魔の巣へ堕ちるか、二つに一つです。いずれにせよ、乗員には神の御心にかなう志操堅固なキリスト者を選ぶべきです〟っ

て。事もあろうに、ランキンはパーマー・ジョスとの間柄をテコにわたしに圧力をかけようとしたのよ。あわよくば、自分が選ばれることを願っているに違いないわ。ランキンのような人から見れば、アロウェイよりもドラムリンの方がまだしも赦せるのでしょうね。
ドラムリンは、なるほど冷血動物のような人かもしれないけれど、それだけに信頼できるわね。愛国者でもあるし、健全だわ。科学者としての経歴にも、何一つ汚点はないでしょう。それに、何よりも本人が派遣を望んでいるのよ。そう、やはり、ドラムリンということに落ち着くわね。アロウェイは補助要員として待機させるのが最良の解決ではないかしら」
「わたしから、そのように伝えますか？」
「ドラムリンより先に伝えるわけには行かないでしょう。最終的な結論が出て、ドラムリンに通知が行った時点で、あなたに連絡するわ。まあ、そんなに悲観しないでちょうだい、ケン。あなただって、彼女が地球にいた方がいいのではなくて？」

★

パリ会談に臨むアメリカ代表を陰で支えている国務省の補佐団〈タイガー・チーム〉に概況説明を終えて、エリーがホテルに戻ったのは夕方六時過ぎだった。ダヘーアは乗員選考会議が済み次第、電話をくれる約束だった。彼女に白羽の矢が立ったかどうか、ダヘーアは何としても自分の口から結果を伝えたいと言った。エリーは選考委員会に対していささか頭が高かったと反省している。他のどんな理由よりも、それが致命的だったのではないかとも思

う。しかし、彼女は望みを捨てきれなかった。ホテルの電話交換手が用件を取り次ぐ「不在中」と記されたピンクのメモ用紙ではなく、フロントに直接手渡された封筒で、切手は貼られていなかった。文面は「今晩八時、国立科学技術博物館にてお待ち申し上げます。パーマー・ジョス」としてあった。

挨拶の言葉もなければ、会いたいという理由の説明も、行動予定も書かれていない。エリーは呆れた。彼女が会いに来るものと決めてかかっているところは大した自信家ではないか。ホテルの便箋で、返信用の宛先もない。パーマー・ジョスは国務長官の口からエリーがワシントンに来ていることを聞きつけて、ふらりとホテルを訪ねたに違いない。エリーは一日中忙しかったし、〈メッセージ〉をさらに詳しく読むこと以外に時間を費やすのは気が進まなかったにもかかわらず、シャワーを浴びて着替えを済ませ、売店でカシューナッツを買って、四十五分後にはタクシーに乗っていた。

あと一時間もすれば閉館になる博物館は、すでにほとんど人気が絶えていた。広い玄関ホールのあちこちに、黒ずんだ大きな機械が展示されている。十九世紀に製紙、繊維、炭鉱等の花形産業で活躍した機械だ。一八七六年の万国博覧会に出展された蒸気オルガンが西アフリカからやって来た団体旅行の見学者たちを相手に賑やかな曲を演奏していた。もとはブラスバンドのために書かれた曲だった。ジョスの姿はどこにも見当らなかった。エリーは踵を返そうとして、辛うじて思い止まった。

信仰と、〈メッセージ〉についてしか話をしたことのないパーマー・ジョスと、この博物館で会うとしたら、どこを捜したらいいだろうか。エリーは思案した。SETIにおける周波数選択の問題に似たところがないでもない。地球外先進文明からのメッセージはいまだかつて受信されたことがなく、相手のことは何一つわかっていない。いや、それどころか、先進文明の存在それ自体が、まだ知られているわけではない。そのような状態で、相手がどの周波数を使ってメッセージを送信して来るか見当を付けなくてはならないのだ。手掛かりは共通の知識である。共通な知識で何よりも確実なものは何かといえば、宇宙に最も豊富に存在する原子である。その原子はある一つの決まった周波数の電波を吸収、もしくは放射することを特徴としている。この考えに従って、SETIの初期の探査では常に、一四二〇メガヘルツの中性水素原子吸収線が注目されたのだ。今、この場でそれに当るものは何だろうか？　アレクサンダー・グラハム・ベルの電話……？　マルコーニの無線電信……？　そうだ！

「ここには、フーコー振子はありますか？」エリーは守衛に尋ねた。

大理石の床にヒールを鳴らして、彼女は振子のある円形の吹き抜けに急いだ。ジョスは手すりに凭れて、方位を示すモザイク・タイルを見つめていた。円周に沿って時間を表示する小さな標識が並び、その半ばは昼の間に振子の動きによって倒されていた。午後七時のあたりで博物館の職員が振子を止めたと見えて、錘は微動だにせず垂直に下がっている。二人の他に人影はなかった。足音はかなり前から聞えているに違いなかったが、ジョスは顔を上げ

ようともしなかった。

「お祈りで振子を止めてみせるっておっしゃるの?」エリーは笑いかけた。

「信仰をからかってはいけませんね」ジョスは真顔で答えた。

「からかうなんて、あら、どうして? 祈りで振子が止まったら、大勢の人たちがあなたを信じるようになるでしょう。神にとっては振子を止めるくらい何でもないはずだし、たしか、あなたは始終、神と対話しているそうだし……。ああ、わたしをここへ呼び出したのは、そんなことではないのね。わたしが調和振動子の物理を信じているかどうか、あなたはどうしても試したいのね? わかったわ」

エリーはジョスが自分を試そうとしていることに半ば驚きながら、一方では、断じて後へは退けない気持だった。彼女はショルダー・バッグを降ろして、靴を脱ぎ捨てた。ジョスは身軽に真鍮の柵を乗り越えて彼女に手を貸した。二人はタイルの斜面を滑るように駆け降りて振子の傍に立った。鈍く黒光りする錘は鋼鉄か鉛か、見た目には判断が付きかねた。

「手伝って」エリーは言った。彼女が錘を抱きかかえ、二人は力を合わせて、錘がちょうど彼女の顔の高さに達するところまで大きく振子を傾けた。ジョスは脇へ避けてじっと彼女を見守った。大丈夫かと尋ねようとはしなかった。前に屈まないように、また、錘をはなす時に押さないように、注意を与えることもなかった。背後の床は一メートル半ほど平らに拡がり、そこから円形の壁に向って斜めに立ち上がっていた。冷静に考えれば恐がることは何もない、と彼女は自分に言い聞かせた。

エリーは手をはなした。錘は真っすぐ向うへ遠ざかった。

軽い眩暈(めまい)を覚えながら、彼女は頭の中で考えた。単振子の周期は2π、ルートg分のL。Lは振子の長さ。gは重力加速度。支点に摩擦が働くから、振子は決してもとの位置を越えて振れることはない。顔を前に出したりしない限り、何の危険もありはしない。

向う側の柵の手前で錘は速度が鈍り、一瞬、宙に静止した。反転した錘は思いのほか激しい勢いで彼女に迫り、動きにつれてみるみる大きさを増すかと思われた。錘は顔前で彼女の視野をいっぱいに満たした。エリーは思わず息を呑(の)んだ。

「わたし、びくっとしたわ」再び遠ざかる振子を見送って、エリーは無念らしく言った。

「ほんの少しでしたよ」

「でも、やっぱり、恐かったのよ」

「あなたは信じています。科学を信じています。一瞬、微(かす)かな不安を感じただけです」

「いいえ、そうじゃないの。これは要するに、人間が百万年の間に身に付けた知識と、十億年来持ち続けている本能の戦いなのよ。だから、わたしたち科学者の仕事より、あなたがた伝道家の方が楽なんだわ」

「これに関してはお互いさまです。今度はわたしの番ですね」パーマー・ジョスは手前に振れきった錘をぞんざいに抱き止めた。

「あなたがエネルギー保存の法則を信じるかどうか、試す必要はないでしょう」

ジョスはにっこり笑って両足を踏ん張った。

「何をしてるんです、そこで？」背後で怒鳴る声があった。「何の真似ですか？」閉館までに見学者たちが間違いなく退出するように見回っていた守衛が、がらんとした広大な建物の片隅で、何たることか、一組の男女が柵を乗り越え、フーコーの振子にすがりつくという、あり得べからざる光景に出くわしたのだ。

「ああ、怪しい者じゃありません、守衛さん」ジョスは愛想好く言った。「わたしたち、お互いの信念を試しているところです」

「困りますねえ、スミソニアン研究所でそんなことをされては」守衛は苦い顔をした。「ここは科学博物館ですよ」

二人は声を立てて笑いながら、何とか振子を垂直の位置に止め、タイルの斜面を這い上がった。

「修正憲法第一条で無罪ね」エリーは言った。

「十戒の第一の戒めに照らしても、許されることです」ジョスは答えた。

エリーは靴を穿いてバッグを肩に掛けると、昂然と胸を張って振子の吹き抜けを後にした。二人は身分を明かさず、顔を見破られることもなく、ひたすら守衛に謝ってその場を切り抜けた。制服の警備員たちが二人を取り囲むようにして外へつまみ出した。警備員の一同は、エリーとジョスが捉えどころのない神を追い求めて蒸気オルガンに攀じ登るのではないかと懸念したに違いない。

★

街は人通りが絶えていた。二人はしばらく無言でモールを歩いた。晴れた夜空の地平線に近く、こと座がかかっていた。

「あそこに明るく見えているの、あれがヴェガよ」エリーは言った。

ジョスはひとしきりヴェガを見つめた。「〈メッセージ〉の解読は、本当に立派なお手柄でしたね」ややあって、彼は言った。

「手柄だなんて、とんでもない。取るに足りないことですよ。先進文明にしてみれば、これ以上はないというくらい、いちばん簡単な暗号だったに違いないんですもの。あれを解読できなかったら、人類はそれこそ不明を恥じなくてはならないわ」

「御謙遜(ごけんそん)でしょう。いやいや、どうして、これは人間の未来を変える大発見ですよ。少なくとも、未来に対する考え方は変ります。その意味では、火や、文字や、農業と同じように、人間の歴史に大きくかかわることでしょう。あるいは、受胎告知にくらべられる出来事と言っていいかもしれません」

ジョスは再びヴェガに視線を馳(は)せた。

「もし、あなたが〈マシーン〉の乗員に選ばれて、〈メッセージ〉の送り手がいる世界に行くとしたら、どんな相手に出会うと思いますか？」

「進化というのは確率的(スタティスティカル)な過程だわ。あまりにも多様な可能性がありすぎて、他(ほか)の宇宙

で生命がどんな進化の過程を辿ったか、予測するのは土台無理な話よ。仮に、生命が誕生する前の地球を知っていたとしたら、果して、キリギリスや縞馬を予想できたかしら？」

「わたしには、答がわかっています。あなたは、おそらく、それをわれわれ宗教家のでっち上げとお思いでしょう。本の知識や、聞きかじりでわれわれが物を言っているのだと考えておいでだと想像しますが、それは違います。わたしの知っていることは、わたしが直に体験したことです。これ以上にはっきりした話はありません。わたしは神と間近に対面したのです」

ジョスの信念は揺ぎなかった。

「その時のことをお聞きしたいわ」

ジョスは語った。

★

「そこまでは、いいわ」話がひと区切りついたところで、エリーは言った。「あなたは医学的に一度死んで、蘇生したわけね。真っ暗闇から眩い光の中へ出た記憶があって、その光に包まれた人の姿に、あなたは神を見たというお話ね。でも、その体験からだけでは、光の中にいた神が世界を造ったことにはならないし、道徳律を定めたとも言えないわ。体験は体験として、あなたが深く心を打たれた事実に疑いをさしはさむ余地はないと思うけれど、ただ、それだったら、他にも説明は成り立つのではないかしら」

例えば？」

「そうね、出産の瞬間とか。出産というのは、つまり、胎児が真っ暗な長いトンネルを潜って、目が眩むような明るい光の中へ出て来ることでしょう。その眩しさといったらないはずよ。赤ちゃんは真っ暗なおなかの中に九カ月もいるんですもの。出産は一人の人間がはじめて光を見ることなのよ。物の形や色、陰翳、人の顔、そういったものがいきなり目に飛び込んで来た時の驚きを想像してごらんなさい。新生児は人の顔を認識できるように、あらかじめ脳にプログラムを与えられているかもしれないでしょう。人が死ぬ瞬間には、ちょうど車のオドメーターがゼロに戻るように、一瞬、出生の時の記憶が蘇るということがあるのではないかしら。誤解のないように言っておきますけど、わたしはなにも、この説明にこだわっているわけではないわ。ただ、いろいろな考え方ができるということを言いたいのよ。あなたはその体験を、思い込みで解釈しているのではないかしら」

「体験した者でなくてはわからないことでしょう」

ジョスは今一度、冷たく光る青白いヴェガを見上げてからエリーをふり返った。

「あなたは……宇宙で迷子になっているような気持を感じることはありませんか？　神がいないとしたら、あなたは何によって御自分の行為、行動を決められますか？　ただ、逮捕されないために法律を守るだけですか？」

「あなたは迷子になることを心配しているのではないわ、パーマー。あなたは、人間が中心ではなくなることが心配なのよ。あなたにとっては、人間こそが天地創造の理由でなくては

ならないから。わたしの宇宙にはいろいろな秩序があるわ。重力、電磁気、量子力学、超統一理論。いずれも法則の上に成り立っている世界よ。行動について言えば、人間にとって何が一番の利益かを考えればいいことではないかしら。人類全体として」

「それは心暖まる、尊い世界観ですね。人の心に善があることを認める点ではわたしもあくまで賛成ですが、しかし、神の愛がないところで、どれほど残虐な行為が働かれたでしょうか」

「神の愛があったにしても、同じことが言えるわ。宗教改革を企てて殉教したサボナローラも、宗教裁判所長のトルケマーダも、神を愛したはずではなかったかしら。あなたの信仰では、人間はみな子供で、子取り鬼が来ますよと言っておどかさないと、すぐ悪さをするという考え方でしょう。だから、神を信じて道徳を守るように教えるのね。それ以外に人間を律する術はないみたいに。罪を犯せば警察が厳しく追及するし、警察の目を逃れても、全知全能の神の目はごまかせないから、天罰覿面というわけでしょう。でも、それはずいぶん人間を舐めた話だわ。

パーマー、あなたはわたしが、あなたと同じ宗教体験を持っていないから神の大きさを理解しない、と思っているようだけど、それは逆よ。あなたの話を聞くと、かえってわたしは、この人の言う神は何て小さいのだろう、と思うの。吹けば飛ぶようなちっぽけな惑星で、たかだか二、三千年、信仰を集めているだけでしょう。宇宙の創造主なんておこがましいわ。神話の仕出しの神格にくらべたって見劣りするくらいよ。

「あなたはわたしと誰か別の宣教師を混同しています。例のモデストの博物館はブラザー・ランキンの領分です。わたしは宇宙の歴史が何十億年だろうとびくともしません。ただ、科学はまだそれを立証していないというだけのことです」

「わたしに言わせれば、あなたがたは科学が提出する証拠を理解していないのよ。宗教上、真理とされて来た因習的な知恵が虚偽だとしたら、そんなものが人間にとって何の役に立つかしら？　あなたがたが、人間はもっと大人だということを真剣に考えたら、お説教の中身も変るはずだわ」

会話がしばらく跡絶え、二人の足音だけが闇に谺した。

「言葉が過ぎたら、ごめんなさい」エリーは言った。「わたし、時々こんなふうに、言いたい放題のことを言ってしまうの」

「約束しましょう、アロウェイ先生。今日あなたがおっしゃったことを、とっくりと考えてみます。わたしとして、お答えしなくてはならない問題提起がありました。同じ意味合いで、わたしの方からもいくつか質問したいと思いますが、いいですか？」

エリーがうなずくのを待って、ジョスは言葉を続けた。

「意識というものについて考えていただきたいのです。例えば、今この瞬間、あなたは何を感じていますか？　頭の中を、何十億という小さな原子が飛び回っているのが感じられますか？　生物学的な仕組みを突き詰めた先の、科学のどこに、子供が愛の本質について学ぶべきものがありますか？　つまり……」

エリーの携帯電話が鳴った。彼女が待ち望んでいたケンからの知らせだろうか。そうだとすれば、会議はずいぶん長引いたことになる。もっとも、だからといって悪い知らせと決まったものでもないかもしれない。液晶の文字盤に、ケンのオフィスの番号が出ていた。近くに公衆電話は見当らなかったが、幸い、ほどなくタクシーを拾うことができた。

「急に失礼するようになって、ごめんなさい」エリーは詫びた。「お話しできて、楽しかったわ。わたしも、あなたの質問をとっくりと考えてみますから……他に質問は？」

「それでは、もう一つ。科学の教えに、科学者の罪を戒めるものがありますか？」

第六章　エルビウムの車知

CamScannerでスキャン

地球があればそれで充分、
星座が近寄ってくれればなどとは思いもせぬ、
むろん星座は今いる場所にいればよく、
星の仲間であるぼくらには今のままで何の不足もない。

——ウォルト・ホイットマン『草の葉』「大道の歌」(一八五五)

CamScannerでスキャン

技術者は夢を脹らませ、外交筋は悪夢に魘されて数年が過ぎ、〈マシーン〉はついに建造開始の運びとなった。〈マシーン〉の呼称として無数の造語が提唱され、建造プロジェクト自体の名称にも、古代神話を典拠にいく通りもの候補が挙げられたが、そもそものはじめから、誰もが〈マシーン〉の一語で事を足らせていたために、結局、これが公式の名称となった。複雑、微妙な思惑絡みでその後も続けられている国際間の駆引きを、西側の報道は〈マシーン・ポリティックス〉と呼んだ。はじめて信頼するに足る建造費の概算見積りが発表されると、航空宇宙産業を代表する超大企業さえもが、その途方もない金額に息を呑んだ。これ造には数年を要するが、見積りによれば、毎年五千億ドルの費用がかかる計算だった。建造は、核兵器と通常兵器を合わせて、全世界の軍事予算のほぼ三分の一に相当する。〈マシーン〉建造は世界経済を破滅させるのではないかと憂慮する声が上がっても不思議はなかった。ロンドン『エコノミスト』は〝ヴェガは地球に経済戦争を仕掛けて来たのか？〟と問いかけた。『ニューヨーク・タイムズ』の毎日の見出しは、どんなに控え目に受け取っても、今は廃刊となった『ナショナル・エンクワイアラー』の十年前の論調にくらべてはるかに不気味

だった。

記録を調べてみればすぐにわかることだが、霊媒、占い師、予言者、祈禱師、自称千里眼、占星術者、数霊術者、十二月も押しつまってから〝来る年〟について託宣を下すコピーライター等々、何らかの形で未来予測の能力を売りものにしている者たちの誰一人として〈メッセージ〉ないし〈マシーン〉を予知した人物はいなかった。ましてや、ヴェガや、素数や、アドルフ・ヒットラーや、オリンピックの映像や、その他もろもろについて予見する発言があろうはずもなかった。にもかかわらず、ここに至って、自分はすべてをはっきり見通していながら、ついうっかり発表しそびれたのだ、と言い立てる者が続出した。もっとも、驚異の予言はあらかじめ書き記されていないものばかりが的中することに相場が決まっているから、これは目くじらを立てるほどのことでもなかった。宗教界はいささか事情を異にしていた。数ある宗団、教派がそれぞれに、想像力を働かせて自分たちの聖典を熟読吟味すれば、そこに紛れもなく今日の大異事が予言されていることがわかるはずである、と主張した。

それはさて措き、世界中の航空宇宙産業にとって〈マシーン〉は無尽蔵の大金脈と期待すべきものであった。広島協定が発効してこの方、航空宇宙産業は凋落傾向にあり、先行きの見通しも暗かった。新しい戦略兵器システムの開発も、これと言って目ぼしいものはない。宇宙住宅開発が新産業として台頭のきざしを見せてはいるものの、軌道レーザー兵器基地や、かつて政府が計画した戦略防衛装備が廃絶された穴を埋めるにはまだ程遠い。そんなわけで、〈マシーン〉の建造が地球の安全を脅やかすのではないかと不安を抱いていた者たちも、こ

れで景気が上向きに転じ、収入と地位が約束されるものならば、と懐疑には目をつむるようになった。

特権階級の一部は、ハイテク産業のためには宇宙の脅威こそ願ってもない飛躍の好機と勇み立った。地球は防衛力を持たなくてはならない。強力な査察レーダーも必要であろう。いずれは冥王星、あるいは、オールト彗星雲あたりに前哨基地も築かなくてはなるまい。地球と地球外文明の軍事力の差がいかに大きなものであるかを聞かされても、彼ら夢想家たちは一向に臆することがなかった。「たとえ力不足で防衛はしきれなくとも、敵がやって来るのを事前に知る必要があるではないか」と彼らは反論した。彼らは莫大な利益の匂いを嗅ぎ付け、何としても獲物をせしめようと隙を窺っていた。ハイテク産業は、もちろん、現に〈マシーン〉の建造に直接携わっている。それだけで何千億ドルもの利益が約束されているはずだが、彼らにしてみれば、その程度は序の口である。上手く立ち回れば儲けは何倍にも脹れ上がるというわけだった。

ラスカー大統領再選の舞台裏で、以前には考えられなかった党派の再編成が進んだ。大統領選挙はとりもなおさず、〈マシーン〉建造の賛否を問う国民投票だった。対立候補は〈トロイの木馬〉と言い、〈終末機械〉と言って建造計画を非難し、進取の気象を誇って来たアメリカ人は、すでに考えられる限りのものを造り出してしまった宇宙人の前に意気沮喪する破目になるだろう、と国民の危機感を煽った。これを受けて立った現職のラスカー女史は、アメリカの技術は必ずやこの試練を乗り越えるものと確信する、と述べ、明言は避けたもの

の、進取の気象を誇るアメリカは、やがてはあらゆる点で先進ヴェガの技術水準に追いつくであろうと自信を仄めかせた。女史は地滑りの圧勝とは言えぬまでも、かなりの大差で再選を果した。

〈マシーン〉建造の成否は、ヴェガから送信された指示をいかに忠実に守るか、その一点にかかっていた。解読の鍵となった、言わば語学入門書と基礎技術講座、それに〈メッセージ〉本文中の建造工程便覧は、いずれも細部に至るまで明快を極めていた。時として、自明のことと言える中間過程がくどいほど詳細に述べられている箇所もあった。例えば、数学の初歩を説明するくだりで、二掛ける三が六ならば、三掛ける二もまた六であることを証明してみせるといった具合である。建造工程の各段階には綿密な検査が課されていた。そこに示された処理法で精製されたエルビウムの純度は九十六パーセントでなくてはならず、他の稀土類がコンマ数パーセントを超えることは許されなかった。コンポーネント31が完成して、これを六バールの弗化水素酸溶液に浸した時、液面の上に出た構造部分は正確に図に示された通りの形状を取らなくてはならなかった。コンポーネント408は、これに二メガガウスの直角方向の磁場をかけた時、ローターの回転速度は毎秒これこれに達しなくてはならない、と厳密な数字が指定されていた。一つでも検査基準に満たない点があれば、その工程ははじめからやり直しだった。

回を重ねるにつれて技術者たちは検査に馴れ、自信も付いて来た。それは、何かを丸暗記することに似ていなくもなかった。得体の知れない部品の多くが、〈メッセージ〉の指示に

従って現有技術を寄せ集めた特殊工場で製作された。重要な部品であることはわかっても、いったいどんな働きをするのか、人間の理解を拒むものも少なくなかった。わからないままに、作ってみるとそれらの部品は機能した。そして、充分な理解が得られなかったにもかかわらず、そこで学んだ新しい技術の他分野への応用が検討される例すらあった。金属工学や有機半導体の分野では、この体験を足掛かりとして、高度な新技術が開発される期待が高まった。部品によっては、最終的に同じ一つのものを作るのにいく通りかの方式が示されている場合もあった。これは、地球の技術ではどのアプローチが最も容易か、宇宙人が判断に迷ったためと思われた。

いくつかの工場が建てられ、とにもかくにもコンポーネントの原型が形を見せはじめると、未知の言葉で書かれた〈メッセージ〉から異星文明の技術を再現するのは無理ではないかという、地球人の能力についての悲観論は影を潜めた。ちょうど、学生が勉強もせずに試験を受けたところが、一般教養と常識の範囲で問題が解け、自分もまんざら出来が悪いわけではない、と気を取り直しているようなものだった。出題に配慮が凝らされた試験は、それを受けること自体が一つの学習体験になり得るのと同じで、地球人は新しい技術を学びながら、まず第一の関門を通過した。エルビウムは充分な純度を達成した。弗化水素酸が無機質素材を腐蝕し去ると、後には図面に示されたところと寸分違わぬ上部構造が残った。ローターは規定の速度で回転した。文明批評家たちは、〈メッセージ〉は科学技術陣を懐柔するものであると言い、彼らは技術の追究に夢中になるあまり、行手に待っているかもしれない危険を

忘れていると批判した。

あるコンポーネントの製造に、一連の極めて複雑な有機化学反応を伴う過程が必要であるとされていた。そこで、半完成のコンポーネントはプールほどの水槽に張ったホルムアルデヒドとアンモニアの混合液に浸された。コンポーネントを形作る物質は成長し、分化し、特殊化して、その場にうずくまった。とうてい人工的に作り出すことは不可能と思われる摩訶不思議な姿だった。複雑に枝分かれして網のように全体を覆う管は、何らかの液体が循環するためのものに違いなかった。表面はコロイド状の肉質で、黒ずんだ赤色を呈していた。自己増殖をしないという点を除けば、これはもう、どう見ても生物で、その奇怪な姿は人を気味悪がらせるに充分だった。この過程を繰り返すと、もう一つ、見た目にまったく同じ姿をしたものが生れた。いともさりげない〈メッセージ〉の記述から、いったいどうしてこのような想像を絶するばかりの異形のものが作り出されるのか、地球の科学では説明のしようがなかった。有機物体は台座の上にうずくまっていた。しかし、見た限りでは、いっさい活動することはなかった。最終的には、この物体は十二面体の乗員席の上下に配置されるはずであった。

〈マシーン〉はアメリカとソ連で同時に建造が進められていた。両国とも建造所には僻地を選んだが、それは人口密集地の安全を配慮したというよりは、むしろ、野次馬や抗議集団、報道陣を遠ざけるためだった。アメリカではワイオミング、ソ連ではコーカサス山脈からカスピ海を隔てた向う側のウズベク共和国で、〈マシーン〉は徐々に形を成して行った。組立

て工場を中心に、各種のプラントが次々に建設された。従来の技術で用が足りるものは広く分担して世界各国が製作に当った。例えば、光学系の部品は東ドイツのイェナで製作され、検査を終えて、アメリカとソ連に納入された。同時に、すべてのコンポーネント一式が日本に運ばれ、原理、構造の組織的調査研究が進められた。調査研究は北海道で行われたが、成果は遅々として挙がらなかった。

〈メッセージ〉に定められていない検査を行っては、最終的に〈マシーン〉に組み込まれた時に、コンポーネント同士の微妙な共生関係を破壊することになりはしないかと懸念（けねん）する声もあった。〈マシーン〉本体を構成する部品のうち、最も大きなものは、外側に三層に重ねられる同心の球殻（スフェリック・シェル）だった。三つの球殻は相互に直角方向の軸を中心に高速回転するもので、その表面には複雑精緻（せいち）な模様が彫り込まれなくてはならなかった。この球殻を検査の名において不用意に回転させたら、最終的に〈マシーン〉に組み込んだ時に正しく回転しなくなってしまうのではないか、という慎重論がある一方で、検査もせずに完全なものができるだろうか、という懐疑も根強かった。

アメリカにおける〈マシーン〉建造の元請けはハッデン産業だった。ソル・ハッデンは、〈メッセージ〉に指示されていないいかなる検査も実施するべきではないと強く主張し、また、コンポーネントの一部を仮に組み立てたりすることにも反対した。〈メッセージ〉の指示は厳守されなくてはならず、一字一句たりともおろそかにしてはならない、というのが彼の方針だった。ハッデンは自社の技術陣に、魔法使いの忠実な弟子たることを命じ、ただひ

たすら魔法の呪文を正しく唱えることに専念するように申し渡した、発音一つ間違えてはならない、と彼は言った。

時あたかも二十世紀の末近く、終末論の立場を取るか否かはともかくとして、そこに謂う千年王国の到来になぞらえられた二十一世紀の幕開けは僅か二年後に迫っていた。最後の審判であれ、キリストの再臨であれ、多くの人々がこの世の終わりに備えて進んで引退したために、あちこちで熟練労働者が不足する事態が生じていた。ハッデンは積極的に人材を集めて仕事の能率化を図り、下請け業者らの意識を掻き立てることに努めた。これがアメリカの〈マシーン〉建造に大きく弾みをつけたとは衆目の一致するところだった。

ところが、当のハッデンは、すでに現役を退いていた。〈プリーチニックス〉の発明者の哲学は広く知られていたから、これは大方の予期せぬことだった。引退に際してハッデンは「千年王国論者たちのおかげで自分は無神論者になった」と語った、と伝えられている。もっとも、腹心の部下の話では、重要な問題に関しては依然として、ハッデンが決定権を握っていた。彼との連絡は高速非同期の遠隔通信網を介して行われた。部下は作業報告や、承認を求める書類、質問等を行嚢に入れて、さる民間の科学情報通信サービスに依託する。ほどなく、別の行嚢でハッデンからの返事が届くという寸法である。業界伝統の指揮としては異例だが、どうやら、これで上手く行っている様子だった。極めて困難な初期の段階が過ぎて〈マシーン〉が形を現わしはじめるにつれて、S・R・ハッデンからの連絡は間遠になった。〈ワールド・マシーン・コンソーシアム〉の役員たちはハッデンのことを気遣ったが、ある

時、彼らは某所にハッデンを訪ねた。訪問は長期におよんだ。そして、以後、誰もハッデンの身を案じることはなくなった。彼のいどころはついに明かされずに終った。

世界の戦略核兵器保有数は一九五〇年代半ば以降、はじめて三千二百基を割った。より困難な軍縮の段階、核抑止力を最低限度まで削減することを目指して、多角的な交渉が進められていた。一方の陣営が核兵器を減らせば、相手方の小規模な先制攻撃で報復能力を封じられる危険は常に付きまとったが、検証の容易な核運搬手段は目に見えて削減が進んでいたし、協定履行を監視する新しいシステムも実施され、現地査察に関する合意も成立して、軍縮の見通しは明るかった。こうした情況は、軍事専門家と一般大衆の意識に等しくある種の衝動を与えた。軍備競争の常として、両大国は互いに後れを取るまいと鎬を削ったが、ここではそれが軍縮の方向を指したのである。現実の軍備という観点から見れば核廃絶には前途程遠く、両大国とも依然として地球の全文明を破壊するに足る核を保有していた。とはいえ、将来への明るい展望が開け、若い世代が希望を抱くようになったことを思えば、これは大きな前進に違いなかった。教会と俗界が挙げて二十一世紀の幕開けを祝う千年祭が間近に迫ったことも手伝って、国際間の武力紛争は年とともに鎮静に向っていた。メキシコの司教枢機卿はこれを称して〈神の平和〉と言った。

ワイオミングとウズベクでは次々に新しい産業が起り、町々は好景気に沸いた。〈マシーン〉建造のコストは、当然、先進諸国が大半を負担したが、これを世界の人口に按分すると、一人当り年間百ドル前後になる計算だった。地球の四分の一の人口にとって、百ドルの年収

増は馬鹿にならない。〈マシーン〉のために支出される金は、直ちに商品を産み出すわけでもなく、サービスの市場を拡げることもなかったが、これが新たな技術開発の呼び水となったから、仮に〈マシーン〉自体が何の用をなさなかったとしても、経済的波及効果は大きく、充分に元は取れると言ってよかった。

先を急ぎすぎている、と批判的な見方をする者も少なくなかった。一つの段階が終ったら、そこで行われたことの意味をつぶさに検討し、とくと理解してから次の段階へ進むべきであるというのがその根拠だった。そのために〈マシーン〉建造が何十年にわたったところで、いささかも不都合はないではないか。時間がかかれば、それだけコストは分散され、世界経済の負担は軽減される勘定ではないか。なるほど、あれこれ考え合わせてみれば、これは正論だった。とはいえ、現実の問題として作業を遅らせるのはむずかしい。〈マシーン〉のコンポーネントを一つだけ取り出して、これを単独に作り出そうとしても、そうは行かなかった。世界中の、ありとあらゆる分野の科学者、技術者たちが〈マシーン〉の複数分野に跨る局面や、境界領域の問題について自分の能力を売り込もうと、虎視眈々と機会を窺っていた。

また一方では、早くしなければ〈マシーン〉は永久に完成を見ることはないと性急に説く者もあった。〈マシーン〉建造はアメリカ大統領とソ連首相が国家の威信にかけて決断したことである。しかし、後々の指導者が同じ考えでこの大事業を引き継ぐという保証はどこにもない。また、現在〈マシーン〉建造の任に当っている者たちは、至極当然のことながら、

CamScannerでスキャン

自分の任期中に完成に漕ぎつけたいと願っていた。〈メッセージ〉が多数の周波数で、長期間、執拗に送られて来たことに着目して、異星人の側にさしせまった事情があるに違いないとする説もあった。地球の技術的環境がととのうのを待ってはいられない。異星人は今すぐにも〈マシーン〉を必要としている、という解釈である。建造作業に拍車がかけられた。

　初期に完成したサブシステムは、いずれも基礎技術の応用だった。検査の基準を満たすのにさしたる困難もなかった。しかし、次第にシステムが高度になるにつれて、検査に合格しないものも出はじめた。これは両国に共通することだったが、どちらかと言えば、ソ連の方が不良品は多かった。コンポーネントの機能や原理は誰一人知る者がなかったから、欠陥が発見されても、工程のどこに原因があるのか突き止めることは、ほとんどの場合、不可能だった。コンポーネントによってはメーカー二社に同時に発注して、仕事の速さと質を競わせることもあった。二つの完成品がともに検査に合格した時は、アメリカもソ連も、国産品を採用する傾向が強かった。そんなわけで、両国で建造が進められている二つの〈マシーン〉は、厳密にはまったく同じものではなかった。

　そうこうするうちに、個別に製造されて来たコンポーネントが、ワイオミングで最終的に〈マシーン〉として組み立てられる時がやって来た。組立ては建造過程の中で最も容易な作業であると思われた。〈マシーン〉は一、二年のうちに完成の目処が付いた。〈マシーン〉が始動する時、予定された通り、世界の終りが訪れるのだ、と一部ではささやかれていた。

★

ワイオミングのウサギは臆病だ。それとも、この地方にはもともと数が少ないのか、たしかなことはわからない。サンダーバードのヘッドライトに照らされて、道端にうずくまっているウサギの姿を時折見掛けることがないでもなかったが、何百匹という大群が沿道に整列するニューメキシコの風習は、どうやら、まだワイオミングには伝わっていないらしかった。エリーの印象では、このあたりの環境は〈アーガス〉とさして変りない。〈マシーン〉関連の科学施設を取り巻いて、果てもなく周囲に拡がる自然の風景は美しい。〈マシーン〉建造は彼女の仕事ではなかったし、乗員の座も逸したが、とにかく、エリーはこのワイオミングで、人類の歴史はじまって以来の大事業に参画している。〈マシーン〉が始動した時に何が起ろうとも、〈アーガス〉における発見が歴史の転機として評価されることに変りはあるまい。

[illegible]独[illegible]んたる力がありさえすれば、というまさにその瞬間に、青天から霹靂が降ったのだ。いや、暗黒天からだ、とエリーは考え直した。二十六光年、二百三十兆キロの彼方から呼びかける声があったのだ。地球より一千年は進んでいると思われる文明世界から誰彼の区別なく声をかけられたら、人は自分がスコットランド人か、スロベニア生れか、四川省の出か、そんなことに構ってはいられない。地球上で最も技術的に遅れている国と最先端の文明国との隔たりも、地球とヴェガの格差にくらべたら物の数でもあるまい。従来、

埋めることのできない溝と思われていた民族、宗教、国家、人種、言語、経済制度、文化の違いは急に色褪せて見えるようになった。

「人間はみな同じ」このところ、あちこちで盛んに言われていることである。ほんの数十年前までは、こうした感情は必ずしもやすやすと表明されることではなかった。特にマスコミでは差別偏見が罷り通っていたのだから、今昔の感を禁じ得ない。近頃では、人類は同じ一つの小さな惑星に生きているという認識が広まり、地球文明という常識が定着しつつある。異星人が人類の代表に会った時、相手が地球上のどちらのイデオロギー陣営に属しているかにこだわるとは思えない。その真意がどこにあるかはいまだに謎のままながら、現に〈メッセージ〉が届いた事実が、世界を一つに結ぼうとしている。それが、今、目の前で起きていることとなのだ。

エリーが乗員に選ばれなかったことを聞いて、母親はまず尋ねた。「あなた、泣いた？」そう、エリーは泣いた。極く自然な感情だった。どこかに、まだ諦められない気持があったとしても無理はない。しかし、何と言ってもドラムリンが最も当を得た人選なのだ、と彼女は母親に話した。

ソ連では、まだルナチャルスキーとアルハンゲルスキーのどちらとも決まっていなかった。二人とも任務に備えて訓練するという。〈マシーン〉を可能な限り理解すること以上に、いったいどのような訓練があり得るのか、疑問だった。アメリカ人の中には、これは自国から〈マシーン〉に関して権威のあるスポークスマンを二人出そうというソ連の魂胆だと僻目に

見る向きもあったが、エリーに言わせれば、それこそ下司のかんぐりだった。ルナチャルスキーもアルハンゲルスキーも、いずれ劣らぬ有能な科学者である。ソ連当局としても、どちらか一人に決めるのはさぞむずかしいことだろう、と彼女は察した。ルナチャルスキーはアメリカに滞在中である。ただし、このワイオミングにはいない。ソ連の政府高官とともにワシントンで、国務長官と、今度新しく国防副長官に就任したマイケル・キッツと会談中である。アルハンゲルスキーはウズベク共和国にいる。

ワイオミングの荒野に忽然と誕生して、今なお発展目覚ましい近代都市はマシーンと呼ばれていた。ワイオミング州マシーン市。ソ連の方も事情は同じで、マシーンに当るロシア語、マヒーナがそのまま町の名になった。町には集合住宅や公共施設が並び、住宅街とビジネス街が区画を分かっていた。しかし、何と言っても町の景観を支配するのは夥しい工場群だった。外から見た限りでは何の変哲もない工場がある一方、ドームや尖塔、複雑に入り組んだパイプなどが奇観を呈する工場も少なくなかった。このワイオミングの荒野に建設された工場はいずれも、例えば有機コンポーネントのように、何らかの危険を伴う可能性なしとしないものを製造する設備で、その他の既成の技術で対応できる設備は広く世界各地に分散されていた。工場群の核をなしているのが最後の組立てが行われる〈システムズ・インテグレイション・ファシリティ〉で、かつてのワゴンウィールの町に程近いところにあった。完成したコンポーネントが搬入されるのを眺めながら、エリーは自分が人類としてはじめてその設計図を見たのだと感慨に打たれること屢々だった。新しいコンポーネントが届く度に、彼女

は駆けつけて開封に立ち会った。コンポーネントが順に組み立てられ、各段階で所定の検査が無事に済むと、彼女は我が子の成長を見守る母親の誇りにも似た昂揚を覚えた。

★

エリーとドラムリン、ヴァレリアンの三人はヴェガからの信号監視に関する定例の会議で顔を合わせた。今では世界中が挙って、引き続き送信されている信号を監視している。会議室はバビロン炎上の話題で持ちきりだった。事件は未明のことで、現場にいあわせたのはよほどの物好きか、いささか趣味の奇矯な常連ばかりであったと想像される。曲射砲と焼夷弾を携えた暴徒の集団は二手に分かれて〈エンリル門〉と〈イシュタール門〉から同時に侵入して〈ジグラト〉に火を掛けた。全裸同然の姿で〈アッシュール神殿〉から逃げまどう男女の写真が新聞に載った。負傷者は多数に上ったが、奇跡的に、死者は一人もなかった。

事件直前に、地球が落雷に打たれて今まさに崩壊しようとしている図柄の社章で知られる右翼系の新聞『ニューヨーク・サン』に襲撃を予告する匿名の電話があった。腐敗堕落を見るに耐えかね、アメリカの品位と礼節を守るために天誅を下すという趣旨だった。歓楽境の経営母体であるバビロン社の社長は談話を発表して暴徒の一味を厳しく非難し、その犯行為を糾弾した。しかし、これまでのところ、姿をくらましたまま、S・R・ハッデンは沈黙を守っている。

エリーがバビロンにハッデンを訪ねたことを知っている学者仲間たちは、しきりに彼女の

感想を聞きたがった。ドラムリンまでが、この事件に対する彼女の意見に関心を示した。バビロンの様子になかなか詳しいところを見ると、ドラムリン自身、何度か行ったことがあるに違いなかった。エリーは彼が古代の服装をして馬車を駆っている姿をありありと想像に描くことができた。もっとも、ドラムリンは新聞や雑誌でバビロンのことを知ったのかもしれない。復原都市の航空写真はかつて何度もニュース雑誌に紹介されている。

事件の話が一段落して議事は本題に入った。〈メッセージ〉は相変らず同じ周波数、同じ帯域幅で送信されている。時定数も変らない。偏波変調も以前のままである。〈マシーン〉の設計図と解読の鍵が素数とオリンピックの映像の合間に重ね書きのように挿入されていることも同じである。ヴェガ星人はよくよく思いつめているらしかった。あるいは、送信機のスイッチを切り忘れているのだろうか。ヴァレリアンはどこか遠くを見る目つきで天井を仰いでいた。

「ピーター、君はどうして、そうやって天井を睨まなくては物を考えられないのかね？」

ドラムリンはここ数年の間にすっかり角が取れたように言われているが、このひと言からも察しられる通り、どこまで人が変ったか、傍からではなかなかわからない。合衆国大統領によって、異星親善使節のアメリカ代表に選ばれたことを非常な名誉として、彼は周囲の親しい者たちに、ヴェガ訪問は生涯の晴れ舞台になるだろうと語っていた。ドラムリンとともにワイオミングに仮寓している妻は、〈マシーン〉建造に携わる科学技術者たちを新しい観客に、ドラムリンが張りきって披露するスライド・ショウを、何度でも文句も言わずに大人

しく見物している。ドラムリンは建造現場から程近い生れ故郷のモンタナにちょくちょく足を伸ばした。エリーは一度、ミズーラまで彼を車に乗せて行ったことがある。長い付合いではじめて、彼は数時間、エリーに優しい態度で接した。

「しーっ。静かに」ヴァレリアンは言った。「これは雑音を除去するわたしのやり方でね。余計なものが目に入らないようにしているのだよ。そこへ脇から雑音を入れられてはかなわないねえ。そんなら、白い紙を見ればいい、と君は言うかもしれないが、紙では大きさが足りない。どうしても、目の端に何かが映るのでね。いや、それはともかく、わたしが疑問に思うのは、どうしていまだにヒットラーの演説とオリンピックの放送なのか、ということだよ。あれからもう何年も経っている。イギリスの戴冠式の放送はすでに向うへ届いているはずではないかね。それなのに、どうして王冠や笏や白衣の大写しを送って来ないのだろうか？　音声にしても、〝神の恩寵により、ここにジョージ六世はイングランドおよび北アイルランド国王ならびにインド皇帝に即位し給う云々〟というのを送って寄越したらよさそうなものじゃあないか」

「戴冠式の模様がテレビで放映された時、ヴェガはたしかにイギリスの真上でしたかしら？」

「ああ、その点はオリンピックの映像を受信した後ですぐ確かめたから間違いない。それに、電波の出力もヒットラーの頃よりはるかに大きいのだよ。ヴェガは戴冠式の放送を受信しているはずなんだ」

CamScannerでスキャン

「向うが知っていることを残らずこっちへ伝えて来ないのは面白くないっておっしゃるんですか？」

「ヴェガは、急を要しているのだよ」ヴァレリアンは時々神託めいたことを言う。

「それより」エリーは異見を呈した。「ヒットラーを知っているということを強調したいのではないかしら」

「それはわたしの言っていることと、ある意味では同じだね」ヴァレリアンは言った。

「もう、そのくらいにしないか。空想を弄んだところで時間の無駄というものだ」ドラムリンは不機嫌に言った。彼は異星人の動機について論ずることを好まない。いずれわかることだから、臆測は時間の浪費でしかないという意見である。それよりも、各人が〈メッセージ〉の解釈に専念するべきだ、と彼は常々言っている。〈メッセージ〉は具体的なデータであって、意味内容に不明な点はない。巧みに構成された文章である……。

「そうだ、君たち二人とも、もっと現実的に物を考えなくてはいけない。組立ての現場へ行ってみよう。たしか、エルビウム車知栓の組み込みがはじまっているはずだよ」

車知栓とは柱や梁などを接合する時に、固定・補強の目的で挿入する栓のことである。

〈マシーン〉の外見は極めて単純だが、内部の構造はこの上もなく複雑だった。五人の乗員の座席は、十二面体の内法が一番大きい中心部に置かれていた。食事や、睡眠や、その他、日常の行動のための場所は設けられていない。乗員と、手荷物の重量は厳密に制限されていた。その点から言えば、乗員には小柄な人間が向いていた。乗員席の簡便な造りは、〈マシ

ーン〉が始動して間もなく、地球からさして遠くないところで星間宇宙船とドッキングすることを意味していると考えられなくもなかったが、ただ、そうだとすれば、望遠鏡はもちろん、レーダーで精査しても、宇宙船とおぼしきものがどこにも見当らないことが問題だった。とかく周到な異星人が、地球人の生理とは切っても切れない自然の要求を忘れるはずはない。してみると、〈マシーン〉がどこかへ飛んで行くという考えが間違っているのではあるまいか。〈マシーン〉はどこへも行かず、ただ、その場で乗員に何らかの作用をおよぼすだけなのではなかろうか。乗員席には装置と呼べるほどのものはない。操縦桿はおろか、イグニッション・キーすら見当らない。そこには、乗員同士、互いに顔を見合わせられるように五つの座席が車座に置かれているだけである。

座席の上下、十二面体の内壁が斜めになっているところに例の異様な有機物体が取り付けられ、その間隙を縫って、一見無作為に、エルビウムの車知が埋め込まれている。十二面体の外側を三層の同心球殻が覆っている。球殻の回転軸は、そのまま三次元座標軸に相当すると言える。球殻は磁力によって保持されるもののようである。それは〈メッセージ〉に強力な磁場発生装置の指定があり、十二面体と球殻の間は高度の真空でなくてはならないとされていることから得られる結論である。

〈メッセージ〉には、コンポーネント個々の名称はいっさい与えられていない。エルビウムは、六十八個の陽子と九十九個の中性子を持つ元素と特定されているだけである。あとは、コンポーネント31、といった具合に番号によって識別されるようになっている。そこで、抜

術史に造詣の深いチェコのさる技術者が、一八七〇年に回転木馬を発明したグスタフ・ベンゼルに因んで、同心球殻をベンゼルと命名した。

〈マシーン〉の目的も機能も不可解で、その建造には数々の新しい技術開発が要求された。しかし、〈マシーン〉は抽象概念ではなく、現実に形を有するものであって、構造を図に示すことができた。実際、内部を透視する恰好で描かれたイラストなどが世界中のマスコミに紹介され、〈マシーン〉の完成した姿はあまねく知れわたっていた。地球の技術を楽観する風潮は衰えることがなかった。

ドラムリンとヴァレリアン、アロウェイの三人は身分証明書を提示し、さらに指紋と声紋の照合等、検問の手続きを済ませて広大な組立て工場に向った。三階の高さの天井クレーンがエルビウムの車知を有機物体の間隙に挿入しているところだった。十二面体の五角形の外板が数枚、高架軌条から吊り下ろされていた。ソ連はいくつか技術上の障害に突き当っていたが、アメリカではサブシステムがすべて検査に合格し、〈マシーン〉は徐々にその全貌を現わしていた。いよいよ完成だわ、とエリーは胸の裡でつぶやいた。別の一画ではベンゼルの組立て準備が進んでいた。完成した〈マシーン〉の外見は、ルネッサンス時代の天文学者が考案したアーミラリー天球を彷彿とさせるものになるはずだった。ヨハネス・ケプラーがこれを見たら何と言うだろうか。

組立て工場の床や、壁面に沿って何層にも引かれた高架軌条は、技術者や政府の関係者、〈ワールド・マシーン・コンソーシアム〉の役員たちでごった返していた。作業を眺めなが

ら、ヴァレリアンは妻と大統領が時折文通を交わしていることを話した。妻はプライヴァシーを楯に、文通の中身を打ち明けようとはしないという。

車知の挿入はあらかた完了した。続いて、建造に着手して以来はじめてのシステム総合検査が予定されていた。〈メッセージ〉に指示されている監視装置は、重力波望遠鏡と呼ぶべきものと思われた。検査を前に、三人はよく見える場所を捜して支柱の下へ向った。

突然、ドラムリンの体が宙に舞った。何もかもが飛び散った。エリーは『オズの魔法使い』の竜巻を思い出した。映画のスローモーションを見るように、ドラムリンは両手を拡げて彼女に向って来た。二人は重なり合ってどうと床に倒れた。いい年齢をして、これがドラムリンの口説きの流儀かしら、とエリーは訝った。これでは、あんまり知恵がなさすぎる。

★

何者の仕業か、ついにわからずじまいだった。左右とりまぜて、夥しい数の集団が犯行声明を出した。地球至上主義者連合、赤軍派、イスラム聖戦軍団、今では非合法化されて地下に潜っている融合エネルギー事業団、シーク教分離派、光の道、緑のクメール、アフガン・ルネッサンス、〈マシーン〉に反対する母の会過激派、再生再統一教会、オメガ・セブン、終末千年至福党（ビリー・ジョー・ランキンは同党との関係を否定し、犯行声明は神の名を汚そうとする不信心者どもの唾棄すべき企みであると非難した）、プレーダーボンド、エル・カトルチェ・デ・フェブレロ、国民党秘密軍隊、シオニスト連盟、神の党、最近復活し

たシンバイオニーズ解放戦線……。とはいえ、声明を出した集団のほとんどは妨害破壊活動を組織するだけの資金的裏付けがなかった。にもかかわらず、かくも多くの集団が名乗りを上げたということは、つまり、一方においてそれだけ〈マシーン〉反対の機運が高まっている証左というほかはなかった。

KKK団、アメリカ・ナチ党、民主主義国家社会党、その他いくつかの同趣の結社は沈黙を守った。これら結社の一部の有力者たちは〈メッセージ〉はヒットラー自身が発したものと信じていた。ヒットラーはドイツのロケット技術を利して、一九四五年五月に地球を脱出した。そして、その後ナチスの残党の手によって、宇宙のどこかに先進技術文明が築かれた、とそんなまことしやかな噂(うわさ)もささやかれていた。

「〈マシーン〉が果してどこへ行くかは想像の外です」数カ月後に大統領は語った。「しかし、行った先がこの地球の半分ほどでも荒廃しているとしたら、そんなところへわざわざ出掛けて行くことは無意味です」

事故調査委員会の報告によれば、エルビウムの車知(しゃち)の一つに爆発物が仕掛けられていた。丸薬箱のように平たく丸い破片が二つ、二十メートルの高さから抜け落ち、かなりの速度で横方向に飛んだ。〈マシーン〉の耐力壁が衝撃を受けて破断した。死者十一名、重軽傷者四十八名。〈マシーン〉の主要なコンポーネントが多数破損された。〈メッセージ〉に述べられた検査課程に爆破作業など含まれているはずもない。一見無傷のコンポーネントも、故障がないとは言いきれなかった。〈マシーン〉の正体を知らぬままに建造を進めて来た関係者た

ちは、いきおい、極度に慎重にならざるを得なかった。

手柄顔に自分たちの犯行と言いたてる結社、徒党には事欠かなかったが、アメリカ国内では早くから、声明を出す気遣いもない二つの集団に疑惑の目が向けられていた。すなわち、異星人とソ連である。〈終末機械〉論が再燃した。〈マシーン〉は完成と同時に地球を破壊するように設計されていた、とする意見が声高に述べられた。地球人が組立てを誤ったために、おそらくは起爆剤だけが小規模な爆発を起したのであって、この程度で済んだのは不幸中の幸いである、という考え方だった。〈マシーン〉反対派は、手遅れにならないうちに建造を打ち切って、破壊を免れたコンポーネントは解体して各地の岩塩の廃鉱に埋めるべきだと主張した。

しかし、調査委員会は〈マシーン災害〉と呼ばれるようになった事件の原因は人為的なものであると結論した。エルビウムの車知は中央部分に何のためとも知れぬ楕円空洞があり、その内面に微細なガドリニウム線が稠密に配線されている。検証の結果、この空洞部分にプラスチック爆弾と時限装置が仕掛けられていたことが判明した。いずれも〈メッセージ〉の部品カタログには見当らないものである。車知はハッデン・サイバネティックス社のインディアナ州テレホート工場で製作加工された。ガドリニウム配線はあまりにも複雑精緻で、手作業では埒が明かず、そのためにハッデン・サイバネティックスはロボット・サーボ機構を備えた新鋭工場をまるまる自前で建設した。工作機械と新しい技術はいくらでも応用が利くから、建設費を負担してもお釣が来るだけの利益は充分期待できた。

同時に加工されたエルビウムの車知四本のうち、他の三本には爆発物は仕掛けられていなかった（これは解体に先立って、ソ連と日本の共同チームによって行われた遠隔探知調査で確かめられたことである）。何者かが、テレポートにおける加工作業の最終段階で空洞部分に爆薬を仕込んだとしか考えられなかった。工場を出た車知は、武装警備員の同乗する特別貨車でワイオミングに運ばれた。爆発の時機と破壊の規模は、これが〈マシーン〉建造に関して詳しい知識を持つ者の犯行であることを物語っている。犯人は内部の人間に違いなかった。

しかし、捜査は難航した。技術者、品質管理アナリスト、荷造りと発送に立ち会った検査員等、動機や手段はともかく、少なくとも犯行の機会があったと思われる数十人の工場従業員が取り調べを受けた。嘘発見機のテストで容疑が濃いとされた者も何人かいたが、その後の調べで、彼らはいずれも確実なアリバイがあることがわかった。近隣のバーの張込み捜査も行われた。容疑者の言動にはいささかも不審な点は見出されなかった。急に金遣いが荒くなった者もなく、尋問に耐えかねて口を割るようなこともなかった。警察の必死の努力にもかかわらず、事件解決の目処は付かなかった。

事件をソ連の工作と見る向きは、その動機を、アメリカに先を越されたくなかったためと説明した。ソ連は破壊工作の能力を持っているし、言うまでもなく〈マシーン〉に関しては詳しい知識がある。両国における建造作業の進捗状況についても確かな情報を摑んでいるはずである。事件直後、ルナチャルスキーのかつての門下生でソ連側の連絡役としてワイオミ

CamScannerでスキャン

ングに駐在しているアナトルイ・ゴールトマンは急遽モスクワに一報を入れ、車知を残らず取りはずすように助言した。本国との電話連絡は常に国家安全局によって監視されているが、ゴールトマンの連絡は額面通りに受け取れば、ソ連は事件に無関係であることを意味していた。しかし、見方によっては、これは疑惑をかわすための狂言かもしれず、あるいは、ゴールトマンが事前に破壊工作のことを知らされていなかっただけの話かもしれなかった。この議論は、近年の核超大国間の緊張緩和を面白く思っていない一部の者たちに支持された。当然のことながら、疑惑の目を向けられていると知ってモスクワは激怒した。

内実は、ソ連は一般に知られているよりもはるかに〈マシーン〉建造で立ち遅れていた。解読された〈メッセージ〉を基に、中型機械工業省は採鉱技術、冶金術、工作機械の開発に力を注ぎ、これらの分野ではソ連は長足の進歩を遂げた。マイクロエレクトロニクスとサイバネティックスは一朝一夕の技術開発では間に合わず、これらの分野にかかわるコンポーネントはヨーロッパ諸国と日本に発注した。が、何よりもソ連が手を焼いたのは、分子生物学に負うところが大きい有機化学の分野だった。

ソ連の遺伝学は、一九三〇年代にスターリンがメンデルの近代遺伝学をイデオロギーの立場から切り捨てたことで致命的な打撃をこうむった。スターリンは政治的に上手く立ち回った農業生物学者、トロフィム・ルイセンコのいかがわしい遺伝学を正統と認めたのだ。以後二世代の間、ソ連の有能な学徒は遺伝学の基礎について事実上、何も教えられることがなかった。六十年を経た今、ソ連の分子生物学と遺伝子工学は低調で、この分野ではソ連の科学

者による見るべき発見もない。似たようなことはアメリカでも起り、神学上の理由から、近代生物学の根本的理念である進化について小学生に教えることを止めさせようとする動きがあったのだが、幸いこれは掛け声だけに終った。問題は見え透いていた。それというのは、根本主義者の聖書の解釈が進化論とは相容れないことは誰の目にも明らかだったからである。そこはよくしたもので、アメリカの根本主義者たちはソ連におけるスターリンほど分子生物学に対して影響力が強くはなかった。

大統領に提出された事件に関する情報分析報告は、ソ連が〈マシーン〉爆破工作に関与したことを示す証拠はない、と結論していた。アメリカと同数の乗員席を確保しているソ連は、むしろアメリカの〈マシーン〉完成を強く期待するはずである、と情報筋は判断した。CIA長官は言った。「自分が技術的に第三課程、競争相手が一歩先の第四課程にいるところへ、降って湧いたように第十五課程の技術が登場したら、これは喜ばずにはいられません。門戸開放で、力量が充分なら、一線に並んだと同じことですから」

合衆国政府内部には、破壊工作をソ連の仕業と見る者はいなくなり、大統領は一度ならず公式の場でソ連の潔白を明言した。しかし、アメリカ国民のソ連に対する偏見は抜き難いものがあった。

「いかによく組織された集団であろうとも、暴徒の衆が、人類の歴史的目標達成を妨げることは許されない」大統領は宣言した。現実には、〈マシーン〉に関して国民的合意を得ることは以前にもましてむずかしくなっていた。事件は論理的であると否とを問わず、ありとあ

らゆる反対意見に復活のきっかけを与えた。ソ連が先に〈マシーン〉を完成するのではないかという懸念だけが、辛うじてアメリカの計画推進を支えるありさまだった。

★

　ドラムリンの妻は内輪だけで葬儀を済ませたかったが、とかく思う通りにならない廻り合わせで、ここでも彼女の善意は容れられなかった。物理学者の知友はもちろんのこと、電波天文学者、SETI関係の各国の研究者仲間、政府高官、それに、パラセーリング、ハング・グライダー、スカイ・ダイヴィング、スキューバ・ダイヴィング、水上飛行機等、スポーツを通して親しく付き合っていた仲間たちが挙って参列を希望した。葬儀委員の面々は、それだけの弔問者を迎えることのできる唯一の場所として、ニューヨークの聖ヨハネ大聖堂を考えたが、ドラムリン夫人はささやかな抵抗を貫き、葬儀は故人ゆかりのモンタナ州ミズーラ市の野外で執り行われることになった。保安当局も、ミズーラなら警備が楽であるという理由でこれに同意した。

　ヴァレリアンは自身怪我をしていたが、医者の反対を押しきって列席し、車椅子から弔辞を述べた。ドラムリンの特異な才能は常に核心を衝く質問を発することにあった、とヴァレリアンは言った。SETIの課題に対して、ドラムリンは疑問を抱いて接近した。懐疑こそは科学の真髄だからである。〈メッセージ〉の受信が明らかとなるや、ドラムリンは誰にもまして熱心かつ精力的にその解読に努めた。大統領の名代として参列した国防副長官マイケ

ル・キッツはもっぱらドラムリンの為人を称揚した。故人は性温厚にして思い遣り篤く、器量に優れ、かつ、壮者を凌ぐ運動家であった。この悔んでなおあまりある悲劇がなかったならば、ドラムリンは異星を訪れた最初のアメリカ人として歴史に名を留めることになったはずである……。

エリーはダヘーアにひと言断わって、追悼の弁を辞退した。記者会見も謝絶した。写真を撮られるのは我慢しなくてはなるまい。彼女とて、写真の必要は理解している。しかし、口を開いたら何を言い出すかわかったものではない。それが自分でも恐かったのだ。エリーは長年にわたって、SETI、〈アーガス〉、そして〈メッセージ〉と〈マシーン〉のスポークスマンの立場に甘んじて来た。が、今度ばかりは事情が違う。彼女は一人でゆっくり考える時間がほしかった。

ドラムリンは身を挺して彼女の命を救ったのだ。エリーの意識の中で、その考えはほとんど確信に近いものになっていた。ドラムリンはいちはやく爆発に気付いた。他の者たちが爆発音を耳にした時、すでに彼は数百キロのエルビウム塊が風を切って飛んで来るのを視野に捉えていた。持前の運動神経に物を言わせて、彼は咄嗟にエリーを柱の陰に押し倒したのだ。

エリーはこれを一つの可能性としてダヘーアに話した。ダヘーアは答えて言った。「ドラムリンは自分が真っ先に逃げるつもりで、たまたま、君とぶつかったのではないかな」何と不謹慎な言い種だろう。それとも、ダヘーアは気休めのつもりで言っているのだろうか。彼女の不興を察して、ダヘーアは言葉を足した。あるいは、ドラムリンが足場に

激突した弾みで投げ出されたのかもしれない……。

エリーの確信は動かなかった。すべては目の前で起きたことである。ドラムリンは何よりもまず、エリーの安全を考えたのだ。事実、彼のおかげでエリーはほんのかすり傷を負っただけで助かった。ヴァレリアンは安全な柱の陰にいたにもかかわらず、倒壊した壁に挟まれて両足を骨折した。エリーはひとかたならず運が好かった。気を失うことさえなかったのだ。

事態を悟った時、真っ先に彼女の頭に浮かんだのは、目の前に無残な姿で倒れている恩師デイヴィッド・ドラムリンへの気遣いではなかった。ドラムリンが体を投げ出して自分を救ってくれたことに対する驚きでもなかった。〈マシーン〉プロジェクトの頓挫はもとより意識になかった。彼女はその時自分が思ったことを、今もはっきり記憶している。〝わたしは行ける。こうなったら、わたしを措いて他に人はいない。何としてもわたしが行かなくては〟。

彼女ははっとして自分を抑えた。が、時すでに遅かった。危機的情況の中で露呈した卑しむべき利己主義と功名心に彼女は慄然とした。ドラムリンが同じ利己心を抱いていたかどうかは問題ではなかった。ほんの一瞬とはいえ、自分の中にそのような気持が動いたことに彼女は背筋が寒くなる思いだった。しかし、それは否定しようのない事実だった。事故現場の喧噪の中で、彼女は自分のこと以外は眼中になく、ただ貪欲に、せわしなく、この先取るべき行動について計算をめぐらせていたのだ。それにしても、彼女が何よりも嫌悪したのは、その瞬間まで自分の心に潜む我欲をまったく知らずにいたことだった。我欲は自ら弁明する

ことなく、他に対して寛容を示さず、彼女の中で野放図に脹れ上がっていたのだ。忌わしいことである。我欲をきれいに捨てきることはむずかしい。彼女は自分が我欲と忍耐強く付き合わなくてはならないことを知っていた。理非をつくして説得し、なだめすかし、時に威嚇して矯正に努めなくてはならない。

事故現場に駆けつけた警察の調べに対して、エリーは寡黙だった。「申し訳ないとは思いますが、あまりお話しすることはありません。わたくしたち、三人で組立て足場の近くにいました。突然、爆発が起って、まわりのものが飛び散ったんです。もう少しお役に立てるといいのですけれど、わたくし、何が何やらわけがわからなくて」

彼女は周囲の者たちに、事故の話はしたくないと言って、アパートに閉じ籠った。長いこと顔を見せない彼女を案じて、見舞いがてらの偵察班が遣わされたほどである。彼女は考えられる限りの角度から事故を分析した。彼女はまた、組立て工場に入る前に三人で交わしたやりとりや、ミズーラへ向う車中でドラムリンが話したことを仔細にふり返り、さらに溯って、はじめて大学院の学生としてドラムリンに会った時の第一印象を思い出した。記憶を探るうちに、彼女は次第に、自分が前々から意識の片隅でドラムリンの死を希っていたことに気付きはじめた。アメリカ代表として〈マシーン〉の席を争う関係になる以前からその気持は萌していた。他の学生たちの前で恥をかかされたことや、ドラムリンが〈アーガス〉に対して批判的であったこと、ヒットラーの映像が再生された時の発言、そうしたすべてが彼女の憎しみを掻き立てた。ドラムリンなどは死んでしまえばいい、と彼女は思った。それが現

実となった今、彼女はこじつけの論理と知りつつも、自分の責任を強く意識した。
もし、彼女がいなかったら、果してドラムリンはあんなことになったろうか？　もちろん、それはあり得ることだ、とエリーは自分に言い聞かせた。〈メッセージ〉は遅かれ早かれ誰かが発見したはずで、言ってみれば、ドラムリンの飛入りは避けられぬ運命であったろう。とはいえ、おそらくは科学者として思慮が足りなかったばかりに、彼女はドラムリンを〈マシーン〉プロジェクトに深入りさせたのではなかったか？　だとすれば、どこに問題の根は発したのか、彼女は順を追ってこれまでのことをふり返った。とりわけ、苦い思い出からは心して目をそらせまいとした。彼女は男たちのことを考えた。何らかの理由で彼女が尊敬の念を抱いた男たち。ドラムリン。ヴァレリアン。ダヘーア。ハッデン……ジョス。ジェシー……ストートン？……父親。

「アロウェイ先生……」

エリーは妄想を絶たれて何故かほっとする思いだった。ブロンドの、太った中年女だった。顔に見覚えがある。迫り出した胸の名札は「H・ボルク、ヨーテボリ」としてあった。

「アロウェイ先生。このたびは、本当に何と申し上げていいか……わたくしたち、大事な人を亡くしましたね。先生のことは、いつもデイヴィッドから聞いておりました」

思い出した。伝説のヘルガ・ボルク。大学院生を集めては、うんざりするほど何度も見せられたスライド・ショウで、スキューバ・ダイヴィングの場面には常にドラムリンと並んで登場した女性だ。あの写真はいったい誰が撮ったのかしら、とエリーはあらぬことを考えた。

かつて思ってもみなかったことである。ドラムリンたちは水底の密会にカメラマンを連れて行ったのだろうか？

「とても親しくしていらしたそうですのね」

この女は何が言いたいのだろう？　ドラムリンは当てつけるような話を聞かせていたのだろうか……。エリーは思わず涙ぐんだ。

「ごめんなさい、ボルク先生。わたし、気分がすぐれないものですから」

エリーは顔を伏せて、そそくさと立ち去った。

葬儀には久方ぶりの顔がたくさん見えていた。ヴェイゲイ、アルハンゲルスキー、ゴスリーゼ、禹、西、デヴィ。それに、アボネバ・エダ。五人目の乗員として、最近とみに呼び声高い人物だった。それとても、各国が見識ある態度を示し、おまけに〈マシーン〉が本当に完成したとすればの話だ、とエリーは密かに思った。皆に会って話したいのは山々だが、神経がささくれ立った彼女にはその根気がなかった。一つには、自分が何を言い出すかわからない不安があった。自分の話すことのどこまでが〈マシーン〉プロジェクトのためか、どこまでが個人の満足のためか、迂闊に口はきけない気持だった。周囲の者たちは彼女に同情して何かと気を遣っていた。それはそうだろう。ドラムリンがエルビウムの破片に直撃されて悲惨な最期を遂げた時、エリーは誰よりも彼と近い関係だったのだ。

第七章　オゾンの長老たち

CamScannerでスキャン

科学が認める神とは、普遍的な法則のみにかかわる神でなくてはならない。神は卸問屋であって、小売店ではない。神は個人の利便のために意志を働かせるわけには行かない。

——ウィリアム・ジェイムズ『宗教体験の多様性』（一九〇二）

CamScannerでスキャン

数百キロの高さから見る地球は、空の半ばを占める大きさである。ミンダナオ島からボンペイにかけて帯を延べたような碧斑は一目におさまり、その美しさは実に息を呑むばかりである。人は故郷を想う。故郷。自分の世界がそこにある。自分が生れ育った場所である。身近に接している者たちも、その名を聞くばかりでまだ会ったことのない人々も、そして無数の未知の同胞もひっくるめて、すべての人間が、あのあくまでも澄み通った美しい碧空の下で生れ育ったのだ。

夜と昼の境目から、東向きに一時間半でこの惑星を一周する。何度かこれを繰り返すうちに、地球の特徴や、その表面に起る変化のありさまがわかって来る。肉眼で、驚くほど物がよく見える。間もなくフロリダが見えて来るだろう。前の周期にカリブ海を移動していた熱帯低気圧は、もうフォート・ローダーデイルに達したろうか？　ヒンズークシにはこの夏、雪のない峰があるだろうか？　サンゴ海の藍緑色を呈した珊瑚礁は何度見ても美しい。南極大陸の西側に目を転ずれば、積氷が海を閉ざしている。あの氷が融けたら、本当に世界中の臨海都市が残らず水没するだろうか？

地球の昼側では、人間が住んでいる証拠を見付けることはむずかしい。しかし、夜に入れば、オーロラを別として、目に映るものはすべて人間の活動のしるしである。地球の隅々まで、いたるところでさまざまな営みが繰り拡げられていることがわかる。ひときわ明るい光が長く連なっているのは北アメリカ東岸だ。ボストンからワシントンにいたる一帯は、こうして見るとメガロポリスの名に恥じない。リビアでは天然ガスを精製した後の廃ガスを燃やしている。日本のエビ漁船団のいさり火は南シナ海に移動した。軌道を一周する毎に、地球では何か新しいことが起きている。カムチャツカで火山の噴火が見られることもあれば、サハラ砂漠の砂嵐がブラジルまで吹き寄せることもある。ニュージーランドが異常寒気に見舞われている様子もわかる。眺めているうちに、地球が一つの有機体であるように思えて来る。地球は生きている。そう感じた時、人は地球に愛着を覚え、地球のことを気遣い、幸せを祈るようになる。子午線や南北回帰線と同様、どこを捜しても目に見える国境線などありはしない。国境は人間が勝手に引いた架空の産物である。そんなものにはかかわりなく、惑星地球は厳然としてここにある。

それ故、宇宙飛行は反体制的な行動である。境遇に恵まれて地球周回軌道に乗った者たちのほとんどが、冥想しばしの後、同じ考えに立ち至るのだ。宇宙飛行を実現した国々は、まず例外なく、国家的な動機で宇宙開発に乗り出した。ところが皮肉なことに、人間はひとたび宇宙を体験すると畏敬の念に強く打たれ、国家の枠を超えて、地球は一つという意識を抱くことになるのである。

この青い惑星への忠誠が他のすべてに優先する時代がいずれ訪れることは想像に難くなかった。いや、少し範囲を拡げて、すぐ近くの黄色矮星を中心とする惑星世界と言ってもいい。かつて、恒星がすべて太陽であることを知らなかった人間は、この矮星に定冠詞を付けて太陽と呼び習わしている。多くの人間が宇宙を体験し、思考を凝らす機会を与えられるようになった今、はじめて人類は太陽系全体を視野におさめ、さらに、その外側に目を向けることの重要性を知ったのだ。ここで注目すべきことは、地球を回る低い軌道上で暮らしている衛星市民の大半が、今なお地球に対して大きな影響力を持っている事実だった。

人間がまだ宇宙に進出する以前から、動物は宇宙に送り込まれていた。アミーバにはじまって、ミバエ、ネズミ、犬、猿が宇宙生活を体験した。長期の宇宙飛行が可能になるにつれて、思いもかけなかったことがわかって来た。微生物はまったく影響を受けず、ミバエに対する影響もなきに等しいものだったが、哺乳類になると、無重力状態では寿命が十ないし二十パーセント延びるという実験結果が得られたのである。無重力状態では、引力に抗して肉体を支えるエネルギーの消費が少ない。細胞の代謝も遅い。それで動物は長生きする。寿命の延長は、ネズミよりも人間において一層顕著であるとする医者の報告もある。不老不死も、永遠に手の届かない夢ではないのかもしれなかった。

地上に対照グループを置いて行われた動物実験では、癌の発生率は軌道上のグループの方が八十パーセントも低かった。白血病とリンパ腺癌は九十パーセントとさらに率が下回った。まだ統計的に裏付けられてはいないが、無重力状態では悪性腫瘍の自然治癒率が高まること

も知られている。ドイツの化学者オットー・ヴァルブルクは半世紀前に、酸素は癌の有力な原因であると主張しているのだ。細胞の酸素代謝が少ない無重力環境は俄かに注目を集めるようになった。二十年前なら杏や桃の種から作られる制癌剤ラエトリルを求めてメキシコ詣でをしたであろう人々が、今は競って宇宙旅行の切符を買う世の中である。とはいえ、その費用は文字通り天文学的な額になる。予防医学であれ、臨床医療であれ、宇宙旅行はまだ限られた特権階級のものでしかない。

堰を切ったように、かつてない多額の投資が民間の軌道ステーションに注ぎ込まれた。二十世紀の終りには、地球から数百キロのところに宇宙老人ホテルのはしりがちらほら登場した。宇宙で生活するには途方もない費用がかかるだけでなく、当然、それに伴う不利もあった。骨や循環器系に進行性の疾患があれば、地表の重力場には二度と再び帰ることができない。しかし、その程度のことでは躊躇を感じない裕福な老人もまた少なくなかった。彼らは宇宙で快適な余生を送れるものならば、と進んで地上の生活を捨てた。

この種の軌道ステーションの開発に対して、地球の限られた富を浪費するものだという批判もあった。今すぐにも何とかしなくてはならない問題は山とある。金も力もない弱者の苦しみや悲しみを他所に、富裕な権力者たちの贅沢のために莫大な金が遣われることは赦し難い。大衆を地球に置き去りにして、エリート階級が宇宙に移住するのを黙って見逃すとはもってのほかである、と批判派は慨嘆した。このままでは、地球は不在地主たちに搾取されるばかりではないか。一方には、エリートの地球脱出を大いに歓迎する見方もあった。批判派

のいわゆる不在地主たちが大挙して宇宙へ移住するならそれに越したことはない。その方が、地球にいるよりは害がないだろう、という理屈だった。

しかし、最も重大な結果を予見した者はほとんど皆無に等しかった。その結果とは、地球のために最もよく貢献し得る立場にいる者たちが、宇宙全体の視野から自分たちの惑星を眺めるようになったことである。数年にして、軌道上から国家主義者はあらかた姿を消した。永遠の生命を求める者にとって、核を背景とする地球上の対立は座視するに忍びないことだった。

軌道ステーションには、日本の実業家、ギリシャの船主王、サウジの王子たち、それに元大統領、さる政党の元事務局長などがいた。中国人の泥棒貴族や、引退したヘロイン密売組織の顔役の名もあった。西側では、経営者からの勧誘を別とすれば、軌道ステーション居住資格はただ一つ、それに要する大枚の金を払えるということだけだった。ソ連のホステルはいささか事情が違った。宇宙ステーションと呼ばれる同国の宇宙船には、共産党前書記長が〝老人学調査研究〟の目的で乗り組んでいると伝えられている。総じて国民大衆はそのことに不平不満を抱いてはいない。いずれは自分たちにも順番が回って来ると思っているからだ。

軌道ステーションの住人たちは、おしなべて思慮深く、冷静で、控え目だった。家族や側近の者たちも、似寄りの性格が多かった。彼らはまだ地球にいる富裕な権力階級の密かな注目の的だった。彼らが宇宙から公の発言をすることはなかったが、その思想は徐々に世界中の指導者たちの間に浸透した。天界の長老たちは五大核保有国のその後の軍縮努力を評価し

ていた。彼らはまた、世界統合の可能性に期待をかけて〈マシーン〉建造に肩入れした。国家主義勢力は何かにつけて、浮世離れした宇宙船の隠居たちが、祖国を敵に売り渡す大掛かりな陰謀を企んでいると宣伝した。民間宇宙ステーションの代表が〈メトセラ〉号上に会して行なった談合の速記録であるという怪文書も出回った。そこには、愛国心などとうの昔にどこかに置き忘れたような者でさえ戦慄を禁じ得ない〝行動計画〟が述べられていた。『タイムズ・ウィーク』はそれをでっち上げと極めつけ、件の文書に〈オゾンの長老会議議定書〉の名を奉った。

★

出発を間近に控えて、エリーはよく明け方のココビーチを散歩した。彼女は浜辺とその向うの大西洋を見下ろす高台にアパートを借りていた。散歩の時はいつもパン屑を持って出て、カモメたちに投げ与えた。カモメたちは空中で巧みにパン屑を受け取った。守備率は、彼女の計算では、ほぼ大リーグの外野手並みだった。二、三十羽のカモメが彼女の頭上数メートルのところに停止して、手品のように湧いて出る餌を待ち構えることがあった。カモメたちは嘴を大きく開いて激しく羽撃いた。カモメ同士は不規則に絶えず場所を入れ替えたが、群全体としては一つところに留まっていた。ある朝、散歩から帰る途中、彼女は波打際で、小ぶりながら美しく形の良い椰子の葉を見付け、指先できれいに砂を払ってアパートに持ち帰った。

エリーはハッデンから、彼の隠棲の場である宇宙の城〈メトセラ〉号に招待されていた。ハッデンは何としても世間の目を避けたがったため、彼女は政府のごく限られた関係者以外に招待のことを話すわけには行かなかった。実際、ハッデンが第一線を退いた後、宇宙に隠居所を求めたことは、まだ一般には知られていなかった。彼女が相談を持ちかけた政府部内の者たちは、口を揃えて招待を受けるように勧めた。「行けば気晴らしになるだろう。君のためには、それが必要だよ」ダヘーアは言った。大統領も彼女の宇宙船訪問に手放しで賛成した。折よく次のスペース・シャトルに席が空いた。老朽宇宙輸送船〈イントレピッド〉号だった。軌道上の保養所への往復には民間の商業宇宙輸送システムが一般に利用されている。もっと大型の使い捨てロケットも開発途上だったが、アメリカの宇宙活動では、軍事、民間とも、今なおシャトル船団が輸送の主力だった。

「再突入の時、外装板が何枚か剝がれますがね、そいつを貼り直して、また打ち上げるんですよ」宇宙パイロットの一人がエリーにそう説明した。

健康状態が良好なら、宇宙飛行のために特別の訓練は要求されない。民間のロケットは満員で飛び立って、空で帰還するのが普通だが、シャトルの方は、たいてい行きも帰りも満席だった。〈イントレピッド〉は先週〈メトセラ〉とランデヴーして、乗客を二人地球へ運んだばかりだった。エリーの知った名前である。一人は推進システムの設計技師、もう一人は低温生物学者だった。エリーは二人がそもそも何の目的で〈メトセラ〉号へ行っていたのかと訝った。

CamScannerでスキャン

「何てことはありません」パイロットは言った。「丸太ん棒から転げ落ちるようなもんです。気分が悪くなったりはしません。みんな、喜びますよ」

実際、楽しい体験だった。同乗者はパイロットの他に宇宙機関士二名、無口な将校、それに内国収税局の職員だった。打上げの衝撃もなく、はじめての無重力状態は、ニューヨークの世界貿易センターで乗る高速エレベーターよりも長い時間楽しむことができた。軌道を一周半してシャトルは〈メトセラ〉とランデヴーした。エリーは二日後に商業輸送船〈ナルニア〉号で地球に帰る予定だった。

ハッデンが好んで城と呼ぶ〈メトセラ〉はゆっくりと回転していた。回転の周期は約九十分。従って、常に地球と正対する恰好である。ハッデンの居室は地球側の隔壁に広い展望窓が開いていた。テレビのスクリーンではなく、透明なガラスを通して、直接地球の景観を眺めることができるのであった。エリーの目に飛び込むフォトンは、ほんの何分の一秒か前にアンデスの冠雪に反射したものなのだ。厚い高分子の層が屈折率を大きくしている周辺部を除いて、窓を通して見る景色は少しも歪んでいなかった。

畏敬の念に打たれることを沽券にかかわると思う人間は少なくない。誰よりも信心深いつもりでいながら、畏怖することを気恥ずかしく感じる者さえ中にはいる。しかし、木石でもない限り、この窓の前に立って何の感動もないなどということはあり得ない、とエリーは思った。若い詩人や作曲家、画家、映画作家、宗派的官僚主義に捉われていない篤信家などをどんどんここに連れて来るべきだ。彼らなら、地球へ帰って一般の人々にこの体験を活きい

きと伝えられるはずではないか。そのような計画が今もって具体的に検討されていないことが悔まれる。エリーは崇高な感動に強く胸を打たれた。

★

「じきに馴れます」エリーを迎えてハッデンは言った。「馴れますが、決して飽きるということはありません。今でもわたしは、時々はっと息を呑むことがあります」

ハッデンは相変らず節制してダイエット・コーラを飲んでいた。エリーは酒を勧められたが断わった。はるばる地球から運ばれたアルコール飲料はさぞかし高いものにつくことだろう。

「もちろん、ここではできないこともあります。遠くまで散歩の足を伸ばしたり、海で泳ぐようなことはできません。旧い友人がふいに訪ねて来るなんということもありません。もっとも、わたしはもともと、あまり運動はやらない方でしてね。それに、御承知の通り、人は時々やって来ます」

「大変なお金をかけて」エリーは言った。

「隣の船室のミスター山岸のところへ、婦人の客が来ます。晴れても降っても、毎月、第二週の火曜日に、必ず訪ねて来るのです。山岸には、あとで紹介しましょう。大した人物ですよ。A級戦犯です。ええ、起訴されただけで、有罪にはなりませんでした」

「あなたをここに引き止めているのは何ですかしら?」エリーは尋ねた。「あなたは、世界

の終りなんて信じていらっしゃいませんね。ここで何をしていらっしゃるんですの？」

「わたしはこの景色が好きでしてね。それに、ここにいると法律上、都合のいいこともあります」

エリーは首を傾げた。

「というのは、わたしのように、始終新しいものを開発したり、事業を興したりしている者は、どっちを向いても法律すれすれでしてね。それも、たいていの場合は法律が時代遅れで、新しい技術に対処できないからですよ。裁判となれば、やたらに時間を取られてかないません。他にすることはいくらでもあるんですから、馬鹿げた話です。ところが、これは……」

ハッデンは大きく腕を伸ばして、彼の城と地球をそっくり抱え込むような仕種をした。「どこの国のものでもない。このシャトーはわたしと、友人の山岸、その他何人かの世界です。わたしらが食料、物資を調達することは何ら法律に抵触することではありません。が、用心のために、ここでは閉じた生態系、つまり、生態遷移の原理で言うところの、安定な動的平衡状態を目指しています。このシャトーと、地球上のいかなる国家との間にも、犯罪人引渡し条約はありません。というわけで、わたしはここにいた方が、何かと便利なのです。

念のためにお断わりしておきますが、わたしは法に触れるようなことは、いっさいしておりません。ただ、いろいろと新しいことに手を染めていますから、揚げ足を取られないようにしなくてはならんのです。現に、〈マシーン〉を爆破したのはわたしだと思い込んでいるやつらがいますな。わたしは〈マシーン〉建造のために莫大な金を遣っているにもかかわら

ずです。そこへ持って来て、御承知の通り、バビロンがあんなことになりました。保険調査員は、バビロンの放火と、テレホートの妨害行為は同一犯人の仕業ではないかと見ています。どうも、わたしは敵が多いようですな。どうしてそういうことになるのか、わたし自身は理解できません。これで、ずいぶん世のため人のためにつくして来たつもりですがね。まあ、とにかく、いろいろありますが、わたしとしてはここにいるのが一番です。

いや、そんなことより、わたしは〈マシーン〉について、あなたとお話がしたかったのです。ワイオミングのエルビウム車知爆破は、実にどうも、災難でしたな。ドラムリンは本当に気の毒なことで。それにしても、惜しい人を亡くしました。あなたも、さぞお心落ちでしょう。本当に、何か召し上がりませんか？」

エリーは地球を眺めながら話を聞くだけで充分だった。

「しかし、このわたしが〈マシーン〉のことを諦めてはいないのですから」ハッデンは言葉を続けた。「あなたが悲観的になることはないでしょう。察するところ、あなたは、もう〈マシーン〉は完成しないのではないか、計画の挫折を願っている人間がこう多くては、この先あまり希望を持てないのではないか、と心配しておいでですね。大統領も同じ気持と見受けました。〈マシーン〉のために建設された工場は、いずれも大量生産設備ではない。部品はみな一品生産です。破壊された部品を新たにととのえるとなると、経費は大変なものです。しかし、それ以上にあなたが気に懸けておいでなのは、自分たちは間違っていたのではないか、という疑問ではありませんか。少々、先を急ぎすぎたのではないか、ここでひとつ、

これまでのことをはじめから、じっくりとふり返ってみる必要があるのではないか、と、あなたはそんなふうに思っておいででしょう。あなたはそんなことはないとおっしゃっても、大統領はそういう考えです。

しかしですよ、ここで徒に時間を延ばしたら、結局〈マシーン〉はこのままで終ってしまうかもしれない。わたしはその方が心配です。それだけではありません。異星人がいつまでも気長にまっていてくれるという保証はどこにもないのです」

「まあ、不思議ですこと。まさに今おっしゃった通りのことをわたしたち……ドラムリンとヴァレリアンと、事故の直前に話し合っていたんです。妨害事件と言うべきですかしら」エリーは言葉を訂正した。「それで、あなたのお考えは？」

「こう見たところ、信仰を持っている人間は総じて、地球を一つの実験と考えていますな。つまり、信仰というものを突き詰めれば、最後にはそこへ行くのです。神にもいろいろありますが、いずれにしたところで、ああでもないこうでもないと人間に干渉する存在なのです。神は商人の女房に手を出したり、山の上で人間に石板を渡したり、子供を不具にするように命じたりする。どの言葉は良くて、どの言葉は悪い、と定めたり、快楽は罪であると教えたりもします。他にもいろいろありますな。しかし、神々はどうして人間を放ったらかしにしないのですか？　人間に干渉する神を見ていると、どうも、それは神が全能ではない証拠のように思えてなりません。ロトの妻がふり返って悪いなら、神はどうしてはじめからこの女に従順な性格を与えなかったのですか？　そうすれば、夫の言うことをよく聞いたでしょう

に。あるいは、ロトをもっと出来の良い男にしておけば、妻の方でももう少し夫の言うことに耳を傾けたんじゃありませんか？　神が全知全能であるならば、そもそものはじめから、自分の望む通りの世界を造ればよかったじゃありませんか。それを、始終、気に入らないと文句ばかり言っていじくり回すのは、どういうわけですか？　そうでしょう。聖書を読むと、一つだけはっきりしたことがわかります。聖書が伝える神は、職人としては賞められたものではないということですよ。設計はなっていないし、細工も下手くそです。競争者がいたら、たちまち食いっぱぐれですな。

だからわたしは、世界は一つの実験だなんという考えは認めません。それはまあ、広い宇宙のことですから、まだ徒弟時代の神々が技を磨く実験工房のような惑星が方々にあるのかもしれません。ランキンだの、ジョスだのがそういう惑星に生れなかったのが残念ですね。が、それはともかく……」彼は再び窓から見える地球を指さした。「この惑星に関する限り、たとえ僅かなりとも、かつて神の干渉が加えられた例はありません。神々がやって来て、人間の間違いを正したことはないのです。人間の歴史を見れば、人類が独立独歩であることは明らかです」

「これまでは、ですね」エリーは言った。「〈マシーン〉は〝機械仕掛の神〟だ、とおっしゃるんですか？　これまでは、人間は放ったらかしだったけれど、とうとう、神々は憐れみの心を起して〈マシーン〉を遣わした、ということかしら？」

「それを言うなら〝神慮の機械〟でしょう。ラテン語として正しいかどうか知りませんが。

ええ、わたしは地球が実験台だとは思いたくありません。地球は実験の対照です。他で行われている実験の比較所見を調べるための標準です。だから、この惑星にはこれまで誰も目を向けなかったし、干渉もしなかったのですよ。その標準世界は、すでに盛りを過ぎて衰退に向っています。放っておけば、いずれはそういうことになりますな。というわけで、地球は徒弟の神々にとっては生きた教材なのですよ。親方は徒弟たちに〝細工をしくじると、地球みたいなものが出来上がるぞ〟と教えるのです。しかし、本来は上等な世界ですから、見捨ててしまってはもったいない。それで、時々様子を見るのです。しくじりを犯した徒弟の神々に、反省を促す機会でもあるでしょう。最後に神々が地球を覗いた時、人間はサバンナでカモシカと駆けっくらをしていました。〝うん、これでよし〟と親方は徒弟どもに言いました。〝この分なら、人間が面倒を起す心配はない。次は一千万年先でいいだろう。が、大事を取って、無線周波数だけは監視するように〟。

と、ある日、地球から通報が入ったという御注進です。〝なに？　人間はもうテレビ電波を出すまでになったか。何をやっているか、見てみよう〟見ると、これがオリンピック競技場です。万国旗が翻っている。鷲のマークの旗がある。アドルフ・ヒットラーの顔が出て、大観衆が歓呼の声を上げている。〝お、お〟神々は顔を見合わせます。危険信号はすぐにそれと察しますからな。神はその場で人間に呼びかけます。〝こら、何をする？　お前たちの惑星はまたとない素晴らしい世界なのだぞ。無秩序ではあるが、立派なものだ。さあ、そんなことは止めにして、代りにこの〈マシーン〉を造るがいい。神は人間のことを気遣ってい

るのです。人間が堕落の道を辿っているのは目に見えていますから、早くしないと取り返しが付かないことになるぞ、と気が気でないのですよ。わたしも同じです。何としても〈マシーン〉を完成しなくてはなりません」

エリーはこうした議論をドラムリンがどのように受け取るか、よく承知していた。ハッデンの話には彼女自身、共鳴するところ少なくなかったが、それにしても、ヴェガ星人の意図に関するこの手のわけ知り顔の推断はもううんざりだった。そんなことにはかかわりなく、彼女はただひたすら、計画の推進だけを願っていた。〈マシーン〉が完成し、始動して、人類が新しい歴史の第一歩を踏み出すこと、それ自体が何よりも肝腎だった。しかし、その動機が果してどこまで純粋か、彼女は自信がなかった。〈マシーン〉が完成すれば、ドラムリンに代って彼女が乗員に選ばれる可能性が人々の口の端に上っても、まだエリーは自分を信用できなかった。それ故、建造再開の遅れは彼女にとってはもっけの幸いだった。気持を整理する時間を与えられたからである。

「食事は山岸と一緒です。あなたもきっと気に入りますよ。ただ、一つ心配なことがありましてね。山岸は夜寝る時、酸素の分圧を非常に低くしているのです」

「どういうことですかしら?」

「つまり、空気中の酸素が少ないほど、人間は長生きする。これは、医者が言っていることですな。それで、わたしらは室内の酸素濃度を自分の好みに合わせて調節するのです。あまり低くすると頭がくらくらしますから、昼間は二十パーセント以下にはできません。脳の働

きも鈍りますしね。しかし、睡眠中は酸素の分圧をもっと下げることができます。が、ここに落し穴があるのです。酸素はいくらでも少なくできるのですよ。山岸などは、いつまでも生きていたいと言って、最近は十四パーセントに下げています。そのため、午前中はぼうっとして、およそまともじゃありません」

「わたしなんて、二十パーセントの酸素を吸っていても、ずっとそんな状態ですよ」エリーは声を立てて笑った。

「それで、山岸は頭をはっきりさせるために、この頃ノエトロピック剤を使っています。ピラセタムとか、それに類する薬です。これは記憶力を増進する作用がありましてね。だからといって、頭が良くなるわけじゃあないでしょうが、とにかく、物覚えは良くなるそうですよ。で、山岸はしきりとこれを服むのです。そうして、夜は満足に酸素も吸わずに寝ている」

「それで、常軌を逸した行動を取るんですか？」

「常軌を逸する？　さあ、それはどうですか。なにしろ、九十二歳のA級戦犯というのは、どこにでもいる人種じゃあありませんでね」

「だから、実験には必ず対照がなくてはいけないんですわ」エリーは言った。

ハッデンはにやりと笑った。

★

高齢ながら山岸は、かつて長年、帝国陸軍で鍛えただけあって、今なお矍鑠としていた。体つきは小柄で、磨き上げたように見事な禿頭である。あるかなきかのささやかな口髭は霜のように白く、端正な顔に柔和な表情を湛えていた。

「わたくしは腰を労って、ここにおるのです」山岸は言った。「癌や寿命についても知っておりますが、わたくしがここで暮らすことにしたのは腰のためです。わたくしのような年齢の者は、骨が脆くなりましてな。筑摩男爵は、蒲団から畳へ転げ落ちて、亡くなりました。落ちるといっても、たかだか二、三十センチですよ。ところが、それで骨が折れてしまったのです。無重力状態なら、腰を痛める気遣いはありません」

なるほど、もっともな話だった。

食事の作法は地上と多少勝手が違ったが、料理は驚くほど豪勢だった。無重力状態で食事を楽しむ工夫もほどこされていた。皿や鉢はいずれも蓋付きで、ワイングラスは吸い飲み式だった。ナッツやコーンフレークのように散らばるものは禁物である。

山岸はしきりにエリーにキャビアを勧めた。彼に言わせれば、キャビアは西洋料理の品目のうちでも、一キロ当りの値段が宇宙への輸送料を上回る数少ない珍味の一つだった。特有の粘り気で、キャビアが塊になっていてよかったこと、とエリーは思った。黒いキャビアの粒が散乱して宇宙老人ホームの通路を雲のように流れ漂う光景が脳裡に浮かんだ。と、彼女は、ここはくらべものにならない質素な老人ホームで暮らしている母親のことを思い出した。それだけではない。ちょうど窓から見えているアメリカ大陸の五大湖のあたりに目をや

ると、母親の老人ホームのある場所がはっきりとわかった。こうして二日間も低軌道を回りながら劫を経た億万長者と話をしているのに、母親と電話で話すのに十五分割くこともできないとは、何という不孝だろう。ココビーチに帰ったら、すぐに電話しよう、と彼女は心に誓った。宇宙船からの連絡では、ウィスコンシン州ジェインズヴィルの老人ホームのためには少々人騒がせが過ぎるだろう。

エリーの妄想の糸を絶って、山岸は自分が宇宙で最年長であることを語った。彼以上の高齢者はいまだかつて一人もいない。中国の元副首相も彼より若い。山岸は上着を脱いで右の袖をまくり上げ、力瘤を作ってエリーに触らせた。すっかり調子付いた彼は、地上で尽力した大々的な慈善事業について滔々としゃべりまくった。

エリーは愛想の好い聞き役を演じることに努めた。「ここは静かで落ち着きますね。悠々として、毎日さぞ気持よくお過しでしょう」

山岸に向けられた他意もない言葉を引き取って、ハッデンが答えた。

「まったく平穏無事かというと、そうばかりでもありません。時折危険に見舞われることがありまして、そういう際には迅速な行動を取らなくてはならんのです」

「太陽面爆発。あれはいけません。あれにやられると、男は子種が絶えますからな」山岸は膝を乗り出した。

「そうです。望遠鏡で大きなフレアが観測されると、それから三日後に高エネルギー粒子がこのシャトーにふりかかって来ます。それで、山岸さんやわたしのような定住者はストー

ム・シェルクーに退避するのです。狭苦しくて、はなはだ不便なところですが、遮蔽は充分ですから放射能にやられる心配はありませんん。むろん、多少の二次電子放出はありますがね。それよりも、問題は定住者ではない乗員、訪問客を三日以内に退去させねばならないことです。非常時ですから、商業輸送船団の助けも借りるし、NASAやソ連の救援隊に応援を求めることもあります。フレアが起きると、思いもかけない人物と鉢合わせするなんということも珍しくありません。マフィアの大物がいたり、情報機関の長官がいたり。美男美女もよく見掛けます……」

「お話をうかがっていると、セックスが目的で地球からここへ来る人が多いような気がしますけれど、わたしの思い違いですかしら」エリーはちょっと言いにくそうな口ぶりをした。

「いやいや、思い違いではありません。その通りです。理由はいろいろでしょう。常連もいれば、人目を忍ぶ仲もあります。しかし、何と言っても最大の目当ては無重力状態ですよ。無重力状態では、八十になっても二十の頃には思いも寄らなかったことができるのです。あなたも一度、休暇を取って御同伴でここへおいでになるといい。歓迎しますよ」

「九十」山岸が横合いから言った。

「何ておっしゃいまして？」

「八十どころか、九十になっても若い時には考えられもしなかったことができる、と、そう山岸さんはおっしゃりたい。それで、たくさんの人がここへやって来るのです」

コーヒーになって、ハッデンは話題を〈マシーン〉に戻した。

「山岸さんとわたしは、仕事の上で長い付合いでしてね。山岸さんは山岸産業の名誉会長です。御承知の通り、同社は北海道で行われている〈マシーン〉コンポーネントの検査、ならびに調査研究の窓口です。そこで一つ、こういうことを考えていただきたい。これは、例えばの話ですが。〈マシーン〉は三層の同心球殻に覆われている。球殻はニオビウム合金製で、その表面に特殊なパターンが彫られている。これが真空中で三方向に直交する軸を中心に高速回転する構造であることは明らかで、今ではベンゼルと呼び習わされています。こんなことは、わたしが言うまでもなく、あなたは先刻ご承知ですな。ところで、この三重のベンゼルの縮尺模型を作って高速回転させたら、どうなりますか？　何が起ると思います？　意見を乞うに足る物理学者たちは口を揃えて、何も起らないだろう、と言っています。しかし、誰も実験してはいません。正確な実験の例はないわけで、本当のところは誰にもわかっていません。〈マシーン〉が完成して、これを始動した時、もし予想外のことが起ったとしたら、どうでしょう？　それは、ベンゼルの回転数によるものか、あるいは、ベンゼルの組成によるものなのか？　それとも、表面のパターンに起因するのか、縮尺模型と実物では何かが違うのか……？　そういったことをいろいろ考えて、わたしどもは実験を試みているのです。縮尺模型と、実物大のものと、両方用意しましてね。そこで、今度、二基の〈マシーン〉と同型、現寸のベンゼルを回転させてみようと思うのです。何も起らなければ、他のコンポーネントを一つずつ組み込みます。サブシステムの系統毎に、順を追って組み込んで行くのです。最後の一つに至る前のある段階で、ひょっとすると〈マシーン〉が何か突拍子も

ないことをやり出さないとも限りません。わたしらとしては、とにかく〈マシーン〉がどのように機能するか知りたいわけです。わたしの言っていることがおわかりですか？」

「じゃあ、同じ〈マシーン〉がもう一基、日本で密かに建造されている、ということですか？」

「いや、必ずしも秘密というわけではありません。これまでコンポーネントを個々に試験して来ましたが、それ以外の試験方法を採ってはならないという法はないでしょう。それで、山岸さんとわたしはこんなことを考えているのです。北海道で進めている試験の予定を変更して、この段階でひとまず全体を組み立ててみるのですよ。組み立ててみた上で〈マシーン〉がうんともすんとも言わなければ、あらためて個別にコンポーネントを試験すればいいでしょう。いずれにしたところで、経費の割りふりに変りはありません。

アメリカが事故による遅れを取り戻して、態勢が旧に復するまでには、まだ何カ月……いや、おそらくは何年もかかるでしょう。その間にソ連が完成に漕ぎつけるとは思えません。こうなったら日本に賭けるしかありませんね。だといって、直ちにこのことを公表する必要はないし、〈マシーン〉始動を決断しなくてはならない、ということでもないのです。これはあくまでも、コンポーネントの試験としてすることですから」

「お二人にそれを決定する権限がありますか？」

「ええ、それはもう、わたしらに課せられた責任の範囲内です。今、わたしがお話ししたようにすれば、半年前のワイオミングの段階に追い着きます。当然、警備は厳重を期さなくて

はなりませんが、コンポーネントに故障がなければ〈マシーン〉に欠陥が生じることもないはずです。北海道は地理的にも安全です。すっかり態勢がととのったところで〈ワールド・マシーン・コンソーシアム〉に、やる気はあるか、と持ちかければいいのですよ。乗員にその意思があれば〈コンソーシアム〉に否やはないはずです。あなたはどう思われますか、山岸さん？」

山岸はハッデンの話をそっちのけにして、今流行の「フリーフォール」を低く口ずさんでいた。低軌道宇宙船で情欲の誘惑に屈する心理を明らさまに歌ったヒット・ソングである。重ねて問いかけられて、山岸は歌詞はよく知らないと答えた。

気にするふうもなく、ハッデンはエリーに向き直った。「コンポーネントの中には試験で撥ねられるものも出て来るでしょう。あるいは、輸送の途中で各種の衝撃を受けているものもあるかもしれません。が、いずれにせよ、最終的にはすべて〈メッセージ〉の基準に合格しなくてはならないわけで、まず全体を組み立てること自体が一種のテストであると言えます。未知の危険が隠されている可能性は否定できませんが、それを恐れるあなたではないでしょう。あなた個人としてはの話ですが」

「わたくし個人？　つまり、乗員の立場で、ということですか？　どうしてそんなことをおっしゃるのかしら。第一、わたくしまだそういう話は聞いておりませんし、その後、情勢も変っていますから……」

「選考委員会があなたを指名することはほぼ確実です。大統領はあなたを強く推しますよ。

なにしろ、あなたのことを非常に期待しておいでですから。なあに、あなた自身その気充分でしょう」ハッデンはにやりと笑った。「脇役に甘んじるつもりとは思えませんな」

スカンジナビアと北海は厚い雲に覆われ、イギリス海峡にはレースを拡げたような淡い霧が流れていた。

「そうです。行くのはあなただ」山岸は立ってエリーに最敬礼した。「わたくしの会社と系列企業二千二百万の従業員を代表して、あらためて御挨拶申し上げたい。お近付きを得て光栄です」

★

エリーはスリーピング・キュービクルで寝苦しい一夜を過した。繭のようなその寝台は隔壁の二カ所に繋索でゆったりと結び付けられていた。無重力状態で寝返りを打った拍子に浮き出して、頭をぶつけたりしないための用心である。彼女は人より早く目を覚まし、通路の壁面に埋め込まれた把手を手繰りながら宙を泳いで大きな展望窓の前に出た。宇宙船は地球の夜側を回っていた。暗い地球のあちこちに、微かな光のかたまりが見えた。半球に太陽の光が届かない間、闇を押しのけようとする人間の健気な努力の証しだった。二十分後、地球の夜明けを目のあたりにして、エリーは指名されたら承引しようと決心した。

ハッデンがふっと背後に寄って来た。エリーはいたずらを見咎められたような気がした。

「たしかに、これは素晴らしい。わたしはここへ来てかなりになりますが、何度見てもこの

景色には感動します。しかし、こうやって宇宙船の中にいるのは面白くないと思いませんか？　まだ誰も体験していないことというのがあるでしょう。宇宙服だけで、命綱もなにもない、宇宙船もいないところで独りぼっちになることですよ。太陽は背中にあります。右も左も星ばかりです。見下ろせば、真下は地球か、あるいは、他の惑星かもしれません。わたしの好みから言えば、木星あたりがいいと思いますがね。そうやって、宇宙に融け込んだようにぽつんと浮かんでいるのです。最近の宇宙服は、他から何の補給がなくても四、五時間は生きられるようにできていますからね。そこまで運んでくれた宇宙船は、もう、とうにどこかへ消えています。あとで拾いに来るはずですが、ひょっとすると、それっきりになってしまうかもしれません。

わたしとしては、迎えの宇宙船なぞ来てくれなくて結構です。生涯の最後の数時間、星と惑星に囲まれて、宇宙に浮かんで過すというのは悪くありませんよ。不治の病に冒されているとか、最後に思いきった道楽をしてみたいとか、そういう人間にとって、これ以上の慰みがありますか？」

「本当にそんなことを考えていらっしゃるの？　その企画を……商品化なさるおつもり？」

「いや、それはまだ時機尚早でしょう。それに、商売にするべきことじゃあないかもしれません。まあ、いずれ実現の可能性を試してみたいと思っている、とだけ言っておきましょう」

エリーは自分の決心を打ち明けずにおくことにした。ハッデンの方でも、訊こうとはしな

かった。数時間後、〈ナルニア〉号が〈メトセラ〉号に接近してランデヴーの姿勢に入ったところで、ハッデンは彼女を片隅へ引き寄せた。

「ここでは山岸が最年長だという話をしましたね。それはそれとして、宇宙飛行士やその他の乗員、サービスを提供する女性たちを除いて、定住者の中ではわたしが一番年若です。その意味では、わたしは既得権益を有することになりますが、医学的可能性を言うならば、無重力状態の中で、わたしはまず間違いなく、何世紀も生きられるのです。実は、わたしは不死の実験をしておりましてね。

いえ、こけおどしで言うことではありません。わたしがこんな話を持ち出すには、それなりのわけがあるのです。人間が寿命を伸ばそうと思うなら、ヴェガ星人がこれまでどういうことをして来たか、そこを考えなくてはいけません。ヴェガ星人は不老不死を実現しているか、少なくとも、それに近いところまで行っているはずだとわたしは思います。わたしは現実的な男です。不滅の生命ということについてはさんざん考えて来ました。わたし以上にこの問題を長時間、深刻に考えた人間はいないでしょう。わたしは不滅の生命を持つ者について、一つだけはっきり言うことができます。彼らは極めて用心深いのですよ。不老不死を獲得するまでに、それは大変な努力を傾けているのです。ヴェガ星人がどんな姿をしているか、わたしは知りません。地球人に何を要求しているかもわかりません。ですが、もし、あなたがヴェガ星人に会うようになるとしたら、一つだけ、わたしから実際の用に立つ助言があります。それは、人間から見ればどう間違っても危険はない、と思えることも、彼らにとって

は、あまりにも危険性が大きすぎて、とても手は出せないということです。もし、何かのことでヴェガ星人と交渉するような場面に立ち至ったら、わたしが今言ったことを、どうか一つ、忘れないようにして下さい」

第八章　蟻（あり）の夢

CamScannerでスキャン

人間の言葉は割れ鍋を叩くにも似て、その粗野な拍子はせいぜい熊を踊らせるのが関の山、星々を酔わせる音楽を奏でるには程遠い。

——ギュスタヴ・フローベール『ボヴァリー夫人』(一八五七)

大衆神学は無知から来る矛盾の塊である。神々が何故存在するかと言えば、それは自然そのものが人間の意識に神々の概念を植え付けたからである。

——キケロ『神々の本質について』第一巻第十六章

夥しい資料や磁気テープに浜辺で拾った椰子の葉を添えて、日本へ発送する荷造りをしているところへ、母親が発作で倒れたという知らせがあった。すぐその後を追うように、計画本部の使い走りが一通の手紙を届けて来た。ジョン・ストートンからの手紙で、挨拶抜きの文面だった。

わたしは前々から折に触れて君の母親と、君の性格上の欠点や、損な性分について話し合って来た。いつものことで、二人の話は嚙み合わない。わたしが君を弁護すると(君には信じられないことかもしれないが、わたしが君の肩を持つことは珍しくないのだよ)、母親はわたしが君に手もなく丸め込まれていると言う。わたしが批判すれば、余計なお世話と君を庇う。

それはともかく、ヴェガ騒ぎが起きてからこの数年というもの、君はまるで母親の傍に寄りつこうともしなかった。それが彼女にとっては絶えず心の痛みとなっていたことを知ってもらいたい。君の母親は自分からどうしてもと言い張ってあのみすぼらしい老

人ホームに入ったが、一緒に暮らしている人たちに、そのうちきっと君が会いに来る、と話している。もう何年もの間、そのうちきっと、と言い続けているのだ。有名人になった自分の娘を皆に紹介するのを楽しみにして、会わせる順序まで心積りしている。

君はこんなことを言われたくないだろうし、わたしとしても気が進まないが、君のためを思って敢えて書く。君の仕打ちは君の母親にとって、かつて体験したどんなことよりも大きな痛手だった。君の父親である前夫の死すら、これほど彼女を悲しませはしなかった。たしかに、君は今や隠れもないおえら方かもしれない。著名な政治家や、各界の貴顕と親しげに言葉を交わす君の立体写真はいたるところでお目に掛かる。しかし、一人の人間としては、君はハイスクールを出て以来、少しも成長していない……。

エリーは目頭を熱くして、手紙を封筒ごと丸めかけた。何やら堅いものが指先に触れた。古い写真からコンピュータの外挿技術で合成したホログラムだった。本物の立体映像にはおよばないが、それでも画面は充分に奥行きがあり、被写体は浮き上がって見える。エリーには見覚えのない写真だった。まだ若く美しい彼女の母親が正面に笑顔を向け、エリーの父親の肩に腕を回している。父親は無精髯を生やしている。二人は見るからに幸せいっぱいだった。衝き上げるような悲しみと、罪の意識、ストートンに対する激しい怒り、それに多少の自己憐憫を覚えながら、エリーはこの写真の二人にはもう二度と会えない現実の重みを噛みしめた。

★

母親はベッドに静かに横たわっていた。喜びもなく、悲しみもなく、虚ろな顔はただ何かをじっと待つばかりのようだった。時折瞬きする他は身じろぎもせず、エリーの話しかける言葉が通じているかどうか覚束なかった。彼女は通信手段について考えた。この場にそぐわない考えが浮かんだとしても、それはやむを得ないことだった。瞬き一つが「イエス」、二つが「ノウ」というのはどうだろう。あるいは、脳波測定機をテレビに接続して、母親にβ波を変調することを教えられないものだろうか。しかし、相手は血の繋がった母親であって、こと座のα星ではない。今必要なのは暗号解読の手法ではなく、心と心の触れ合いなのだ。

エリーは母親の手を握って、長いこと話し続けた。自身の少時の記憶も含めて、当時の両親の思い出を、口に浮かぶままにとりとめもなく彼女は話した。まだよちよち歩きの子供だった頃の記憶も甦った。洗い立てのシーツを並べ干してある中で遊んでいるところをいきなり母親に抱き上げられて、本当に天に昇る気持がした時のことを彼女は話した。ジョン・ストートンのことも話し、また、あれやこれやについて母親に詫びた。そして、時に溢れる涙が頬を伝うに任せた。

母親の乱れた髪をブラシで梳きながら、エリーはその皺深い顔に自分自身の顔を見た。母親の落ち窪んだ目は潤んで動かず、時折見せる瞬きは、どこか遠くに向けられているかのようだった。

「わたし、誰の血を受けたか忘れてはいないつもりよ」エリーは母親の耳もとに口を寄せて言った。

母親は、それとはわからぬほど微かに首を横にふった。母娘が離ればなれになっていた年月を悲しくふり返るふうでもあった。エリーは母の手を強く握った。僅かに握り返して来る力を感じたと思った。

命に別条はない、と医者は言った。容態が変ったら、すぐにワイオミングに連絡をくれる約束である。あと何日かすれば老人ホームに帰れるだろう。老人ホームにも充分な医療設備はととのっている。その点は医者が請け合った。

ストートンは打ち沈んでいる様子だった。彼がそれほどまでに母親のことを気遣っているとは、エリーは思ってもみなかった。努めて電話をかけるようにする、と彼女はストートンに約束した。

★

殺風景な大理石のロビーにはいささか場違いな裸婦像が飾られていた。それも、立体映像ではなく、古代ギリシャのプラクシテレスの流れを汲んでいると見える本物の彫像である。一行はオーティス-日立のエレベーターで上階へ運ばれた。エレベーターの内部の表示は点字ではなく、第二公用語の英語で記されていた。案内に従いて伽藍のように広大な部屋を抜けた。たくさんの人々がワードプロセッサーに向っていた。キーボードに平仮名を打ち込め

ば、スクリーンに漢字が出る。新聞を読むには三千から四千の漢字を知っていれば充分だが、コンピュータは何十万もの漢字を記憶している。日本語には同音異義の言葉が多いため、コンピュータは考えられる限りの漢字の組合わせを頻度の順に表示する。ワードプロセッサーは文脈を読み取るサブルーチンを内蔵しており、入力された言葉の意味を判断し、それに相当する漢字の組合わせを取り出して文章を構成する。その判断には、まず誤りがない。比較的最近までタイプライターというものが普及していなかった日本語の世界で今、ワードプロセッサーはコミュニケーション革命を巻き起こしている。伝統主義者たちは必ずしもこれを歓迎してはいない。

会議室に通されて、一同は漆塗りの低いテーブルを囲んで椅子に掛けた。お茶が出た。エリーの席から窓越しに東京の街がよく見えた。このところ、始終窓から外を眺めている、とエリーはふと思った。ここは朝日新聞社の一室である。彼女は紅一点の政治記者に興味を覚えた。アメリカやソ連では女流記者は珍しい。日本は今、国を挙げて女性の役割の再評価に取り組んでいる。報道の目が向けられることもない日常生活のあらゆる側面で女性の地位向上のための闘争が進められ、男性上位の伝統は徐々に退潮の萌しを見せている。つい昨日も、ナノエレクトロニクスの社長がエリーに、東京にはもう帯を結べる女の子はいない、と嘆かわしげに話した。ホックで止めるボウ・タイと同じ、着付の簡単な着物や帯が幅を利かせているという。日本の女性は毎日長い時間、鏡の前で幾本もの紐を体に巻きつけて過すより、もっと大事なことがあるというわけだった。女記者はスカートも長めの地味なスーツを着て

いた。

保安上の理由から、北海道の〈マシーン〉建造現場では報道陣の出入りをいっさい認めていない。その代り、乗員やプロジェクト関係者が東京へ出た時には、内外の記者団を集めて会見を行う慣例である。いつものことながら、記者団の質問は月並だった。国柄や風土の違いは多少認められるにしても、〈マシーン〉に対する報道陣の姿勢は、基本的に世界中どこも同じだった。アメリカとソ連の挫折の後、日本で〈マシーン〉が建造される運びになったことを評価しますか？　北海道の生活で、隔絶感を味わうことはありませんか？　北海道では〈メッセージ〉には指示のないコンポーネントの試験も行われていますが、その点に不安はありませんか？

一九四五年以前は、新聞社のあるこの一画は帝国海軍の敷地だった。今も新聞社に隣接してかつての海軍天文台が残っており、海上保安庁の観測所として機能している。望遠鏡をおさめた二基のドームが午後の陽に銀色に輝いていた。

十二面体を三層のベンゼルが覆う〈マシーン〉の構造をどう説明しますか？　もちろん、誰にもわからないことは承知の上で、アロウェイ博士個人の解釈をお訊きしたい。エリーはそれに答えて、判断の材料がないところで何かを解釈しようとすることの愚かしさを説いた。記者団は引き下がらなかった。エリーは、わからないものはわからないのだから、勘弁してもらいたい、と答えるしかなかった。もし、非常な危険が予想されるなら、日本の人工知能の専門家が言うように、ロボットを乗せるべきだとは思いませんか？　私物はどんなものを

持っていく予定ですか？　家族の写真ですか？　マイクロコンピュータ？　スイス製の軍用ナイフ？

エリーは窓の向うの観測所の屋上に姿を現わした二人の男に気を取られていた。二人は面で顔を隠し、昔の侍が着たような青灰色の刺子の防具を身につけていた。長い木刀を携えた二人は向き合って礼を交わし、一瞬不動の姿勢を取った後、三十分にわたって攻防を展開した。その光景にすっかり魅せられたエリーは記者団の質問も上の空だった。彼女の他は誰一人、見向きもしなかった。木刀はかなり重いものらしく、様式化された試合の動きは緩慢で、水底の立ち回りを見るようだった。

ルナチャルスキー博士やスハヴァティ博士とは、〈メッセージ〉受信以前からの長い付合いですか？　エダ博士をどう思いますか？　西氏についてはどうですか？　彼らの学術上の業績をどう評価しますか？　五人の乗員はお互いに、しっくり行っていますか？

エリーは自分がその五人の中の一人に選ばれたことに今さらながら驚きを隠しきれなかった。

日本製のコンポーネントの品質をどう思いますか？　明仁天皇拝謁の感想は？　神道や仏教界の指導者との会見は、〈マシーン〉の始動に先立って世界中の宗教家の意見を聞いておこうというプロジェクト側の方針によるものですか？　それとも、今や建造計画の主体である日本に対する儀礼ですか？　〈マシーン〉が〈トロイの木馬〉あるいは〈終末機械〉である可能性について、どのように考えますか……？

エリーは記者団の質問に対して、礼を失せず、多くを語らず、議論の種を蒔くことがないような回答を心懸けた。〈マシーン〉プロジェクトの広報官はいかにもほっと安堵した様子だった。

記者会見はふいに終った。朝日の編集局長は、エリー以下五人の成功を祈るとともに帰還後のインタヴューを心待ちにしていると述べ、また、今後エリーの度重なる日本訪問を期待すると挨拶した。

記者たちは笑顔で彼女に会釈した。屋上の剣士二人はすでに姿を消していた。彼女に同行した警備官らは会議室の開け放たれたドアからせわしなく左右に目を走らせた。エリーは戸口で一緒になった女流記者に時ならぬ武士の出現について尋ねた。

「ああ、あれですか」女流記者は答えた。「あの人たち、海上保安庁の観測員です。毎日、昼休みにあそこで剣道の稽古をするんです。時計を合わせられるくらい、時間は正確ですよ」

★

西は中国労農紅軍が戦略的大移動を敢行した、いわゆる長征の時代の生れで、革命期には若き闘士として国民党と戦った。その後、情報将校として北鮮に駐在し、中国における戦略技術の権威と目されるまでになったが、文化大革命で失墜し、国内追放の憂目を見た人物である。文化大革命の嵐が去って、彼は鳴物入りで復活を果した。

文化大革命の視点からすれば、西の罪条の一つは孔子崇拝で、なかんずく、孔子の遺書と言われ、また、曾子の著作ともされる『大学』の一節を信奉していたことである。これは古来、中国人の教養の根幹をなす思想であって、文化大革命以前は、どんなに学問のない人間も暗で知っていた。孫逸仙は二十世紀のはじめに、その『大学』の一節に基づいて三民主義革命運動を起した、と自伝に述べている。

古之欲明明徳於天下者、先治其国。欲治其国者、先斉其家。欲斉其家者、先修其身。欲修其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。
（古の明徳を天下に明らかにせんと欲する者は、先ずその国を治む。その国を治めんと欲する者は、先ずその家を斉う。その家を斉えんと欲する者は、先ずその身を修む。その身を修めんと欲する者は、先ずその心を正しくす。その心を正しくせんと欲する者は、先ずその意を誠にす。その意を誠にせんと欲する者は、先ずその知を致す。知を致すは物に格るに在り。）

そんなわけで、西は知識の探究こそ中国人民の幸福のために欠くべからざるものと信じて疑わなかったが、紅衛兵たちの考えは違っていた。

文化大革命の間、西は寧夏回族自治区の貧しい人民公社で労働を強いられた。そこは万里

の長城に程近く、回教的伝統の色濃い土地柄だった。痩せた土地を耕やしていたある日、彼は漢朝のものと思われる精緻な紋様をほどこした兜を発掘した。指導部に返り咲いた彼は、戦略兵器から考古学に関心を移した。文化大革命は五千年におよぶ中国文化の歴史を切り捨てようとする試みだった。対して西は、民族の過去に溯る橋を架けることを自らに課し、西安（長安）郊外の陵墓発掘にいやまさる情熱を注いだ。

この発掘調査の最大の収穫は、始皇陵の兵馬俑坑発見であった。中国の国名は、もとを糺せば始皇帝に因んだものである。皇帝は、正式には秦始皇帝と名乗ったが、この秦の音が変化して西方に伝わり、支那の名が広く知られるようになったのだ。秦始皇帝は紀元前三世紀に中国を統一し、万里の長城を築いた。そして、始皇帝は自分の死後、古来の風習に依れば遺骸とともに生きながら山陵に埋められるはずの側近者たち——将兵、役人、貴族——に代えて、彼らの姿を生き写しに象ったテラコッタ像、すなわち陶俑を埋葬するように厳命した。陶俑の軍団が兵馬俑で、発掘されたもの七千五百体。ほぼ一個師団に相当する。兵馬俑はどれもみな個性の際立った顔つきで、始皇帝が中国全土から兵を集めていたことを物語っている。始皇帝は四分五裂して対立し合っていた諸国を平定して天下を統一したのだ。また、近くの墳墓からは、ほとんど完全な姿で保存された貴婦人の遺体が発見された。宮廷の下級官女太であるとされている。おそらくは、長年侍女たちに睨みを利かせていたためであろう、太の表情は鋭く、きつい。が、それはともかく、遺体の保存技術は古代エジプトの遠くおよばぬところである。

秦始皇帝は文字を簡略化し、法律を整備し、道路を敷設し、万里の長城を築いた。そして中国史上、はじめての国家統一をなしとげた。始皇帝は武器の没収も行なった。自分の政治を批判する学者を数多く処刑し、儒家の思想を不穏当として禁じる、いわゆる焚書坑儒を断行した始皇帝は、地方官吏の腐敗を一掃し、国中に平和と秩序をもたらしたと自らうそぶいた。西は始皇帝の事績をふり返って、文化大革命を思い出した。始皇帝の精神構造の中には極端に矛盾する人格が同居していると思われた。始皇帝は度を超して傲岸だった。例えば、自分の意に添わぬ山を罰すると称し、草木を残らず根こぎにして、裸になった山肌を赤一色に塗りつぶすように命令を発したという逸話が伝えられている。赤は有罪を宣告された囚人の服の色である。始皇帝は大人物であったには違いない。が、同時に狂人でもあった。そもそも、群雄割拠して諸国が互いに隙を窺い合っている状態から天下を統一しおおせるということが常人の業ではないだろう。まともな人間だったら、はじめから、そんな野心を抱くはずがない、と西は笑いながらエリーに話したことがある。

　西は執念を新たにして、西安の大規模な発掘に取り組んだ。いつか彼は、見事な兵馬俑群が発見された場所の近くで、完全に保存された始皇帝の遺骸が発掘を待っていると確信するようになっていた。古い記録によれば、そのあたりの地下深くに、紀元前二百十年当時の中国をそっくり再現した縮景が作られているという。大廈高楼ことごとく精巧に実物を模し、河川には水銀を流し、雛型の御座船が四時を分かたず地底の王土を巡行している、とその記録は伝えている。西安の土質に水銀汚染が発見されて、西は勇み立った。

彼は始皇帝が地下の縮景を覆うように命じた天蓋について詳述した古文書を発掘した。地底の箱庭は、王朝支配下の中国の名をそのままに〈天の王国〉と呼ばれていた。漢字は二千二百年の間ほとんど変化がなかったから、西は言語学者の助けも借りずに古文書を読むことができた。秦の時代の書記は直に西に語りかけた。西は毎夜、始皇帝の地下の陵墓の天井に懸かる天の川や、始皇帝崩御の際、その偉業をたたえて天に出現したという彗星群のことを思い描きながら眠りに就いた。

西は以来十年間、秦始皇帝の陵墓の玄室と地下の小宇宙を捜し求めて発掘調査に没頭した。それらはまだ発見されていないが、西の精力的な活動は中国民衆の心に古代への情熱を掻き立てた。彼を評して、一部では「中国には十億の民がいる。しかし、西は一人しかいない」とさえ言われている。徐々にではあるが、個人に対する束縛を緩めつつある中国で、西は建設的な影響力を持つ人物と目されるようになった。

秦始皇帝は不老不死を強く希ったことで知られている。世界最大の人口を擁する国に己が名を与え、地上最大の建造物を築いた人物だが、ままあることで、始皇帝は自分の存在が忘れられることを恐れていた。それ故、始皇帝は各地に記念碑を建立し、威勢を後世に伝えるために兵馬俑を作らせ、陵墓を営んで地底に自分が支配した世界を再現したのだ。加えて、始皇帝は幾度も東海に探検隊を送って不死の妙薬を捜させている。その莫大な費用には、さしもの始皇帝も頭を痛めたといわれる。最後の探検には三千人の若い男女が大船団を仕立てて繰り出したが、生還者はただの一人もなく、不死の妙薬はついに手に入らなかっ

た。

それからちょうど五十年後に、突如として日本に水田耕作と鉄器文化が登場した。日本の経済構造を根本から変革し、武士階級の形成に繋がる動因である。日本という国名は、日本文化がその源流を中国に負っていることを如実に示すものである、と西は言う。日本とは、日出ずる国の意味である。日本の空に日が昇るところを眺めることのできる位置関係を考えてみるがいい。だから、最前エリーが訪ねた朝日新聞は、秦始皇帝の生涯とその時代を今に記念している、というのが西の論法だった。秦始皇帝にくらべれば、アレクサンダー大帝などは洟垂れの餓鬼大将でしかない、とエリーは思った。歴史上の評価はともかく、それが彼女の感想だった。

始皇帝は不老不死に執着したが、西は始皇帝に憑かれていた。エリーは彼に、宇宙船暮らしのソル・ハッデンを訪問した体験を話して聞かせた。二人は、秦始皇帝が二十世紀の暮れ方に生きていたならば、低軌道宇宙船に安住の場を見出したことだろうと言って笑い合った。エリーは西をテレビ電話でハッデンに紹介し、あとの話は成行きに任せた。西はイギリス領香港の中国返還に関与して、もともと流暢な英語にますます磨きをかけていた。〈メトセラ〉号が地平線の向うに沈んでも、彼らの話は終らず、静止軌道の通信衛星ネットワークに助けを借りなくてはならなかった。西とハッデンは意気投合した。ハッデンは早速、〈マシーン〉の始動を〈メトセラ〉号が上空を通過する時刻に合わせてほしいと要求した。その時、北海道を望遠鏡の視野におさめていたい、とハッデンは言った。

CamScannerでスキャン

「仏教徒は神を信じるのかしら、ねえ？」禅師との会食に向う途中、エリーはふと疑問を口に出した。

★

「仏教の立場では……」ヴェイゲイが気のない声で答えた。「神は広大無辺であって、存在の必要もない、ということらしいね」

郊外の道を車に揺られながら、彼らは日本における禅宗大本山の長老、内海禅師の噂をした。数年前、広島被爆五十周年記念式典における内海禅師の演説は世界的な反響を呼んだ。禅師は日本の政界にも顔が広く、与党の精神的支柱と仰がれている。もっとも、日頃は僧院で三昧の境に生きている。

「父親も偉いお坊さんだったのよ」スハヴァティが言った。

エリーは眉を持ち上げた。

「何も不思議はないわ。禅僧だって結婚は認められているんですもの。ロシア正教も同じよ。そうでしょう、ヴェイゲイ？」

「以前はそうだったね」ヴェイゲイはいくらか投げやりな口ぶりで言った。

竹藪に囲まれた料亭は「雲月」と言い、折しもその名にふさわしく、夕月の面に叢雲がかかっていた。席を設けた日本側のはからいで、彼らの他に客はなかった。エリーたちは竹林に臨む小ぢんまりとした座敷に通された。

剃髪の禅師は黒と銀の法衣で座に着くと、完璧な英語で一同に挨拶した。後に西が話したところによれば、禅師の中国語もそれに劣らず見事であったという。竹の葉のそよぎの他は音もなく、会食は清談閑話に終始した。運ばれる料理はどれもみな、珠玉の芸術作品と言ってよかった。エリーは、近年の新しい料理が多く日本の食の文化に根ざしている事情を理解し得たと思った。目隠しをして食べるのが日本料理の作法だったとしても、彼女は満足できたろう。また、料理は見るだけで、食べてはならないものだとしても、やはり、心が豊かになったに違いない。目と舌を同時に楽しませてくれる日本の料理はこの上ないもてなしだった。

エリーはルナチャルスキーと並んで禅師と向き合っていた。面々は一品毎に料理の材料を尋ね、それが未知のものであれば、せめて動物界、植物界の別なりとも教わろうとした。鮨が片付いて銀杏が出たところで、それとなく〈マシーン〉のことが話題に上った。

「時に、人は何故コミュニケーションをするのですか？」禅師が質問を発した。

「情報を交換するためです」ルナチャルスキーが言うことを聞かない箸を持てあましながら答えた。

「ならば、重ねてお尋ねしますが、人は何故、情報交換を願うのですか？」

「それは、情報が人間の糧だからです。生き延びるために、情報は欠かせません。情報がなければ人間は死にます」

ルナチャルスキーは箸と格闘していた。銀杏はつまみ上げる度に箸の先から滑り落ちた。

彼は身を乗り出して、箸の方へ顔を寄せた。

「わたくしは思うに、コミュニケーションとは、愛情、あるいは、共感の発露でありましょう」禅師はこともなげに、手摑みで銀杏を口に運んだ。

「だとすると……」エリーが言葉を挟んだ。「〈マシーン〉は共感の媒体だというお考えですか？　恐れることはない、とおっしゃるのですね？」

「わたくしは花と心を通わせることができます」禅師は答える代りに話を一歩先へ進めた。「石と話ができます。あなたがたの言われる、地球外知的生物ですか……他の世界の存在を理解するのは、さしてむずかしいことではありますまい」

「石が何かを語りかけて来る、とおっしゃるなら、それはよくわかります」ルナチャルスキーが銀杏を噛みながら言った。彼は禅師に倣って手摑みで食べていた。「しかし、石と話ができるというのは、どうでしょうか。禅師の言葉が石に通じている、とどうしてわかりますか？　人間同士の間でも、誤解や行き違いが絶えません。石と話ができる、とおっしゃる言葉に自己欺瞞がないかどうか、その点は何によって判断するのですか？」

「ほう。科学的懐疑ですね」禅師は破顔一笑した。エリーは惚れぼれとその顔に見とれた。まるで汚れを知らない童子のような笑顔だった。

「石と心を通わせるには、何と言いますか……こちらの気持を空にしなくてはなりません。考えたり、話したりすることはないのです。石と心を通わせるというのは、言葉の問題ではありません。キリスト教では〝はじめに言葉ありき〟と言いますが、わたくしの言っている

コミュニケーションは、それ以前の、もっと根本的な交感です」

「言葉について書かれているのはヨハネ伝だけです」エリーは言う傍から知識をひけらかそうとしている自分を恥じた。「ヨハネ以前の共観福音書は、言葉については何も触れていません。あれはギリシャ哲学から来ているんです。禅師のおっしゃる、言葉によらないコミュニケーションとは、どういうことでしょうか？」

「あなたは、その質問を言葉でなさっておいでです。それは、言葉にならないことを言葉で説明しろということです。そう……日本には『蟻の夢』という話があります。蟻の国の話でして、大変長いので、ここでは省略しますが、要するに、話の眼目は、蟻の言葉を理解するためには、蟻にならなくてはならない、ということです」

「蟻の言葉というのは、実際は化学現象ですよ」ルナチャルスキーが禅師の顔を見据えて言った。「蟻はある種の分泌物でしるしを付けて、餌のありかを仲間に伝えるのです。蟻の言葉を理解するためには、わたしなら、ガス・クロマトグラフか分光分析装置を使います。蟻になる必要はありません」

「おそらくは、それが、あなたが蟻になるための唯一の方法でありましょう」禅師は誰にともなく言葉を返した。「ところで、人間は何のために蟻の足跡を調べるのですか？」

「それは……」エリーが進んで答えた。「昆虫学者だったら、蟻の性質や蟻の社会を理解するため、と言うはずです。理解することは、科学者にとっては喜びですから」

「つまり、それも、蟻を愛するということの、もう一つの言い方ですね」

エリーは肩をすくめようとして思い止まった。

「その通りです。でも、昆虫学者に資金を提供する人間は、また別のことを言うだろうと思います。研究の目的は、蟻の行動を制御することだとも言えます。例えば、蟻が家に侵入するのを防いだりするのもその一つです。あるいは、生物学の立場から土壌を理解して、農業の役に立つ知識を得るということもあります。殺虫剤の代りに蟻を使うことだってできるかもしれません。これも、ある意味で、蟻を愛することだとおっしゃいますかしら……」エリーは言葉を切って考えに沈んだ。

「しかし、それはやはり人間の身勝手だよ」ルナチャルスキーが言った。「殺虫剤は害虫を駆除するだけじゃあない。もともと、人間にも毒なのだからね」

「こういう食事の席で、どうして殺虫剤の話なんてしなくてはならないの?」スハヴァティが脇から言った。

「蟻の夢は、また今度にしましょう」禅師はあの屈託のない笑顔で、そっとエリーに言った。一メートルもある靴べらで靴を穿き、一同は車寄せに向った。女将以下、仲居たちが玄関に勢揃いして彼らを見送った。禅師は接待役の日本人たちとリムジンに乗り込んだ。

「石と話ができるなら、死んだ人間はどうかと訊いてみたがね」西がエリーの耳もとで言った。

「禅師は何て?」

「死人と話すのは何でもないそうだ。厄介なのは生きた人間だということだったよ」

第九章　超統一理論

CamScannerでスキャン

荒海や佐渡(さど)に横たふ天(あま)の河

——松尾芭蕉(ばしょう)(一六四四—九四)

CamScannerでスキャン

北海道は歴史的に、日本の中の外国とも言える色彩が濃い。〈マシーン〉建造計画の本拠地に北海道が選ばれたのも、おそらくはそのためであったろう。気候風土の違いは建物の造り一つにも現われて、北海道の景観は、俗に言う内地の日本的風景と際立った対照を示している。列島北端のこの地は、また、アイヌの故郷でもある。体毛の濃い原住民アイヌに対して今なお偏見を抱いている日本人は少なくない。ミネソタやワイオミングに劣らず北海道の冬は厳しい。本州とは海峡を隔てているために、物資人員の移動に何かと不便を伴うが、万一〈マシーン〉に事故があった場合には、遠隔の地であることが幸いであろう。もっとも、全長五十一キロメートルの海底トンネルで本州と結ばれている北海道は、文字通り隔絶の地というわけではない。海底トンネルとしては、これは世界最長のものである。

〈マシーン〉のコンポーネントを個々に試験している段階では安全性についての危惧はなかったが、北海道で組立てが行われることになって、関係者の間に不安が高まった。それというのは、現地に立って周囲の山々を見ればわかる通り、近年この一帯は火山活動が盛んになっていたからである。一日一メートルの隆起が記録された山すらあった。北海道から僅か四

十三キロの宗谷海峡を隔てて樺太を領土に持つソ連も、火山活動を指摘して懸念を表明した。もっとも、ソ連が日本に何かと難癖を付けるのは今にはじまったことではなかった。それに、〈マシーン〉はたとえ月の裏側で建造されたとしても、始動すれば地球を破壊するものではないという保証はなかった。危険の予測、評価はあくまでも〈マシーン〉建造が大前提であって、場所は二の次だった。

七月はじめに〈マシーン〉は再び形を成しはじめた。アメリカでは世論が割れた上に政治問題が絡んで計画再開の目処が立たず、ソ連は技術的な問題で暗礁に乗り上げていた。両国のそんな状態を尻目に、ワイオミングよりもはるかに設備のささやかな北海道では、すでにエルビウムの車知の取り付けも終り、十二面体は完成していた。ただし、そのことはまだ公にはされていなかった。正十二面体を最初に発見した古代ギリシャのピタゴラス学派はその図形を秘中の秘とし、他へ洩らした者は厳罰に処したと伝えられている。してみれば、それから二千六百年を経て地球の反対側で建造された小家ほどの十二面体が、限られた数の当事者にしか知られていないのは、まことに相応しいことかもしれなかった。

日本の計画本部は関係者全員に数日間の休暇を与えることにした。建造現場に近いところで、とにもかくにも大都会と呼べるのは帯広市くらいのものだった。十勝川と札内川の合流点に開けた美しい町である。旭岳の雪渓にスキーに行く者もあり、温泉の湧く川に石を積んで堰き止め、数十億年前にどこかの超新星爆発で降り注いだ放射性元素の崩壊エネルギーで体調をととのえる者もあった。輓馬競走も人気が高かった。ドサンコと呼ばれる北海道在来

のたくましい荷馬に重石を積んだ橇を繋ぎ、畑の畝の上を走らせる草競馬である。五人の乗員は、一つだけ重要な公式行事を済ませてから、ヘリコプターで二百キロ足らずのところにある北海道第一の都会、札幌へ出掛けた。

折よく札幌は七夕祭の最中だった。保安上の気遣いはなかった。計画成功の鍵は何よりもまず〈マシーン〉それ自体の安全にあり、五人の乗員にはさして重きが置かれていなかったからである。彼らは特別の訓練を受けているわけではない。〈メッセージ〉と〈マシーン〉それに、彼らが携行する何種類かの機材について詳しい知識を持っているというにすぎないのだ。理屈の上では、いくらでも交替が利く顔触れだ、とエリーは思っている。もっとも、〈ワールド・マシーン・コンソーシアム〉のどこからも文句の出ない人物を新たに五人選ぶとなると、政治的な思惑が絡んでなかなか容易なことではあるまい。

西とヴェイゲイは、どうしても飲みながら話したいことがある、と言ってどこかへ姿を消した。エリーとデヴィ・スハヴァティ、アボネバ・エダの三人は接待役の日本人の案内で中心街の〈大通り〉へ出掛けた。紙の吹流しや提灯、常磐木に亀や鬼をあしらった絵看板、王朝風俗の若い男女を象った切絵などが町並を飾り、通りを隔てて向き合った建物に、羽根を拡げた孔雀の横断幕が懸け渡されていた。

エダは民族衣裳の美しい縫取りのある麻の長衣に植木鉢のような縁なしの帽子、スハヴァティも色鮮やかな絹のサリーという出立ちだった。エリーはこうしてこの二人と一緒にいることを幸せに思った。日本の〈マ

た検査にすべて合格している。五人の乗員は、厳密に全人類を代表するとは言えぬまでも、公正に選ばれた惑星地球の使者である。のみならず、彼らは各国政府の意を体した外交団とは異なり、自由な意志を持つ純粋な個人の集団である。その意味では、彼らはそれぞれに反逆者の性格を帯びていると言えないこともない。

例えば、エダ。物理学界の夢とされていた超統一理論を完成した有能な科学者である。超統一理論とは、重力から素粒子まで、物理学の全領域を包含し、自然界のすべての根源となる力――重力、電磁力、核力――を、ただ一つの力の場の理論で整然と説明するもので、エダの成功はアイザック・ニュートンやアルバート・アインシュタインの業績に匹敵するとされている。実際、彼は現代のニュートン、アインシュタインと称されること屡々である。エダは回教徒を両親に持つナイジェリア人だが、そのこと自体は特に異とするには当らない。ところが、エダは同じ回教徒でも、キリスト教との折衷を唱えて宗教改革を目指すアハマディア運動推進派のスーフィー教の信奉者だった。内海禅師と会食した夜、エダは回教の一宗派であるスーフィー教の立場を、仏教における禅宗のようなものだと説明した。アハマディアはペンによる聖戦を掲げている。非暴力主義である。

物静かで、並はずれて控え目なエダだったが、回教保守本流の聖戦の考え方には強く反対して、常々、自由な思想の交流を主張して止まなかった。それ故、旧態依然とした回教世界から、彼は始末におえない異端の徒と目されていた。一部の回教国はエダの〈マシーン〉搭乗に抗議した。彼を嫌ったのは回教徒ばかりではなかった。エダは地球上で最も優れた頭脳

の持主とよく言われるが、人種差別論者にしてみれば、黒人のノーベル賞受賞は我慢のならないことだった。彼らが表立って偏見を示さなかったのは、ただ時流に逆らう煩わしさを避けただけにすぎない。四年前、エダが公民権運動の闘士タイロン・フリーを獄中に訪ねた時、アメリカの黒人社会は大いに鼓舞されて、彼の行動を喝采し、青年層はエダを新しい規範と仰ぐようになった。エダは人種差別論者の腹黒さを暴露し、常人の善意を呼び覚ましたのである。

「物理学をやる時間というのは、一種の贅沢品ですよ」ある時、彼は[illegible]に言った。「機会を与えられれば才能を発揮できる人間は大勢います。でも、食うことに追われていたら、学問をする時間がありません。ナイジェリアの若い科学者たちの生活条件を良くすることがわたしの務めです」

ナイジェリアの国民的英雄として名声が高まるにつれて、エダは次第に調子を上げて政府官僚の腐敗堕落を批判し、不正な特権を攻撃した。彼は科学のみならず、社会全般における公正の要を説き、ナイジェリアがいかに優れた国であり得るかを訴えた。ナイジェリアの人口は一九二〇年代のアメリカと同じだ、と彼は言う。資源が豊富なことに加えて、文化の多様性もこの国の強みである。現在抱えている社会的障害を克服すれば、ナイジェリアは世界の前に指針を示す国家となり得よう。日頃はひっそりと孤高を保っているかに見えるエダだったが、この問題に関しては常に積極的に発言した。回教、キリスト教、心霊信仰の別なく、老若を問わず、ナイジェリアの大衆は彼の主張に真剣に耳を傾けた。

CamScannerでスキャン

エダの性格的特徴のうち、とりわけ顕著なのは信じ難いほどの謙虚さだった。彼は決して自己主張しない。立ち入った質問には言葉少なにさりげない答を返すだけである。彼の文章や、親しい席での座談の端々に、人ははじめて彼の深みを感じ取る。〈マシーン〉や〈メッセージ〉について議論がかまびすしく、〈マシーン〉が始動された時何が起るかをめぐってさまざまに取り沙汰されている中で、エダは一度だけ自分から発言したことがある。モザンビークの伝承を引いて、彼は言った。猿は口をきかない。何故ならば、一言でも口をきけば、たちまち人間にこき使われることを知っているから……。

饒舌家揃いの乗員仲間にあって、寡黙なエダは異色だった。他の乗員たちと同様、エリーは彼の片言隻句にも心して耳を澄ませた。エダは、まだ試行錯誤の段階にあった頃の未完の超統一理論を指して、愚かしい誤謬であると言い捨てる。年齢は三十代半ば。エリーとデヴィは密かにエダの何に譬えるべくもない魅力について意見が一致している。エダには素敵な妻がいることもエリーは知っている。エダの妻子は今、ラゴスで暮している。

沿道に並べ立てられた七夕の竹は夥しい色紙、短冊で撓うばかりだった。そこへさらに若い男女が願い事を書きつけた紙切れを吊り添えていた。七夕は、日本では珍しい恋の祭である。七夕伝説の誰でも知っている場面を描いた絵巻が飾られ、野外の仮設舞台では七夕に因む踊りや寸劇が演じられていた。恋し合う二つの星が天の川に隔てられている。陰暦七月七日の夜、二つの星は年に一度の逢瀬を楽しむことができる。その夜が晴れていればの話だ。エリーはアルプスの山を思わせる紺青に澄んだ空を見上げて、恋する星たちの幸せを祈った。

日本の伝説では、星の一方は牛飼いの若者で〈牽牛〉と呼ばれ、わし座のα星であるA7型の矮星アルタイルがこれに当る。相愛の娘は織姫の〈織女〉で、こと座のα星ヴェガである。数カ月後に〈マシーン〉が始動するというこの時期に、ヴェガが日本の星祭の主役とは何と不思議な暗合だろう。もっとも、広く民間伝承を調べれば、夜空に見える明るい星はみなそれぞれに神話伝説を与えられているに違いない。七夕伝説も、もとは中国が起源で、エリーはそのことを数年前、パリではじめて〈ワールド・メッセージ・コンソーシアム〉の会議が開かれた時、西から聞いた。

現在、日本のほとんどの都会で七夕祭は廃れかけているという。見合い結婚が必ずしも標準的ではなくなって、実らぬ恋の哀しみは、もはや若者たちの琴線に触れることがないからだ。一方、札幌、仙台、その他いくつかの大都市では年とともに祭はますます盛んになっている。特に、札幌の場合は今なおアイヌとの混血に対して根強い偏見が残っているために、七夕伝説を思って身につまされる男女は少なくない。結婚相手の類縁、先祖の家系を調査して報酬を受け取る探偵会社もある。相手にアイヌの血が流れているとわかれば、親が問答無用で結婚を破談にする例は跡を絶たない。デヴィは久しい以前に若死にした夫を思い出して、人種偏見に対する怒りを隠そうとしなかった。エダも似たような悲劇を身近に見聞きしているに違いなかったが、例によって、彼はむっつり黙りこくったままだった。

仙台の七夕は、牽牛織女をめったに肉眼で見ることもない現代の日本人にとって、テレビの歳時記に欠くことのできない大きな年中行事になっている。ヴェガ星人はこの先もずっと

同じ〈メッセージ〉を地球に向けて送り続けるだろうか、とエリーはふと思った。日本のテレビが七夕に結び付けて、しきりに〈マシーン〉のことを取り上げていたからだ。もっとも、誰言うとなく〈五人組〉と呼ばれるようになった乗員一同にテレビ局から声がかかることはなかった。彼らが札幌の七夕祭を見物に来ているとは誰も知らない。とはいえ、エダも、スハヴァティもエリーも、今では世界中に顔を知られている。大通りを行く三人に、あちこちから敬意を込めた拍手が湧いた。丁寧に頭を下げる人々もいた。楽器屋の店先のスピーカーから、エリーの知っているロックが弾けていた。黒人グループ〈ホワイト・ノイズ〉の『君に当って砕けたい』だった。残照の中に、一匹の老犬が目を潤ませてうずくまっていた。エリーが近付くと、犬は力なく尾をふった。

日本の報道機関を代表する論説委員や解説者は盛んに〈マシーン道〉を説いた。地球は一つであって、全人類は一蓮托生だとする考え方で、〈マシーン道〉の世界観は漸く一般に浸透しつつあった。すべての宗派教団が足並みを揃えたわけではなかったが、宗教界でも同じ主張が叫ばれていた。布教活動に携わる伝道者たちは、自分たちの努力が実らず、異星人の〈マシーン〉によってはじめて地球は一つという認識が広まったことを託ったが、それも無理からぬことだった。宇宙における人類の位置に対するこの新たな認識が一種の宗教的回心だとすれば、地球は今、神学上の革命に当面していることになる、とエリーは思った。欧米の千年至福論者すら、〈マシーン道〉の影響から逃れられなかった。しかし、もし〈マシーン〉が機能せず、〈メッセージ〉が跡絶えたとしたら、〈マシーン道〉の世界観はいつまで説

得力を持ち続けるだろうか？　仮に〈メッセージ〉の解釈や〈マシーン〉の建造過程に誤りがあったとしても、また、ヴェガ星人に関して今以上に何らの理解が得られなかったにしても、宇宙には地球よりもはるかに進んだ文明が存在することは〈メッセージ〉によって疑いの余地もなく立証されたのだ。それが動かぬ事実である以上、暫くは地球の平和も保たれることだろう、とエリーは考えていた。

彼女はエダに、宗教的な啓示を体験したことがあるかと尋ねてみた。

「あります」エダは言った。

「いつ？」彼から話を引き出すには努力がいる。

「はじめてユークリッド幾何学に接した時です。ニュートンの力学を理解した時もそうでした。マクスウェル方程式や、一般相対性理論からも啓示を受けましたね。超統一理論を完成する途中でも、そういう体験はありました。こうやって、啓示に導かれてここまでやって来られたわたしは恵まれていたとつくづく思います」

「そうじゃなくて……」エリーは言った。「わたしが言いたいことはわかるでしょう。科学を離れての話よ」

「それはありません」エダはきっぱり答えた。「科学を離れて啓示を体験したことはありません」

エダは珍しく自分の信仰について、いくらか詳しい話をした。教義を一から十まで信じているわけではないが、おおむね満足できるという。本来、もっと広く受け入れられていい信

仰であると彼は考えている。アハマディアはクリスチャン・サイエンスやエホバの証人とほぼ同じ頃、パンジャブのミールザー・グラム・アハマドによって提唱された新興宗派である。デヴィも、この新興宗派については多少の知識を持っているらしかった。アハマディアは西アフリカで特に多くの信者を獲得した。その教義は終末論に根ざしている。アハマドは自ら、回教で世界の終末に出現するとされている救世主、マーディを名乗った。それのみならず、キリストの再来、クリシュナの復活、ブールーズ、モハメッドの生れ変りなど、いずれもアハマドが自らもって任ずるところだった。このアハマディアとキリスト教の千年至福信仰が渾淆して、熱心な信徒らはアハマド再臨の時は近いとしている。世界の終りにアハマドは救世主マーディの姿を借りて再来し、地上に正義の王国を実現するという。いつの頃からか、アハマドの歿後百年に当る二〇〇八年がその時であると待望されるようになったのである。鎮静、再燃を繰り返しながらも、救世主待望は世界的な拡がりを見せて止まるところを知らないと思われた。エリーは、各宗派がそれぞれに自分たちの救世主に示す身贔屓を嘆いた。
「恋のお祭の夜ですもの」デヴィは言った。「そんなふうに悲観的に考えることはないわ」

★

札幌は例年にない大雪に見舞われた。この町の名物である雪と氷の彫刻は、時代の先端の風俗、流行を映すことで広く知られているが、珍しい動物や伝説の主人公に加えて、今年は巨大な十二面体が登場し、これが毎夕、聖像のようにテレビ・ニュースの画面を飾った。何

日か小春日和が続くと、輪郭の崩れた雪の彫刻に散水して新たに鑿を入れ、化粧直しをする光景も報道された。

〈マシーン〉の始動は何らかの形で破局的な情況を招くのではないかと懸念する声は、一部では前にもまして高まった。〈マシーン・プロジェクト〉当局は一般に対して胸を張って安全を約束し、政府に対してはそれとなく不安を静めるように努め、始動の時期についてはいっさい秘密を守った。科学者の中に、十一月十七日を始動の日に推す一派があった。今世紀最大の隕石雨が観測されるはずの日で、その時期に合わせて〈マシーン〉を始動することに象徴的な意味がある、と彼らは主張した。しかし、もし〈マシーン〉が地球を離れるとすれば、彗星状の石礫が降り注ぐ中を飛ぶことになり、不必要な危険を冒すのは賢明でないというヴァレリアンの意見で、始動はそれより数週間先の、一九〇〇年代最後の月と決められた。厳密に言えば、これは二十一世紀がはじまる一年前である。しかし、暦の約束にはこだわらない先物買いや、十二月に二年続きで二十一世紀到来を祝おうという仕掛人たちの暗躍で、世の中は早くもお祭気分が溢れ、大規模な記念行事の計画が目白押しだった。

異星人が乗員各人の体重を知るはずもなかったが、コンポーネント個々の重量や、乗員を含めた〈マシーン〉の総重量は〈メッセージ〉に厳密に規定されていた。機材を持ち込む余裕はほとんどなかった。そのために、一時期、乗員は体重の軽い女性ばかりにして、少しでも多く観測機材を積んではどうかという議論が起ったが、結局、それは無意味な考えとして斥けられた。

重量制限の範囲では、宇宙服は論外だった。この上は、地球人は酸素を吸って生きていることをヴェガ星人が承知してくれているように祈るしかなかった。事実上、装備と呼べるものは何もなく、乗員はそれぞれに文化的背景を異にし、行った先に何があるかわからない、となると、当然、彼らの前途にはかなりの危険が予想される。各国のマスコミが入れ替り立ち替りそのことを指摘し、警告を発した。しかし、当の五人はいっさい口を閉ざしたままだった。

何種類かの小型カメラ、分光計、超絶機能を備えた小型のスーパーコンピュータ、それに、地球に関する情報をおさめたマイクロフィルム・ライブラリーは他の何を措いても携帯するべきであると判断された。妥当な判断とも言えようが、あるいはまた、およそ見当はずれであるかもしれなかった。〈マシーン〉には寝る場所もなければ料理の設備もなく、生理上の便宜も考慮されていなかった。食糧その他所持品は最小限度に抑えられ、全部合わせてもカヴァーオールのポケットにおさまるほどの量でしかなかった。デヴィは簡単な救急医療品一式を持って行くことにした。エリーは、歯ブラシも下着の替えもいらないと思った。椅子に坐ったままヴェガまで行けるものなら、何もかも、すべては向うで用が足りるはずではないか。カメラが必要なら、ヴェガ星人にそう言って借りればいい。

五人は裸で〈マシーン〉に乗るべきだと大真面目に主張する向きもあった。〈メッセージ〉は衣服について何一つ規定していず、衣服は〈マシーン〉の機能を妨げる恐れなしとしない、というのがその根拠だった。誰よりもエリーとデヴィがこの意見を面白がったが、衣服につ

いて規定がないことは、すなわち衣服を着用してはならないということを意味するものではない。オリンピックの映像を見れば、地球人に着衣の習慣があることは明らかであろう。西もヴェイゲイも、ヴェガ星人が衣服を禁ずるはずはない、と言って裸になることに反対した。規定されているのは総重量だけである。入れ歯や眼鏡はどうしたものだろう？　結局、地球人は野蛮だと誤解されたくない心情が勝って、裸論議は落着した。が、この問題は愉快な冗談としてマスコミにもてはやされ、技術陣や、当の五人も、何かにつけてこれを笑いの種にした。

「規定のあるなしを言うなら……」ヴェイゲイは理屈をこねた。「人間でなくてはならないとはどこにも定められていないのだよ。チンパンジー五匹だって、ヴェガでは大歓迎かもしれないじゃあないか」

手ぶらで行くと言うエリーに対しては、プロジェクト内部から批判があった。異星の技術文明を伝える写真一枚でも、かけがえのない収穫ではないか。異星人の姿を写真に撮ることができたらどんなに素晴らしいことだろう。エリーは考え直して、せめてカメラ一台くらいは持って行くべきではないか。大所帯のアメリカ代表団とともに北海道を訪れたダヘーアは、もう少し真面目になるように、と彼女をたしなめた。乗員は重大な責任を負っている……と言いかけて彼は、エリーの険しい視線にすくんで口をつぐんだ。エリーにしてみれば、彼女の子供染みたふるまいがどれほどの損失を招かないとも限らない、と説教をする気の彼の腹は見え透いていた。驚いたことに、ダヘーアは二人の関係において傷付いたのは自分の方だ

と言わんばかりの態度を取っていた。エリーはデヴィにそのことを訴えたが、デヴィは必ずしも彼女に同情してはいなかった。ダヘーアは心優しい人だとデヴィは言った。結局、エリーが折れて、ダヘーアは「椰子の葉」を持って行くことにした。

私物の所持品リストに、超小型のビデオカメラ、エリーは「椰子の葉、〇・八一一キログラム」と記入していた。またしても、ダヘーアがプロジェクト本部から説得に遣わされた。「重さ僅か七百グラムそこそこという、素晴らしく性能の良い赤外線撮像装置があるんだよ。それなのに、何だって君は木の枝なんか持って行くんだ？」

「木の枝じゃなくて、葉っぱ。椰子の葉よ。あなたはニューヨーク育ちだけれど、椰子の葉くらいは知っているでしょう。『アイヴァンホウ』に出て来るじゃないの。ハイスクールで読まされなかった？　十字軍の時代には、聖地に巡礼した人たちが、みんな証拠に椰子の葉を持ち帰ったのよ。長い遠征の間、心の支えでもあったのね。ヴェガの文明がどんなに進んでいようと、そんなことは問題じゃないわ。わたしの聖地はこの地球ですもの。地球から来た証拠に、わたしは椰子の葉を持って行くの」

ダヘーアは呆れた様子で首をふるばかりだったが、ヴェイゲイは彼女の話を聞いてうなずいた。「その気持はよくわかるね」

エリーはパリで会った時にヴェイゲイから聞いた、貧しい村に遣わされたドロスキー馬車の話を思い出した。しかし、彼女が気に懸けているのは馬車の運命ではなかった。椰子の葉は、彼女にとって、もう一つ別の意味を持っていた。地球のことを思い出させてくれるもの

が必要だったのだ。ヴェガへ行ったら帰る気がなくなってしまうのではないかと、それがエリーは心配だった。

★

いよいよ〈マシーン〉を始動するという前日、エリーは小包を受け取った。ワイオミングのアパートに直接届けられたものを、本部の連絡員が日本へ運んでくれたのだ。返送のための宛先も、贈り主の名前もなかった。中身は金鎖の付いたメダルで、振子を象ったものと見られないこともなかった。メダルの表に小さな文字が刻まれていた。

金衣を纏う
至高の女王ヘラは、
百眼もて睥睨するや
震撼世界に隈もなき
巨人アルゴスを威服せり。

裏にも短い文章が彫り付けられていた。

スパルタの衛士ら、ローマ軍の将に答えて曰く「汝もし神ならば、汝を害せざりし者を

毀傷することあらじ。汝、人ならば、進め。男らは汝と異なることなきを知らん」女らもまた同じなり。

エリーは贈り主が誰かを悟った。

★

明けて〈始動の日〉、計画本部では上級スタッフを対象に、結果を予測するアンケート調査を行なった。〈マシーン〉は動かず、何事も起らない、とする回答が大半を占めていた。少数ながら、相対性理論に反しようとどうしようと、五人は瞬時にヴェガ系に移動するに違いない、と予測する回答もあった。その他、意見は多岐にわたっていた。〈マシーン〉は太陽系探査機であるとするもの、史上最大の浪費を狙ったいたずらだとするもの、その他、教室、タイムマシーン、銀河世界の公衆電話など、いろいろな解釈が示された。ある科学者は「五人は座席に坐ったまま徐々に緑の鱗と鋭い牙を持つ醜悪な姿に変ることだろう」と回答した。これは〈トロイの木馬〉に最も近い考え方だった。一人だけ、ずばり〈終末機械〉と記した者がいた。

形ばかりの壮行会が催された。プロジェクトのおもだった役員たちが代るがわる祝辞を述べ、軽食と飲みものが出た。人々は互いに肩を抱き合った。そっと涙を拭う者もあった。あからさまに懐疑を示す者も皆無ではなかった。どんなに些細なことであれ、〈マシーン〉の

独断によって何かが起れば大変な騒ぎになるであろうことは、その場の雰囲気から察しられた。が、それはともかく、総じて関係者の顔にはここまで漕ぎつけた満足と安堵の色が浮かんでいた。

エリーは多忙の隙を盗んで老人ホームに電話をかけ、母親に出発の挨拶をした。北海道から呼びかける彼女の声は、そのままにウィスコンシンに伝わった。しかし、返事はなかった。看護婦の話では、母親は不随の半身に僅かながら運動機能を回復しており、間もなく口もきけるようになるだろうということだった。受話器を置いた時には、エリーはすっかり気持が軽くなっていた。

日本の技術陣は揃いの鉢巻をしていた。日本人は昔から、心身の統一を図る時には鉢巻を使用する。特に闘争の場では、精神を引き締め、意志をふるい立たせるのに鉢巻は有効である。彼らの鉢巻には標準的な図法による世界地図が染め抜かれていたが、特にどこかの国が中心を占める配置になってはいなかった。

国家意識は表に立たず、エリーが見た限りでは、人々が国ごとに寄り集まる光景が展開することはなかった。各国の元首はビデオテープで短い餞の言葉を寄せた。アメリカ大統領のスピーチが一番気が利いている、とエリーは思った。

「これは作戦伝達でもなければ、最後の別れでもありません。わたくしは、ただ、皆さんに、行ってらっしゃい、と言うだけです。あなたがた一人一人は十億の地球人に代ってこの宇宙の旅に出るのです。あなたがたは惑星地球全人類の代表です。どこか宇宙の遠いところへ移

動するならば、わたくしたちのために、見られる限りのものを見て下さい。科学の立場からだけではなく、学ぶべきものは余さず学んで下さい。あなたがたは、全人類の過去、現在、未来を代表するのです。何が起ろうとも、あなたがたの足跡は永遠に歴史に残ります。あなたがたは、惑星地球の誇るべき英雄です。わたくしたち地球の声を宇宙に伝えて下さい。あなたがたの賢明な行動を期待します。どうか、無事に帰って下さい」

数時間後、彼らは一人ずつ小さなエアロックを潜って、はじめて完成した〈マシーン〉に乗り込んだ。間接照明が控え目に点った。〈マシーン〉はすべての検査に合格していたが、計画本部は大事を取って、今日の今日まで人を乗せずに来たのだ。ベンゼルが回転していなくとも、座席に誰かが腰を降ろすだけで〈マシーン〉は動き出すのではないかと懸念する声すらあった。しかし、これまでのところ、五人が乗り込んでも、何一つ異常は起きていない。エリーははじめて、深く窪んだビニール張りのシートにおそるおそる体を沈めた。更紗の方が良かったのに、と彼女は思った。シートの形から言って、チンツ織りの上掛けが一番合うはずだ。もっとも、それは好みの問題でしかない。ビニール張りのシートの方がより近代的で、科学技術の匂いがする。やはり、これが相応しいのかもしれない。

ヴェイゲイは人も知る愛煙家で、プロジェクト本部は〈マシーン〉内は禁煙と、彼にくれぐれも釘を刺した。語学に堪能なヴェイゲイは十カ国語で思うさま悪態を吐き、最後のラッキーストライクをゆっくり喫い終えてから、しんがりに乗り込んだ。エリーの隣に坐った時には咽喉をぜいぜいいわせていた。〈メッセージ〉にはシートベルトについて何の指定もな

く、従って〈マシーン〉にはベルトが付いていなかった。技術陣からは、シートベルトがないなどとんでもない話だ、という声が出ていたのだが。

★

何も起らないはずはない。エリーは思案した。〈マシーン〉は移動の手段であり、それ自体、別の世界への出口なのだ。時間を遡ることさえできるのかもしれない。〈マシーン〉は汽笛を鳴らして夜の闇を驀進する貨物列車なのだ。これに乗れば、人は生れ故郷のみすぼらしい田舎町を後に、輝きに満ちた大都会へ行くことができる。それは発見であり、脱出であり、孤立への終止符である。〈マシーン〉建造に遅延を来した技術上の障害や、〈メッセージ〉とその補遺の解釈をめぐる果てしない議論は激しくエリーの焦燥を掻き立てた。彼女が求めているのは栄光ではなかった。いや、そういう気持もまったくなかったとは言いきれない。しかし、それ以上に彼女はある種の解放を目指していた。

エリーは常に驚異を求めて止まなかった。意識の上では、彼女は古代バビロンの〈イシュタール門〉の前に呆然と立ちつくしている未開人であった。はじめてオズのエメラルド・シティの高楼を遠くに望んだドロシーだった。エリーは、一九三九年のニューヨーク世界博覧会でいきなり遊歩道コリドール・オブ・ネーションズに連れ出され、前方から差し招く呼び物のトライロンやペリスフィアに目を瞠ったブルックリンの貧しい少年の心を持っていた。視野いっぱいに拡がるロンドンの街を眺めながら、はじめてテムズ河口を溯ったインディア

ン女性ポカホンタスの驚きと感動がエリーの心に生きていた。

彼女は期待に胸を膨らませた。必ずや、はるかに進んだ異星人が達成したものを目のあたりにすることになるだろう。そうでなくてはならないはずではないか。人類の祖先が密林の木洩れ日を頼りに枝から枝へ飛び移っていた頃、すでに恒星間宇宙飛行を実現していたと想像される異星人が、今はたしてどのような文明を営んでいるだろうか。

彼女のおおかたの友人知人と同様、ドラムリンもまた、エリーのことを救い難い夢想家と評していた。夢想家であることが、とかく賞められない感性のように言われるのが彼女には不思議でならない。夢見る心こそ、彼女にとっては生命の糧であり、喜びの源泉なのだ。誰に恥じることなく夢を求めて、今エリーはオズの魔法使いに会いに出掛けるところだった。

★

始動の準備情況が刻々と無線で五人に伝えられた。〈マシーン〉の外側に据えられた夥しい計器類はこれまでのところ何一つ異常を告げてはいない。あとはベンゼルの間隙から空気が抜き取られるのを待つばかりである。高性能の吸気システムはかつて地球上で作り出されたいかなる真空よりもさらに高い真空度を達成するはずだった。エリーはマイクロ・ビデオカメラを念入りに点検し、椰子の葉にそっと手を重ねた。十二面体の外板に沿って強力な照明が点った。ベンゼルの二つはすでに〈メッセージ〉に定められた速度で回転していた。外で見守る者たちの目に、もはやベンゼルは輪郭もさだかでなかった。第三のベンゼルも、次

第に回転を速めた。電荷は徐々に高まった。互いに直交する軸を中心に、三層の球殻の回転がある速度に達した時、〈マシーン〉は始動する。少なくとも〈メッセージ〉にはそのように述べられていた。

西は並ならぬ決意の表情を浮かべていた。ルナチャルスキーは努めて何げない顔を装っていた。スハヴァティは興奮に目を瞠った。一人エダだけはあくまでも冷静に神経を研ぎ澄ませていた。エリーと目が合うと、スハヴァティはにっこり笑った。

エリーは自分の子供がほしいと思った。その意識を最後に、〈マシーン〉の外壁が閃いて透明に変り、大地が裂けて彼女を呑み込んだ。

第三部　銀河系

CamScannerでスキャン

されば我、高きところをあてどなく歩み行き、汝(なんじ)が塵(ちり)もて捏(こ)ね、永遠なるものと交わりを持たしめ給(たま)いしものに希望あることを知りぬ。

——死海写本

第一章　裸の特異点

驚嘆の階段を登り、
楽園に至る。

――ラルフ・ウォルドー・エマースン『マーリン』（一八四七）

あり得べからざることではない。
広大無量の超越者の目には、
宇宙は一つの平面にすぎず、惑星間の隔たりは
たかだか砂粒の表面の細孔ほどのもの、
恒星間の空間は、隣り合う砂粒の
間隙以上のものではあるまい。

――サミュエル・テイラー・コウルリッジ『オムニアニア』

〈マシーン〉に乗って五人は落下して行った。十二面体の正五角形の隔壁は透明に変った。天井も床も透き通り、ただ、その表面を這う有機珪素化合物の網の目と、埋設されたエルビワムの亜知だけが微妙に震動しているのが見えた。十二面体は、ほとんど内接するばかりの狭いトンネルに飛び込み、三層のベンゼルは消え失せた。加速は一Gほどと思われた。前方を向いているエリーはシートに押しつけられ、彼女と対坐したデヴィはやや前屈みの恰好になっていた。やはり、シートベルトは必要かもしれなかった。

地球のマントルの中を、熔けた鉄が煮えたぎる核へ向って潜行しているという印象は拭えなかった。このまま真っすぐ進んで行けば……エリーはこの何とも説明しようもない体験を、ギリシャ神話の黄泉の川、ステュクスをフェリーボートで渡る光景になぞらえて把握しようと試みた。

視野をかすめ去るトンネルの内壁に彼女は速度を実感した。壁面は輪郭もさだかでない不規則な斑紋を示していた。トンネルの形状は記憶に残らず、ただ、そこを通過して行く事実だけが強く印象づけられた。地表から数百キロあたりでも、岩石は赤熱しているはずである。

にもかかわらず、そのような気配はかけらもなかった。交通整理に当る小鬼の姿もなく、マーマレードの瓶をしまった食器棚も見当らなかった。

時折十二面体の角々が壁をこすり、何物とも知れぬ物質の破片が飛び散った。十二面体はびくともしないようだった。やがて、微粒子の雲が長く尾を曳いた。十二面体が壁に触れる度に、何やら弾力性のあるものがへこんで衝撃を吸収するような波動が感じられた。あたりは黄色味を帯びた鈍い光に均一に照らされていた。トンネルはところどころで緩い弧を描き、十二面体は何の抵抗もなくその曲線を辿った。エリーの見る限り、これまでのところ前方から向って来るものは何もない。たとえ雀一羽でも、この速度で衝突したらえらいことになるはずである。底無しの井戸を限りなく落下して行くとしたら、その先にはいったい何が待ち受けているのだろうか。彼女は胃の腑の底に何か堅いものがわだかまっているように感じた。とはいえ、もはや思案の余地はなかった。

ブラックホール。彼女は確信した。これはブラックホールに違いない。〈マシーン〉は事象の地平面を越えて、恐るべき特異点に向っているのだ。あるいは、ここはブラックホールではなく、〈マシーン〉は裸の特異点に接近しようとしているのだろうか。裸の特異点……。物理学者が考え出した言葉だ。重力崩壊によって時空の曲率が無限大になる領域が特異点である。言わばブラックホールの中心であり、時空の終点だ。これが事象の地平面に囲まれていず、すなわち、ブラックホールを伴わずに生じたものが裸の特異点である。特異点では因果律が破られ、物理法則は成り立たない。結果は原因に先立ち、時間の逆流が起り得る。特

にもかかわらず、そのような気配はかけらもなかった。交通整理に当る小亀の姿もなく、マーマレードの瓶をしまった食器棚も見当らなかった。

時折十二面体の角々が壁をこすり、何物とも知れぬ物質の破片が飛び散った。十二面体はびくともしないようだった。やがて、微粒子の雲が長く尾を曳いた。十二面体が壁に触れる度に、何やら弾力性のあるものがへこんで衝撃を吸収するような波動が感じられた。あたりは黄色味を帯びた鈍い光に均一に照らされていた。トンネルはところどころで緩い弧を描き、十二面体は何の抵抗もなくその曲線を辿った。エリーの見る限り、これまでのところ前方から向って来るものは何もない。たとえ雀一羽でも、この速度で衝突したらえらいことになるはずである。底無しの井戸を限りなく落下して行くとしたら、その先にはいったい何が待ち受けているのだろうか。彼女は胃の腑の底に何か堅いものがわだかまっているように感じた。とはいえ、もはや思案の余地はなかった。

ブラックホール。彼女は確信した。これはブラックホールに違いない。〈マシーン〉は事象の地平面を越えて、恐るべき特異点に向っているのだ。あるいは、ここはブラックホールではなく、〈マシーン〉は裸の特異点に接近しようとしているのだろうか。裸の特異点……。物理学者が考え出した言葉だ。重力崩壊によって時空の曲率が無限大になる領域が特異点である。言わばブラックホールの中心であり、時空の終点だ。これが事象の地平面に囲まれていず、すなわち、ブラックホールを伴わずに生じたものが裸の特異点である。特異点では因果律が破られ、物理法則は成り立たない。結果は原因に先立ち、時間の逆流が起り得る。特

異点に落ち込んだら、その体験を記憶するどころか、二度と再び生きては帰れない。エリーはかつて学んだ知識を総ざらいしてブラックホールと特異点について考えた。ブラックホールが回転していると、特異点は環状ないしはさらに複雑な形を取る。いずれにせよ、ブラックホールは近付いてはならないものなのだ。うっかり落ち込めば、重力の潮汐効果で人間は糸のように引き伸ばされてしまう。あるいは紙のように平たく押し潰されるかもしれない。幸い、今のところはまだそうしたことは起きていない。透明なまま灰色にくすんだ天井と床で新しい動きが生じていた。有機珪素化合物の網が、あるところでは皺になって折り重なり、またあるところでは繰り延べるように拡がった。エルビウムの車知は回転しながら揺動した。しかし、彼女や同乗の四人を含めて、十二面体の内部には何一つ異常はなかった。もちろん、彼らはいくらか落着きを失っている。しかし、誰も糸のように細長くなったりはしていない。

　そんなことに気を遣うのは愚かしいということはわかっていた。ブラックホールの物理に関しては、エリーは門外漢である。それにしても、これが宇宙の誕生の時にできた原始ブラックホールであれ、その後に太陽よりも大きな星が爆縮して生じたものであれ、現に今、彼女が体験しつつあることと、ブラックホールとがどこでどう結び付くのか疑問だった。星が爆縮した後には重力場が残り、収縮して行く星の重力は無限に大きくなって、ついには光さえ脱出できなくなってしまう。だから、この天体は黒い穴としか見えない。それがブラックホールの名の由来である。とはいえ、〈マシーン・プロジェクト〉が星を陥没させた事実

はないし、原始ブラックホールを捕獲したとも考えられない。地球に最も近い原始ブラックホールがどこに潜んでいるかはまだ誰にもわかっていないのだ。プロジェクトは〈マシーン〉を建造して、ベンゼルに回転を与えただけである。

エリーはそっとエダの様子を窺った。エダは小型コンピュータを取り出して、しきりに何かを計算していた。十二面体が壁をこする度に、骨格を通して低い振動音が体を走り、耳に伝わった。彼女は声を張り上げた。

「これは、いったい、どういうこと？」

「どういうほどのことはありませんよ」エダは叫び返した。「実際には何も起っていないことが、だいたい証明できますね。ボイヤー＝リンドクウィスト座標を知っていますか？」

「知らないわ。お恥ずかしい話だけれど」

「あとで説明しましょう」

エダが〝あとで〟説明する機会があると思っていると知って彼女は安堵した。

目で見るより先に、体で減速を感じた。ちょうど、ローラー・コースターが急な下りから水平部分を過ぎて、ゆっくりと登り勾配にかかる時の気持だった。減速がはじまる手前でトンネルは不規則に起伏した。周囲にあふれる光は色も明るさも変らなかった。エリーはビデオカメラに長焦点レンズを着けて遠く前方を覗いた。トンネルの波打つ様子が見えるばかりだった。望遠レンズで引き寄せた壁面の斑紋はおそろしく複雑に入り組み、一瞬、それ自体が仄かな光を放っているかに思われた。

CamScannerでスキャン

十二面体はほとんど歩行の速度にまで減速した。トンネルはどこまでも続いていた。どこへ向っているにせよ、果して目的地まで行き着くだろうか、とエリーはあらぬことを考えた。設計値に誤算はなかったろうか。〈マシーン〉に欠陥はないと言いきれるだろうか。ほんの僅かでも、どこかに狂いがあったとしたら、どうだろう。北海道では技術的に許せると思われた誤差も、実地では致命的な不備となりはしないだろうか。背後に靡き、時に脹れ上がって十二面体を包み込む微粒子の雲を見ていると、エリーはさらに新たな不安にとりつかれた。〈マシーン〉は壁にぶつかりすぎて、設計時の計算以上に推力を失ったのではあるまいか。トンネルの内壁と十二面体の間隔は前にもまして狭まっている。やがて〈マシーン〉は宇宙のどことも知れぬ場所に嵌まり込んでしまい、乗員は苦痛に喘ぎながら酸素がつきるのを待つしかなくなるのではなかろうか。これだけの努力を払いながら、ヴェガ星人は地球人が呼吸をしなくては生きられないことを忘れているのだろうか。ナチスの群衆が歓呼する情景を、ヴェガ星人は何と見たのだろうか……。

ヴェイゲイとエダは重力理論の大秘事について話し込んでいた。……ハドロンのひも模型。仮想粒子無限大発散のくりこみ。時間的キリング・ベクトル。非アーベル群のゲージ不定性。測地線再整合。超重力の十一次元カルーツァ＝クライン理論。そして、もちろん、エダ自身の画期的な超統一理論……。しかし、二人の表情を見れば、この状況は容易に説明が付きそうもないことがわかった。充分な時間が与えられれば、彼らはきっと何らかの解答を見出すに違いない。超統一理論は地球上で知られている限りの物理学の全領域に対応するはずなの

だ。このトンネルが、エダの場の方程式を満たすものでないとは考えられない。
ヴェイゲイが問いかけた。「誰か裸の特異点を見たかな？」
「そう言われても、特異点がどんな姿かわかりませんもの」デヴィが言った。
「いや、失礼。特異点は裸じゃないかもしれない。言い方を変えよう。誰か、因果律の破綻を感じることはなかったかな？　何か理屈に合わないこと、感覚的に受け付けないことが起っているという意識はなかったかね？　煎り卵が白身と黄身にきれいに分かれて、もとの卵に返るのと似たようなことが、何かなかったかな……？」
デヴィは不審に目を細めてヴェイゲイを見返した。
「ヴェイゲイの質問はおかしくないのよ」エリーは咄嗟に口を挟んだ。ヴェイゲイはちょっと興奮しているけれど、と内心、彼女は自分に言い聞かせていた。「ブラックホールの本質にかかわることですもの。不思議に聞えるのは事実だけれど」
「別に異常は感じなかったわ」デヴィは思案げに言った。「今の質問自体がよく呑み込めないだけで」と、彼女はふいに顔を輝かせた。「でも、正直に言って、快適な乗り心地ね」
これは皆も同意見だった。ヴェイゲイは大いに気を好くした。
「宇宙では検閲が徹底しているということだね。ブラックホールの中でさえ、特異点は目に見えない」
「今のはヴェイゲイの冗談ですよ」エダが横から言った。「事象の地平面を越えたら、ブラックホールの特異点は避けようがないんです」

エリーの取り成しにもかかわらず、デヴィはまた不審顔でヴェイゲイとエダを見くらべた。物理学者は日常体験とはかけはなれた概念に言葉を与え、説明を加えなくてはならない。その際、彼らはとかく生粋の新造語を嫌って、不充分ではあっても、何とか常識の中に類比を求めようとする傾向がある。さもなければ、現象や方程式に発見者の名前を付けて間に合わせる。それ故、物理学者の話は内容を理解していない聞き手に混乱を与えかねない。

エリーはデヴィの傍へ行こうとして腰を浮かせた。と、そこで西が奇声を発して一同を驚かせた。トンネルの内壁が波状にくびれ、しごくように十二面体を前方に押しやった。トンネルの波動はやがて一定のリズムを刻みはじめた。十二面体が停止寸前まで減速すると、その都度、内壁が収縮して新たに推力が加わった。エリーは乗物酔いの軽い吐気に襲われた。トンネルが小刻みに蛇行しているところでは、内壁の蠕動が特に激しく、十二面体は難航したが、それ以外のところ、とりわけ直行路では、まさに矢のように前進した。

はるか彼方に微かな光点が認められた。それは次第に輝きを増した。十二面体の内部に青白い光が満ち溢れた。光はすっかり回転の鈍ったエルビウムの黒い円筒に反射した。発進してからまだほんの十分か十五分しか経っていないように感じられたが、途中の黄色がかった淡い光にくらべて、見る間に強くなりまさる輝きは眩暈を誘うばかりだった。十二面体はその光源に急速に接近していた。トンネルはいつか上向きになり、やがて、十二面体は通常空間と思われるところへ飛び出した。目の前の、手を伸ばせば届きそうなあたりに青白色の大きな星が浮かんでいた。エリーは一目でそれがヴェガとわかった。

★

望遠レンズで星を覗くわけには行かなかった。ヴェガよりもずっと暗く、温度の低い太陽ですら、直接レンズを向ければ目をやられてしまう。エリーは白い紙を長いレンズの焦点面に置いて星の像を映し出した。大きな黒点群が二つと、星を取り巻くリング面に何やら影のようなものが認められた。彼女はカメラを脇へ置くと、手を翳してヴェガの光輪を隠した。それまでヴェガの輝きに圧倒されて見えなかったコロナがくっきりと浮き出た。

彼女は手を翳したまま、ヴェガのまわりの塵の環を観察した。素数の集まりから成る〈メッセージ〉の受信以来、ヴェガ系の構造は世界中で議論の的になっている。惑星地球の天文学界を代表する立場として、彼女は自分の観察に誤りがあってはならないと強く思った。絞りやテープのスピードをいろいろに変えて、彼女はヴェガをビデオに録画した。十二面体が飛び出したのは、リング面のちょうど内側の塵のない空間だった。リングは面状の大きな拡がりにくらべて極度に薄かった。リングは場所によって微妙に色が違ったが、リングを作っている塵の粒子は見分けられなかった。リングが土星の環と同じようなものだとすれば、直径数メートルのかたまりは超特大の部類であろう。ヴェガの環は、宇宙塵、岩石や氷のかけらなど、いずれも極く小さな粒子が集まってできていると見てよさそうだった。

後方をふり返ってみると、十二面体が飛び出したあたりに黒い穴が口を開けていた。穴は丸く、黒いベルベットや夜の闇よりもなお黒かった。穴はその向うに伸びているヴェガのり

ングを隠していた。レンズで覗くと、穴の中心部に微かに光が揺れているように見えた。ホーキング放射だろうか？　いや、そうだとしたら、波長はもっと長くて目に見えないはずだ。地球からの光がトンネルから洩れているのだろうか。あの黒い穴の反対側の出口は北海道に通じている……。

惑星はどこにあるのだろう？　エリーは望遠レンズでリング面を精査した。リングのどこかに嵌め込まれたような惑星か、少なくとも〈メッセージ〉を発信した異星人の母星があるはずではなかろうか。重力効果で塵を集め、周囲を丸く拭き取ったようにしている惑星はないかと、彼女は幾重にも重なっているリングの空隙を捜した。それらしいものはどこにも見当らなかった。

「惑星は見付からないかね？」西が尋ねた。

「どこにもないわ。彗星なら近くにいくつか大型のがあって、尾も見えるのだけれど、惑星らしいものは、ちょっと見当らないわね。リングは数えきれないくらい、何重にも重なっているわ。こう見たところ、どれも塵の集まりね。ブラックホールがリングに大きな切れ目を作っていて、わたしたちは今、ちょうどその中でゆっくりヴェガのまわりを回っているのよ。ヴェガ系はまだ新しいでしょう。誕生してから、せいぜい数億年ね。だから、天文学者の一部には、まだ惑星ができるには早すぎるという考え方があることはたしかだけれど、でも、だったら〈メッセージ〉はどこから発信されたのかしら？」

「案外、こいつはヴェガじゃあないのかもしれないぞ」ヴェイゲイが首を傾げて言った。

「信号は、たしかにヴェガから来ているんだよ。ところが、トンネルはどこか他の恒星系に通じているとしたら、どうだろう？」

「考えられないことではないわね。でも、その別の星がヴェガとだいたい同じ色温度だというのは、偶然にしては話が上手すぎるのではないかしら。ほら、この星は青みがかっているでしょう。それに、塵の集まったリングも特徴的よ。たしかに、眩しくて星座から位置を確認することはできないけれど、これはヴェガに間違いないわ。賭けてもいいわよ」

「だとしたら、ヴェガ星人はどこにいるの？」デヴィが尋ねた。

目の良い西は、天井の有機珪素の網を透かして、五角形のパネル越しに、リング面のはるか上方を仰ぎ見ていた。口を閉ざした西の視線を辿って、エリーも空を見上げた。何やら光るものがあった。距離が遠いために正確なことはわからなかったが、相当の大きさに違いなかった。彼女は望遠レンズをその方に向けた。レンズは何とも名付けようのない巨大な不定形の多面体を視野に捉えた。多面体の表面をぎっしりと隙間なく埋めている丸いものは何だろうか？　円盤か、椀型アンテナか？　パラボラか？

「ねえ、喬木、これで見て、あなたの解釈を聞かせて」

「ははあ、なるほど。あれは君の専門じゃないか。電波望遠鏡だよ。何千台とあるな。四方八方に向いている。惑星じゃあなくて、装置そのものだよ」

一同は代るがわる望遠レンズを覗いた。エリーは密かに順番を待ちかねた。電波望遠鏡の基本構造は多かれ少なかれ、電波の物理的性質に規定される。とはいえ、ブラックホールを

超相対論的輸送手段に利用するほどの文明に達した異星人が、今なお一見してそれとわかる電波望遠鏡を使っていることに彼女は失望を禁じ得なかった。どんなに大規模であろうともだ。ヴェガ星人は思いのほか保守的で、独創性に乏しいのではなかろうか……。望遠鏡を極周回軌道に乗せる考え方は理解できる。周期中に二度、宇宙塵のリングを突き抜けなくてはならないことを除けば、この軌道は安全である。それはともかく、何千基もの電波望遠鏡が八方を睨んでいるということは、全宇宙規模の探査が行われていることを意味する。〈アーガス計画〉の豪華版である。テレビ電波や軍用レーダー、その他、地球では探知されたことのないあらゆる種類の電波を対象として、無数の惑星が監視されているのだ。電波信号はたびたび観測にかかるのだろうか？　それとも、観測史百万年を通じて地球がはじめての収穫だろうか？　それにしては、歓迎団が出向いて来る気配もない。地球のような辺境からの代表団は取るに足らず、その到着を待つ見張り役すら立てられてはいないのだろうか？

やっと順番がひと回りして、エリーは絞りとピントに注意しながら異星人の観測基地を録画した。全米科学財団に対して、電波天文学がいかに重要な領域であるかを示すためにもしっかりした記録を残しておきたかった。多面体までの距離が摑めないのがもどかしい。夥しい電波望遠鏡は、鯨の体表にこびりついたフジツボのようである。無重力状態なら、電波望遠鏡はいくらでも大きくできるだろう。映像を詳しく分析すれば、円弧の数分を占めると思われる被写体の視角は割り出せるとしても、距離がわからない限り、現実の寸法は算出できないが、とにかく、とてつもなく大きなものであることだけは間違いなかった。

「惑星がないとなると、ヴェガ星人はここにはいないね」西は言った。「ここには誰もいない。ヴェガは番小屋でしかないんだ。国境警備隊が暖を取る休憩所と言ってもいいかな。あの電波望遠鏡は……」彼はちらりと上空に目をやった。「万里の長城の物見櫓だよ。光の速度が何物をもってしても超すことのできない限界だとすれば、銀河帝国の統一はなかなかむずかしい。守備隊に反乱軍の鎮圧を命じたところで、結果がわかるのが一万年先というのでは、時間がかかりすぎてどうしようもないだろう。だからといって、辺境守備隊の司令官たちに自治権を与えれば、それはすでに帝国ではないね。ところが、ここにこういうものがある……」彼は遠のいて行く空間の黒い染みを指さした。「これは、僻地と帝都を結ぶ公路だよ。ペルシャにも、ローマにも、道があった。中国も同じ。道があれば、光の速度に制限されることはない。道があって、はじめて帝国の統一は実現するのだよ」

エダは物理学上、何やら腑に落ちないことがあると見えて、しきりに首をふりながら考え込んでいた。

ブラックホールは……そう、彼らが目にしているものが、事実ブラックホールだとすれば……リングの空隙に沿ってヴェガをめぐる軌道を回っていた。両側のリングがブラックホールを敬遠してでもいるかのように、空隙は広々としていた。それにしても、ブラックホールの黒さは何に譬えるべくもなかった。

ビデオカメラをリングにつけてパンしながらエリーは、リングを作っている星間塵がいつの日か惑星系へと進化するのだろうかと考えた。粒子がぶつかり合い、寄り集まり、次第に

大きな塊に成長するうちに、やがて重力による凝縮が起り、ついには、いくつかの惑星となって中心星の周囲を回るようになる。これが、現在天文学者の間で認められている四十五億年前の太陽系誕生の過程である。現にこうしている今、エリーはリングのあちこちに、明らかにそれとわかる斑が生じているのを見た。局部的な脹らみは、そこで塵の凝縮が進んでいることを物語っていた。

ヴェガを回るブラックホールは至近の周囲に目に見える塵の波動を惹き起していた。十二面体もまた、ささやかながら同様の航跡を曳いているはずである。この重力擾乱と、それによって生じる塵の凝縮、拡散は遠い将来の惑星形成に何らかの影響をおよぼすものだろうか。もし、影響があるとすれば、今から数十億年後のある惑星の存在そのものが、あのブラックホールと〈マシーン〉に起因すると言えないこともない。さらに溯れば、それは〈メッセージ〉に端を発したものであり、つまりは〈アーガス計画〉がそもそものはじめである。そこまで言うのは自意識過剰かもしれない、とエリーは思い直した。彼女がいなくても、誰か他の電波天文学者が遅かれ早かれ〈メッセージ〉を受け取ったに違いない。〈マシーン〉は建造され、いつか別の瞬間にこの空間に飛び出したはずである。しかし、現に今ここに彼女がいる以上、将来この恒星系に生れる惑星のどれかは、やはり彼女に存在を負うものであろう。ひるがえって、彼女は自分がいなければ生れるはずだった別の惑星の存在を奪ったかもしれない。純粋に学術的な動機に根ざしていたとはいえ、自分の行為が未知の惑星の運命を左右することを思って、彼女は何となく気が重かった。

CamScannerでスキャン

エリーは十二面体の内部から透明な五角形の隔壁の接目を舐めて、ブラックホールとともに自分たちが移動しているリングの空隙にカメラをパンした。青みがかった光を孕む二つのリングに挟まれた空隙に沿ってカメラをあおって行くと、はるか前方で内側のリングが捲れたように反り返っていた。

「チャオム」彼女は西にカメラを渡して言った。「あそこを見て。何かしら」

「どこだって？」

彼女はその位置を指さした。西は小さく、しかし、隠しようもなく、はっと息を呑んだ。

「またブラックホールだ」彼は言った。「今度はもっと大きいぞ」

★

彼らは再び落下した。トンネルは前よりも広く、動揺は少なかった。

「これだけのこと？」エリーはデヴィに向って思わず声を張り上げた。「ブラックホールを見せびらかすために、わたしたちをヴェガまで連れて来たの？　千キロも向うの電波望遠鏡をもったいぶって、ちらっと見せるだけ？　わたしたち、あそこにいたのはせいぜい十分くらいよ。それだけで、またブラックホールで地球へ帰されてしまうの？　二兆ドルをかけた挙句がたったこれだけ？」

「わたしらは考え違いをしているのかもしれないな」ヴェイゲイが言った。「向うの目的は地球に足場を固めることだったのかもしれない」

エリーは夜密かにトロイの城門の下を掘り進む兵士らの姿を想像した。

エダは両手で何かを押えつけるような恰好をして皆をなだめた。「もう少し様子を見ましょう。これは別のトンネルですよ。地球に通じていると決まったものでもないでしょう」

「じゃあ、ヴェガはわたしたちの目的地じゃあないというの？」デヴィが問い返した。

「これは実験的な輸送手段ですよ。次はどこへ飛び出すか、楽しみですね」

今度は十二面体が壁をこすることもめったになく、トンネルの蠕動も激しくなかった。エダとヴェイゲイはクルスカル＝セケレス座標に時空図を描き込んで議論を戦わせていた。エリーには二人の話はまるで理解できなかった。急勾配の登りにかかった時のような減速の間は、前と同じで不快だった。

トンネルの向うの光は橙色だった。〈マシーン〉はかなりの速度で、二つの恒星が触れ合うまで近接した接触連星系の空間に飛び出した。老年期にさしかかった赤色巨星の外層が膨れ上がって、地球の太陽に似た中年の、活発な黄色矮星の光球に食い込んでいた。両星の接触点は高エネルギー放射のために眩いばかりだった。エリーはリングや惑星、軌道上の電波観測基地などを捜したが、それらしいものは見当らなかった。別に不思議はない、と彼女は思った。おそらくは、この連星系にも多数の惑星があるに違いない。ただ、小さなビデオカメラでは捉えることができないだけだ。エリーは望遠レンズをはずして二つの太陽を紙の上に映し出し、その像を短焦点レンズで録画した。

リングがないために、ここではヴェガの周囲にくらべて光の乱反射が少なかった。しばら

くあたりを見回すうちに、彼女は北斗七星によく似た星座に気が付いた。しかし、それ以外の星座は見分けられなかった。北斗七星の明るい星のいくつかは地球から数百光年離れている。だとすれば、ここはまだ地球からさほど遠くはない、とエリーは結論した。

彼女はこの考えをエダに話して意見を求めた。

「わたしの考えですか？　思うに、これはアンダーグラウンドですね」

「アンダーグラウンド？」

彼女は〈マシーン〉が始動した直後の、地獄の底へ落ちて行くような気分を思い出した。

「メトロ。地下鉄ですよ。ここは駅です。この連星系も、トンネルを出たところが全部、駅なんです。乗客が乗り降りするんですね。乗り換えもあります」

エダは接触連星を指さした。その手は二つの影を作った。一つは黄色の補色、もう一つは赤の補色だった。彼女はふとディスコの雰囲気を思い出した。それ以外にこの印象を伝える上手い譬えは浮かばなかった。

「ところが、わたしたちは降りられません」エダは言葉を続けた。「この車輌はドアが締めきってありますからね。終点まで行くしかないんです」

ドラムリンは生前、こうした説明の仕方をお伽噺といってこき下ろすのが常だった。エリーの知る限り、エダが思いつくままにお伽噺ふうの比喩を使ったのはこれがはじめてだった。

★

エリーは光スペクトルを専門としてはいなかったが、五人の中では唯一の観測天文学者だったから、潜り抜けるトンネルや、その途中の四次元通常空間について、できる限り多くのデータを集めるべき責任を自覚していた。彼女たちがブラックホールであると理解しているトンネルは、常に恒星系または重星系の周辺に軌道を描いていた。そして、〈マシーン〉を吐き出すトンネルの口と、次に落ち込む入口は必ず同一軌道上に対をなしていた。飛び出す度に世界はがらりと変った。太陽系に似通った世界は一つもなかった。エリーは天文学の未知の扉の向うを垣間見る思いだった。人工物はどこにもなかった。別の十二面体と出会うこともなく、惑星を改造して、西のいわゆる装置に変えたと見られる大規模な工事の跡もなかった。

あるところでは、星の明るさが見る間に変って行った。カメラの絞りを次々に変えなくてはならないことからもそれがわかった。ことR座R星型の変光星の一種に違いなかった。その他、途中には五重星があり、輝きを失った赤褐色の矮星があった。澄んだ空間に孤高の光を放つ星がある一方、星雲状物質に埋もれ、あるいは仄暗い光を孕む分子雲に取り巻かれている星もあった。

エリーは〝天国で分け前を差し引く〟という警句を思い出した。彼女は何一つ差し引かれていない。科学者として冷静を保とうとどんなに努めても、この豊かな星の世界を前にして舞い立つような歓喜は抑える術もなかった。すべての恒星系に生命が溢れていたら、どんなにか素晴らしいことだろう。そのような日がいつか訪れることを彼女は夢見た。

ジャンプを四度重ねたあたりから、彼女はいくらか気懸かりを感じはじめた。密かに時計を見ると、思った通り、北海道を発ってからほぼ一時間が過ぎていた。この状態が長く続けば、いずれ生理的要求は耐え難くなるに違いない。先進文明を営む異星人がどれほど地球のテレビ映像を仔細に分析したとしても、やはり人間の生理機能に関しては見落しは避けられなかったのではなかろうか。

それに、異星人が本当に優れた知能を持ち、高度の技術を達成しているものなら、こんなふうに小刻みにジャンプを繰り返す必要があるだろうか。なるほど、地球人は技術的に遅れていると考えれば、最初のジャンプはしかたないことかもしれない。しかし、ヴェガを過ぎてからはどうだろう？　どこであれ、一気に十二面体を目的地へ移動させてもよくはないだろうか。

トンネルから飛び出す都度、彼女は期待に胸を躍らせた。今度はどんな驚異が待ち受けているだろうか。それは、高度な先端技術を駆使して趣向の限りをつくした遊園地で味わう興奮にも似た気持だった。彼女はふと、〈マシーン〉始動の瞬間を見逃すまいと北海道に望遠鏡を向けているハッデンの姿を想像した。

〈メッセージ〉の送り手によって彼女の眼前に繰り延べられる景観は、事実、この上もなく絢爛華麗であったし、同乗の四人に恒星の進化の過程について説明する時には、正直に言って、人の注目を集める花形の優越感も味わった。にもかかわらず、ほどなく彼女は何か飽き足らないものを感じはじめた。何故だろう、と首を傾げて彼女はすぐに思い当った。異星人

は自分たちの能力をひけらかしているのだ。何と曖昧なことだろう。優れた知的生物にはあるまじき態度ではないか。

前よりもひと回り大きく、曲折の多いトンネルに入ったところで、ヴェイゲイがエダに、この地下鉄は何故みすぼらしい寂れた駅にばかり停まるのか、と疑問を呈した。「どうしてもっと若くて活動の盛んな、塵なんぞない単独の星へ出ないのかね？」

「それはですね……」エダは答えた。「もちろん、これはあくまでもわたしの想像ですが、おそらく、あなたの言うような恒星系は、どこも住民がいて……」

「旅行者が現地人を脅やかさないように、ということね」スハヴァティが先回りして言った。

エダはにやりと笑った。「あるいは、その逆かもしれませんよ」

「つまり、あなたはそっちを考えているわけね。そうでしょう？　未開の惑星に対して、一種の不干渉主義の倫理があるのね。時たま、未開人がこの地下鉄を利用することもあるのはわかっているから……」

「未開人を信用していないわけじゃあないけれど」エリーが引き取って考えを進めた。「でも、まったく心配がないかというと、そうでもないのよね。未開人は、やっぱり未開人ですもの。だから、こうやって辺鄙なところばかり通る地下鉄に乗せるのよ。この地下鉄は、よくよく考えて作ってあるんだわ。それにしても、どうして各駅停車なのかしら。どうせなら急行に乗せてくれればいいのに」

「急行となると、トンネル工事もむずかしいのではないかな」発掘調査に長年の経験を持つ

西が言った。エリーは地球の土木工学の頂点、全長五十一キロの青函トンネルのことを思った。

トンネルは左右に大きく曲がりくねっていた。エリーは愛車のサンダーバードを思い出した。吐き気が心配だった。意志の力で堪えるほかはない。〈マシーン〉にはビニール袋の用意はなかった。

ふっと動揺がおさまった。見渡す限り、星また星だった。地球の観測者が肉眼で見る、たかだか数千の貧相な星屑とはわけが違う。前後左右、頭上足下、どこを見ても視野いっぱいに無数の星が犇き合っていた。その多くが黄色や青や赤の輝きを帯びていたが、中でも赤い星が特に目立った。天空は光の氾濫だった。星間物質が大きく螺旋を描いているところもあった。形容を絶するばかりの巨大なブラックホールに宇宙塵が渦状に凝集しながら流れ込み、そこから夏の夜の熱雷にも似た放射が迸っていた。エリーが察した通り、もしここが銀河系の中心だとすれば、十二面体は強いシンクロトロン輻射にさらされているはずである。地球人がどんなにか弱い人種か、異星人が承知してくれていればいいのだが、と彼女は祈る思いだった。

十二面体の回転につれて視野に入って来たものを、いったい何と呼べばよかろうか。不可思議、驚異、奇跡……。一同がはっと目を瞠った時、すでにそれは空の半ばを塞いでいた。十二面体から見下ろすその表面には、照明を浴びて数百、いや、数千の孔が口を開けていた。開口部はすべて形が違った。多くは多角形ないしは円形で、中には長円もあり、また、突起

を持つものや、大小いくつかの円を、中心をずらせて重ねたような輪郭も認められた。エリーはそれらが宇宙船のドッキング・ポートであることを悟った。直径数メートルから数キロメートル、さらにはもっと大きなものまで、幾千もの形の違うドッキング・ポートが一カ所に集められているのであった。その一つ一つが、この十二面体と同じような星間宇宙船を受け入れるために建設されたものに相違なかった。体格の大きな人種の重厚なマシーンには大きなポート、地球人のように小柄な人種の華奢なマシーンには小さなポート。文明による特権や差別のない公平な扱いではないか。ドッキング・ポートのさまざまな形状はすべての文明が平等に迎えられることを物語っている。それにしても、何と多彩な人種、何と多様な文明だろう。宇宙の雑多な人種が集まり散ずるこの場所は、まさに、グランド・セントラル・ステーションだ、と彼女は思った。

銀河系は文明の坩堝なのだ。宇宙には生命と知性が満ち溢れている。エリーは歓喜の声を抑えかねた。

彼女たちは黄色く照らされたポートに接近していた。ポートは十二面体が切って嵌めたようにぴたりとおさまる形に造られていることがわかった。エリーは隣接するドッキング・ポートに目をやった。彼女たちの十二面体とほぼ同じ大きさで、ヒトデを思わせる形の宇宙船が静かに収容されるところだった。銀河系の中心に位置していると考えられる〈ステーション〉の、辛うじてそれとわかる球面の湾曲に沿って、彼女は遠く全周に視線を馳せた。ついにここへ招かれたことは人類にとって何と晴れがましいことだろう。人類には希望がある。

彼女は意を強くした。未来は大きく開かれている。
「とにかく、ブリッジポートでないことだけは間違いないわ」
彼女は明るい声で言った。物音もせず、衝撃もなく、ドッキング操作は完了した。

第二章　グランド・セントラル・ステーション

CamScannerでスキャン

万物は被造なり。自然もまた神の業なればなり。

——トマス・ブラウン　夢について『医師の宗教』（一六四二）

天使らは姿容（すがたかたち）を持たなくてはならない。自分たちのためではなく、我ら人間のためにである。

——トマス・アクィナス『神学大全』第一巻第五十一章第二節

悪魔は見目好（よ）く姿を変える術（すべ）を知るもの。

——ウィリアム・シェイクスピア『ハムレット』第二幕第二場

エアロックは人一人がやっと潜れる大きさに設計されていた。搭乗に先立って、遠い宇宙の惑星にどの国が第一歩を印すべきかが問題にされた時、五人は揃って眉を顰め、プロジェクトの役員たちを前に、そんなことにこだわるのはもってのほかと笑い飛ばした。以来、彼らは仲間内でも意識してその話を避けていた。

エアロックの内と外、両側のドアが同時に開いた。誰が開けゴマと言ったわけでもない。〈グランド・セントラル〉のこの場所は、然るべく与圧され、酸素も充分に供給されている様子だった。

「それで、どなたから？」デヴィが言った。

ビデオカメラを手にして順番を待ちながらエリーは、未知の世界に踏み出すこの時のためにこそ椰子の葉を持って来たのではないか、と思い返した。座席に戻る彼女の背後で、先頭を切って降り立ったらしいヴェイゲイの歓声が聞えた。エリーは降り注ぐ光の中へ走り出た。エアロックの閾すれすれに砂が迫り、その向うで、踝まで水に漬ったデヴィがはしゃいで西の方に跳ねをかけていた。エダは晴ればれとした笑顔を浮かべていた。

そこは浜辺だった。小さな波が砂を洗っていた。青空にちぎって投げたような積雲が点々と浮かんでいる。波打際からやや引っ込んだところに疎らな椰子の繁みがあり、空には黄色い太陽が一つ。地球の太陽にそっくりだ、とエリーは思った。あたりには、丁子とシナモンを思わせる微かな香りが漂っていた。ザンジバルの海岸だとしても不思議はない風景だった。三万光年の距離を旅して、降りたところがこの浜辺か。いや、もっと芳しくない事態かもしれない。エリーは不安を覚えた。軽く頬を撫でるほどの風が、砂を小さく巻き上げた。これは何百万年も前の探査によって得られたデータに基づいて、精密に再現された地球の情景ではなかろうか。あるいは、五人は壮大な宇宙を旅しながら、結局は記述天文学の知識を深めただけで、ぞんざいに地球のどこか文化果つるところに放り出されたのではあるまいか。

ふり返ってみると、十二面体は跡形もなく消え失せていた。超小型スーパーコンピュータとその情報ライブラリー、それに、なけなしの観測機材は積んだままだった。一同はしばらく当惑に顔を見合わせた。しかし、とにもかくにも彼らは無事だった。途中の体験は、もし地球へ帰れるものならば、立派に土産話になるだけのことがあった。ヴェイゲイはエリーが苦労して持って来た椰子の葉にちらりと目をやり、海岸の椰子の繁みを見やって笑った。

「ニューカッスルの炭鉱に石炭のお土産ね」デヴィが寸評を加えた。

しかし、エリーの椰子の葉は海岸の椰子と少し違っていた。種類が別なのか、あるいは、この景色を作り上げた技術者の不注意によって生じた地域差かもしれなかった。エリーは水平線に目を転じた。四億年の昔、地球の生物がはじめて陸に上がった頃の情景を思い浮かべ

ずにはいられなかった。ここがインド洋であれ、銀河系の中心であれ、五人は人類史上かつてない体験をしたのだ。これからの予定も、目的地も、自分たちの意志の届かぬところであるのは事実だが、五人は星間空間の海を渡り、今まさに、人類史の新時代に足を踏み入れようとしているのだ。彼女は誇らしい気がした。

西はブーツを脱いで、政府支給のごてごてと紋所の入ったジャンプスーツの裾を膝までまくり、浅瀬を行きつ戻りつした。デヴィは椰子の木の陰に姿を隠し、ほどなく、サリーに着替えて、ジャンプスーツを腕に掛けて現われた。エリーはドロシー・ラムーアの映画を思い出した。エダはトレードマークになっている麻の帽子を出してかぶった。エリーは彼らの様子を行き当りばったりにビデオカメラにおさめた。再生すれば、できの悪いホーム・ムービーと変りないことだろう。彼女も西とヴェイゲイに倣って水際に足を浸した。水は暖かだった。よく晴れた午後の海辺である。狐につままれたような気持とはいうものの、つい一時間ほど前の真冬の北海道にくらべれば、まさに別天地だった。

「みんな、何か象徴になるものを持っているね」ヴェイゲイは言った。「何もないのはわたしだけだ」

「どういうこと？」

「スハヴァティとエダは民族衣裳。西は米粒」なるほど、西は米粒の入った小さなビニール袋を指先でぶら下げていた。「君は椰子の葉だ」ヴェイゲイは続けて言った。「ところが、わたしはそういうものを何も持っていない。地球との由縁を示すものは何も持って来なかった

のだよ。この中で、本当の唯物論者はわたし一人だ。わたしが持って来たものは、全部この頭の中にあるのだよ」

エリーはジャンプスーツの襟を寛げて、首に掛けている金メダルを引き出した。ヴェイゲイはメダルを受け取って、そこに刻まれた文字を読んだ。

「これは、たしか、プルタークだな」ややあって、彼は言った。「スパルタ人はこうやって威勢のいいことを言ったのだよ。しかし、結局のところ、戦に勝ったのはローマ勢だからね」

いくらか非難めいたその口ぶりから、ヴェイゲイがそのメダルをダヘーアからの贈り物と思っていることがわかった。過去の経緯から、彼がケンに対して含むところあるのは無理からぬことだったが、そんなヴェイゲイの気持や一徹なところがエリーは嬉しかった。彼女はヴェイゲイに腕を絡げた。

「煙草が吸えるものなら、どんな悪いことでもやりかねない心境だね」ヴェイゲイは彼女の腕を腋の下に挟みつけて、親しげに言った。

★

五人は潮溜りを囲んで腰を降ろした。穏やかな波の音を聞きながら、エリーは〈アーガス計画〉で宇宙の囁きに耳を澄ませて過した数年のことを思い出した。太陽はすでに天頂を過ぎて沖に傾いていた。蟹が一匹、角の先の目玉を光らせて横這いに走り抜けた。この浜には

蟹がいる。椰子の実もある。僅かながら、一行のポケットには携帯食糧がある。しばらくは餓えに悩まされることもあるまい。砂上には、彼ら自身の足跡のほか、人の気配はまるでなかった。

「あらかたは先方の仕事だね」ヴェイゲイは自分たちのこの体験についてエダと話し合ったことを他の三人に説明した。「こっちのプロジェクトがしたことと言えば、ただ、時空にあるかないかの小さな皺を寄せただけの話だよ。そこへ、向うはトンネルを繋げたんだ。多次元幾何学的空間を考えると、その時空の僅かな皺を見付け出すだけだって大仕事だよ。ましてや、そこへトンネルの口を開けるとなると、これは容易なことじゃない」

「どういうことかしら？　異星人が空間の構造を変えた、ということ？」

「うん。つまりね、空間は位相幾何学的に複雑な形で連続しているわけなんだ。アポネパに言わせれば、これはあまり上手い譬えではないかもしれないけれども、片方に二次元の平面があると仮定しようか。これが先進文明の世界だよ。で、もう一つ、こっちに別の二次元平面がある。これは後進世界でね、二つの平面は迷路のような管で結ばれている。先進世界から限られた時間で後進世界へ行くには、その迷路を抜けるしかないんだ。ところで、先進世界の住人が先端に穴の開いた管を伸ばすとするね。その時、後進世界の方でそれに合わせて自分たちの平面にちょっと皺を寄せてやれば、そこへ管の先が届くだろう。これでトンネルが通じる」

「つまり、先進世界はどうやって平面に皺を寄せるか、電波で情報を送って後進世界に指示

を与えるわけね。でも、両方とも厳密に二次平面の世界だとしたら、皺を寄せるなんていうことができるかしら？」

「大量の物質を一カ所に集めればいいだろうな」ヴェイゲイはいくらか自信なげに言った。

「でも、わたしたち、そんなことしていないわ」、

「ああ、わかっているよ。具体的に何がどうなっているかは措くとして、おそらく、それがペンゼルの働きだと想像するがね」

「問題は」エダが控え目に口を挟んだ。「そのトンネルがブラックホールだとすると、非常な矛盾が生じるということなんです。アインシュタインの場の方程式にR・P・カーが与えた解によれば、たしかにトンネルができて、これをカー・ブラックホールと言っていますが、このトンネルはとても不安定でしてね。ほんの少しの擾乱で、たちまちトンネルは塞がって特異点に変ってしまいますから、何物もそこを通り抜けることはできないんです。わたしは極めて技術的に水準の高い文明が、陥没星の内部構造を制御して、トンネルを安定に保っているのではないか、というふうに考えてみました。これは非常に困難なことです。そのためには絶えずトンネルを監視して安定を確保しなくてはなりませんが、十二面体のように大きな物が落下する場合は特に厄介です」

「仮にアポネバが、トンネルが塞がらないようにする手段を考えてくれたとしてもだね、ことはそれだけじゃあ済まないんだ」ヴェイゲイが言った。「問題は他にも山とある。ブラックホールというやつは、物質を吸い込む以上に問題をたくさんこしらえるからね。まず、潮

が効果？ ブラックホールの重力場の中へ入ったら、人間はみんな細長く引き伸ばされて、エル・グレコの絵の人物みたいになってしまうはずだよ。それから、ほら、イタリアの彫刻家の、ええと、何と言ったかな……？」彼はエリーに助け船を求めた。

「ジャコメッティでしょう。あの人はスイス人よ」

「そう、ジャコメッティの彫刻みたいになってしまう。それだけじゃあない。地球から見ると、例えばわたしらがブラックホールを通過するには無限の時間がかかるはずだよ。従って、こっちはいつまで経っても地球へは帰れない。いや、こうしている今、わたしらはまさにそういう状況に置かれているのかもしれないんだ。だとすれば、もう二度と地球へ戻ることはないと覚悟しなくてはならないだろうな。それに、特異点付近では焦熱地獄のようなシンクロトロン輻射にさらされる。これは量子力学的な不安定状態で……」

「おまけに」エダが引き取って続けた。「カー・ブラックホールでは、因果律がめちゃくちゃに破られてしまうんです。トンネル内で、ほんの僅かに針路が狂っただけで、飛び出したところはまだ宇宙がはじまったばかりというようなことにならないとも限りません。例えば、ビッグ・バンのピコセコンド後かもしれないんです。宇宙はまだ、まったくの無秩序ですよ」

「ねえ、ちょっと待って」エリーは声を挟んだ。「わたしは、一般相対論に関しては門外漢よ。でも、ここへ来る途中で見たのは、あれは事実ブラックホールでしょう？ わたしたち、ブラックホールに落下して、反対の口から飛び出したんじゃあないの？ 百の理論よりも一

つの現実の方が重味があるのではないかしら？」

「ああ、君の言いたいことはよくわかるよ」ヴェイゲイは困惑を隠さずに言った。「それにしても、どこか理屈に合わない。わたしらの理解はそう的はずれではないはずなんだ。どうかね？」彼は救いを求める顔でエダに問いかけた。

エダは感情抜きに短く答えた。「自然に発生したブラックホールはトンネルになるはずがありません。ブラックホールの中心には、越すに越されぬ特異点があるんですから」

ありあわせの六分儀と腕時計で、彼らは沈んで行く太陽の角速度を測った。結果は地球と同じ、三百六十度を二十四時間で回る速さだった。日暮れ前に、彼らはエリーのカメラを分解し、レンズを使って火を起こした。彼女は暗がりで誤って火にくべられることのないように、椰子の葉を傍(そば)に引き寄せた。西(シー)は火の扱いが巧みで、皆を風上に坐(すわ)らせて焚火(たきび)を小さく保った。

星が次第に輝きを増した。地球で見馴(みな)れた星座が残らず空にかかっていた。エリーは焚火の番を買って出て、皆を寝かせた。こと座が上がるのが楽しみだった。数時間後にこと座は上がった。空はあくまでも澄みきって、ヴェガはくっきりと明るい光を放っていた。星座の見かけの運動に加えて、南半球の星座が顔を覗(のぞ)かせていること、そして、北の水平線に北斗七星が低く横たわっていることなどから、彼女は自分たちの位置を赤道近くと判断した。これがもし擬似効果だとしたら、ずいぶん手の込んだことをしたものだ、と思いながら、彼女はいつか眠りに落ちた。

★

エリーは不思議な夢を見た。五人は一糸まとわぬ姿で、互いの目を恥じることもなく、水底を泳いでいた。ある時は石サンゴの鹿の角に似た枝の陰に休み、また、ある時は海藻の間に見え隠れする岩の裂け目に潜った。一度、彼女は水面に浮かび出た。波をかすめて十二面体の船が飛んでいた。透明な外板を通して、中で新聞を読んだり、話に興じたりしている腰布や腰巻姿の人影が見えた。エリーは再び居心地の好い水底に戻った。

夢の中では長い時間水に潜っていても、少しも苦しくなかった。鰓で水を呼吸していた。水圧を感じることもなく、魚のように自然に泳ぐことができた。それどころか、ウーイゲイなどはハタ科の魚に似ていないこともなかった。水は多量の酸素を含んでいるに違いない。夢の最中に、彼女はふと以前さる生理学研究室で見たマウスのことを思い出した。マウスは酸素を添加したフラスコの水の中で、長い尾を後ろに靡かせ、小さな前脚をせわしなく動かして、涼しい顔で泳ぎ回っていた。エリーはそのフラスコの酸素量を計算してみようと試みたが、まるで頭が働かなかった。だんだん頭が鈍くなっていくようだった。いいではないか、と彼女は思った。一向に構わない。

見ると、他の四人はすっかり魚の姿に変っていた。デヴィの鰭は透き通っていた。どことなくおかしみがあり、それでいて不思議に官能的だった。いつまでもこうしていたい、とエリーは思った。そのうち何かわかって来るかもしれない。しかし、何に対して答を捜してい

るのか、疑問そのものがすでに曖昧で掴みどころがなかった。生温かい水の中で、彼女は何とも言えず長閑な気持を味わっていた。異星人は、今度は何を考え出すだろうか……。

★

目が覚めると、眩暈に襲われているようで自分がどこにいるのかまるでわからなかった。ウィスコンシンだろうか？　プエルトリコ？　ニューメキシコ？　ワイオミング？　北海道？　それとも、マラッカ海峡だろうか？　思い出した。とはいえ、三万光年四方に範囲を限ってみたところで、ここが銀河系のいったいどのあたりなのか、とんと見当も付かない。自分のいる場所がわからないといって、これ以上にわからないことはまずあるまい。頭痛がしていたが、エリーは声を立てて笑った。隣でデヴィが身じろいだ。前の日の午後、半径一キロほどの範囲を探索したが、人家とおぼしきものは見当らず、五人は砂山の陰に野宿して、朝日はまだ顔に射しかかるまでにはなっていなかった。エリーは砂の斜面に頭を預け、デヴィはジャンプスーツを丸めて枕にしていた。

「柔らかい枕で寝る習慣の文化は何かもう一つ、したたかな強さに欠けていると思わない？」エリーは目を覚ましたデヴィに声をかけた。「頸木を枕に寝るような人間が、いざという時には頼りになるのよ」

デヴィは明るく笑って朝の挨拶をした。

向うの浜で呼ぶ声がした。男たち三人が手招きしていた。エリーとデヴィは飛び起きて駆

けつけた。

波打際にドアが立っていた。板張りのドアで、真鍮の把手が付いている。少なくとも、見た限りでは真鍮と思われた。黒塗りの蝶番で脇柱に留められて、ドアは框にぴたりとおさまっている。表札はない。地球人の目には、極くありふれたドアだった。

「向うへ回ってごらん」西が促した。

裏へ回ってみると、そこにはドアがなかった。エグ、ヴェイゲイ、西、デヴィの四人が数歩離れたところに立ち、足下の砂はひと続きにその隔たりを埋めていた。エリーは踵を濡らして横へ回った。砂の上に、剃刀の跡ほどの線が垂直に立っているのが認められた。手を触れる気にはなれなかった。もう一度はじめの位置に立って目を凝らせたが、ドアは影も形もなく、陽炎のような空気の乱れもなかった。エリーはドアのあるべきあたりをまっすぐに突っ切った。

「やりましたね」エグが嬉しそうに言った。ふり返ると、目の前に閉じたドアがあった。

「そっちからは、どんなふうに見えたの？」彼女は尋ねた。

「厚さ二センチばかりの閉じたドアを抜けて、きれいな女が一人、湧いて出たよ」ヴェイゲイは煙草が切れて辛いところを、よく頑張っている様子だった。

「開けてみた？」エリーは重ねて尋ねた。

「いや、まだだ」西が答えた。

エリーはあらためて不思議なドアをしげしげと見つめた。

「何と言ったかな、ほら、フランスのシュールレアリストの絵にこういうのがあるじゃないか」ヴェイゲイは言った。

「ルネ・マグリット。マグリットはベルギーの画家よ」

「どうやら、ここはやっぱり地球ではないようね」デヴィが海や砂浜や空をひっくるめて指さす仕種で言った。

「三千年前のペルシャ湾でないとすればね。その辺に、妖精はいないかしら」エリーは笑った。

「それにしても、このドア、よくできていると思わない？」

「そうね」エリーはうなずいた。「たしかに、よくできていることは認めるわ。でも、いったい何のためなの？　どうしてこんな手の込んだことをするのかしら？」

「異星人はきっと、とても凝り性なのよ」

「いいところを見せようとしているのかもしれないわ」

「でも、どこでこれだけドアについて詳しい知識を仕入れたのかしらね」デヴィは首を傾げた。「だって、ドア一枚だって、いろいろな形式や細工があるでしょう。こんなドアをどこで見たのかしら？」

「テレビでしょうね」エリーは言った。「ヴェガは、ええと……一九七四年までの地球のテレビ信号を受信しているはずでしょう。その中に、これは行ける、という映像があれば瞬間伝送でここへ投射できるわよ。一九三六年から一九七四年までテレビを見続けているんです

もの。ドアなんて珍しくも何ともないのではないかしら。それはともかく……」彼女は特に話題を変えるふうもなく、言葉を続けた。「このドアを開けて中へ入ったら、どうなるの？」

「もしこれが、わたしらに対するテストだとすれば」西が言った。「おそらく、向う側で一人一人、何らかの形で試されることになるのだろうね」

西はすでに心の準備ができている態度だった。エリーは羨ましかった。

椰子の木が砂に朝日の影を曳きはじめた。一同は無言で顔を見合わせた。四人は早くドアを潜りたくてうずうずしているらしかった。一人エリーだけが漠然とした気後れを感じていた。彼女はそれとなくエダを促した。どうせなら、第一人者を先頭に立てるべきだという気持だった。

エダは帽子を取って軽く形良く会釈すると、迷わずドアの前に立った。エリーは駆け寄って彼の両頬に接吻した。他の者たちもエダと抱き交わした。彼は向き直ってドアを開けた。踏み出す足が消え、体が消え、一瞬後ろへ引いた手を最後に、エダは忽然と消え去った。ドアの隙間に見えるのは、一同の足下から続くままの砂浜と、その向うの波打際だけだった。ドアが閉じた。エリーはドアの裏側へ走った。エダの姿はなかった。

西が後に続いた。エリーはふいに、自分たちがまるで意志を奪われた者のように正体も知れぬ相手の言いなりになっていることに思い至った。異星人は、少なくとも、何の目的で、どこへ五人を連れて行くのか、事前に知らせてくれてもよかったはずではないか。〈メッセージ〉の一部にそのことを含めるなり、〈マシーン〉が始動した後で五人に直接伝えるなり、

CamScannerでスキャン

方法はいくらでもあったろう。地球の情景を再現した海岸に降りると、そこにドアがあるということを、異星人は何故前もって教えてくれなかったのだろうか。もちろん、異星人がどんなに進んでいたところで、テレビから学んだだけでは充分に英語を操れないだろうとは想像が付く。まして、ロシア語、北京語、タミール語、ハウサ語となると、彼らの知識は乏しいに違いない。しかし、彼らは素数を使った〈メッセージ〉という優れた意思伝達の手段を編み出したではないか。どうしてそれを使おうとしなかったのだろう？　五人を驚かせようという悪戯心だろうか？

　閉じたドアを見つめている彼女を気遣って、ヴェイゲイは順を譲ろうとした。

「ありがとう、ヴェイゲイ。わたし、ちょっと考えていることがあるの。馬鹿げた話とは思うけれど、ふっと頭に浮かんだことなのよ。わたしたち、どうして何でも向うの言いなりにならなくてはいけないの？　サーカスのトラやライオンみたいに、輪を出されたら黙ってそれを潜らなくてはいけないかしら？　こっちが拒んだら、どうなると思う？」

「エリー。君は根っからのアメリカ人だねえ。わたしは自分の国にいるのと少しも変らないよ。子供の時から、体制の指さすところに従うように慣らされているからね。こっちに選択の余地がないとなればなおさらだよ」彼はにやりと笑って気軽にドアに向き直った。

「大公からおかしなことを吹き込まれないようにね」エリーは消えて行くヴェイゲイの背中に呼びかけた。

　頭上でカモメが一声啼いた。ヴェイゲイはドアを開け放しにして行った。やはり、向うの

水際が見えるばかりだった。
「あなた、大丈夫？」デヴィが心配そうに尋ねた。
「大丈夫よ。気にしないで。わたし、ちょっと一人きりになりたいの。すぐ後から行くわ」
「わたしは医者として、真面目に言っているの。どこか、具合が悪いことはないの？」
「起きた時、頭痛がしたわ。変な夢を見たし、まだ歯も磨いていないわ。コーヒーもまだよ。新聞を読みたいとは思わないわね。でも、それを別とすれば、大丈夫、わたしはどこも悪くないわよ」
「そう。それならいいけれど。実を言うと、わたしもちょっと頭痛がするの。気を付けてね、エリー。あなたが見たことは全部、よく憶えておいてちょうだい。今度会ったら、聞かせてくれるように」
「約束するわ」エリーは言った。
二人は接吻して互いの無事を祈った。デヴィはドアの中へ消えた。ドアが閉じた。エリーは一瞬、カレーの匂いがしたと思った。
エリーは塩水で口を漱いだ。娘の頃から、こういうことには人一倍潔癖だった。彼女は椰子の実の汁を飲んで朝食に代えると、ビデオカメラと録画済みのカセットの砂をきれいに払った。それから、〈メトセラ〉号を訪ねる前の日にココビーチで拾った時と同じように、椰子の葉を海で洗った。
気温が上がって、彼女はひと泳ぎすることにした。椰子の葉の上に衣類を丁寧に畳んで、

彼女は大胆に波打際に向った。体の線にはまだまだ自信があったが、異星人が裸の女を見て劣情を催すことはまずあり得まいと思った。それは微生物学者が、ゾウリムシが有糸分裂するところを顕微鏡で覗いて欲情を覚えるようなものだろう。

彼女はのんびりと仰向けに浮かんで穏やかな波のうねりに身を任せながら考えた。何千という部屋があって、その一つ一つに、宇宙のさまざまな世界の楽園が忠実に再現されているとしたら、どうだろう。何千という世界の陸と海、空、気象がもとの惑星そのままに模造され、そこに本物と見分けも付かぬ、それぞれの惑星に固有の生物の複製が放されているのだとしたら……。技術的には決してできないことではないだろう。しかし、いかにも無駄な企てである。どれほど経済が豊かであろうと、破滅に瀕した惑星からやって来たたかが五人の「標本」のために、これだけの規模の模造世界を構築する意味がどこにあるだろうか。

しかし、一方には、異星人は動物園の飼育係であるとする考え方がかなり広く浸透している。この幾千ものドッキング・ポートを持つ巨大な〈ステーション〉は、事実、人工環境を備えた動物園ではあるまいか？「珍しい動物の自然の生態を」エリーはカタツムリのような頭をした案内人が客を呼び込んでいる図を想像した。銀河系の隅々から観光客がやって来る。特に夏休みなどは押すな押すなの盛況だ。新しい動物を試験的に飼育することになると、園長が客を締め出し、前からいる動物たちをどかせて、砂浜を足跡一つ残さずきれいに掃き清める。そこへ新種の動物や未開人を遊ばせ、試験に備えて半日の休息を与えるのだ。

あるいは、この環境は異星人が動物を繁殖させる一つの手段かもしれない。地球の動物園

で狭い檻に閉じ込められた動物は、往々にして子を産まなくなるというではないか。

　エリーは妄想を絶つと、反転して深く水に潜った。岸に向って強く水を掻きながら、彼女はこの二十四時間のあいだに二度、自分の子供がほしいと思った。

　浜に人の気配はなく、沖を行く帆もなかった。カモメが数羽、波打際に降りていた。蟹を漁っているに違いなかった。パン屑を持って来ればよかった、と彼女は思った。体が乾くのを待って服を着ると、もう一度ドアの前に立った。ドアは最前のまま、ただ開けられるのを待っているふうだった。彼女はまだ決心が付かなかった。躊躇よりは一種の恐怖を感じていた。

　彼女はドアから目を離さずに後退り、椰子の木の根方に腰を降ろすと、顎の下に両膝を抱いて、あらためて白い砂浜を見渡した。

　どのくらいそうしてじっと坐っていたろうか。彼女は起き上がって伸びをすると、カメラと椰子の葉を片手にドアに近付いて、そっと把手を回した。ドアは細目に開いた。隙間から沖の白い波頭が見えた。軽く押すと、ドアは音もなく、また少し開いた。向うは何の変哲もない、殺風景な砂浜だった。彼女は頭をふって引き返し、最前の椰子の根方にうずくまった。

★

　他の四人はどうしているだろうか。今頃は得体の知れない試験機の前に坐らせられて、選択肢の質問に汗を流しているのだろうか。それとも、試験は口頭試問だろうか。試験官は何

者だろう。エリーはまたしても、衝き上げて来る不安を覚えた。地球から遠く離れたどこか別の惑星の、まるで異なった環境で、まったく違う遺伝子変異を経て進化した知的生物――。異星人は彼女が見たこともないどころか、想像することすらむずかしい、異様な姿をしているに違いない。西が言うように、ここが何らかの試験機関だとすれば、当然、検閲官がいなくてはならないはずである。検閲官は地球人とは似ても似つかぬ異形の者だろう。エリーは何という理由もなく、虫と蛇、それにホシバナモグラが嫌いだった。それだけではない。白状すれば、人間の肉体的異常、畸形も彼女は苦手だった。彼女の知性はそれを許さなかったにもかかわらず、足萎えや、ダウン症候群の子供、パーキンソン氏病の症状からはつい目をそむけてしまう。なるべく顔に出さないように気を付けてはいるものの、そのために人を傷付けたことがないかと問われれば、ないと答える自信はない。そのことについて深く考えたこともない。そのような場面では、ただ自分の非を恥じて話題を他へ向けるだけである。

　しかし、ここに至って彼女は異星人と対面することに強い不安を感じた。人類を代表して異星人の信頼を勝ち得るどころの話ではない。五人を選ぶに当っては、その点がまったく考慮されていないのだ。マウスや小人や火星人を恐がるかどうかは人選の際の判断材料ではなかった。選考委員会がてんから考えもしなかったことである。それを顧慮しなかった委員会が恨めしい。今にして思えば、これこそ真っ先に検討されるべき重要な問題ではないか。

　彼女を派遣したのは間違いだったのだ。髪の毛が蛇の銀河宇宙検閲官の前に出たら、彼女はうろたえて、どんな醜態を演じないとも限らない。自分一人が恥をかくだけならまだしも、

試験の中身は知らず、そこで人類の評価を落第点に引き下げるようなことにでもなったら目も当てられない。彼女は不安と憧憬の入り混じった目で不思議なドアを見つめた。ドアの裾は水に浸っていた。潮が満ちて来た。

砂浜の向うに人影が現われた。数百メートルの距離があったろうか、彼女ははじめ、ヴェイゲイが早々と試験を終えて良い知らせを伝えに来たのかと思った。しかし、何者であれ、その人物は〈マシーン・プロジェクト〉のお仕着せのジャンプスーツ姿ではなかった。それに、ヴェイゲイよりもずっと若く、動作も機敏だった。エリーは望遠レンズに手を伸ばした。何故かカメラのファインダーを覗くことが躊躇われた。彼女は立ち上がって、陽に小手を翳した。まさか……。一瞬、疑惑が意識を過った。考えられないことだった。異星人が彼女の心の弱味につけ込むような意地の悪いやり方をするだろうか。が、彼女はもうじっとしてはいられなかった。彼女は髪を靡かせて波打際を男に向って走った。男は写真で見た通り、逞しく、陽気だった。無精髯が伸びていた。彼女はしゃくり上げながら、男の腕の中に飛び込んだ。

「やあ、プレッシュ」男は彼女の項を撫でて言った。

懐かしい声だった。溢れるように記憶が甦った。彼の体臭、歩き方、笑い声。頰ずりをされると痛い髯。そんなすべてが彼女の気取りを打ち砕いた。彼女は重たい石の蓋がのけられて、忘れられた古い墓に日の光が射し込むのを目のあたりにする思いだった。

彼女は息を整えて自分を失うまいと努めたが、感情は胸に衝き上げて、涙を抑えることは

むずかしかった。彼はエリーがはじめて大階段を一人で降りた時の、あの優しく励ますような笑顔で、彼女の感情の波が去るのを気長に待っていた。どんなに会いたかったことだろう。しかし、それは叶わぬ夢と知って彼女はずっとその気持を隠して来たのだ。彼女は二人が世界を分かってから流れ去った年月のために泣いた。

少女の頃から娘時代にかけて、彼はちょくちょく夢に現われて、自分の死は間違いだったと告げた。夢の中の彼は本当に素晴らしかった。強い腕で彼女を軽々と抱き上げてくれたりもした。しかし、その嬉しさも束の間で、目が覚めれば、彼がもはやこの世にはいないという現実が前にもましてエリーの心に重くのしかかった。にもかかわらず、夢の中で彼に会うことをエリーは無上の喜びとしていた。この喜びがあればこそ、彼女は翌朝目覚めた時の喪失感と深い悲しみに耐えることができたのだ。彼女にとって、夢の中の触れ合いは、唯一の父の形見だった。

その父がここにいる。夢でもなく、亡霊でもなく、生身の父が目の前にいるのだ。少なくとも、そう言って不思議はないほど、相手はエリーの知っている父親そのままだった。父は宇宙から彼女に呼びかけた。そして、彼女はここへやって来た。

エリーは力いっぱい父親を抱き締めた。父親の姿を借りた別の存在であることは理解していたが、その顔容を見れば、父親と思うことに何の抵抗もなかった。彼女は腕いっぱいに体を離して相手を見上げた。やはり父親としか思えなかった。何年も前に亡くなって天国へ行った父親と、信仰とは別の道を辿って再会を果した気持だった。彼女は再び嗚咽とともに父

の胸にすがった。

気持が落ち着くまで、しばらく時間がかかった。もしこれがケンだったら、彼女は別の十二面体、例えば、遅れ馳せに完成したソ連の〈マシーン〉が五人の後を追って銀河系の中心に到着したのだと理解したかもしれなかった。しかし、父親が相手では、間違ってもそのように考えることはできなかった。父の遺骸は、もう、湖畔の墓地で土に還っているはずだった。

★

エリーは泣き笑いして、涙を拭った。

「こうやって会えたことを、何に感謝したらいいのかしら？　ロボット工学？　それとも、催眠術？」

「わたしは人造人間か、それとも、幻影か、ということかね。何についてもそれは言えるな」

「わたし、この年齢になってもまだ、ほんのひと目でも父に会えるものなら、どんな犠牲もいとわないって、いつもそう思っているわ」

「だから、わたしはここにいるじゃないか」父親は愉快そうに言い、両手を上げて、この通りとばかり彼女に背中を向けて見せた。それにしても、何と若々しいことだろう。今のエリー自身よりもまだ若い。亡くなった時、父は三十六歳だった。

異星人は彼女の恐怖を紛らせるために父親を登場させたのだろうか。そうだとすれば、大

変思い遣りのあるあしらいと言ってよかった。エリーは父親の腰に腕を回して、僅かばかりの所持品を置いてある椰子の木の陰に案内した。父親の温もりは、触れ合う肌に直に伝わった。皮膚の下に夥しい歯車と集積回路が隠されていたとしても、それを意識させるものは何もなかった。

「で、わたしたち、どんなものかしら？」彼女は尋ねた。これでは質問の意味がわからないかもしれない。「だから、わたしが訊きたいのは……」

「わかっているよ。〈メッセージ〉の受信から君たちがここへ来るまで、ずいぶん時間がかかった」

「時間と正確さと、どっちが評価の対象なの？」

「両方とも無関係だよ」

「じゃあ、まだ試験は終っていないっていうこと？」

父親は答えなかった。

「お願い。説明して」エリーはせがんだ。「わたしたち、〈メッセージ〉の解読や〈マシーン〉建造に、さんざん、時間と労力を費やしたのよ。わたしたちは何をしているのか、最終的には、いったい何が目的か、説明があって然るべきじゃないかしら」

「ほう、しばらく会わないうちに、ずいぶん口が達者になったな」父親は少女時代のエリーと、今もって未完成な彼女を比較する口ぶりだった。

彼は愛しげにエリーの髪を掻き乱した。これも、子供の頃の懐かしい思い出だった。しか

し、地球から三万光年も離れた世界の異星人が、いったいどうして、数十年前、ウィスコンシンの片田舎で父親が幼い娘に示した親愛の動作を知っているのだろうか？　エリーははたと膝を叩いた。

「夢ね」彼女は言った。「昨夜、わたしたちが夢を見ている間に、頭の中を探ったのね。そうでしょう。そうして、わたしたちの知識や記憶を洗い浚い取り出したのね」

「コピーを取っただけだ。君の頭の中にあったものは、そっくりそのまま、少しも変っていないはずだよ。何か欠けているものがあるかどうか、考えてごらん」父親はにやりと笑って言葉を続けた。

「テレビを見ただけではわからないことがたくさんあった。もちろん、君たちの技術水準は充分正確に予測できたし、君たち自身についても、テレビから学ぶところ少なくなかった。しかし、それで済むほど君たち人類は単純ではない。映像を通じて間接的に知識を得ることも有効だけれども、どうしても、君たちから直接情報を取らなくてはならなかったのだよ。プライバシーの侵害と受け取られかねないのは承知だがね……」

「まさか、そんな」

「……もう、あまり時間がないのだよ」

「じゃあ、試験は済んでいる、ということ？　昨夜、寝ている間にわたしたち、質問に全部答えたのね？　それで、わたしたち、及第したの？　それとも、落第？」

「及第とか、落第とかの話じゃあない。六年生の試験とはわけが違うんだ」

エリーは六年生の時に父を亡くしていた。

「わたしらのことを、無法者を取り締まる宇宙保安官のように考えるのは間違いだよ。わたしらは、それよりはむしろ、銀河系国勢調査局と思ってくれた方がいい。情報を集めるのがわたしらの仕事なんだ。地球は技術的にとても遅れているから、宇宙の他の文明から見れば、地球に学ぶべきものなどありはしない、と君は考えているね。しかし、技術だけがすべてではない。どの文明にも、それぞれに取り得があるんだ」

「例えば？」

「そう……音楽。思い遣り。いい言葉だね。それから、夢。テレビからではわからないが、人間は実によく夢を見るね、銀河系のいたるところに、夢を交易する文化がある」

「ここでは星間文化交流が進められているのね。それで、わたしたちにもお誘いがかかったのね。でも、どこかの戦闘的で血に餓えた文明が星間宇宙旅行の技術を身に付けるまでになったら、心配ではなくて？」

「さっきも言った通り、わたしらは情愛、思い遣り、いつくしみ……そういうものを大切にするのだよ」

「もし、ナチスが世界を、つまり、地球で言うところの世界を征服して、宇宙へ進出しようとしたら、あなたがたはそれを阻止したでしょうね」

「君は意外に思うだろうけれども、そこまで行くことはめったにないのだよ。長期的な視野で見れば、戦闘的な文明は、まずほとんどが自滅する。それが戦闘的、侵略的文明の性質で

あって、自分たちではどうすることもできないのだね。だとすれば、いっさい干渉を避けて、放っておくのが一番だ。そのうちに、自分で運命を引き寄せて滅びて行くのだから」

「それじゃあ、わたしたちのことはどうして放っておかなかったの？　誤解のないように断わっておきますけど、わたしは決して文句を言っているのではないの。わたしはただ、銀河系国勢調査局の仕事のしかたに興味があるだけよ。あなたがたが最初に傍受したのはヒットラーの放送でしょう。あれを見て地球に接触して来たのは何故？」

「あの映像には、たしかに驚いたよ。地球は大変なことになっている、とかなりはらはらしたものだ。ところが、音楽を聴いてみると、捨てたものでもなさそうだった。ベートーベンは希望があることを語っていた。わたしらはね、極く僅かなことしかできないんだ。地球人が助けを必要としていると判断したのは事実だけれども、わたしらにできることはたかが知れている。この点は理解してもらわなくてはならないね。因果律というものがあって、自ずから限界が定められているのだよ」

父親はしゃがみ込んで波に手を浸し、その手をズボンで拭いた。

「昨夜、わたしらは君たちの頭の中を探った。五人ともだ。いろいろ学ばせてもらったよ。感情、記憶、本能、知識、洞察、狂気、夢、愛……。愛は大切なものだ。君たち五人は実に興味深い集団だね」

「それだけたくさんのことを、たった一晩で？」エリーはいくらか憮然として言った。

「なにしろ、急がなくてはならないのでね。時間がさし迫っているものだから」

「さし迫っているって、じゃあ何か危機的な状況が……」

「いや、そうじゃあない。ただ、首尾一貫した因果律を構築しなくては、因果律が一人歩きをするようになる。これはまずいということだよ」

エリーには何のことやらさっぱり理解できなかった。

「〝首尾一貫した因果律を構築する……〟父はそんな物の言い方はしなかったわ」

「どういたしまして、そんなことはない。お父さんの話し方を思い出してごらん。君のお父さんはなかなかの読書家だったね。君がまだ小さい時から、君のお父さん……ああ、わたしは、いつも君を対等の人間として話をしたじゃあないか。憶(おぼ)えていないかな？」

もちろん、彼女はそういう父をよく憶えている。エリーは老人ホームにいる母親のことを思った。

「ほう、いいペンダントだね」自分が若い娘になるまで生きていてくれたら、きっとこんな父親になったろう、と常々エリーが想像している通りの、物わかりの好(よ)い態度で相手は言った。「誰(だれ)の贈りものかな？」

「ああ、これね」彼女はメダルに手をやった。「実を言うと、わたしのよく知らない人なのよ。その人、わたしの信念を試そうとして……あら、こんなこと、話すまでもなく全部そちらはご存じね」

男はまた、にやりと笑った。

「わたしたちがどんなふうに見られているか、そこが知りたいわ」エリーは一歩[illegible]

「ざっくばらんに聞かせてほしいの」

男は即座に答えた。「いいだろう。君たち地球人は、よくここまでやって来た。本当に立派だと思うよ。君たちの社会は、組織について満足な理論一つない。経済制度は信じ難いほど遅れている。歴史的な未来予測のメカニズムについて、君たちはまるで理解していない。それどころか、自分たち自身のことさえ何もわかっていないね。地球文明のめまぐるしいまでの変化を考えると、地球がとうの昔に破壊されたとしても不思議はないのだよ。それが、今もって健在であることは、実に、驚異的と言っていい。だからこそ、わたしらはまだ地球を見限る気はないのだよ。君たち人類は一種特有の適応能力を持っている。少なくとも、短期的にはね」

「短期的、というところに問題があるのね？」

「それだけではないけれどもね。じきにわかるだろうが、短期の見通ししか持たない文明は役割を果せない。与えられた運命を辿るしかないんだ」

エリーは、本当のところ、相手が人類をどう思っているか知りたかった。好奇心の対象だろうか？　憐みの種だろうか？　それとも、一日で知りつくしてしまった後は、もはや何の関心も湧かない存在だろうか？　異星人が人間の心に代るどのような認識機構を持っているかはいざ知らず、相手は彼女を、彼女が蟻を見るのと同じ目で眺めているのではあるまいか……。エリーは質問を声に出す勇気がなかった。答を知るのが恐かった。

声の抑揚や言葉の含みから、彼女は何とかして父親の姿をした異星人の正体を、せめて片

鍵なりとも垣間見ることはできないものかと神経を凝らした。彼女はこれまでに数えきれないほど多くの人間と直接触れ合っている。それにくらべれば、宇宙検閲官たちの人間体験はほんの一日足らずではないか。注意深く観察すれば、この気の好い物知りの仮面の下に隠された異星人の素顔が見えて来るのではなかろうか。が、相手は一向に隙を見せなかった。これまでのやりとりから、すでに相手が父親でないことは明らかである。当人もそのことを隠そうとはしていない。しかし、その事実を別とすれば、どう見ても、今目の前にいるのは一九六〇年に三十六歳で亡くなったシオドア・F・アロウェイ以外の誰でもない。意志を強く持ち、家では良き夫であり、優しい父親であったシオドア・F・アロウェイ。金物屋を営み続けなければ自分は早晩この模造人間にしなだれかかって甘えるようになるであろうことをエリーは承知していた。意識の片隅で、天国へ行ってからのことを尋ねてみたい気持が疼いていた。キリストの再臨や昇天についての考えも聞いてみたかった。千年至福を控えて、天国では何か特別な準備が進められているのだろうか。祝福を受けた人間がこの世を去って後、山上や雲の中、洞穴、オアシスなどで平和に暮らす来世を説く信仰は少なくない。しかし、彼女が記憶している限り、善人義人が死後、海辺に導かれるという教えはなかった。

「これから何をするにせよ、その前に、いくつか質問していいかしら？」

「いいとも。一つ二つ、答える時間はあるだろう」

「あなたがたの輸送システムを説明してほしいの」

「それだったら実際を見た方が話は早い。そのまま、じっとして」

アミーバを思わせる闇が天頂に拡がって太陽を隠し、空を覆った。

「まるで手品を見るようね」エリーは目を丸くした。

足の下はもとの浜辺のままだった。彼女は爪先で砂を抉った。頭上は宇宙そのものだった。二人ははるか彼方の銀河の渦状構造に向って、極限の速度で落下して行くようであった。父親の姿をした異星人はエリーのよく知っている科学の言葉で、巨大な回転花火にも似た銀河の構造について即物的に説明した。彼の指さす方を見ると、今しも太陽を抱え込んだオリオンの渦状腕があり、その内側に、星座神話の知名度の順にいて座アーム、じょうぎ座／たて座アーム、そして、三キロパーセク・アームが続いていた。

輸送システムの網の目が、電光で表示されたパリの地下鉄の路線図のように見えはじめた。エダが言った通りだった。各駅は恒星系の内部に口を開けた低質量の一対のブラックホールであると思われた。ブラックホールはその大きさから判断して、大質量の星が正常な進化の果てに陥没したものではあり得なかった。おそらくは、ビッグ・バンの名残りの原始ブラックホールを捕獲して、超絶機能を備えた宇宙船で所定の位置に曳航したのであろう。あるいは、星間物質を局所に集積して作り出したとも考えられる。エリーはそれについて質問してみたいと思ったが、息を呑むばかりの移動の速度に気圧されて機会を失った。

銀河の中心付近を白熱した水素の光円が回転し、銀河面から外縁に向って分子雲の環が噴き出していた。秩序立った動きを見せるその大きな分子雲複合体は、過去数十年にわたって地球の電波天文学者たちがこぞって観測の目を向け、多くの分子を見付け出したいて座B2

CamScannerでスキャン

であった。さらに銀河の中心に近付くと、もう一つ大きな分子雲があり、その向うに、エリー自身が〈アーガス〉で観測した電波源、いて座A西があった。

そして、そのすぐ隣、文字通り銀河の中心に、互いの重力によって強く抱き合った形で一対のとてつもなく大きなブラックホールが口を開けていた。ブラックホール一つの質量は太陽の五百万倍に相当し、太陽系をそっくり呑み込むほどのガスの流れがその中心に注ぎ込んでいた。形容を絶する大きさとはこのことだった。巨大と言い、広大と言ってみたところで、とうていその大きさは表わせない。エリーは地球の言葉の限界を痛感した。銀河の中心に超大質量のブラックホールが二つ、互いに相手のまわりに軌道を描いて回転しているのであった。一つはかねてから存在を知られていた。少なくとも、その存在は確実と予測されていた。しかし、もう一つブラックホールがあろうとは、果して誰が想像したろうか？　ブラックホールが二つあったとすれば、それはスペクトル線にドップラー偏移として現われたはずではなかったか？　エリーは二つ並んだブラックホールの一方に〈入口〉、他方に〈出口〉の表示が掲げられている図を思い描いた。今のところ、使われているのは入口のみで、出口はただそこにあるだけのことである。

銀河の中心にわだかまる二つのブラックホールの縁辺に、辛うじて踏み留まっているかのように〈グランド・セントラル・ステーション〉は位置していた。幾百万もの若い星が天空を眩い輝きに満たしていた。が、それらの星はガスや塵とともに、見る間に入口のブラックホールに呑み込まれて行った。

「あれはみんな、どこか定まったところへ行くのね？」エリーは尋ねた。

「そうだよ」

「どこかしら？」

「ああ。あれは全部、はくちょう座A電波源に集まっているんだ」

はくちょう座A電波源ならエリーはよく知っている。近くのカシオペア座にある超新星の残骸を別とすれば、はくちょう座Aは地球の空で最も強い電波源である。彼女はざっと計算した。はくちょう座Aは一秒間に太陽の四万年分を上回るエネルギーを放出しているはずである。電波源は天の川をはるかに越えた銀河領域外、六億光年の距離にある。多くの銀河系外電波源と同様、星間ガスが二条の巨大なジェット噴流となって光速に近い速さで迸り、稀薄な銀河間ガス中に複雑なランキン＝ユゴニオ衝撃波面を作っている。その過程で発生する電波ビーコンが宇宙の大半を明るく覆うのだ。直径五十万光年におよぶ宇宙空間の全物質が、二本のジェット噴流のちょうど中間の、針で突いたような一点から溢れ出している。

「はくちょう座Aは、あなたがたが作っているの？」

エリーは少女時代にミシガンで過した夏の夜のことをぼんやりと思い出した。空に向って落ちて行きはしないかと恐れたことを憶えている。

「いや、わたしらだけでしていることではないのだよ。これは、たくさんの銀河系の共同事業でね。言うなれば、宇宙の改造工事がわたしらの主な仕事だよ。わたしらのうち、一部の者だけが後から来る文明と接触する役割を負っている」

立ち止まる度に、エリーは左頭頂葉のあたりに軽い疼きに似た刺激を感じた。

「銀河系の共同事業？」彼女は訊き返した。「たくさんの銀河系のそれぞれに行政府のようなものがあって、何百億、何千億という星を支配しているというの？　で、その各銀河系の政府が協力し合って、何百万もの恒星をケンタウルス……じゃなくて、はくちょう座Aに注ぎ込んでいる、ということ？　ごめんなさい……あんまりスケールが大きい話なので、わたし、頭がこんがらかってしまって。でも、どうしてそんなことをするの？　目的は何？」

「宇宙を未開の荒野のように考えてはいけないよ。数十億年来、宇宙は自然のままじゃあない。開発されているんだ」

エリーはまた頭頂葉に刺激を覚えた。

「でも、何のために？　何を開発するの？」

「基本的には極く単純なことなんだ。スケールの大きさに驚いてはいけないよ。君は天文学者じゃあないか。問題は、宇宙が膨張しているということだ。ところが、宇宙にはその膨張を食い止めるだけの物質がない。このまま行くと、いずれ新しい銀河系は生れなくなってしまう。新しい星も、惑星も登場しない。生命の誕生も望めない。古い世界だけが残ることになるのだよ。その先にあるのは荒廃でしかない。それではつまらないじゃあないか。そこで、何か新しいものを産み出すために、はくちょう座Aで技術をテストしているのだよ。都市再開発の実験と考えればいい。ただし、わたしらはすでに実験段階を過ぎている。近い将来、宇宙の一部を閉鎖して、無限の時間が経つ間に宇宙が空っぽになってしまうのを防ぐことを

計画しているよ。方法としては、当然、局所的に物質の密度を高めることだ。これは真面目な仕事だよ」

ウィスコンシンで金物屋を営むのと同じように……。

はくちょう座Aが六億光年の距離にあるとすれば、地球上の天文学者は……いや、その意味では銀河系内のどこであっても同じだが……六億年前の電波を観測していることになる。六億年前と言えば、地球上にはまだ、海の中にさえ姿をととのえた生き物は育っていなかった時代である。彼ら異星人の歴史は気が遠くなるほど古いのだ。

六億年の昔、地球の海岸には蟹もいず、カモメもいず、椰子の木も生えてはいなかった。エリーは岸辺に打ち寄せられた顕微鏡的な植物が水際にそろそろと細い根を降ろすありさまを想像に描いた。その頃、異星人たちはすでに銀河創世の実験に手を染め、宇宙改造の初期の計画に取りかかっていたのだ。

「あなたがたは六億年前からはくちょう座Aに物質を注ぎ込んでいるの？」

「そう、君たちが電波天文学の観測で捉えたのは、わたしらがごく初期の段階で試みた実用性試験でね。今はもっと進んでいるよ」

今から数億年後に、もし地球に電波天文学者がいるものなら、彼らははくちょう座A電波源周辺で進められている宇宙改造の成果を目のあたりにすることだろう、とエリーは想像した。この先、何を見せられても怖気付いてはいられない。彼女は自身を叱咤した。宇宙の住民には、これまで彼女が考えてもみなかった尺度にまたがる幅広い階層があると考えなくて

はならない。そのどこに位置しているかはともかく、地球は重要な場所を与えられているに違いない。そうでなかったら、異星人がどうしてあれほど苦労してまで地球に声をかけて来たろうか。

闇は巻き上げられるように天空に消え去り、太陽と青空が甦った。二人はもとの浜辺に立っていた。波も砂浜も、椰子の繁みも最前のままだった。波打際にはマグリットのドア。エリーの手にはカメラと椰子の葉。そして、目の前には父親がいる。

「あの銀河系の中心近くに流れている星間雲と星間塵のリングだけれど……あれは、このあたりで周期的に起きる爆発で生じるものではないの？　こんなところに〈ステーション〉を作って、危険なことはないかしら？」

「爆発は散発的でね、周期的に起きるわけではないよ。それに、大した規模じゃあない。わたしらがはくちょう座Aでやっていることにくらべたら、あんなものは何でもない。ささやかなものだよ。予知できるし、たいていは、ただじっとしていれば済むことなんだ。本当に危険が迫った場合には、一時〈ステーション〉を他へ移動する。なあに、手順の知れた単純な操作だよ」

「手順の知れた、単純な操作ねえ。これは全部、あなたがたが建設したの？　これって、つまり、地下鉄のことだけれど。あなたがたと……他の銀河系の技術者たちが協働して？」

「いやいや、わたしらは何もしていない」

「わからないわ。わたし、何か間違って理解しているのかしら？」

「宇宙のどこも事情は同じらしいのだがね。わたしらは遠い昔に銀河系のあちこちの惑星で進化した。わたしらの祖先が恒星間宇宙旅行の技術を開発して、ある時期に中継ステーションの一つに出くわしたのだよ。もちろん、その当時はそれが何だかわからなかった。勇気のある者がはじめてトンネルを潜ってみるまで、人工的に構築されたものであることすら、わたしらは知らなかったんだ」

「〝わたしら〟って、つまり、あなたがたの種族の祖先のこと？」

「いや、そうではない。わたしらは、たくさんの違った種族の寄合い所帯だよ。そうこうするうちに、あちこちで多数の地下鉄が発見された。年代も違えば、形式もまちまちで、それが全部、使用されずに放置されたままになっていたのだよ。しかも、ほとんどはすぐにも使用に耐える状態だった。わたしらは、多少の修理と改造を加えただけだ」

「他には、遺物は何もなかったの？　都市の廃墟とか、当時の記録は残っていないの？　地下鉄を作った人たちの生き残りはいないの？」

父親は首を横にふった。

「工業化されて、その後、放棄された惑星とか……？」

父親は同じ動作を繰り返した。

「一時期、銀河系全域に栄えた文明があったわけね？　その文明が、〈ステーション〉だけを残して、跡形もなく消え去った、ということ？」

「まあ、おおまかな話がざっとそんなところだね。何十億年か前に、その文明はどこかへ移

って行った。どこへ行ったのか、わたしらには見当も付かないのだよ」

「でも、行くとしたらどこかしら？」

父親は三度、ゆっくりとかぶりをふった。

「じゃあ、あなたがたは……」

「そう、わたしらは、言うなれば管理人のようなものでしかない。あるいは、いずれまた、彼らは戻って来るのかもしれないよ」

「じゃあ、そこまではいいとして、もう一つ」エリーは顔の前に人差し指を立てた。物心付いた頃からの癖だった。「もう一つだけ質問させて」

「いいとも」父親は優しくうなずいた。「ただし、もう、あまり時間がない」

エリーはドアに目をやった。ほとんど透明な体をした小さな蟹が走り抜けるのを見て、彼女は思わず身ぶるいした。

★

「あなたがたの神話や宗教のことを知りたいの。あなたがたは何かに驚異を感じたり、畏怖を覚えるということはあるの？　それとも、あなたがたは神秘を働く存在だから、そういう感情を抱くことはないの？」

「神秘を働くのは君たち人類だって同じだよ。いや、君の質問の意味はよくわかる。わたしらも、もちろん、驚異や畏怖を感じるよ。とは言うものの、説明するとなると、これがなかなか

なかなかむずかしい。質問に答える代わりに、一つの例を話すことにしよう。それで正確な理解が得られるというものでもないだろうが。例を示せば——」

曲げたような言葉を切った。エリーは不意に胸騒ぎを感じた。父親は彼女のホーソンを除っているのではないかと、ふとそんな気がした。昨夜、何かを見落としたのではなかったか。そうだとしたら面白い。彼らも完全無欠ではないということだ。

「——わたしたちが伸ばした触覚や恐怖がどんな性質のものか、いくらかなりともわかってもらえるのではないかな。そう、例えばこうだ。πというものがある。円周率。つまり、円周と直径の比率だね。今さらわたしが説明するまでもない。πがどこまで計算しても終わらないことも君は知っているね。宇宙の何者も、どんなに知能が高かろうと、πの最後の桁まで行き着くことはない。どこまで計算しても桁数は無限であって、最後の桁というものはないからだ。地球の数学者は、どのあたりまで計算したかな——」

エリーはまた肩を竦めた。

「——小数点以下、そう、百億桁までも行ってはいないのではないかね。何はともあれ、宇宙にはもっともっと先まで計算した数学者がいるのだよ。計算を続けて行くと、あるところまで——例えば10^{20}桁のあたりとしておこうか——不思議なことが起きる。それまでデタラメに並んでいた数字が鳴りを潜めて、その先はひたすら1と0ばかりが延々と続くようになるのだよ」

彼は思わせぶりに言葉を切った。一呼吸置いて、エリーは話を促した。

「その0と1も、どこかで終りになるでしょう？　それから、またでたらめな数字が続くはずね」父親の好意的な表情に促されて、彼女は言葉を続けた。「その0と1から成る数字だけれど……それは素数の積かしら？」

「そうだよ。十一個のね」

「つまり、πを計算して行くと、ずっと先のどこかに十一次元のメッセージが隠されている、ということかしら？　宇宙の誰かが、数学を使って意思伝達を図ろうとしているわけね。でも、ちょっと待って……まだよくわからないわ。数学というのは恣意的なものではないでしょう。πの価はどこでも同じはずね。だとしたら、どうしてπの中にメッセージを隠すことができるかしら？　それはもともと、宇宙の構造に組み込まれているはずだわ」

「その通りだよ」

エリーは父親の顔を覗き込んだ。

「いや、もう一歩踏み込んで考えることができる」彼は言った。「その0と1の組合わせは、十進法を使った場合にのみ現われると仮定しよう。別の数を基本単位にすれば、また違ったことが起るだろうがね。加えて、最初にこのことを発見した知性は手の指が十本だったと考えたら、どういうことになるだろう？　πは演算速度の速いコンピュータを使いこなす十本指の数学者が出現するのを、何十億年もの間ずっと待ち続けていた、と考えてもあながち無理ではないのではないか。つまりね、そこに隠されている〈メッセージ〉は、他でもない、わたしらに向けられたものだということだよ」

「要するに、それは一つの譬えでしょう。現実には、πの小数点以下10^{20}桁目がどうこうという問題ではないわね。それに、十本指と言うけれど、英語でフィンガーと言えば拇指は含まれないでしょう。その意味では、あなたは十本指ではないわ」

「まあね」父親はまたにやりと笑った。

「ねえ、教えて。〈メッセージ〉は何を伝えているの？」

父親はちょっと考えて、マグリットのドアを指さした。小人数の集団がどやどやとドアから飛び出して来るところだった。

★

一行は延び延びになったピクニックに出掛けて来たかのようにはしゃいでいた。エダは目も覚めるばかりに美しい若い女を連れていた。派手な色柄のブラウスとスカートを着た女はヨルバランドの回教徒婦人が好んで用いる薄地のゲレを形良くかぶっている。エダは見るからに上機嫌だった。デヴィ・スハヴァティは涼しい目をした真面目そうな青年と手を繋いでいた。医学生時代にデヴィと結婚し、若くして逝ったスリンダル・ゴーシュに違いない。西は小柄ながら見事な押出しのきびきびした男と何やら夢中で話し合っていた。エリーはこの男が陵墓造築の陣頭指揮に立ち、黄河、長江に水銀を流し込む工匠たちに命令を発する光景を想像した。

ヴェイゲイは、ブロンドの髪を波打たせた年の頃十一、二の少女を伴っていた。

「孫のニーナだよ……少なくとも、見た目にはニーナと変りない。わたしの皇孫女だ。前にモスクワで紹介すればよかったのだがね」

エリーは少女を抱き締めた。ヴェイゲイがストリッパーのメーラを連れて現われなかったことは幸いだった。ニーナを目の中に入れても痛くないほど可愛がっているヴェイゲイを見て、エリーはすっかりこの男が気に入った。学者同士の付合いは長いが、その間、ヴェイゲイはエリーの前で孫に対するこの情愛の素ぶりすら見せたことはなかった。

「これの母親にとって、わたしはあまり良い父親ではなかったよ」彼は打ち明ける口ぶりで言った。「ニーナに会うのは本当に久しぶりだ」

エリーはあたりを見回した。宇宙検閲官は五人のために、それぞれの最も深い愛情の対象と言う以外にない相手を差し向けたのだ。おそらくは、あまりにもかけ離れた人種間の垣根をいくらかでも低くしようという配慮であったろう。エリーは五人のうちの誰一人、自分自身のコピーと親しげに言葉を交わしてはいないのを見て密かに胸を撫で降ろした。

地球でこのようなことが可能だとしたらどうだろう、と彼女はあらぬことを考えた。どう上辺を取り繕おうと、最愛の相手が公表される決まりだとしたら? それが地球における人間関係の大前提だとしたら、社会環境はさぞかし変ることだろう。エリーは、男ないしは女ばかりの集団がたった一人の異性を囲んで方陣を形作っている光景を思い描いた。集団は鎖や円を作るかもしれない。HやQの字、あるいは、とりとめもない8の字を描くかもしれない。人はその形を一目見て、誰が誰を最も深く愛しているか知ることができる。言うなれば、

一般相対性理論の社会心理学的応用である。実現には多大な困難を伴うことかもしれないが、これによって、人は愛情を得ることができなくなるはずではなかろうか。

五人の幾何に当った管理人たちは何かと心遣いを示したが、時間には厳しかった。もう、ゆっくり話してはいられなかった。一同が最初に降り立ったとおぼしきあたりに、十二面体のエアロックが現われた。対称性の法則が、あるいは異次元間の質量保存則によるのか、[illegible]えて、ヤグリットのピアは消え去った。一同は互いに紹介し合った。エリーは何故かひどく空しい気持を感じながら、始皇帝を相手に父親のことを英語で語った。西は生真面目に通訳し、始皇帝とエリーの父親は、どこか田舎の野外パーティではじめて知り合ったかのように、もったいぶって握手を交わした。エダの妻は見れば見るほど惚れ惚れするばかりの美貌だった。スリンダ・ボースは無表情に彼女を見つめていたが、デヴィは気にする様子もなかった。そんなことより、エリーの返事を[illegible]のかもしれない。

「あのピアを通ってどこへ行くの？」エリーはそう、デヴィに尋ねた。

「[illegible]」デヴィは答えた。

エリーは考えこんでしまった。

「[illegible]。時代は一九[illegible]年。スリンダもいて、[illegible]」

デヴィは[illegible]

エリーは[illegible]

親の方から出向いて来たのだ。ウィスコンシン時代にも、そんなことがよくあった。

エダも、超越数の中に隠されたメッセージのことを聞かされたという。彼の場合、それはπや自然対数の底eではなく、彼女が聞いたこともない、ある種の数字だった。無限にある超越数の、いったいどれを地球に帰って調べたらいいのか、エダも思案に暮れていた。

「わたし、向うに残って計算するつもりでした」エダはエリーに耳打ちした。「わたしの感じでは、彼らは知恵を借りたがっているようでした。彼らがこれまで考えもしなかった角度から問題を解決するきっかけが摑めるのではないかという期待があったように思います。ただ、その問題が、彼らにとっては内々のことで、不用意に公にするべき性質のものではないらしいのです。正直なところ、わたしたち地球人は力不足で、彼らに知恵を貸すどころの話ではないように思いますね」

πのメッセージはまだ解読されていないということか。銀河系を改造しようという検閲官や管理人にして、銀河宇宙が二度あまり回転するほどの長い時間、彼らの目の前で解読を待っているメッセージを持て余しているのだろうか。メッセージはそれほど難解な意味を含むものなのか。それとも……？

「そろそろ家へ帰る時間だ」父親が穏やかに言った。

後ろ髪を引かれる思いとはこのことだ。エリーはまだ帰りたくなかった。彼女は椰子の葉を見つめながら、質問を用意して時間を稼ぐ算段をした。

「家へ帰るって、どういうこと？　わたしたち、太陽系のどこかに放り出されるの？　そこ

からどうやって地球へ降りろっていうの？」

「まあ、見ていてごらん」父親は言った。「楽しい旅になると思うよ」

彼はエリーの腰に手を回して、開いたエアロックの方へ促した。

まだ寝たくないのに時間だからといって寝室へ連れていかれるような気持だった。そんな時は良い子にふるまうことだ。賢い質問をして、いくらか寝る時間を遅らせることもできる。小さい時、彼女はよくそんなふうにして時間を稼いだものだ。

「地球とここは繋がっているのね？　トンネルは両方向に通じているんでしょう？　わたしたちが地球に帰れるなら、あなたがただって一瞬のうちに地球に来られるはずね。でも、わたし、とても恐いの。ここで一旦、接触を絶った方が良くはないかしら。わたしたちはわたしたちで、この先何とかやって行くわ」

「ごめんよ、ブレッシュ」父親は言った。娘を寝かせることになっている八時をとうに過ぎているのを気にしているふうだった。ごめん、と言ったのは、気持はわかるがもう寝ろということか、それとも、トンネルを閉ざすわけには行かないという意味だろうか？

「少なくとも、ここ当分は、トンネルは地球向きの一方通行だよ。もっとも、わたしらがトンネルを使うことはないと思うがね」

地球とヴェガを直接結ぶ交通路はないと知ってエリーは内心ほっとした。地球人が善からぬ行動を取り、懲罰のために異星人が遠征して来るとしたら、その間、五十二年の時差があった方がいい。ブラックホールが通じていては始末が悪いではないか。彼らは瞬時にして北

海道にやって来る。いや、北海道に限らず、地球上のどこなりとも自由自在かもしれない。これはハッデンの言う傍観的干渉の実施である。そんなことはない、と口では言っても、彼らは以後、地球を厳重に監視するに違いない。何百万年に一度、ざっと様子を見るのとはわけが違う。

エリーは自分が何を恐れているのか、気持の分析を試みた。何と神学的な状況だろう。天に知的な存在がある。地球の人類から見れば、彼らは全知全能と言ってもおかしくない。彼らは人間のことを気遣い、ある規範に照らして人間の行動を見守っている。自分たちの役割ではないと言いながらも、彼らはいざとなれば無知にして微力な地球人に賞罰を与え、時にその生死をも左右し得る立場にある。いったい、これは古来の宗教における神と人間の関係とどこが違っているのだろう？　エリーは自問した。考えるまでもなく、答はすぐに浮かんだ。要は証拠の問題ではないか。彼女の録画したビデオテープがある。他の者たちが集めたデータがある。いずれも宇宙のこの場所に〈ステーション〉があり、そこで何が起きているか、また、ブラックホールによる宇宙輸送システムとはどのようなものかということの確固とした証拠である。五人の報告はそれぞれに独自の内容を含みつつ、相互に補い合い、かつ、ビデオテープその他の動かぬ証拠に裏付けられるはずである。この体験は事実であって、幻覚や妄想の産物ではない。

彼女は父親に向き直って、相手の顔を静かに眺めた。父親は無言でそれを受け止めた。エリーは話した。

「あなたは親切に、わたしの質問に全部答えて下さったわね。そちらからは、何か質問はないかしら？」

「気を遣ってくれてありがとう。必要なことは、昨夜残らず教えてもらったよ」

「それだけ？　わたしたちに、何か訓戒はないの？　田舎者に教えを垂れることはないの？」

「君とはそういう関係ではないよ、プレッシュ。君はもう大人だ。これからは自分の力でやって行くことだ」彼はちょっと首を傾げるようにして、懐かしい笑顔を覗かせた。エリーは目にいっぱい涙を浮かべて父親の腕に飛び込んだ。長い抱擁だった。やがて、エリーはそっと腕を解かれるのを感じた。今度こそ、もう寝る時間だった。エリーは指を立てて、あと一分とねだりたい気持だったが、失望を与えてはよくないと思い直した。

「さようなら、プレッシュ。母さんによろしく」

「お達者でね」彼女は小声で答え、これを見おさめと銀河系の中心の浜辺を眺めわたした。ウミツバメらしい海鳥が二羽、上昇気流に乗って翼も動かさずに高く浮かんでいた。エアロックを潜りかけて、エリーは父親をふり返った。

「メッセージは何を伝えているの？　πの中に、何が隠されているの？」

「それが、わたしらにもわからないのだよ」父親は数歩エリーの方へ近付いて、いくらか無念そうに言った。「あるいは、統計的な偶然かもしれない。とにかく、今、計算を続けているところだ」

微かな風が起ってエリーの髪をなぶった。
「じゃあ、わかったら、きっと知らせてね」彼女は言った。

第三章　因果律

CamScannerでスキャン

神々から見れば、われわれは悪童の目に映った蠅同然。神々は気紛れに人を殺すのだ。

——ウィリアム・シェイクスピア『リア王』第四幕第一場

全能なる者こそすべてを恐るるなれ。

——ピエール・コルネイユ『シンナ』第四幕第二場

五人は生還を狂喜した。彼らは有頂天になって浮かれ騒ぎ、席を立って互いに肩を抱き合い、背中を叩き合った。誰もが感動に目を潤ませていた。彼らはやったのだ。それも、未知の世界へ行き着いただけではない。いくつものトンネルを潜り抜けて、無事、地球に帰還したのだ。ふいにスピーカーから雑音が流れ出し、それを押しのけるように〈マシーン〉の状態を報告する声が響き渡った。三層のベンゼルは減速した。高まった電荷は減衰に転じた。報告の口調から、外部の者たちには〈マシーン〉に何が起ったのか、いっさいわかっていないものと察せられた。

始動してからどのくらい時間が経っているだろうか。エリーは腕時計に目をやった。少なくとも、まる一日は過ぎている。外では紀元二〇〇〇年も明けて、すでにかなりの日を重ねているはずである。帰還の時機としては文句ない。エリーは体験を語ることが待ち遠しくてうずうずする思いだった。夢ではないことを確かめるかのように、彼女はビデオ・マイクロカセットを納めたコンパートメントにそっと手を置いた。この映像が公開されたら、世界はどんなに変るだろうか。

ペンゼルの間隙が与圧され、エアロックのドアが開けられるばかりとなった。スピーカーから乗員たちの安否を尋ねる声が流れた。

「ただいま！」エリーはマイクに向って声を張り上げた。「早くここから出してちょうだい。びっくりするようなお土産があるわ」

五人は意気揚々とエアロックから姿を現わし、〈マシーン〉を造り上げ、かつ操作した技術陣と喜びの挨拶を交わした。日本人技術者たちは最敬礼して五人を迎えた。〈プロジェクト〉の役員たちも揃って駆け寄って来るところだった。

デヴィはエリーの耳もとに口を寄せて言った。「こう見たところ、皆、昨日と同じ恰好ね。ほら、見て。ピーター・ヴァレリアンのけばけばしい黄色のネクタイ」

「でも、あの人はいつもあれ一本よ」エリーは言った。「奥さんの贈りものなのよ」

時計は午後三時二十分を指していた。始動は前日の午後三時になろうとする頃だった。五人はまる一日ちょっと地球を離れていた計算である……。

「今日は何日？」エリーは尋ねた。出迎えの一同は不思議そうな顔で彼女を見返した。何かがおかしかった。

「ピーター、あなた、何ていう顔をしてるの？ 今日は何日なの？」

「何日かって……」ヴァレリアンは面喰らった。「今日は今日だよ。一九九九年十二月三十一日、金曜日。大晦日だ。君が言ってるのはそのことかな？ エリー、君はどうかしたのか？」

ヴェイゲイはアルハンゲルスキーを摑まえて、はじめから逐一話して聞かせるが、何はともあれ、まず一服と煙草をねだっていた。〈プロジェクト〉の役員や〈マシーン・コンソーシアム〉の代表団の面々が五人を取り巻いた。エリーは人垣を分けて近付いて来るケン・ダヘーアの姿を認めた。

「そっちから見ていて、どうだったの？」彼が傍まで来るのを待って、エリーは尋ねた。

「どうもこうもないさ。真空システムが作動して、ベンゼルが回転した。電荷が上がって、ベンゼルが規定の回転数に達した。で、その後、全部もとへ戻っただけのことだよ」

「もとへ戻ったって、それ、どういうこと？」

「ベンゼルの回転が下がって、電荷が減衰した。間隙が与圧されて、ベンゼルが止まって、君たちが出て来たんだ。その間、全部で二十分といったところかな。ベンゼルの回転中は通信不能だった。そっちは、何かあったのかな？」

エリーは明るく笑った。「それが、ケン、すごいのよ。まあ聞いてちょうだい」

★

〈マシーン〉の始動を記念し、あわせて新年を祝って〈プロジェクト〉関係者を集めたパーティが催された。エリー以下、五人の乗員は出席しなかった。テレビはどの局も新年の祝賀番組で盛りだくさんだった。パレードがあり、各種のショウがあり、歴史を回顧する番組があった。各国指導者の楽天的な年頭所信演説も放映された。エリーは内海禅師の講話を一部

だけ聴いた。首相はいつもながら、人に希望を抱かせる話術を披瀝した。しかし、エリーは鬱々として気が晴れなかった。〈プロジェクト〉首脳部は五人の断片的な体験談を聞くと、即座に事態は異常と判断した。一行は政府関係者や〈コンソーシアム〉の役員たちでごった返している〈マシーン〉現場から直ちに連れ去られ、予備尋問を受ける破目になった。まず、五人から個別に報告を聞くことが穏当と思われる、と〈プロジェクト〉の幹部は説明した。

ダヘーアとヴァレリアンが小さな会議室でエリーの報告聴取に当った。他に役員が何人か同席し、その中にはヴァレリアンのかつての教え子、アナトルイ・ゴールトマンの顔もあった。ヴェイゲイの尋問に際しては、ロシア語に堪能なボビー・ブイがアメリカ人のために通訳を務めた。

彼らはエリーの話に真面目に耳を傾け、ピーター・ヴァレリアンは時に如才なく質問を挟むなどしてエリーの気持をほぐすことに努めた。しかし、彼女の話はなかなか理解されなかった。それ以上に報告は彼らに困惑を与えているようだった。エリーの興奮は伝わらなかった。十二面体が一日はおろか、二十分間すら地球を離れたかどうかということからして、まず疑問だった。何となれば、ベンゼルの外側に設置された夥しい計器類が〈マシーン〉の状態を観測、記録していたにもかかわらず、そこには何の変化も示されなかったからである。ヴァレリアンの話によれば、外部から見た限り何が起ったかと言えば、ただベンゼルが規定の回転速度に達し、いくつかの、何のためとも知れぬ計器の針がそのことを示しただけである。ベンゼルは減速して、やがて停止し、五人が大はしゃぎで飛び出した。ヴァレリアンは

支離滅裂なことを口走りながら」とこそ言わなかったが、言外にその意味を匂わせていることがエリーにはよくわかった。役員たちは節度ある態度に終始したが、胸の裡は見え透いていた。〈マシーン〉の機能は、つまるところ、二十分の間に五人の脳裡に拭い去ることのできない幻影を焼き付けたことにつきる、と彼らは理解したのだ。いや、悪くすれば、役員たちは五人の狂気を疑っているかもしれなかった。

エリーはビデオテープを再生してみせることにした。マイクロカセットには一つ一つ丁寧に項目が記されていた。「ヴェガのリング系」「ヴェガの電波観測設備？」「五連星」「銀河系中心の星空」……。「海岸」と記された一巻もあった。彼女はそれらを次々にデッキにかけて再生ボタンを押した。画面には何も映らなかった。映像が記録されているカセットはただの一巻もなかった。いったいどうしたことだろう。彼女は〈マシーン〉の始動に先立ってビデオカメラの操作を学び、何度もテスト録画を繰り返したし、ヴェガ系から次の場所へ移動する途中、それまで録画した分を再生してみたはずではないか。後に、他の者たちの携行した観測機材も役に立たなかったと聞かされてエリーは愕然とした。ピーター・ヴァレリアンは彼女の話を信じようと努力した。ダヘーアもそれは同じだった。しかし、彼らの善意をもってしても、こればかりはどうにも仕方がなかった。五人の持ち帰った報告は、大目に見ても〈プロジェクト〉首脳陣の期待に添うものではなかった。何よりも具合の悪いことに、彼らの話には一つとして事実の裏付けがなかった。それに、時間の計算が合わないことも問題だった。五人が〈マシーン〉の中にいたのはたかだか二十分にすぎない。

こんなはずではなかったに、とエリーは思ったが、いずれ誤解はとけるという希望は捨てなかった。当面は自分の体験を頭の中で繰り返し、できる限り詳細に書き綴ることに努めるしかない。どんな些細なことも書き落とすまい、と彼女は心に誓った。

★

カムチャツカ上空から例年にない厳しい寒気団が迫っていたが、元日の暮れ方はまだ冷え込みもさほどではなかった。何機かの不定期便が札幌国際空港に降り立った。新任のアメリカ国防長官マイケル・キッツと急遽駆り出された専門家集団は合衆国特別機で飛んで来た。彼らの訪日は、北海道でニュースになる間際に、はじめてワシントンで確認された。そっけないプレス・リリースは、国防長官の日本訪問は形式的なものであり、危機的情況にかかわることはなく「札幌北東の〈マシーン・システム総合施設〉からは何の異常も報告されていない」と述べていた。モスクワから夜間飛行で到着したTu−120には、ステファン・バルーダとティモフェイ・ゴスリーゼを交えた専門家集団が乗っていた。両国の集団はいずれも新年の休日を家族と離れて過さなくてはならないことを面白く思っているはずがなかった。しかし、北海道はことのほか陽気が穏やかだった。札幌の雪の彫刻は寒さが緩んで融けはじめ、十二面体は五角形の稜線も定かならぬ氷の塊と化して表面から融水を滴らせていた。

二日後に、異例の寒波が一帯を襲った。豪雪のために交通は杜絶し、四輪駆動車すら〈マシーン〉現場へは近付けなかった。通信とテレビ網の一部が遮断された。マイクロウェーブ

CamScannerでスキャン

の中継塔が倒壊したためだった。引き続き行われている五人の尋問中、外部との連絡は電話に頼るしかなかった。十二面体を利用する手もあるではないか、とエリーは思った。彼女は密かに〈マシーン〉に乗り込んでベンゼルを始動してみたい誘惑に駆られた。愉快な考えだった。とはいえ、現実の問題として〈マシーン〉が再度機能するかどうか、彼女には判断が付きかねた。トンネルの地球側からでは無理だろう。一方通行だ、と父親は言っていた。エリーとしては、あの砂浜と父親のことを思い出すだけで満足するしかなかった。しかし、この先何が起ろうとも、彼女の奥深くで疼いていた心の傷は癒えている。傷口が塞がって行くのが自分でもわかった。これは歴史上、最も高価な心理療法だったに違いない。そう、そのことが多くを語っている、と彼女は思った。

★

西とスハヴァティの報告聴取はそれぞれに自国の政府代表によって行われた。ナイジェリアは〈メッセージ〉の受信や〈マシーン〉建造にさしたる役割を果したわけでもなかったが、エダは厭な顔一つせずにナイジェリア政府との長時間にわたる面談に応じた。もっとも、〈プロジェクト〉の役員による厳しい尋問にくらべれば、ナイジェリア政府との話合いはごく気楽なものでしかなかった。ヴェイゲイとエリーは、わざわざそのために本国から繰り込んだ専門家集団によって、あらためて詳しい尋問調査に呼び出された。当初、米ソ両国は他の国の関係者を尋問の席から締め出したが、〈マシーン・コンソーシアム〉を通じて抗議が

申し込まれ、両国が折れて、結局二人の尋問は国際的な顔触れの同席のもとに進められることになった。

エリーの尋問に当ったキッツは、突然の役回りであったにもかかわらず、実に準備周到だった。ヴァレリアンとダヘーアは、時にエリーの肩を持ち、また、時に突っ込んだ質問を挟んだが、何と言っても、主役はキッツだった。

彼はあらかじめ、自分の態度をエリーに説明した。尋問に当っては科学的良心を旨とし、疑うべき点は疑うが、建設的に話を進めたい。途中、不躾な質問をするかもしれないが、決して個人的な含みはないので誤解のないように。エリーを一人の有能な科学者として、尊敬をもって遇する一方、自分がそもそものはじめから〈マシーン〉プロジェクトに反対であった事実をもって判断を歪めてはならないと自ら戒める心である……。

エリーは彼の芝居染みた正義漢ぶりを軽く受け流して、順を追って体験を語った。はじめのうち、キッツは彼女の話に真剣に耳を傾け、時折細かな質問をしてはその都度、話の腰を折ったことを謝った。しかし、二日目になると、彼の態度はがらりと変った。

「ほう。ナイジェリア人は妻と出会って、インド人は死んだ夫と会ったというんですか。ロシア人は可愛い孫、中国人はモンゴルの将軍……」

「秦始皇帝はモンゴル人じゃありませ……」

「あなた自身は、何と小さい時に亡くした懐かしい父親に出会った、と。その父親は、仲間と一緒に宇宙の改造に取り組んでいる、という話ですか。これは驚きましたね。天にましま

まあらかな父よ、ですか。これはまさに宗教談議ですよ。あるいは、文化人類学か、ジグムント・フロイトだ。そうじゃありませんか。死んだ父親が甦ったという話だけじゃない。その父親が宇宙を創造したなんていう話を、いったい誰が信じると思いますか……」

「いえ、わたしはそんなふうには言っていません」

「しっかりして下さい、先生。あんまりわたしらを馬鹿にしないでいただきたい。証拠のかけらもないじゃありませんか。事実の裏付けもなしに、そういう愚にも付かない話をどう信じろというんです？　本気とは思えませんね。あなたは立派な科学者だ。こんなことが通用すると思いますか？」

エリーは抗議した。ヴァレリアンもまた、このような尋問は時間の無駄だと主張した。現在〈マシーン〉の精密な材質検査が進められている。エリーの報告の真否は検査の結果を待って判断するべきではないか、と彼は言った。キッツは検査の重要性を認めたが、アロウェイの報告自体、現実に何があったかを知る上で聞き捨てならない、と言い返した。

「天国で父親に再会して云々、という話はいただけませんね、アロウェイ先生。何故かというと、あなたはユダヤ・キリスト教文化圏出身者ですね。しかも、あなただけが父親に会っている。これは話ができすぎです。もうひと工夫ほしいところでしたね」

エリーにとって、これ以上の打撃はなかった。彼女は一瞬、何とも言いようのないうろたえを感じた。駐車したはずの場所に車がなかったり、前夜たしかに錠を下ろしたはずのドア

が朝になってみると細目に開いていたりした時の驚愕に似た気持だった。

「じゃあ、わたしたちの話はみんなでっち上げだっておっしゃるの？」

「いいですか、アロウェイ先生。わたしは若い頃、クック郡の検事局にいたことがあります。容疑者を起訴するかどうか判断する際、問題になるのは次の三点です」彼は指を折ってみせた。「機会があったか？　手段を持っていたか？　動機があるかどうか？」

「何のことかしら？」

キッツはむっとして彼女を見返した。

「だって、わたしたちの時計では、向うでまる一日以上経っているのよ」彼女は声を尖らせた。

「いやあ、わたしとしたことが、これは迂闊でした」キッツはわざとらしく額を叩いた。「そう言われてしまっては二の句が接げません。時計を一日進ませることが無理な相談とは思ってもみませんでしたよ」

「そんな。それじゃあまるでわたしたちが示し合わせて作り話をしているみたいじゃありませんか。西が嘘を言うと思いますか？　エダがでたらめを話すと思いますか？　あなたは……」

「もっと本質的な問題に移った方がいいようですね。ああ、ピーター」キッツはヴァレリアンに向き直った。「なるほど、君の言う通りだ。明日朝一番に材質試験結果の報告が出ることになっている。これ以上、水掛け論で時間を無駄にするのは止そう。今日はこれまでだ」

CamScannerでスキャン

検査中、ダヘーアは一言も発言しなかった。彼が時折曖昧な薄笑いを浮かべるのを見て、エリーは父親の笑顔を思い出さずにはいられなかった。ダヘーアが何かを訴えるような表情を見せることもあったが、エリーはその真意を測りかねた。報告を撤回しろということだろうか。エリーの生い立ちを知っているダヘーアは、父親に対する彼女の気持を推量したことだろう。彼がエリーの狂気を疑っているであろうことは想像に難くない。さらに疑惑を脹らませて、五人が揃って常軌を逸した可能性をさえ考えているかもしれない。集団ヒステリー症。共同幻想。五人の感応性精神病。狂気は何とでも名付けることができるだろう。

★

「これが、検査の結果です」キッツは厚さ一センチほどの報告書をテーブルに放り出した。弾みを食って鉛筆が飛び散った。「御自身で目を通されたいとお思いでしょうが、アロウェイ先生、わたしがかいつまんで説明します。いいですね？」

エリーは無言でうなずいた。報告書に関しては、すでに、五人の話を裏付ける内容であるという噂が彼女の耳に達していた。これでこの愚劣な騒ぎにもけりが付くだろうと彼女はある程度楽観していた。

「十二面体は、見かけ上……」キッツはこの言葉を必要以上に強調した。「ベンゼルおよび支持構造とはまったく異質の環境にさらされた形跡があります。見かけ上、極めて強度の張力と圧縮力を受けています。十二面体が破壊しなかったのは奇跡的と言えます。ということ

は、あなたがたもまた、奇跡的に無事であったわけです。加えて、十二面体は見かけ上、高エネルギーの放射を浴びています。低レベルの人工放射能、宇宙線、その他の痕跡が認められました。これだけの放射を浴びながら、あなたがたが何ともなかったことは、もう一つの奇跡です。十二面体には何一つ付加されたものもなければ、失われたものもありません。あなたの報告では、十二面体は絶えずトンネルの内壁に接触したということですが、それが事実とすれば当然見られるはずの、角頂部の磨滅損傷はいっさい認められません。また、地球の大気圏に高速で突入した場合に生じると考えられる皺や焼け焦げもありません」

「つまり、検査の結果はわたしたちの報告を裏付けているということではないかしら。そうでしょう、マイケル。張力と圧縮力……言い換えれば、潮汐力は典型的なブラックホールに落下したとすれば当然予想されるのであって、これは五十年も前から知られていることだわ。体に感じなかったのはどうしてか、わたしにもわかりませんけれど、たぶん、十二面体に保護されていたせいでしょうね。それに、ブラックホール内部の高エネルギー放射も、銀河系の中心のガンマ線も、よく知られていることで、今さら驚くには当らないでしょう。だから、〈マシーン〉がブラックホールを落下した事実、銀河系の中心まで行った事実はいずれも他の条件に左右されない独立の証拠によって裏付けられているのよ。わたしたちの作り話ではないということだわ。磨耗が見られない点についてはわたしにも説明できませんけれど、でも、それはわたしたちがまだよく性質を知らない素材と、まったく未知の物質の間の現象でしょう。皺や焼け焦げはなくても不思議はないわ。だって、わたしたち、地球の大気に突入

CamScannerでスキャン

したとは言っていませんもの。全体として、検査の結果はわたしたちの報告をほぼ完全に立証しているのではないかしら。だとしたら、何が問題なの？」

「問題は、あなたがたが優れた科学者だということです。超一流の知識人であるところに問題があるのです。懐疑論者の立場で考えてごらんなさい。一歩退って、全体を眺めてごらんなさい。ずば抜けて優秀な頭脳を持った、国籍の違う集団がいます。彼らは世界が崩壊の危機に瀕していると考えています。そこで、宇宙から難解な〈メッセージ〉を受信したと言い触らします」

「言い触らす？」

「まあ、黙って聞いて下さい。彼らはその〈メッセージ〉なるものを解読して、そこには実に何兆ドルもの経費を要する複雑怪奇な〈マシーン〉の建造が指示されていると発表します。おりしも世界は奇妙な空気に包まれています。千年王国到来ということで、宗教界は揺れています。驚くべきことに〈マシーン〉は建造されるのです。当の集団は、二、三顔触れが変りますが、実質的には前と同じ……」

「それは違うわ。スハヴァティも、エダも、西も、選ばれて参加した人たちよ。そもそもこれは……」

「とにかく、わたしの話を聞いて下さい。実質的に前と変るところない同志集団は〈マシーン〉に乗り込みます。〈マシーン〉はその構造故に外からは内部の様子がわかりません。ひとたび稼動すれば交信も不能です。〈マシーン〉は始動して、やがて、ひとりでに停止しま

す。その間、約二十分。外部からは何の操作を加えることもできません。それはともかく、二十分後に集団の面々は欣喜雀躍しながら〈マシーン〉から姿を現わします。そして、驚くなかれ、彼らはブラックホールを超光速で潜り抜けて、銀河系の中心まで行って来た、とまことしやかに報告します。ごく普通の注意力と思慮を持った人間がこの話を聞いたらどう思いますか？　何はともあれ、まず証拠を見たいと思って当然でしょう。写真なり、ビデオテープなり、あるいは、その他どんなデータでも構いません。ところが、ありていはどうか？彼らの持ち帰ったテープは都合好くきれいに消去されています。彼らは銀河系の中心に先進文明が存在すると主張しますが、その証拠となる工芸品なり産物なりがありますか？　そんなものは何もありません。異星文明との出会いを記念するものはどうか？　それもありません。石板一枚、小動物一匹、その他、どんなものでも証拠があればいいのですが、彼らは何も持ち帰ってはいません。手ぶらです。唯一、物理的証拠と目されるのは〈マシーン〉表面の目に見えない損傷です。となると、ここに一つの疑惑が生じます。ある種の動機を抱き、かつ、極めて知的水準の高い彼らに二兆ドルという自由な予算を与えるならば、張力による材質疲労や放射能被爆の痕跡かと見まがう証拠を捏造することは、決して不可能ではないのではなかろうか」

エリーは開いた口が塞がらなかった。僅かの時間で、あまりのことに唖然としたのはこれが二度目である。これ以上に悪意に満ちた曲解はない。キッツはいったい何が面白くてこれほどまで事実を歪曲しようとするのだろうか。彼の精神はひどく鬱屈しているに違いない、

とエリーは思った。

「誰もあなたがたの話を信じようとはしないでしょう」キッツは言葉を続けた。「これは歴史上、最も手の込んだ、そして、最も金のかかった詐欺行為です。あなたと、あなたの仲間は、合衆国大統領を丸め込んでアメリカ市民を欺いたのみならず、世界各国の政府をもたぶらかしたのです。あなたがたの目には、世の中がさぞおめでたく見えることでしょう」

「マイケル！　これは正気の沙汰ではないわ。〈メッセージ〉の受信、解読、〈マシーン〉の建造には何万人という人たちが携わっているのよ。〈メッセージ〉は磁気テープに記録されているし、プリントアウトやレーザーディスクは世界中の天文台に保存されているわ。もし仮にあなたの言うことが本当なら、全世界の電波天文学者が陰謀を企んで、航空宇宙産業やサイバネティックス産業と結託して……」

「いいや、そんな大袈裟な陰謀の必要はありません。ヴェガから電波が来ているように見える発信機を一基、宇宙に打ち上げれば済むことです。あなたがたがどのような手段を取ったか、わたしの考えを話しましょうか。第一に、あなたがたは〈メッセージ〉を用意しました。そして、それを人工衛星や探査機の打上げに充分な経験を持つ何者かに託して、送信機に組み込んで、打ち上げさせたのです。おそらくは、何かの探査計画と巧みに抱き合わせにしたのでしょう。送信機は恒星の運行と見まがう軌道に達します。そのために使用されている人工衛星は一基とは限らないかもしれません。軌道に達したところで〈メッセージ〉の送信が開始されます。あなたは手回し良く天文台で待ち受けている。そこへ〈メッセージ〉が入っ

て来ます。世界中があっと驚く大発見です。あなたは何も知らないわれわれ素人に、〈メッセージ〉の意味を説き聞かせました」

さしもの控え目なダヘーアも、これには堪りかねた。椅子に沈んでいた彼は、きっと体を起した。「ちょっと待ってくれないか、マイク……」

口を開きかけるダヘーアを制して、エリーは言った。

「〈メッセージ〉の解読はわたし一人の仕事ではないわ。大勢の人たちの努力があって、はじめてできたことよ。特に、ドラムリンの力は大きかったわ。ご存じでしょうけれど、ドラムリンははじめは懐疑派の最右翼だったのよ。でも、データが入りはじめてからは、誰よりも献身的だったわ。本当に、すべてを擲ってこの仕事につくしてくれたのよ」

「そうでしたね。デイヴ・ドラムリンも気の毒なことをしました。故デイヴ・ドラムリンね。あなたはドラムリンを嵌めたんです。恩師とはいえ、怨み骨髄でしたからね」

ダヘーアは前よりも深く椅子に沈み込んだ。エリーはふと、彼女についてあることないことをキッツの耳に吹き込んでいるダヘーアの姿を思い浮かべた。彼女はダヘーアの顔に目を凝らせた。しかし、その表情からは何も読み取ることはできなかった。

「〈メッセージ〉解読の最中、あなたは何かと忙しかった。次の行動に備えて、することは山ほどあったからです。一方、ドラムリンはすでに高齢です。かつての教え子であるあなたの名声が輝きわたって、自分の存在が霞んで行くのは面白くありません。そうこうするうちに、ドラムリンはあなたの仕事に割り込んで、主役の座にのし上がるにはどうすればいいか、

名案を思いつきます。あなたはあなたで、ドラムリンの自己陶酔を煽って、まんまと老体を乗せたのです。ドラムリンが解読に躓けば、あなたは助け船を出したことでしょう。さらに、悪くしてドラムリンの知恵が錆びついているようであれば、おそらく、あなたは自分で玉葱の皮を剥いたはずです」

「わたしたちにあれだけの〈メッセージ〉を編み出す能力があったということね。まあ、大変な買いかぶりですこと。でも、せっかくのお褒めですけど、ヴェイゲイやわたしには無理な話だわ。そんなことができるはずはないでしょう。誰だろうと、一流と言われるような技術者に訊いてみるといいわ。地球にはまったく未知の素材を使って、見ず知らずの下請け工場に部品を発注して、あんな〈マシーン〉を建造できるものか、訊いてみればいいんだわ。ほんの何人かの物理学者と電波天文学者が仕事の隙に、あれだけの〈メッセージ〉を作成できるものかどうか、考えてもごらんなさい。仮に知恵があったとしても、わたしたちにいつそんなことをする時間があったというの？　〈メッセージ〉の情報量が厖大なことは知っているでしょう。プログラムを組むだけだって何年もかかるわ」

「その何年もの時間があったんですよ。〈アーガス計画〉という空っぽの時間です。何の実りもないということで、計画の打切りが論議されました。ドラムリンが打切り派の急先鋒だったことを、あなたは忘れようとしても忘れられないでしょう。そこで、ぎりぎりのところで〈メッセージ〉が受信されたわけです。計画打切りの声はぱったり跡絶えました。わたしは、あなたとあのロシア人科学者が仕事の隙にすべてをお膳立てしたものと見ています。そ

れだけの時間はあったはずです」

「正気の沙汰ではないわ」エリーは声にならぬ声で言った。

ヴァレリアンが発言した。問題の時期、彼はアロウェイ博士と親しく接していた。彼女は純粋な科学研究に没頭して、目覚ましい成果を挙げた。キッツの言うような陰謀を企てる時間はとうていなかったはずである。ヴァレリアンは科学者としてエリーを尊敬することにおいて人後に落ちない。にもかかわらず、〈メッセージ〉や〈マシーン〉の実現は彼女の能力の遠くおよばぬところであることは認めざるを得ない。その意味では、地球上に一人としてその能力を備えている人物はいない……。

しかし、キッツは耳も貸さなかった。「それはあなたの個人的判断でしょう、ヴァレリアン先生。人によって物の見方はそれぞれです。あなたがアロウェイ先生を尊敬しているのはよくわかります。わたしだって、その点は同じです。あなたがアロウェイ先生を弁護するのは当然だろうと思いますよ。しかし、ここに一つ、先生にとっては決定的に不利な事実があります。まだご存じないことです。それをこれからお話ししましょう」

キッツは身を乗り出すようにしてエリーの顔を覗き込んだ。明らかに、これから自分の話すことにエリーがどう反応するか、興味津々という態度だった。

「〈メッセージ〉は〈マシーン〉の始動と同時に杜絶しました。正確には、ベンゼルが所定の回転速度に達した、まさにその瞬間です。世界中、どこも同じ。その時ヴェガを視野に捉えていた電波天文台がすべて、例外なくそのように報告しています。あなたがたが話の中身

を変えることがないように、今までその事実を伏せてきたのです。〈メッセージ〉は尻切れに終っています。これは、上手の手から水が洩れましたな」

「わたしは何も知らないわ、マイケル。でも、〈メッセージ〉が跡絶えたからどうだっていうの？　〈メッセージ〉は目的を果したんでしょう。わたしたちは〈マシーン〉を完成して、どこであるかはともかく、向うの要求する場所へ行ったんですもの」

「だとすると、少々まずいことになるんじゃありませんか」

エリーは卒然としてキッツの狙いを悟った。まさに虚を衝かれた思いだった。キッツは陰謀を言い立てているが、彼女は狂気に怯えていた。キッツが正気だとしたら、異常を来しているのは彼女自身ではあるまいか。地球の技術で幻覚剤が作られるものならば、はるかに水準の高い先進文明にとって、相互にまったく齟齬のない共同幻想を作り出すことぐらいお手のものではなかろうか。一瞬、それはあり得ることと思われた。

「仮に、これが先週のことだとしましょうか」キッツは先を続けた。「今この時点で地球上のわれわれが受信している電波は、二十六年前にヴェガから発されたものであるはずですね。電波が宇宙空間を突っ切って地球に達するのに二十六年を要します。二十六年前と言えば、アロウェイ先生、〈アーガス計画〉などはまだ誰も、夢にすら考えてはいません。あなたがたはマリファナやLSDで朦朧とした頭で、ベトナムやウォーターゲートのことを嘆いていた時代です。あなたがたほどの科学者集団が、光の速度に思い至らなかったとは驚きですね。〈マシーン〉が始動して〈メッセージ〉が打ち切られるものならば、その間、二十六年の時

差がなくてはならないはずです。ただし、通常空間を、光の速さを超えて情報を送る手段があれば話は別ですがね。こんなことはあなたを前にしてわたしが言うのもおこがましいようなものでしょう。あなたがランキンとジョスについて、何ものも光速を超えることはできないということも理解していないのだから始末におえない、と閉口していたのをわたしは知っています。こんなことで人を騙せると思っていたとは、ちょっと信じられませんね」

「マイケル、聞いてちょうだい。わたしたちは現に、銀河系の中心まで瞬時に往復したのよ。瞬時と言うのが間違いなら、二十分でもいいわ。特異点付近では因果律が破られるのよ。そのことに関してはわたしは専門家ではないから、エダかヴェイゲイに訊いてみることね」

「これは、どうも御親切に」キッツは言った。「実は、二人とはもう話しました」

エリーはヴェイゲイが仇敵アルハンゲルスキーの厳しい尋問を受けている光景を想像した。その席には、世界中の電波望遠鏡を破壊してデータを焼き捨てるべきだと主張したバルーダもいることだろう。おそらく、尋問に先立って彼らとキッツは鳩首談合したに違いない。彼女はヴェイゲイが持ち堪えてくれることを祈った。

「おわかりですね、アロウェイ先生。あなたにわからないはずがない。ですが、念のため、もう一度わたしの言うことを聞いて、間違いがあったら訂正して下さい。二十六年前、電波は地球へ向けて発信されました。電波はヴェガと地球の間の空間を進みます。ひとたびヴェガを出た電波には何ものも追いつくことはできません。途中でこれを遮ることも不可能です。仮にあなたの言うように、ブラックホールを通して〈マシーン〉の始動が瞬時に送信者側に

伝えられたとしても、地球に入って来る電波が跡切れるのは二十六年先のことです。ヴェガ星人が二十六年前から、地球上でいつ〈マシーン〉が始動されるか知っていたということはあり得ませんね。それも、分秒の単位まで正確にですよ。もしそれが事実だとしたら、地球人は時間を二十六年溯って、一九九九年十二月三十一日に〈メッセージ〉の送信を停止するようにヴェガ星人に伝えたと考えなくては話が合いません。わたしの言うことは、わかりますね？」

「ええ、よくわかるわ。これは地球の科学ではまだまったく未開拓の領域に属する問題なのよ。でも、時空連続体というのは意味もなく使われている言葉ではないわ。もし、空間をトンネルで繋ぐことができるなら、時間の中にも何らかの形でトンネルを通せるのではないかしら。わたしたちが向うで一日過したのに、前日の地球へ帰って来た事実は、異星人が少なくとも限られた範囲ではタイム・トラベルを実現している証拠よ。だから、わたしたちが〈ステーション〉を出発したところで、向うは二十六年前に情報を送って送信機を止めたのではないかしら。これはわたしの想像だけれど」

「この時点で〈メッセージ〉が跡絶えたということは、そちらにとっては大変都合が好いのですよ。送信が続いていれば、人工衛星を発見できます。捕獲して、送信用のテープを持ち帰ることもできるでしょう。これは、いかさまをあばく動かぬ証拠です。テープがあっては言い逃れはできませんからね。あなたがたは、証拠を摑まれる危険を冒すわけには行かなかった。それで、ブラックホールなどというこじつけの説明を構えなくてはならなかったので

す。さぞかし苦しかったことと察しますよ」
キッツは気の毒そうな顔をした。
潔白を証す事実の断片が一つ一つ組み合わされ、見る間に複雑巧妙な陰謀に作り変えられて行くようで、エリーは背筋が寒くなった。もっとも、ここで言う事実は日常体験や常識とはかけ離れたものである。科学的にあらゆる角度から検証されて然るべきだろう。しかし、キッツの解釈はあまりにも悪意に満ち満ちている。よほど心に深い傷を受け、精神が歪み、何ものかに怯えている者でなくてはここまでどす黒い考えに徹することはできまい、とエリーは思った。共同幻想の恐れはいくらか薄らいだ。が、キッツの言う通り〈メッセージ〉が杜絶したとすれば、また一つ難題が加わったと考えなくてはならない。
「さて、そこでわたしは考えました、アロウェイ先生。あなたがた科学者集団はこれだけのことを計画する知恵には事欠かないでしょう。動機もありました。しかし、手段はとなると、仲間内だけではどうしようもなかったはずです。衛星がソビエトの手で打ち上げられたものでないとすると、その技術と能力を持つ数少ない国のうちのいずれかに頼ったであろうことが想像されます。ところが、調べてみるとそれらしい軌道に浮遊する衛星はどこの国も打ち上げていません。となると、衛星は民間の手で打ち上げられたと考えなくてはなりません。民間の企業なり組織なりでそのような技術を持っているところはどこか、ということで航空宇宙業界を見渡したところ、興味ある人物が浮かび上がりました。S・R・ハッデン氏と言いましてね。知っていますか？」

「馬鹿なことを言わないで、マイケル。〈メトセラ〉訪問の前にわたしはあなたにハッデンのことを話したはずでしょう」

「間違いのないように、確認したまでのことです。こういう筋書はどうでしょう。あなたとあのロシア人科学者は知恵を出し合って計画を練り上げると、ハッデンに金を出させて下準備を進めました。人工衛星の設計にはじまって、〈マシーン〉の開発、〈メッセージ〉の符号化、放射能被爆の擬装、その他もろもろです。〈マシーン・プロジェクト〉が発足すれば二兆ドルの予算が自由になるという餌でハッデンを釣ったのでしょう。ハッデンは食いつきました。〈マシーン〉建造を受注すれば利益は莫大ですからね。それに、過去の行動から見て、ハッデンは政府を悩ませることに生き甲斐を感じる男です。あなたは〈メッセージ〉の解読に難渋するふりを装いました。解読の鍵が見付からないといって、ハッデンに知恵を借りに行く芝居まで打ってみせました。ハッデンの示唆で〈メッセージ〉の解読が進んだことになっていますが、これは不用意でしたね。あなたは、やはり、自力で解読すべきでしたよ」

「不用意にもほどがあるよ」ダヘーアが口を挟んだ。「だいたい、君が言うように、事実これがいかさまだとしたらだよ、どうしてそこで……」

「ケン。君にはほとほと呆れるね。まんまと一杯食わされて、踊りをおどったのは誰だ？　アロウェイとその仲間が、どうしてハッデンに助言を仰ぐことが賢明と判断したか、その理由を君は御丁寧にも方々に説明して回った。アロウェイがハッデンに会いに行ったことを宣伝したのも君じゃあないか」

キッツはエリーに向き直った。「アロウェイ先生。中立の傍観者の目で物を見てごらんなさい……」

キッツはますます言い募った。彼の弁舌によって、エリーの半生は目の前で書き換えられ、思いも寄らぬ展開を見せはじめた。彼女はキッツのことを決して鈍な男とは思っていなかったが、だと言って、これほど飛躍的な発想の持主であろうとは知る由もなかった。むろん、彼一人の知恵ではあるまい。しかし、この途方もない妄想を増幅しているのは彼自身の情念にほかならない。

キッツは大袈裟な身ぶりを交えながら、詭弁曲論を弄して彼女たちを攻撃した。職務というだけではこうは行くまい。尋問とは表向きの歪曲と讒謗は、キッツが執念を燃やすだけの理由があってのことに違いない。いくばくもなく、エリーはそれが読めたと思った。五人は右から左へ軍事的に応用できる情報を何一つ持ち帰らなかった。政治的流動資本と呼べるものもない。ただ荒唐無稽と言うしかない報告がもたらされただけである。ところが、その報告は幻想として聞き流すわけには行かない重大な意味を含んでいた。キッツは今や地球上最も大規模な兵器庫の番人である。報告によれば、宇宙では管理人の手で銀河系の建設が進められているという。キッツは代々核の力を背景とする対立戦略を推進してきた米ソ両国指導者の直系の子孫である。宇宙の管理人たちは、数多の惑星の種族が志を同じくして団結した連合体である。キッツの立場から見れば、かかる連合体の存在は無言の脅威に違いない。もし、宇宙連合の意思によってトンネルが開通し、それに対してキッツはなす術もないとした

らどうだろう。宇宙連合は瞬時にして地球に侵攻し得るのだ。その時、キッツはどうして合衆国を防衛できるだろうか。〈マシーン〉建造決定に際してキッツの果した役割は、今エリーの目の前で大きく書き換えられつつあったが、どう言葉を飾ってみたところで、友好的とは言えない裁判官から職務怠慢と解釈される恐れなしとしない。異星人に対して、キッツは前任者たちを含めて彼自身の惑星管理思想をどう説明したらいいだろう？　トンネルから現われるのが復讐の天使の軍団ではないとしても、宇宙連合遠征のことが知れわたれば、世界は大きく変るに違いない。現に変化の兆は見えはじめている。しかし、実際に変化が起きるとなったら、生易しいことでは済むまい。

エリーはあらためてキッツに同情を覚えた。少なくとも何百世代にわたって、地球は彼よりもはるかに出来の悪い者たちに牛耳られてきたのだ。その世界の規則が全面的に改められようとしている時に舞台の中央に立つ破目になった彼は、実に不運と言うしかない。

「……仮にあなたがたの報告が細部に至るまですべて事実だとしてもですよ」キッツはさらに言葉を重ねた。「異星人はえらく意地が悪いとは思いませんか？　懐かしい父親の姿で現われて、あなたの泣きどころを衝くというのは、あまりきれいなやり方じゃありませんね。しかも、自分たちが何を目指しているのか、本当のところは話さない。ビデオテープは消去するし、データは残らず破壊するという念の入れようです。他愛もない呪いの椰子の葉を置いて来ることさえ認めなかったんですね。あなたがたの携帯品目録から減ったものは何一つありません。食糧がいくらかなくなっただけです。加わったものも何もない。僅かに砂が床

CamScannerでスキャン

に落ちていただけです。あなたがたは二十分の間に携帯食糧を頬張って、ポケットに忍ばせておいた砂を撒きちらしただけだと言われても仕方ないでしょう。あなたがたが出発後、一ナノセコンドかそこいらで戻って来たとすれば、これは文字通り目にも止まらぬ速さです。外から見ている者にとっては、あなたがたが地球を離れたというのは信じられないことです。もし異星人が、本当にあなたがたがどこかへ行ったのだということを疑いもなく明らかにしたいと思うなら、一日後か、あるいは一週間後かにあなたがたを帰したはずでしょう。違いますか？　ほんの短い時間でも、ベンゼルの内側が空になったとすれば、わたしらだって五人がどこかへ行ったと考えないわけには行きませんよ。あなたがたのことを思うなら、異星人はどうして〈メッセージ〉の送信を打ち切ったんですか？　そうでしょう？　おかしいじゃあありませんか。異星人だって、それくらい考えればわかりそうなものじゃあないですか。それをどうして、あなたがたが困るようなやり方をしたんですか？　あなたがたの報告を支持する気なら、方法はいくらでもあるでしょう。何か記念になるものを寄越したっていい。そんなことより、ビデオテープを持って帰らせればいいんです。映像を見れば、誰もこれが手の込んだいかさまだとは言いません。だったら、異星人はどうして接触の証拠を提供しようとしないんですか？　あなたがたの報告を裏付けようとしない理由は何ですか？　異星人の存在を立証するために、あなたは長年、寝食を忘れて努力を重ねたんじゃあありませんか？　異星人は、その労を多とする気持もないんですか？」

キッツはそれまでとは態度を変えて話を続けた。

「エリー。君が自分の報告を、現実の体験であると確信する根拠はどこにあるのかな？ もし、君が主張する通り、これがいっさい作りごとではないとすると、例えば、妄想……というようなことは考えられないかな？ こんなことを言うのはわたしとしても辛いんだ。誰だって、人の異常を疑いたくはないからね。とは言うものの、このところの精神的な負担を考えれば、まったくあり得ないことでもない。それに、君があくまでも正常であると言い張れば、刑事犯に問われずには済まされない……。そのことも含めて、もう一度よく考え直してくれないか」

言われるまでもなく、エリーはその点を考えていた。

★

その日の午後遅く、彼女は単独でキッツと面談した。事実上、取引の相談だった。エリーは取引に応ずる気はなかったが、キッツは充分それを承知で条件を用意していた。

「君はそもそものはじめからわたしのことを快く思っていなかったからね」彼は言った。「しかし、それを根に持つようなわたしじゃあない。ここはあくまでも公平に話をしよう。政府はすでに、〈マシーン〉はいっさい機能しなかったという趣旨の発表をした。当然、どこに故障があったのか、目下調査中ということになっている。ワイオミングやウズベク共和国の例があるから、今のところ、政府発表は額面通りに受け取られているよ。

何週間か置いて、調査は何の進展も見られないという発表を追加する予定だ。できる限り

手はつくしているけれども、〈マシーン〉の調査には非常に経費がかかる。遺憾ながら、地球の科学技術はまだ〈マシーン〉の秘密を解明し得る水準に達してはいないのではないか。それに、危険がないとは言いきれない。これは当初から懸念されていることであって、〈マシーン〉は爆発を起したり、あるいは何か予想もし得ない事故を起したりしないとも限らない。というわけで、大局的見地から、政府としては、〈マシーン・プロジェクト〉は少なくともここ当分、凍結することが至当であると判断する。と、まあ、ざっとそんなところだね。これで、政府もやるだけはやったという言い訳も立つ。

ハッデンの一門は当然抗議するだろうけれども、総帥のハッデンが遠くへ行ってしまった今となっては……」

「遠くだなんて、ほんの三百キロの上空じゃないの」エリーは腑に落ちない顔で言った。

「え？　まだ伝わっていないのかい？　ソルは死んだよ。ちょうど〈マシーン〉が始動した頃だった。それも、妙な死に方でね。悪かったよ。もっと早くに君に話すべきだったんだ。君があの男と親しかったことを、つい忘れていたもので」

エリーはキッツの話を真に受けていいものかどうか迷った。ハッデンはまだ六十には間があったし、最後に会った時は健康そのものだった。彼女は、事実を探ってみる必要がある、と頭の隅に書き留めた。

「それで、あなたの筋書では、わたしたちはどうなるの？」彼女は尋ねた。

「わたしたち？　誰のことかな？」

手はつくしているけれども、〈マシーン〉の調査には非常に経費がかかる。遺憾ながら、地球の科学技術はまだ〈マシーン〉の秘密を解明し得る水準に達してはいないのではないか。それに、危険がないとは言いきれない。これは当初から懸念されていることであって、〈マシーン〉は爆発を起したり、あるいは何か予想もし得ない事故を起したりしないとも限らない。というわけで、大局的見地から、政府としては、〈マシーン・プロジェクト〉は少なくともここ当分、凍結することが至当であると判断する。と、まあ、ざっとそんなところだね。これで、政府もやるだけはやったという言い訳も立つ。

ハッデンの一門は当然抗議するだろうけれども、総帥のハッデンが遠くへ行ってしまった今となっては……」

「遠くだなんて、ほんの三百キロの上空じゃないの」エリーは腑に落ちない顔で言った。

「え？　まだ伝わっていないのかい？　ソルは死んだよ。ちょうど〈マシーン〉が始動した頃だった。それも、妙な死に方でね。悪かったよ。もっと早くに君に話すべきだったんだ。君があの男と親しかったことを、つい忘れていたもので」

エリーはキッツの話を真に受けていいものかどうか迷った。ハッデンはまだ六十には間があったし、最後に会った時は健康そのものだった。彼女は、事実を探ってみる必要がある、と頭の隅に書き留めた。

「それで、あなたの筋書では、わたしたちはどうなるの？」彼女は尋ねた。

「わたしたち？　誰のことかな？」

「わたしたち、五人。あなたがいっさい機能しなかったと極めつけている〈マシーン〉に乗った五人よ」

「ああ。君たちは、もう少しこっちで訊きたいことがある。それが済めば自由の身だよ。あのでたらめな話を方々へ触れ回るような馬鹿な真似はしないだろう。その点、わたしは何も心配していない。ただし、何かの時の用心に、君たち五人について精神分析医の鑑定書を準備してある。性格判断、その他、ごく簡単な内容だがね。君は若い時分から反抗的なところがあった。どういう立場にあっても、君は常に体制批判の急先鋒だね。それはそれで結構。独立独歩の精神は大切だからね。政府もそれは奨励している。特に科学者は自由な精神を持つべきなんだ。それはいいとして、過去数年、君たちは身心ともに非常に負担が大きかった。必ずしも故障を招くものではないにしても、緊張はひと通りでなかったろうし、肉体もかなり酷使していたはずだね。特にアロウェイ、ルナチャルスキー両博士は人一倍重荷を負っていた。〈メッセージ〉の受信にはじまって、その解読や、〈マシーン〉建造の必要を政府に説くことと、建造中のいろいろな問題と、その苦労は並大抵のものではなかった。妨害行為もあったしね。そうして、やっと完成した〈マシーン〉に乗り込んだところが、これがうんでもなければすんでもない……失望もまた大きかったであろうことは想像に難くないね。さんざんの苦労も水の泡。それまでの仕事が全部、骨折り損に終ったのだからね。そうでなくても、科学者というのは総じて絶えず緊張と闘うことを強いられている。〈マシーン〉の挫折で君たちが多少常軌を逸したところで、世間は同情こそすれ、君たちを決して非難しはしないだ

ろう。だと言って、君たちの話を信じるかというと、そうは行かない。誰も真面目に聞こうとはしないな。だから、君たち自身が行動を慎んでくれさえすれば、精神鑑定書を公表する必要もないわけなんだ。

〈マシーン〉はあの通り、現在ここにある。雪が上がって道路が開通し次第、通信社のカメラマンに撮影を許可する手筈になっているよ。報道陣には〈マシーン〉がどこへも行かなかったことを説明する。乗員については、落胆が大きくて、精神的に少々参っていることを理由に、記者会見は勘弁してもらう。

どうかね。これで八方丸くおさまると思わないか？」キッツはにんまり笑った。細工は流々、おそれいったかと言わんばかりの態度だった。エリーは沈黙を守った。

「こんな物わかりのいい話はないのではないかね？　あのがらくたに、二兆ドルという金がかかっているんだよ。本来なら君の科学者生命は永久に絶たれても不思議はないところだ、アロウェイ。それを、無罪放免にしようと言うんだからね。君は保釈金を積むこともない。政府の態度は紳士的だと言ってもらいたいね。これも千年至福の功徳だよ。マシーン道精神だ」

第四章　ギルガメシュ

CamScannerでスキャン

二度と再び帰らぬもの
それが人生の美しさ

——エミリー・ディキンスン『全詩集』作品一七四一

CamScannerでスキャン

新時代の夜明けと喧伝頻りだったこの時期、宇宙葬は富裕階級の間で一種の流行となっていた。宇宙葬は民間業者の手で行われ、業界は競争が激しかった。一時代前なら、自分の灰を生れ故郷の野山や、あるいは、出世の糸口を摑んだ工場のある町に空から撒くように遺言したであろうような人々が特にこれを好んだ。宇宙葬にすれば、灰は土に還ることなく永久に、そう、日常の時間の尺度で言えば限りなく永久に近く、地球のまわりを回り続けるのだ。そのためには、遺言に一条それを希望する旨書き加えておけばいいのである。もちろん、金を払えなくては話にならないが、遺言に従って死体は焼かれ、灰は玩具のような小さな棺に詰められる。棺には死者の名と歿年、追悼文、それに三種のうちから一つを選んで宗旨の紋章が彫りつけられる。こうして出来上がったミニチュア棺を何百もひとまとめにして中高度の軌道に打ち上げるのである。各種の人工衛星で混雑している静止軌道と、大気圏を脱しきらない俗臭を留めた低軌道を尻目に、死者の灰はバン・アレン放射帯の真っ只中を、生涯を送った惑星を見下ろしながら周回する。太陽風の高エネルギー荷電粒子の嵐が渦巻いている領域だから、宇宙船や衛星が近寄る気遣いはない。しかし、灰にとっては痛くも痒くもない

のである。

この高さでは、すでに地球は生前各界の指導的立場にあった名士たちの灰に覆いつくされた観がある。何も知らずに他所の惑星からやって来た訪問者は浮遊する夥しいミニチュア棺を見て、うら淋しい宇宙の共同墓地に迷い込んだと勘違いするかもしれない。その過激な環境のしからしめるところとして、宇宙霊園には墓参に訪れる遺族の姿もない。

S・R・ハッデンはそんな光景を思い描いて、宇宙葬を望んだ貴顕紳士らの不滅の概念のいじましさに悲しくなった。脳も心臓も、その他の臓器も、人をして一個人たらしめるものは何一つ残っていない。あるものは、ただ焼かれた後の灰だけである。そこにはもはや人格と呼べるものはない。灰はただの物質にすぎない。いかな先進文明の技術をもってしても、灰から生命を復活させることはできない相談ではないか。しかも、御念の入ったことに、灰をおさめた棺はバン・アレン帯に投棄されているのだ。そこでは灰すらも、やがては崩壊してしまう。

もし、いくらかなりと細胞そのものを保存できるものなら、その方がどれだけいいか知れない。DNAが無傷の生きた細胞だ。ハッデンは手頃な料金で上皮組織を冷凍し、高軌道に打ち上げることを仕事とする企業を夢見た。バン・アレン帯を超え、さらには静止軌道よりも地球から離れたところへ細胞を運ぶことになるだろう。これなら、死んでからである必要はない。思い立ったが吉日と言うではないか。こうして細胞を生かしておけば、異星の分子生物学者なり、あるいは、遠い将来、地球の遺伝子工学者なりが、その僅かな細胞からクロ

CamScannerでスキャン

ーン培養によって、もと通りの人間を作り出すことができるのではあるまいか。細胞の主は一千万年後に、目をこすり、伸びをして、むっくり起き上がるのだ。個体として甦るまでには至らないとしても、遺伝子のコピーは残るだろう。理屈の上では、もとの人間が生き続けるということだ。いずれにしても、細胞が保存されれば生命は永遠であると言える。

しかし、ハッデンはさらに考えを進めた。満足するのはまだ早い。何となれば、蹠からそぎ取ったいくつかの細胞は、しょせん一個の人格ではないからだ。上手くすれば、もと通りの姿容を持った個体は再現されるかもしれないが、それとても、人格は別ものである。本気で永遠の生命を考えるなら、そのようにして甦ったクローン人間に、生前の記憶を残らず移植しなくてはならない。上皮細胞を保存するだけでなく、家族の写真や綿密詳細な自伝、かつて読んだり見たりしたすべての本やテープ、その他、個人に関するありとあらゆる情報を残しておかなくてはならない。使いつけのアフターシェーブ・ローションや好みのダイエット・コーラといったことまでも含めてだ。あまりに自己中心の考えであることは承知していたが、ハッデンは放恣な空想を楽しんだ。なにせ終末論が世の中の狂乱を煽っている時代である。人が人類の滅亡や地球の破滅を思い、選ばれた者たちの昇天を考えるのと同じで、個人の行く末に思いを馳せることに何の不思議があろう。

異星人が英語を解することはまずあり得まい。彼らの手を借りて甦ることを望むならば、言葉を教えるところからはじめなくてはならない。ある種の翻訳術、ないしは解読手法を伝える必要がある。ハッデンにとって、これは〈メッセージ〉解読の裏返しであって、恰好な

頭の体操になった。

ところが、これだけの情報を積み込むとなると、スペース・カプセルはかなり大きなものを用意しなくてはならない。ならば、いっそのこと、一塊の上皮組織などと言わず、自分自身がそっくりそのままカプセルに入ってしまった方が話は早いではないか。息を引き取ると同時に急速冷凍処理ができるものなら、それに付随して、もう一つ歓迎すべき結果が期待される。肉体は良好な状態で保存されるであろうから、誰であれ、これを発見する者はクローン人間を作るのではなく、本人を蘇生させることができるのではなかろうか。むろん、その際には、本人を死に至らしめた原因を取り除いてから蘇生を図らなくてはならない。遺族が当人の絶命に気付かず、冷凍前に徒に時を移せば、その分だけ蘇生の可能性は小さくなるだろう。理想を言えば、死の直前に冷凍処理をほどこすことだ、とハッテンは考えた。その方が蘇生もはるかに容易であろう。もっとも、このサービスはあまり大きな需要を見込めまい。

考えてみれば、死の直前ということにこだわる理由もないではないか。余命僅か一、二年とわかったら、それ以上肉体が衰えないうちに、直ちに冷凍人間になってしまった方が賢明ではなかろうか。それにしても……。ハッテンは悩ましく思案した。肉体を蝕んでいる病気がどのような性質のものであれ、それをそのままにしては、蘇生の後も病勢は悪化するのではなかろうか。何世紀にもわたる冷凍睡眠から目覚めた途端に、異星人にはまるで馴染みのない黒腫や心筋梗塞で死んでしまっては意味がない。

ハッテンは結論した。彼の理想を実現する方法はただ一つ、頑健な肉体をもって星間宇宙

へ片道旅行に出るしかない。病苦に悩み、老醜をさらすことを免れるという点でも、この方法は願ってもない。太陽系の内惑星を遠く離れれば平衡体温は絶対温度で僅か数度に下がるであろうから、冷凍を持続する必要もない。温度は自然が管理してくれる。しかも、経費はかからない。

この論法で、ハッデンは計画を煮詰めた。寒冷な星間空間に達するまでに数年を要するのであれば、その間は眠らずに宇宙の眺めを楽しむのもまた一興だろう。太陽系を脱したところで急速冷凍を実施すればいい。これによって、低温学に依存する度合も軽減されるはずである。

★

ハッデンは地球軌道で予期せぬ故障に見舞われることのないように、万全の予防策を講じた。記録によれば、彼は空の城〈メトセラ〉に移り住むに先立って、超音波による胆石と腎臓結石の爆破手術を受けたという。にもかかわらず、彼はアナフィラクシーのショックで死亡した。彼を崇拝するさる人物が〈ナルニア〉号に託したフリージアの花束に潜んでいた蜂に刺されたのである。不幸にして〈メトセラ〉の大きな薬局には蜂の毒に効く抗血精の備えがなかった。蜂は〈ナルニア〉号の低温の貨物室で動けなくなっていたのであろう。蜂を責めたところではじまらない。叩き潰された小さな蜂の死骸が科学警察研究所の昆虫学者のもとに資料として届けられた。億万長者が蜂の一刺しに倒れるという皮肉な椿事を、新聞各紙

の論説子が見過しにするはずはなかった。牧師も挙って日曜日の説教にこの出来事を取り上げた。

ところが、これが実は狂言だったのだ。刺されるどころか、蜂などどこにもいはしなかった。ハッデンが死ぬはずもない。彼は望み得る限り最良の健康状態だった。〈マシーン〉の始動から九時間後、新年の鐘を合図に〈メトセラ〉の腹に抱かれた大型補助宇宙船のロケット・エンジンが点火した。宇宙船は見る間に加速して地球圏脱出速度に達した。ハッデンはこの宇宙船を〈ギルガメシュ〉と名付けていた。

ハッデンは生涯にわたって力を蓄え、時間について思索を重ねた。力は蓄えれば蓄えるほど渇望を募るものであることを彼は知った。しかし、財力も権力も、時間の前にはなす術がない。死は万人に等しく訪れるからである。それ故、古来、王たちは自らの権力を誇示する目的でモニュメントを建造した。が、モニュメントは風化し、帝王の業績は色褪せ、時には王の名さえ忘れられてしまう。いや、それ以上に重たい現実は、彼らとて死を免れぬことである。それを思えば、モニュメントに名を残そうとするよりも、こうして宇宙への片道旅行に出掛ける方がはるかに気が利いている。潔く、その上、満足の度も大きい。ハッデンは時間という壁に小さな潜り戸を見付けたのだ。

彼がこの計画をちらりとでも匂わせたら、さぞかし厄介な問題が持ち上がったことだろう。地球から百億キロ離れた宇宙で四ケルビン度に冷凍されたハッデンの法律的身分はどうなるのだろうか。企業の采配をふるのは誰か？　彼はそうした問題を未然に避けた。遺言状に書

き添えた簡素な一項によって、彼は相続人ならびに譲り受け人に一つの新しい会社を託した。ロケット技術と低温技術に長けたこの会社は、後に不老長寿の願いをそのままに「インモータリティ」の名で知られることになる。ハッデンは何一つ後顧の憂いもなかった。〈ギルガメシュ〉には無線機の装備がなかった。〈マシーン〉の五人がどうなったかは、もはやハッデンの関心外だった。地球上で何があろうと知ったことではない。軽薄な馬鹿騒ぎも、腹立たしい出来事も、今の彼には縁がない。下界の無意味な狂乱はもうたくさんだ。ここには孤高の沈黙があるばかりである。年を経るうちに、もし何か不本意なことが生じたら、〈ギルガメシュ〉の超低温システムはスイッチ一つで稼動する。それまでは、豊富に積み込んだテープで好きな音楽を心行くまで楽しめばいい。本もある。ビデオテープも揃っている。淋しいことはない。ハッデンは生来、孤独を好む男だった。山岸も一旦は同行に傾いたが、考え直して止めにした。〝参謀〟がいなくては戦はできない、と彼は言った。この片道旅行に参謀らを従わせるに足る大義名分はない。第一、〈ギルガメシュ〉にはそれだけの場所がない。単調な食事と生活の不便は、人によっては耐え難いことかもしれないが、ハッデンには大きな夢がある。生活の不便などは何ほどのこともない。

　ハッデンの霊柩宇宙船は二年後に木星に接近し、放射能帯のすぐ外側でこの惑星の重力ポテンシャルの窪みに落ち込むことになるだろう。そして、ハンマー投げさながらに木星のまわりを回って星間空間に放り出されるはずである。ハッデンはまる一日、太陽系最大の惑星の表面に渦巻く五彩の雲の眺めを楽しむことができる。その景観は〈メトセラ〉の自室

の窓から飽かず眺めたあの絶景に勝るとも劣らず、さぞかし壮大華麗であろう。ただ眺めだけから言うならば、ハッデンは土星に心を惹かれている。とりわけ土星の環には興味つきせぬものがある。しかし、土星までは地球から早くて四年の航程である。あれこれ考え合わせると、土星を目指すことは賢明でない。不滅の生命を志す者は、何よりもまず安全を心掛けなくてはならない。

この速度では、地球から最も近い恒星ですら、そこに達するのに十年かかる。もっとも、絶対温度で四度に冷凍されていれば、時間を気にすることはない。やがて、ある晴れた日〈ギルガメシュ〉はどこか遠くの太陽系に迷い込むことであろう。たとえ百万年後のことだとしても、必ずその時は来る、とハッデンは確信していた。さもなければ、彼の霊柩船は暗黒の星間空間で、地球人よりもはるかに進んだ、視野の広い異星人に発見されるであろう。異星人は〈ギルガメシュ〉を彼らの宇宙船に収容する。中で永遠の眠りについている冷凍人間をどう扱うべきか、彼らはたちどころに理解するだろう。これは、かつて何人も試みたことのない企てである。地球上に生きた人間の誰一人、いまだかつてここまで考えを進め、あまつさえ、その考えを実行に移した者はない。

自身の終焉はすなわち新生であると確信してハッデンは目を閉じ、試みに胸の上に腕を組んだ。エンジンが再度、前よりは小さく火を噴いた。鏡面のように胴体を輝かせて、〈ギルガメシュ〉は果て知れぬ星間空間を指して邁進した。

今から数千年の後、いったい地球はどうなっているだろうか。もとよりハッデンの与り知

らなことである。正直な話、彼は一度として地球の行く末を案じたことがない。いずれ、彼は超低温で冷凍され、肉体は良好な状態に保存されたまま、永遠の眠りにつくのだ。彼を乗せて霊柩船は星間宇宙を突き進む。彼は古代エジプトのファラオたちを超え、アレクサンダーを凌ぎ、秦始皇帝をして顔色なからしめることになろう。ハッデンは自ら復活の手段を講じたのだ。

第五章　プログラム修正

我ら汝らに告ぐるに、巧みなる作り話を用いざりき。我らは親しくその稜威を見し者なり。

――[illegible]

目を覚まし、心に留めよ。空を見よ。
汝ら底深く喘ぐ如く、蒼穹に目を凝らせよ。
無窮の果てに。祈りの場所に。
今こそ請われ。虚空に呼びかけよ。
汝、何をか聞く？　天空何を答う？
天国は奪われたり。そは汝の家にあらず。

――カール・ジェイイ・シャピーロ『虚無者のためのトラベローグ』

電話は復旧し、道路は除雪された。世界各地から集まった報道陣のうち、厳正に選ばれた何人かが施設の取材を許された。一握りの記者とカメラマンが三層のベンゼルの間隙を覗き、エアロックを潜って十二面体の中に入った。彼らは五人の乗員が坐ったシートに腰を降ろし、テレビを通じて世界中に、〈マシーン〉を始動するという人類初の壮挙が失敗に終ったことを告げた。エリー以下乗員たちは距離を隔てて画面に元気な姿を見せたが、記者会見は当分お預けだった。〈マシーン・プロジェクト〉当局は現況の評価を踏まえて、この先進むべき方向を検討中であると報道された。青函トンネルは開通したが、地球とヴェガを結ぶトンネルは閉ざされていた。現実に閉ざされているかどうか、調査しようという提案はどこからも出てはいない。五人が現地を去った後でプロジェクト当局がベンゼルをもう一度回転させるのではないかという疑いが頭をかすめないでもなかったが、エリーは自分が聞いたことを信じるしかなかった。〈マシーン〉は二度と再び機能しない。もはや、地球側からトンネルを潜ることはできないのだ。その気になれば、時空に僅かな歪みを作ることは可能だろう。しかし、異星人の方でそこにトンネルを通す意思がなければどうにもならない。宇宙の真の姿

を垣間見る機会を与えられたのだ。そして、あとは自分たちで何とかしろと突き放されたのだ、とエリーは考えた。その意思と能力があればの話だが。

五人はやっと話を交わすことを許された。エリーは一人一人順に別れの挨拶をした。誰もビデオテープのことで彼女を責めようとはしなかった。

「映像はカセットテープに磁気的に記録されるんだ」ヴェイゲイは彼女を慰めた。「ところが、ベンゼルの回転で強い電場が作られている。おまけに、こいつは動いているんだからね。電場の時間的変化が磁場を作る。マクスウェルの方程式だよ。そう考えればテープが消去されたって不思議はない。君のせいじゃあないさ」

尋問にはヴェイゲイもほとほと閉口した様子だった。彼は直接いかさま師呼ばわりされることはなかったが、西側の科学者たちを抱き込んだ反ソビエトの共同謀議に荷担した疑いがあるとして、暗に非難されたという。

「こうなると、エリー、一つだけ未解決の問題は、果して党政治局には知的生物がいるかどうかということだけだね」

「それはホワイトハウスにしても同じことよ。大統領がキッツの独走を見逃すなんて信じられないわ。大統領自身、誰よりもこの計画に乗り気だったはずでしょう」

「この惑星の指導者たちは、皆どうかしているね。もっとも、連中がどうやって今の地位に這い上がったかを考えれば、驚くには当らないかもしれないな。皆、視野が狭いし、おまけに近視眼的だよ。何年か先しか見ていない。いくらかましな人間で、せいぜい二、三十年だ。

要するに、自分が権力の座にある間のことしか考えられないんだ」

エリーははくちょう座A電波源のことを思った。

「それはともかく、連中はわたしらの話を嘘だと言いきる自信がない。立証できないんだからね。だから、こっちは絶対、引き下がっては駄目なんだ。今だって連中は内心、本当なのではないか、と首を傾げているんだよ。中には信じたいと思っている向きもある。そうは言っても、ここが微妙なところでね。何か確信できるものがあればいいんだろうな……。わたしは、必ず道はあると思う。重力理論を修正する手もあるかもしれないし、観測を重ねて、わたしらが向うで聞かされたことを確認するのも一つの行き方だろう。特に、銀河系の中心とはくちょう座A電波源については、脈があるのではないかな。わたしらが観測を続けることまで禁止するわけには行かないだろう。それに、上手く話を持って行けば、十二面体を調べることだってできるかもしれないんだ。エリー、何としても、連中の意識を変えさせてやらなきゃあ」

政府や〈プロジェクト〉幹部がまともでないとしたら、意識を変えさせるのはむずかしい。

エリーは気が重かった。

「政府がわたしたちのしてきたことはでたらめだと国民に信じさせるのは無理じゃないかしら」

「そうかな？　これまでだって、政府がどれだけ国民を騙して来たか、考えてごらん。地球上の人類を一瞬のうちに皆殺しにするために、世界中の富を注ぎ込んでおけば平和は保たれ

るなどということを、一般大衆に吹き込んでいるんだよ。一朝事が起きて、政府がその気になったら地球は破滅だ。そんな馬鹿な話を国民が納得していることの方が信じられないじゃないか。悲しいかな、エリー、国民の意識を操ることにかけては、向うの方が一枚も二枚も上手だよ。政府が、〈マシーン〉は機能しなかった、五人の乗員は少々頭がおかしくなった、とそれだけ言えば、一般大衆はころりと信じるさ」

「わたしたち、五人揃って体験を話せば、そんなに狂っているようには見えないと思うけれど。でも、そうね、あなたの言う通りかもしれないわ。わたしたちとしては、まず証拠を手に入れることね。ヴェイゲイ……あなた、国へ帰って、具合の悪いことにはならないかしら?」

「わたしをどうするって言うんだ? ゴリキー送りかね? 仮にそうなったとしても、わたしはへこたれたりしない。これで若い頃はさんざん苦労しているしね。それに……いや、わたしは大丈夫だ。君とわたしは安全保障条約を結んでいるようなものだからね、エリー。君が生きている限り、ソビエトはわたしを必要とするんだ。もちろん、その逆も言える。わたしらの話が本当だとわかれば、党執行部はソビエト人民の一人が〈マシーン〉に乗ったことを得意然として大声で言い立てるに違いないんだ。それに、アメリカ政府と同じで、ソビエトもわたしらの話を、軍事、経済の側面から検討することは目に見えている。

政府や党から何と言われようと問題じゃあないよ。大事なのは、こっちが生き延びることだ。時期を見て、五人でそれぞれに体験を語るのだよ。もちろん、これは慎重にやらなくてはいけない。はじめは、信頼できる相手を選んで話す必要があるだろうね。話は口伝えに広

まっていく。それを止めることは誰にもできないよ。遅かれ早かれ、各国政府は十二億体の中でわたしらが体験したことを公に認めないわけには行かなくなる。その時まで、君とわたしはお互いの保険証書なんだ。エリー、わたしはね、すべてをひっくるめて、今度のことを大変幸せに思っているんだよ。生れてこの方、これ以上に素晴らしい体験はしたことがない」

「ニーナに、わたしからよろしくね」エリーは言った。ヴェイゲイは夜の飛行機でモスクワへ発った。

★

朝食の席でエリーは西に、期待を裏切られたのではないかと心境を尋ねた。

「裏切られる？　あそこへ行って……」彼は天井に目をやった。「彼らに会って、どうして期待を裏切られるものかね。わたしは長征時代の申し子で、天涯孤独の身だよ。文化大革命も生き延びた。万里の長城の麓で六年間、ジャガイモとサトウキビを作ろうとして骨を折っていたんだ。わたしの人生は波風の絶え間もなかった。裏切られるというのは、こんなものではないよ。

宴席に出て、餓えに苦しむ貧村に帰ったところが誰も喜んで迎えてくれなかったといって、裏切られた気持になるだろうか？　わたしは今度のことで裏切られたとは少しも思っていないよ。言ってみれば、ちょっと小競合いで押し戻されただけのことだ。力関係を考えて、ど

こに敗因があったか検討することは大切だろうけれども」

西は間もなく中国に帰る予定だった。彼は帰国後、〈マシーン〉内での体験についてはいっさい公式な発言はしないと誓約させられていた。その代り、彼は引き続き西安における発掘調査の監督に当ることになっている。秦始皇帝が彼の帰りを待っていた。西はトンネルの向うで会った始皇帝の替え玉がどこまで真に迫っているか、比較できる日を待ち侘びていた。

「気に障ったらごめんなさい。不躾なことを訊くようだけれど……」エリーはちょっと口ごもった。「でも、五人の中で、あなただけは身近な人でなく……つまり、その、生涯を通じて、あなたには、本当に心から愛した人はいないの？」

エリーは言う傍から拙い質問を後悔した。

「わたしが愛した相手は皆、わたしの手が届かないところへやられてしまったよ。抹殺の憂目に遭ってね。二十世紀に入ってからも、何人もの皇帝が登場しては消えて行った。わたしは他人の手で姿を歪められたり、復権させられたり、葬り去られたりすることのない人物に憧れたんだ。歴史上、その名を消そうとして消すことのできない人物となると、数えるほどしかいない」

西はテーブルに目を落し、ティースプーンを弄びながら話した。

「わたしは革命に身を挺したよ。そのことを後悔する気はさらさらない。でも、父や母のことはほとんど何も知らないんだ。両親の顔も憶えていない。君は、御母堂がまだ御健在だし、御尊父の思い出もある。それどころか、再会までしているんだ。それがどんなに幸せなこと

デヴィはひどく塞いでいるようだった。そんな彼女を、エリーはこれまで見たこともなかった。〈プロジェクト〉首脳部や各国政府の懐疑的な態度のせいだろうとエリーは理解したが、デヴィは首を横にふった。

「あの人たちが信じてくれようと、くれまいと、わたしにとってはそれほど問題ではないの。あの体験それ自体が大切なのよ。わたしは変ったわ。エリー、あれは本当にあったことよ。現実の体験なのよ。北海道へ帰って最初の夜、わたしはね、あれは夢だったのではないかと思ったの。わかるかしら？　でも、違うのよ。夢なんかではないわ。

　ええ、わたしは悲しいわ。でも、わたしの悲しみは……あのね、エリー、わたしはずっと前から、ひと目なりと、もう一度スリンダルに会いたいと思い続けていたの。だから、わたしはあそこで生涯の願いが叶ったのよ。わたしが憶えているまま、夢に見た通りのあの人だったわ。でも、あの人と本当に少しも変らない仮装を見て、わたしは悟ったの。あの人の思い出がかけがえのないものだったとすれば、それは、もぎ取られるような形で愛を失ったからよ。あの人と一緒になるために、他の多くを捨てたからよ。それだけのことだわ。あの人、そんなに大した男じゃないのよ。十年も一緒に暮らしたら、離婚は避けられなかったでしょうね。五年も続かなかったかもしれないわ。わたし、若かったし、馬鹿だったのよ」

「わかるわ、その気持」エリーは言った。「わたしも、失恋の経験がないわけじゃあないし」

「エリー」デヴィはかぶりをふった。「わたしが言ってるのは、そういうことじゃないの。この年齢になって、やっと、はじめて、スリンダルのために泣くことはなくなったのよ。あの人のために捨てた家族のことを思って、わたしは胸が痛むの」

デヴィは数日後にボンベイに帰ることになっていた。彼女はタミール・ナドゥの生れ故郷を訪れる予定であるという。

「時間が経つにつれて」デヴィは言った。「あれはやっぱり幻想だったと思うことに抵抗がなくなるでしょうね。毎朝起きる度に、記憶が薄れて、夢のような気がして来るんだわ。五人が離ればなれにならなければ、お互いに補い合って記憶が色褪せるのを防ぐこともできるでしょうけれど。異星人は、きっと、こういう事態があり得ることを予測していたのよ。だから、わたしたちが現実として把握できるように、地球の環境によく似たあの浜辺に案内したのだと思うわ。わたしは、誰であれ、わたしたちのこの体験を黙殺しようという態度は許せないの。大切なのは、自分自身を信じることよ。あれは断じて夢なんかではないわ。実体験よ。エリー、あなたも、しっかりね」

★

周囲の情況を考えると、エダは意外なほど泰然自若としていた。そのわけを聞いて、エリ

―は納得した。彼女とヴェイゲイが尋問に痛めつけられた長い時間を、エダはもっぱら計算に費やしていたのだ。

「あのトンネルは、アインシュタイン・ローゼンの橋だと思います」エダは言った。「一般相対論には各種の解が与えられていますが、その一つに、リンゴの虫食い穴というのがありましてね。本質的にブラックホールと同じことですが、一つだけ違うところは、ワームホールは星の進化の最終段階に重力陥没によって生じるものではないという点です。それはともかく、普通のワームホールは、いったん生じると永久に拡張収縮を繰り返します。潮汐力は破壊的です。それに、外部から見ると、その中に落下した物体が向うへ抜けるには無限の時間がかかるでしょう」

エリーはそのことが彼らにとってどう有利なのかわからず、重ねて説明を求めた。最も重要な問題は、ワームホールが閉じてしまわないためにはどのような時空構造が必要かということだった。エダは彼の場の方程式に、新たに巨視的な場を予言する解を与えた。ワームホールの閉塞を妨げる一種の張力を考えたのである。そのような力が働いているワームホールは、ブラックホールに不可避的に伴う障害から解放される。潮汐力はずっと小さく、両方向に通じて、しかも、外部の時計で測れば、ワームホールを潜り抜けるのに要する時間はゼロに等しい。内部の放射線も過激ではない。

「ワームホールが果して小さな擾乱に対して安定を保てるかどうか、その点が疑問ですが」

エダは言った。「もし不安定だとしたら、高度なフィードバック・システムで常時トンネル

を監視して、安定を保ってやる必要があります。これについては、今のところまだはっきりしたことは言えませんが、少なくとも、もし、トンネルがアインシュタイン＝ローゼンの橋であるとすれば、幻想だと言う人たちに反論する根拠はあります」

エダはラゴスへ帰るのを楽しみにしていた。上着の胸のポケットに、ナイジェリア航空の緑のチケットが覗いていた。彼は自分たちの体験に基づいて物理学に新たな地平を切り開くことができるかどうか、正直なところ、もう一つ自信がない、と打ち明けた。理論物理学者としては、すでに年齢を取りすぎている、というのがその理由だった。エダは三十八である。が、それはともかく、今はただ、妻子のところへ帰りたい一心だ、と彼は言った。

エリーは彼を抱き締め、知り合えたことを誇りに思う、と言った。

「どうして、過去形で言うんです？」エダは訊き返した。「近いうちに、きっとまた会うようになりますよ。それから、エリー……」彼はふと思い出したように言い足した。「一つ頼まれてくれませんか。今度のことを、はじめから終りまで、全部思い出してほしいんです。細大洩らさず、書いてわたしに送って下さい。わたしたちの体験は、貴重な実験データです。誰かが見逃したことを、別の誰かが憶えていることもあるでしょう。あの体験を深く理解するために、それは欠くことのできない手掛かりかもしれません。あなたが記憶している限りのことを、書いて送って下さい。他の人たちにもお願いしました」

エダは手をふり、ひしゃげたブリーフケースを提げて、待機している計画本部差回しの車に向かった。

それぞれの国へ帰って行く仲間を見送りながら、エリーは自分の家族が離散したような気持を味わった。彼女自身、この体験で人が変った。変らなかったらその方がおかしいではないか、と彼女は思った。彼女にとって、この体験は言わば悪魔祓いだった。そして、自分はかつてないほど深く人を愛することができるようになったと感じている今、エリーは独りぼっちだった。

★

エリーはヘリコプターで連れ出された。政府の特別機でワシントンへ向う間、彼女は昏々と眠り続けた。ハワイのヒッカム空港の人気のない滑走路に一時着陸し、ホワイトハウスの職員が搭乗した時には揺り起さなくてはならないほどだった。

結局、取引に応じた形になった。エリーは、所長の座からは降ろされたものの、〈アーガス〉へ戻って好きな研究を続けることを認められた。彼女が希望するなら、終身研究員として留まることもできるという約束だった。

「政府だって、そんなにわからず屋じゃあない」キッツもようよう一歩譲った。「君の方で、きちんとした証拠を見せてくれればいいんだ。なるほど、とうなずけるものがありさえすれば、国は正式に君たちの報告を支持するよ。発表が遅れたのは慎重を期したからだということにすればいい。証拠を揃えるのに調査が必要であれば、政府としても事情の許す範囲で協力する用意がある。しかし、今この段階で君たちの報告を公表したら、世の中はたちまち大

騒ぎになるだろう。そのうちに懐疑派の声が高まって始末におえないようになる。君たちも困るだろうし、政府もそうした事態は避けたいんだ。だから、証拠が集められるものなら、それに越したことはない」キッツがここまで態度を和らげたのは、おそらく、大統領の鶴の一声があったためだろう。彼が自分から進んで譲歩したとは考えにくい。

それはさて措き、交換条件としてエリーは〈マシーン〉の中で何があったかについて、いっさい口外無用を申し渡された。五人は十二面体のシートに坐り、しばらく雑談を交わして降りて来た。公式に認められている事実はそれだけである。それ以外のことを一言でも口にすれば、エリーの芳しからぬ精神鑑定所見がマスコミに流される。政府は泣いて馬謖を斬ることになろう、とキッツは言った。

当局はピーター・ヴァレリアンやヴェイゲイ、それにアボネバの口も封じようとしたろうか。エリーは思案をめぐらせた。報告の聴取に当った五カ国の政府代表と〈ワールド・マシーン・コンソーシアム〉の関係者を抹殺しない限り、いつまでも事実を伏せておくことはむずかしい。要するに時間の問題でしかない。つまり、当局は時間を稼ごうとしているのだ。

それにしても、威しは意外なほどあっさりしていた。もっとも、いずれかが協定を破るようなことになったとしても、その時キッツはすでに野に下っているはずである。ラスカー政権はあと一年で憲法に定められた上限、二期の任期を満了して退陣する。キッツは防衛産業を依頼人に多く持つことで知られているワシントンのさる法律事務所にパートナーとして天下ることが決まっているという。

エリーは、しかし、キッツがこのまま引き下がるだろうとは思っていなかった。その態度から察して、彼はエリーが銀河系の中心における体験を協定に反して語る虞れについてはさほど案じていない。それよりも、彼が気に病んでいるのは、トンネルがまだ開いている可能性であると見て間違いない。地球側からは塞がっているとしても、異星人はその気になればいつなりと地球にやって来られるのだ。エリーは、北海道の施設はやがて撤収されることだろうと予想した。技術者たちはそれぞれ古巣の企業や大学へ戻るのだ。彼らはそこで何をどう話すだろうか？　十二面体は、おそらく筑波学園研究都市に展示されることになるだろう。そして、ほとぼりが冷め、世界の関心が他へ移った頃、北海道で爆発事故が発生する筋書だろう。説得力のある理由を構えることができれば、キッツは核爆弾を使うことも辞さないのではあるまいか。核爆発が起れば、放射能汚染を理由に一帯は立入禁止区域に指定されるはずである。これで人払いができ、トンネルも切り離される、というのがキッツの計算であろう。しかし、日本人の核兵器に対する過敏な神経を考えると、地下爆発にしても核の使用は問題である。キッツは通常兵器で我慢しなくてはなるまい。打ち続く北海道の炭鉱落盤事故を装うことも、考えられなくもない。しかし、核兵器であれ通常兵器であれ、そのような姑息な手段で地球からトンネルを切り離せるかどうか、エリーは疑問に思った。

それに、キッツがそんな計画を抱いているかどうか、本当のところは想像の外である。あるいは、エリーは彼のことを不当に悪く取っているかもしれない。考えてみれば、キッツにしてもマシーン道の影響をまったく受けないはずはない。彼にも家族があり、友人がいる。

愛情の何たるかを知らないわけがない。少なくとも、彼はエリーたちの報告から、何かを嗅ぎ取っているに違いない。

★

明くる日、大統領はホワイトハウスで催された公開の式典でエリーに自由勲章を授与した。白大理石の壁の暖炉に大きな薪が勢いよく焚かれていた。大統領は物量の面で〈マシーン・プロジェクト〉を後押ししたのみならず、自らこの計画に政治生命を懸けていた。それ故、アメリカ市民はもちろん、世界の前にその成果を謳い上げなくてはならなかった。合衆国ならびに世界各国が〈マシーン〉に注ぎ込んだ投資は充分な効果をもたらした、と大統領は述べた。新しい技術が開発されて、新しい産業が興り、トマス・エジソンの発明にも劣らず一般の生活に恩恵をほどこしつつある。人類は宇宙の孤児ではないことを知った。宇宙には人類よりはるかに進んだ知性が存在する。彼らは人類の自分たち自身に対する考えを根底から改めさせた。この度の発見は、大統領個人の神への信仰を深めるものだったが、大方のアメリカ人にとっても、それは同じだと想像する、と大統領は言った。神は宇宙の多くの惑星で生命と知性を創造し給うたことが今や明らかにされた。それはすべての宗教の考え方に添うものと思われる。しかし、〈マシーン〉からわれわれが与えられた最大の恵みは、地球に芽生えた新しい精神である。人類の共同体はより深い相互理解で結ばれるようになった。人類は軽舟に身を託して時空を旅する乗合いの客であることをわれわれは知った。人類は共通の

目標を目指して心を一つにしなくてはならない。これこそが、今、世界中に広まりつつあるマシーン道の精神である。

大統領はこのように述べた後、エリーを報道陣の前に誘い、十二年間におよぶ彼女の苦労をねぎらった。また、〈メッセージ〉の受信から解読に至る科学者としての優れた業績、そして〈マシーン〉に乗り込んだ彼女の勇気を称えることも忘れなかった。〈マシーン〉がどのような働きをするものか、誰一人として知る者はなかったのだ。始動した〈マシーン〉が機能しなかったとしても、アロウェイ博士に落度はない。アロウェイ博士は進んで身を挺したのだ。彼女は人間として能う限りのことをした。彼女は全アメリカ市民、いや、地球上の全人類から感謝されて然るべきである。エリーは本来、一私人にすぎなかった。静謐を好む内向的な性格でありながら、ひとたびその必要を認識するや、彼女は〈メッセージ〉と〈マシーン〉について一般に説明する責任を背負って立った。実際、報道陣に対して彼女の示した忍耐は、大統領の立場から見て、賞讃おく能わざるものがある。アロウェイ博士は、今、いっさいの公務から解放され、研究生活に返ることを許されるべきである。先に報道陣向けの発表があり、内容についての補足説明も行われた。キッツ国防長官とダヘーア科学顧問が取材に応じた。ここは、記者会見を辞退したいというアロウェイ博士の気持を尊重するよう、大統領から記者諸氏にお願いしたい。ただし、写真撮影はこの機会に済ませるように。

大統領が果してどこまで真相を知っているか確かめることもなく、エリーはワシントンを後にした。

統合参謀司令部の小型ジェット機で〈アーガス〉へ向う途中、エリーは屈み込んでジェインアヴィルへ回ってもらった。母親は着古しのキルトに包まっていた。誰かが気を利かせて頬紅をうっすらとはたいていた。エリーは母親の枕に顔を埋めた。老いた母は不自由ながらも口がきけるようになったばかりか、エリーの肩にそっと右手を上げるまで回復していた。

「ママ、話があるの。素敵な話よ。でも、びっくりしないでね、体に障るといけないから。ママ……わたし、パパに会ったのよ。本当よ、ママによろしくって」

「そう……」母親は弱々しくうなずいた。「昨日、ここへも来たわ」

エリーはジョン・ストートンが前の日面会に訪れたことを知っていた。今日は仕事が忙しいことを理由に同行を拒んだが、ストートンは母娘水いらずの対面を邪魔しないように気を遣っているのかもしれなかった。その好意には感謝するべきだと知りつつも、彼女は声が尖るのをどうすることもできなかった。

「そうじゃないのよ、ママ。わたしが言ってるのは、パパのこと」

「あの人に、言ってちょうだい」母親はもつれる舌で言った。「あなたから、そう言って……お店の掃除はもういいから、家へ帰るようにって」

母親の意識の中では、夫は今もって金物屋の主人なのだ。それは、エリーにとっても同じだった。

地平線の果てから果てに張り渡された鉄条網の柵は、ただでさえ荒涼として人気のない砂漠に一層うらさびた趣を添えていた。エリーは古巣へ帰った安堵を味わった。前にくらべればずっと小規模になるとはいえ、新しい研究計画に取りかかれるのが嬉しかった。

ジャック・ヒバートが〈アーガス〉研究所の所長代行に任命され、彼女は管理業務から解放されて肩の荷が降りた。ヴェガからの信号が跡絶えて望遠鏡に余裕ができ、それまで脇に押しやられていた電波天文学の基礎領域で各種の研究が軌道に乗りはじめていた。研究所の同僚たちは誰一人、キッツのように〈メッセージ〉をいかさまと受け取っている気配はなかった。ダヘーアやヴァレリアンが〈メッセージ〉や〈マシーン〉について周囲にどんな話をしているか、エリーは多少気にならないでもなかった。

キッツが間もなく明け渡すペンタゴンの奥まったオフィス以外の場所で〈メッセージ〉のことを口にする気遣いはなかった。エリーは一度だけそのオフィスにキッツを訪ねたことがある。海軍の下士官が腋の下に拳銃を吊り、後ろ手をして玄関口にしゃちこばっていた。迷路のような廊下で何者かが故知れぬ暴虐的衝動に駆られるといった体の非常事態に備えているのだ。

ウィリーは彼女のサンダーバードを自分で運転して、ワイオミングから回しておいてくれた。政府との約束で、彼女は研究所の敷地内でしか車の運転を許されていなかった。敷地は

CamScannerでスキャン

ただドライヴを楽しむだけならば充分な広さがある。しかし、テキサス西部の風景は望むべくもない。ウサギの群の歓迎を受けることもなく、夜の山道に車を駆って南天の星を見に行くこともできない。研究所内の蟄居生活で彼女が一つだけ不満に思う点である。もっとも、冬の間はどうせウサギたちは姿を見せはしない。

はじめのうちは夥しい数の報道陣が押しかけ、柵越しなりともエリーに質問を浴びせ、あるいは望遠レンズで姿を捉えようと機会を窺った。しかし、彼女は頑として記者たちを寄せつけなかった。新任の広報スタッフは頼もしく、時には報道陣に対して邪険ですらあった。それはそうだろう。アロウェイ博士のプライバシーを守ることは大統領直々の要請なのだ。数週間が過ぎ、何カ月か経つうちに、はじめは大隊規模の人数だった記者団は中隊になり、小隊に減って、今では執念深い何人かが残るばかりとなった。〈ワールド・ホログラム〉をはじめとする、暴露記事が売り物の週刊新聞や千年至福論者系の宗教雑誌の記者がほとんどだったが、中に一人〈サイエンス・アンド・ゴッド〉を名乗る雑誌の記者もいた。どの宗派の雑誌かは誰も知らず、当の記者もそれを明かそうとはしなかった。

発表された記事や読みものはどれも似たり寄ったりで、十二年におよぶエリー以下科学者たちの献身的な努力について述べ、記念すべき〈メッセージ〉解読を山場に据えて、その後の〈マシーン〉建造へ繋ぐという構成がほとんどだった。世界中の期待を集めたプロジェクトは不幸にして失敗に終った。〈マシーン〉はどこへも行きはしなかった。アロウェイ博士の失意は察して余りある。そして、どの記事も、彼女が神経衰弱気味であることを匂わせて

いた。

新聞各紙の社説はおおむねこの成行きを歓迎する論調だった。驚天動地の新発見と、哲学および宗教の再検討の必要は人類に難題を突きつけた。これに対処するためには、ゆっくり時間をかけて論議をつくし、人類の置かれた立場をあえ直す必要があるという趣旨である。地球はまだ異星文明と接触するには時機尚早ではないかとする意見もあった。社会学者や教育者の一部は、人類よりもはるかに進んだ知的生物が存在するということ自体、本当に正しく理解されるにはまだ何世代もの時間がかかるだろうと予測した。彼らに言わせれば、異星文明の存在は人類の鼻をへし折る大打撃だった。そうでなくても、人類は自ら解決しなくてはならない課題を山と抱えている。向う五十年の間には、人類も〈マシーン〉の本質をより深く理解するに至るだろう。その時、人類は過去の間違いを知り、一九九九年にはじめて試運転した〈マシーン〉が機能しなかった原因が何と些細な不備にあったことかと笑って語り合うようになるだろう。

また、一部の宗教家は、〈マシーン〉の失敗は人類が驕り高ぶった罰であると論じた。ビリー・ジョー・ランキンはテレビの全国放送を通じて〈メッセージ〉は事実ヴェガと呼ばれる地獄から地球宛に送られたものであって、そもそものはじめからこの問題について彼が主張して来た立場が、ここに至って一層強固なものとなったと述べた。〈メッセージ〉と〈マシーン〉は現代のバベルの塔である。人類は愚かにも神の座に着こうとして惨めな結果に終った。今より数千年の昔、バビロンという町があった。人々は神を恐れず、蟲惑にうつつを

抜かした。ために、神はこの町を亡ぼし給うた。現代にも同じ名前の町があった。そして、ここにおいても、神の御言葉に従う者たちの手によって御旨は達せられたのである。〈メッセージ〉と〈マシーン〉は神を恐れる義なる者たちに対する重ねがさねの邪悪な仕打ちである。が、またしても悪魔の企みは未然に封じられた。ワイオミングにおいては神慮の事故により、また、神を知らぬソ連においては聖霊の働きを受けた共産主義科学者たちの躓きによってである。

ランキンはなおも論じ立てた。神の意志がかくも明らかに示されているにもかかわらず、人類は三度〈マシーン〉の建造を試みた。神はこれを黙認された。然る後に、慈しみをもって密かに〈マシーン〉の機能を障碍し給うたのである。かくて悪魔の意志は挫かれた。神はここに今一度、罪深く、気まぐれな、ありていに言って恩寵に価しない地球の子らに対する寛大な思い遣りを示し給うた。人類はこれを教訓として自ら罪の深さと曲がった行いを反省するべきである。千年至福の到来を控え、二〇〇一年一月一日にはじまる次世紀を待たずして、人類は今あらためて、地球とわれわれ自身を神の御手に委ねなくてはならない。〈マシーン〉は破壊されるべきである。すべての部品ともども、一基残らず破壊しなくてはならない。心を浄めようとせず、機械を作ることによって神の右手に立てると思ったら大間違いである。手遅れにならないうちに、人類は根本的に精神を入れ替えなくてはならない。

小さなアパートの一室で、エリーはランキンの話を聞き終えると、テレビを消してプログラム修正の作業を続けた。

彼女がかけることを認められている外線電話はウィスコンシン州ジェインズヴィルの老人ホーム発の通話だけだった。ジェインズヴィル以外からの電話はすべて丁重に取次ぎを断わられた。ダヘーア、ヴァレリアン、大学時代の親友ベッキー・エレンボーゲンの手紙は封も切らぬまま状差しにあふれている。サウスキャロライナからの速達便や、研究所の使い走りに託されたパーマー・ジョスからの便りもあった。エリーは手紙を読みたい誘惑に駆られたが、ついに一通も開封しなかった。ジョスには「パーマーへ、もう暫く時間を下さい。エリー」とだけ返事を認め、自分の住所は記さずに投函した。その一通が果してジョスのもとに届けられたかどうか、エリーは知る由もなかった。

さるテレビ局はエリーの同意もなしに、彼女の人となりを紹介する特別番組を制作した。それによれば、彼女はニール・アームストロングやグレタ・ガルボも顔負けの隠遁生活を送っているとされていた。エリーは笑って見過した。それどころではない。彼女は忙しかった。時間はいくらあっても足りないほどだった。

外部との連絡は絶たれていたが、純粋に調査研究の目的についてはこの限りではなかった。非同期通信網の空き回線を利用してエリーとヴェイゲイは連絡を取り合い、長期の観測計画を立案した。観測の対象は銀河系中心に近いいて座Aと、強力な銀河系外電波源、はくちょう座Aだった。〈アーガス〉の電波望遠鏡はソ連のサマルカンドの望遠鏡と結ばれ、これによって、事実上、地球サイズの電波望遠鏡一基に相当する開口合成型干渉計が実現した。観測波長数センチでこの干渉計は、銀河系中心までの距離を隔ててなお、太陽系内惑星程度の

電波的な測定し得る分解能を持つはずであった。

しかし、エリーはまだ納得できなかった。回転する二つのブラックホールはそれよりもはるかに小さい。観測を続ければ、さらにどんな新しい発見がないとも限らない。理想を言えば、宇宙船に電波望遠鏡を積んで、太陽の向う側へ打ち上げるに如くはない。地上の望遠鏡と連動させれば、人類は地球の軌道と同じ口径の望遠鏡を手にすることになる。これによって、銀河系中心の地球程度の天体を観測するだけの分解能が得られるはずだ、と彼女は計算した。あるいは〈ステーション〉ほどの大きさでも観測にかかるかもしれない。

エリーはもっぱら書きものに時間を費やした。CRAY21のプログラムを書き直す仕事に加えて、〈マシーン〉が始動してから地球時間で二十分間に圧縮された特異な体験を、記憶する限り細大漏らさず、詳しく書き残しておかなくてはならなかった。書きながら、彼女は自分のしていることが言論統制下の地下出版（サミズダート）に他ならないことに気付いた。印刷機ではなく、タイプライターとカーボン紙を使っているところが違うだけの話だ。彼女はオリジナルとコピー一部を、ハーデン原則の黄ばんだコピーとともに金庫にしまい、第三のコピーを四十九号望遠鏡の、電子制御室の羽目板の下に隠した。カーボン紙は焼き捨てた。黒い煙が目に染みた。一週間かかってプログラム修飾の作業を終え、パーマー・ジョスのことを思い出しているところへ、当のパーマーがふらりと〈アーガス〉研究所を訪れた。

大統領特別補佐官から研究所に電話があり、〈マシーン〉は久闊払いを負うことはなかった。補佐官とは長年の知合いである。服務についてはおよそ堅苦しいことを言わない南西部に来

てまでも、ジョスはいつもの通り、きちんと上着を着てネクタイを締めていた。エリーは彼に椰子の葉を贈り、ペンダントの礼を言った。キッツから強く釘を刺されていたにもかかわらず、ジョスを前にして、彼女は迷わず一部始終を打ち明けた。

　政治的に差障りのあることを話題にする時のソビエト人科学者たちの顰みに倣って、二人は用事にかこつけて外に出た。ジョスが時折足を止め、屈み込んでエリーに顔を寄せる姿が遠くから眺められた。その都度、エリーは彼の腕を取って先を急いだ。

　エリーの話に、ジョスは好意的かつ真摯に耳を傾けた。特に、彼女の話を多少とも信じるなら、自身の教義を根本から問い直すことを迫られる立場としては、その態度は実に度量が広いと言わなくてはならなかった。はじめて〈メッセージ〉を受信した当時、あくまでも拒否の姿勢を取り続けたジョスだったが、エリーは今やっと、彼を〈アーガス〉の施設に案内する機会を得た。彼は気持の好い話相手だった。エリーは再会を心から喜んでいる自分に気付いた。最後にワシントンで会った時も、自分の方にもっと心のゆとりがあればよかったのに、と今さらのように悔まれる思いだった。

　傍目には当てもないふうを装って、二人は四十九号望遠鏡の土台の細い鉄梯子を登った。百三十基の電波望遠鏡が個々の軌条の上に据えられ、前後左右にぎっしりと並んだ景観は地上のものとは思えなかった。制御室の羽目板をずらせて、エリーは分厚い封筒を取り出した。表にジョスの名が記されていた。彼は封筒を内ポケットに忍ばせた。それとはわからぬほど僅かに上着の胸が脹らんだ。

いて語った。

「CRAYほどの大型コンピュータでもね、πを10^{20}桁まで計算するとなると、とても時間がかかるのよ。それに、こっちの求める答がπの中にあるかどうかも、はっきりとわかっているわけではないの。むしろ、πじゃあないような口ぶりだったわ。自然対数の底、eかもしれないし、ヴェイゲイが聞いて来た一連の超越数のうちのどれか一つかもしれないのよ。あるいは、それだっておよそ見当が違うということだってないとは言いきれないわ。だから、当てずっぽうに手近な超越数を取り上げて、しゃにむに計算を続けたところで時間の無駄でしかないのよ。ところが、〈アーガス〉では信号に含まれている規則性を見付け出すための有効な解読手法が確立されていて、これによれば、ある一つのデータ群の中に偶然ではあり得ないもの、まったくの無作為では起り得ないことがあった時、その部分を取り出して表示することができるの。場合によっては、その信号を図式化することもできるのよ。それで、プログラムを書き換えて……」

ジョスの顔を見て、エリーは自分の話が通じているかどうか不安になった。彼女はそれとなく話の筋道を脇へそらせた。

「……ただ、πのような数字をどこまでも計算して、プリントアウトしたものを、こっちがいくら眺めたところではじまらないわ。そんなことをしていたら、いくら時間があっても足りないでしょうからね。だから、コンピュータはπをどんどん計算して行って、もし途中で

0と1ばかりが不自然に長く続くようなところがあったら、そこではじめて立ち止まって考えるようにプログラムされているわけなの。わたしの言ってること、おわかりかしら？　無作為ではあり得ないものを見付け出すということよ。たまたま、1と0がいくつか並んだとしても、これは不思議でも何でもないわね。平均すれば、0から9までの数字のうち、0も1も十パーセントの確率で登場するはずでしょう。計算を長く続けて行けば行くほど、偶然0と1ばかりがたくさん並ぶ可能性も増すと考えていいわね。プログラムは統計的にどこまでそういうことがあり得るかを知っていて、その範囲を大きく越えて0と1が長く続いた場合にはじめてそこに注目するように組まれているの。それと、もう一つ、コンピュータは十進法だけではなしに、他の記数法でも同じ計算をするの」

「ちょっと待って下さい。どこまでも計算を続けたら、どんな数の組合わせだって偶然出交(でくわ)すということはあるんじゃありませんか？」

「ええ、その通りよ。ただし、それがどのくらいの確率で起るか、計算でわかることなのよ。いくらも行かないうちに高度な内容を含むメッセージが浮かび上がるようなら、それは偶然ではあり得ないでしょう。というわけで、研究所のコンピュータは毎日、朝早くからこの計算をやっているの。外からはいっさいデータを加えることはないし、今までのところ、コンピュータの方からも何のデータも出て来てはいないわ。コンピュータはただ、最大効率化されたプログラムに従ってπを計算して、数字が流れて行くのを見守っているだけ。何か異常を発見するか、あるいは、外から呼びかけがあるかしない限り、ひたすら計算を続けるのよ。

言ってみれば、自分のおへそを見つめているようなものね」
「わたしは、数学はまったくの素人でしてね。もう少し具体的に、わかりやすい例で説明していただけませんか」
「いいわ」エリーはジャンプスーツのポケットを探ったが、紙切れ一枚持ち合わせてはいなかった。ジョスのポケットから今しがた渡したばかりの封筒を引っ張り出してメモ用紙の代りにすることも考えないではなかったが、遠くから監視されているかもしれず、それは少々躊躇われた。ジョスはじきにそうと察して、螺旋綴じの小さな手帳を差し出した。
「ありがとう。πは、3・14159 26……というふうにはじまっているでしょう。数字はばらばらに登場するわね。たしかに、1ははじめの四桁に二度も出て来るけれど、計算を続けて行けば、平均してどの数字もだいたい同じ頻度で現われるようになるのよ。充分に桁数を重ねれば、0、1、2、3、4、5、6、7、8、9の各数字は、ほぼ正確に十パーセントずつになるはずよ。そこまで行く途中には、例えば、4444といったふうに同じ数字の繰り返しもあるでしょうね。でも、それだって統計的に予想される範囲を超えることはないのよ。ところが、どんどん計算して行くうちに、あるところで、一つの数字だけが続くようになったとしたら、どうかしら。444……と百桁も続いたとしたら。そこには何の情報も含まれ得ないけれど、でも、統計的偶然とも考えられないわ。数字が無作為の羅列であるとすれば、宇宙の年齢に等しいだけの時間、πの計算を続けたところで4が百桁も並ぶことはあり得ないのよ」

「あなたが電波望遠鏡で〈メッセージ〉を探査したのと似ていますね」
「その通りよ。いずれの場合も、わたしが求めているのは雑音とはっきり区別できる信号なの。統計的偶然ではあり得ない何かを捜しているのよ」
「しかし、それは百桁続きの4とは限りませんね。違いますか？　あなたのおっしゃるその何かは、われわれから見て意味内容を持つことですか？」
「もちろんよ。どこかで0と1ばかりが延々と続いたような場合を考えてごらんなさい。そうなれば、〈メッセージ〉を解読した時と同じように、そこから意味を拾い出すことができるわ。事実、そこに何らかの意味が含まれているものならばね。ただ、おわかりでしょうけれど、果して何がどのような形で現われるか、それはまったく予想できないことなのよ」
「ということは、例えば、πの中に隠された情報を取り出してみたところが、それは脈絡もないヘブライ文字の寄せ集めだった、などということもあり得るわけですか？」
「ええ、そう。石の上に大きく黒々と彫りつけられていたりね」
ジョスは眉を寄せてエリーを見返した。
「失礼、エリナ。どうも聞いていると、あなたは何か、その……えらく遠回りをしているように思うんですがね。あなたは仏門の尼僧の沈黙の戒律に縛られているわけではないでしょう。さっきわたしに話したことを、堂々と発表したらいいじゃありませんか」
「パーマー。確実な証拠があれば、あなたに言われるまでもなく、進んで発表しているわ。でも、証拠がなくてはキッツのような人たちに、でたらめと極め付けられるのが落ちよ。さ

もなければ、妄想だと言われるだけだわ。だからこそ、わたしはあの体験を文章にしてあなたに預けたのよ。あなたにお願いするわ。その文書は封印して、日付を入れて、公証して、どこかの銀行の金庫に預けてちょうだい。わたしに万一のことがあったら、あなたの手で文書を公表していただきたいの。文書の扱いについては、あなたにいっさいの権限をお任せするわ」

「あなたの身に何事もなかったら？」

「わたしの身に何事もなかったら？　この先、求めているものが見付かれば、その時、その書き付けがわたしたちの話を裏付けることになるのよ。銀河系の中心に二連のブラックホールがあることが立証されるか、はくちょう座Aに巨大な構築物が発見されるか、あるいは、πの中にメッセージを読み取ることができるかすれば、その時は……」エリーはジョスの胸にそっと手を置いた。「これがわたしの証拠よ。わたしはわたしたちの体験を、誰憚ることなく発表できるわ。それまでは……なくさないでね」

「まだよく理解しかねるんですが」ジョスは言い淀んだ。「宇宙には数学的な秩序があるということをわたしたちは知っています。万有引力の法則その他いろいろですね。それと、このこと、いったいどこが違いますか？　つまり、πの中にも秩序があるということでしょう。それがどうだと言うんです？」

「そうじゃないの。わからない？　それとこれとはまったく別の話よ。物理学や化学を支配する厳密な数学の法則で宇宙を解明しようということじゃないの。わたしが求めているの

はメッセージなのよ。何者であるかはともかく、宇宙の創造者は何かを伝えようとして超越数の中にあるメッセージを隠したのよ。百五十億年後に知的生物が充分に進化した時はじめてそれを読むように。初対面の時、そのことを理解していないと言って、わたし、あなたとランキンを批判したわね。〝わたしたちが神の存在を知ることを望むなら、神は何故、疑問の余地もない明快なメッセージを伝えないのか?〟とわたしは質問したの。憶えているかしら?」

「よく憶えています。あなたは、神は数学者だと思うのですね」

「ある意味ではね。もし、わたしたちがあそこで聞いたことが事実だとすれば。もし、これが当てもない空騒ぎでないならば。メッセージが他の超越数ではなしに、たしかにπの中に隠されているものならば……。でも、今のわたしはどっちを見てももしばかり」

「あなたは数学に啓示を求めているのです。他にも近道はありますよ」

「パーマー。これ以外に道はないわ。懐疑派を納得させるには、これしかないのよ。わたしたちが何かを見付けた時のことを考えてごらんなさい。そんなに高度に複雑なことである必要はないのよ。πの中にそれだけの数字が、ただ偶然に積み重ねられているのではないと言える秩序が見付かりさえすればいいの。それで充分なのよ。そうすれば、そのメッセージの意味するところはひとまず措くとして、世界中の数学者がまったく同じ結果に行き着くはずでしょう。そこには流派の別なんてあり得ないのよ。誰もが同じ聖書を読むことになるんだわ。その時には、教義の中心となる奇跡が、どこかの呪術師のでっち上げだったとか、後世

の歴史家による記録の改竄だとかいう議論はまったく意味がなくなるでしょう。妄想とか、幻想とかの問題でもないわ。大人が求める代理の親という考え方もなくなるわ。誰もが同じ一つのことを信じられるようになるのよ」

「何であれ、あなたが必ずそれを見付けられるという保証はありませんね。ここに籠って一生πの計算を続けるのも一つの生き方です。あるいは、声を大にして、世界に向けてあなたの信念を語るのも、また一つの道です。遅かれ早かれ、あなたはそのいずれかを選ばなくてはならないでしょう」

「選択を迫られるようなことにはなりたくないわ。パーマー。何よりも先ず、動かぬ証拠を手に入れることよ。証拠を摑んだら、わたしは胸を張ってすべてを発表するわ。証拠がなかったら……わたしたちがどんなに弱い立場にいるか、あなた、わからないかしら？　わたし個人のことじゃあなくて、つまり……」

ジョスはそれとはわからぬほど微かにかぶりをふった。口の端に小さく笑いが浮いていた。彼は二人の置かれた情況にある種の皮肉を見出していた。

「あなたは何故、そうやって熱心にわたしに発表を勧めるの？」エリーは尋ねた。

逆説と受け取ったか、ジョスは答えようとしなかった。エリーは言葉を続けた。

「考えてみると、おかしいわね。あなたとわたし、何だか立場が入れ替ったようだと思わない？　わたしは現に深い宗教的な体験をしていながら、それを証明できずにいるのよ。本当にね、パーマー、わたしにはその体験の意味をどう解釈したらいいかわからないの。ところ

な、あなたは……一筋縄ではいかない懐疑派だったはずのあなたは、わたしよりもはるかに余裕綽々で、証拠もないわたしの話に理解を示そうとしているのよ」

「いえ、エリナ、それは違います。わたしは懐疑派じゃありません。わたしは信じます」

「本当？　わたしが体験を語るとしても、それは神による賞罰の話ではないわ。キリストの再臨や昇天も関係ないわ。だいたい、キリストなんてどこにも出て来ないのよ。そこでわたしが言うべきことは、一つには、人間は宇宙の目的の中心ではないということ。わたしの体験を考えると、人間がとてもちっぽけに見えて来るのよ」

「その通りです。同時に、その分だけ神は大きくなります」

エリーはちらりとジョスの顔を覗き、急き込むように言葉を接いだ。

「あのね、地球は太陽のまわりを回っているけれど、かつて地上で権力を握っていた教会は、地球が動くことを認めようとしなかったのよ。教会は常に権力を求めて已まなかったし、大衆に対しては自分たちこそが最高の権威であるふりを装っていたのね。ところが、真理の前に立たされた時、教会勢力は自分たちが卑小な存在であることを悟ったのよ。教会は自分たちの権威が失墜する真理を恐れて、それを覆い隠そうとしたわ。教会は、真理は危険であることを思い知ったのよ。わたしの話を信じたらどういうことになるか、あなた、わかっていて？」

「わたしは常に真理を求めて来たのですよ、エリナ。わたしも無駄に年齢を取ってはいません。目の前に真理があれば、わたしにはわかります。本当です。真理を求める信仰、神を知

あろうとする信仰は、宇宙を受け容れる勇気に支えられていなくてはなりません。現実の宇宙をです。その果てしない広さや、そこにある無数の世界をひっくるめてです。あなたの話から想像される宇宙の規模や、その規模故に創造主に開かれた機会の多様性を考えると、わたしは息を呑む思いです。この地球という小さな世界に神を閉じ籠めるより、その方がどれだけ素晴らしいことか知れません。わたしは以前から、地球は神が足を乗せる緑の踏み台だとする考え方にはなじめませんでした。それは、あまりにも御都合主義というものです。まるで童話です。一種の気休めにすぎません。ですが、あなたの宇宙はもっと大きくて、歴史も長い。わたしの信じる神にふさわしい宇宙です。

あなたはこれ以上、どんな証拠がいりますか？　証拠はすでに充分じゃあありませんか。はくちょう座Aだの、ブラックホールだのについては科学者たちが考えればいいことです。あなたは、自分の話を一般の人々に信じさせるのは大変むずかしいことだと思っていますね。わたしはそうは思いません。少しもむずかしいことではありませんよ。あなたは、自分の体験が、あまりにも特異な、常識とはかけ離れたものだと思っているでしょう。でも、わたしにとっては、はじめて聞く話ではありません。わたしはよく知っています。あなただって、よくご存じのはずです」

ジョスは目を閉じると、一呼吸置いて創世記の一節を暗誦した。

時に彼、夢みて梯子の地に立ちいてその頂の天に達れるを見、また、神の使者のそれに

のぼりくだりするを見たり……まことにエホバこの処にいますに我しらざりき……この処これすなわち神の殿のほかならず、これ天の門なり。

ジョスは満堂の会衆を前に壇上から説教する時のように、いくらか芝居がかっていた。目を開けると、彼は照れ臭そうに笑った。二人は南西部の陽にさらされながら空を睨んで林立する電波望遠鏡の間の広い通路を歩いて戻った。しばらくして、ジョスは打ち解けた会話の口ぶりに返って言った。

「あなたの話は予言されています。以前にあったことなのです。あなたは心のどこか奥底で、このことを知っていたに違いありません。あなたの話の何一つ、創世記には書かれていません。それはそうでしょう。書かれているはずがないのです。創世記の挿話は、あれはヤコブの時代にふさわしいように書かれているんですから。それは、とりもなおさず、あなたの証言はわたしたちが生きている、今、この時代にふさわしいということです。

人はあなたの話を信じますよ、エリナ。世界中の、何百万という人々があなたを信じます。わたしには、わかっています……」

エリーはかぶりをふった。二人はしばらく無言で歩き続けた。

「まあ、いいでしょう。あなたの気持はわかります。どうぞ納得の行くまで考えて下さい。ですが、もし、いくらかなりと時間を繰り上げられるものなら、急いで下さい。わたしからお願いします。千年至福まで、もう、まる一年とないのです」

「それはわかっているの。あとほんの何カ月か時間をちょうだい。それまでに、πの方の埒が明かなかったら、わたしも沈黙を破ることを考えるわ。一月一日までは延ばせない、というのはわたしも同じ気持ですもの。その頃には、エダや他の三人も進んで話す気になっているのではないかしら。ね、いいでしょう？」

二人は再び口をつぐんで〈アーガス〉研究所の本館に向った。スプリンクラーがみすぼらしい芝生に水を撒いていた。二人は水溜りを避けて通った。灼けるように乾いた土地で、水溜りは妙に場違いに感じられた。

「結婚の経験はありますか？」ジョスは尋ねた。

「いいえ、一度も。忙しすぎたのね、きっと」

「恋愛したことは？」他意はない、単刀直入の質問だった。

「恋愛といえるほどではないかもしれないけれど、何度かそういうことはあったわ。でも……」エリーは近くの望遠鏡を見上げた。「いつも雑音が多くて、信号がよく受け取れなかったわ。あなたは？」

「一度もありません」彼は他人ごとのように言い、ちょっと頬をほころばせて言葉を足した。「ですが、わたしには信仰があります」

エリーはこの話題には深入りしない方がいいと思った。二人は〈アーガス〉のメインフレーム・コンピュータを覗きに短い階段を登った。

第六章　画家の署名

CamScannerでスキャン

見よ、われ汝らに奥義を告げん。我らはことごとく眠るにはあらず、終りの喇叭の鳴らん時は、みな忽ち瞬く間に化せん。

——コリント前書　第十五章第五十一節

宇宙は造化の意志と深慮によって、数の秩序に支配されていると思われる。何となれば、創世の神の心の裡にもとから存在する数の力によって、あらかじめ描かれた下絵さながら、宇宙の姿は決定されているからである。

——ゲラサのニコマコス『数論』第一巻第六章（紀元一〇〇年頃）

エリーは老人ホームの階段を駆け上がると、空の揺り椅子が等間隔に並んでいる緑のペンキも新しいベランダに急いだ。ジョン・ストートンが力なく俯き、両腕を垂れて立ちつくしていた。右手に提げたショッピング・バッグから、透き通ったビニールのシャワー・キャップ、花模様の化粧道具入れ、ピンクの玉房の付いたスリッパなどが覗いていた。

「亡くなったよ」エリーの姿を認めて彼は言った。「部屋へ入るのは遠慮してくれないか」拝むような口ぶりだった。「見ない方がいい。母さんだって、お前にこんな姿を見られたくないだろう。母さんが器量自慢だったことは知っているね。とにかく、中へ入っても、もう母さんはいないんだ」

長年のわだかまりのせいで、エリーは彼に背を向けて、構わず部屋に入りたい衝動に駆られた。彼女は今もって、信条としてジョンに反抗する覚悟があったろうか？　いったい彼女の信条とは何か？　やつれた顔を見れば、ジョンの悲嘆に偽りがないことは明らかだった。彼はエリーの母親を愛していたのだ。彼女自身よりも深く愛していたかもしれない。そう思うと、エリーは自責の念にさいなまれた。長いこと母親が寝たきりでいた間、彼女は何度と

なく、いざという時に備えて自分の気持を確かめた。ストートンが送って寄越した写真の、輝くばかりに美しい母親を思い出すと、心の準備はすっかりできているはずであったにもかかわらず、彼女はこみ上げる嗚咽を堪えきれなかった。

彼女の動揺を見て、ストートンは慰めようと近付いた。しかし、彼女は片手を上げて義父を遮り、傍目にもそれとわかる意志の力で感情を抑えた。この場におよんでもなお、彼女はストートンの胸にすがる気になれなかった。二人は一体の骸によって僅かに繋がれた他人同士だった、とは言いながら、彼女はどこか深いところで、父親の死をストートンのせいにするのは間違いであることを知っていた。

「渡すものがあるんだ」ストートンはショッピング・バッグを掻き回しながら言った。中身のトートが入れ替った。人造革の財布とプラスチックの入れ歯のケースを見て、エリーは思わず顔をそむけた。やがて、ストートンは古びた封筒を手にして体を起した。

「エリナへ」と記されていた。母親の筆跡を認めて彼女は進み出た。ストートンは、まるで彼女が摑みかかろうとでもしたかのようにぎくりとして後退り、彼女の顔の前に封筒をかざした。

「ああ、ちょっと待った」彼は言った。「ああ、わかっている。お互い、とうとう馬が合わなかったな。まあ、それはそれとして、一つだけわたしの頼みを聞いてくれないか。封を切るのは夜まで待ってほしいんだ。そうしてくれるね？」

打ち沈んだストートンは十も老けて見えた。

「どうして？」エリーは問い返した。

「お前は昔から、何かというとすぐ、どうして？　だな。ここは黙ってわたしの頼みを聞いてくれないか。それは無理な注文というものかね？」

「わかったわ」彼女は言った。「無理な注文だなんて、そんな。ごめんなさい」

ストートンは彼女の目をまっすぐに覗き込んだ。

「〈マシーン〉で何があったかは知らないが、お前もいくらか変ったらしいな」

「そうかもしれないわ、ジョン」

★

エリーはジョスに電話して葬儀の祭司を依頼した。「ご存じの通り、わたしは不信心者ですけど、母は以前、教会に通っていましたから。それに、他の人にお願いしたいとは思わないの。義父も賛成するはずよ」

ジョスは次の飛行機に乗ると請け合った。

早目に夕食を済ませてホテルの部屋に戻ると、エリーは封筒の折れ目や潰れた角をまさぐった。封筒はかなり古びていた。母親は何年も前に手紙を書いておきながら、エリーに渡したものかどうかと迷い、ついに財布に入れたままになってしまったに違いない。一度開いて封をし直した形跡はなかった。エリーは、ストートンは中身を知っているだろうかと首を傾げた。すぐにも読みたい気持が募る一方で、何やら悪い予感がして、彼女は封を切りかねて

いた。黴臭い肘掛椅子に体を沈め、両膝を胸の下に抱いて、彼女は長いこと考えに耽った。
チャイムが鳴って、テレタイプがけたたましく印字を開始した。ファックスはヘアーガスのコンピューターと結ばれている。エリーは以前の幸せな一時期を思い出したが、今は急を要するほどのことは何もない。コンピューターが何かを拾い出したとしても、それが消えてなくなる気遣いはない。地球が何回転しようと、πが割りきれることはない。πの中にメッセージが隠されているものならば、いつまでも彼女を待っているはずである。

エリーは今一度封筒に目をやった。耳の底に残ったチャイムの音に気が散って、考えは脈絡を欠きがちだった。ある一つの超越数に重大な意味が含まれているとするならば、それは、そもそものはじめから宇宙の構造に組みこまれていなくてはならないはずではなかろうか。今、彼女が取り組んでいる計画は実験神学の範疇に属することである。もっとも、それはすべての科学について言えることだ、とエリーは考えた。

時機、コンピューターがチャイムとファックスでエリーに表示した。

エリーは父親のことを思った。正しくは、父親の姿を借りた地球外知的生物と言うべきだろうか。……銀河系に散らばるトンネル網とその管理人たち。彼らは幾百万もの惑星における生命の発生に立ち会い、おそらくは、その後の進化に影響を与えたのだ。彼らは宇宙の一部を創り、銀河系建設の途上にあるという。加えて、彼らは限られた範囲ながら、時間とトンネルを支配している。彼らは地球の宗教の乏しい想像力を超える神さながらであった。地球の宗教の枠にはおさまりきらない。その彼らにも限界

がある。彼らはトンネルを作らなかったのだ。その能力はなかったのだ。超越数にメッセージを挿入したのも彼らではない。それどころか、今もってメッセージを読み取れずにいるという。トンネルを作り、πにメッセージを書き込んだのは、彼らとは別の存在なのだ。その別の存在は、もはやこの宇宙にはいない。行先を書き残すこともなく、どこかへ移って行ったのだ。その後に、やがて管理人となる者たちが孤児として残されたのであろうとエリーは想像した。彼女もまた孤児だった。

彼女は、トンネルはワームホールであるとするエグの仮説を思い出した。ワームホールはわれわれの銀河のみならず、他の銀河系にも跨って、無数の恒星系を結び、整然とした網の目を作っているという。ワームホールはブラックホールと共通するものがあるが、その性質と発生の機構において似て非なるものである。ワームホールは質量ゼロではない。エリーがヴェガ系で見た、星間塵の重力による航跡模様からもそのことは明らかである。ワームホールを潜って数多の宇宙文明が交流し、銀河系を統合した。

ワームホール。理論物理学のこの含蓄ある術語は、宇宙を一つのリンゴに見立てたものである。何者かがリンゴの芯を縦横に貫く穴を穿ったのだ。リンゴの表面にいる微生物にとっては、これは奇跡である。しかし、外側からリンゴを眺める者の目には、さして驚くほどのことでもない。むしろ、穴を掘る虫は不埒千万でしかないかもしれない。ところで、あのトンネルを作った者たちが、そこで言うリンゴを食う虫だとすれば、われわれ人類はいったい何だろう？　エリーは考えあぐねた。

〈アーガス〉のコンピュータは、人間によると機械によるとを問わず、かつて地球上で計算されたどんな桁数をも超えて、先の先までπを計算していた。管理人たちの到達した桁数にはまだおよばないとしてもである。それにしても早すぎる、とエリーは思った。あの地図にはない浜辺でシオドア・アロウェイが語った、悠久の過去から解読を待っているメッセージがかくも手易く開顕されるはずがない。これは何かの予告かもしれない。来るべき展開の前口上か、程遠い前途への激励か。あるいは、人類が挫けることのないように掲げられた光明かもしれない。いずれにしたところで、管理人たちが今なお解読へ向けて努力を重ねているメッセージを、コンピュータが解読してのけたとは思えない。蓋し、メッセージには容易なものと難解なものがあり、それらがいくつもの超越数に織り込まれているのではあるまいか。そして、〈アーガス〉のコンピュータは運好くそのうち最も容易なものを読み取ったのではなかろうか。

銀河中心の〈ステーション〉で、エリーは謙虚ということを学んだ。地球の住民がいかに無知であるかを思い知らされたのだ。宇宙の先進諸文明の間には、人間と蟻の間に匹敵するほどの進化の階層があるのかもしれない、と彼女は考えた。いや、その隔たりはもっと大きく、人間とビールスほども離れているかもしれない。しかし、それを思って彼女は決して絶望しなかった。諦念の淵を覗く代りに、彼女は畏敬に打たれ、驚異に身を揺られた。前にもまして、彼女の憧れは脹れ上がったのだ。

それは、ちょうどハイスクールから大学へ進んだ時の気持に似ていた。まったくの苦労知

CamScannerでスキャン

ふずにいたものが、絶えず自らを律して努力を続けなくては付いて行かれなくなったのと同じである。実際、ハイスクールでは、ほとんど勉強しなくても大方の友だちに引けを取ることはなかった。大学に上がって、彼女は自分より優秀な人間がいくらでもいることを知ったのだ。さらに大学院に進み、ひとかどの天文学者として歩きだすにつれて、彼女はより大きな努力を強いられるようになり、その分だけ闘志を掻き立てられもした。いつの場合も、彼女よりはるかに優れた学究が先を歩いていた。そして、階梯を一つ登ると、そこには常に、前よりも感興をそそる展望が開けていた。この上は、何があろうと驚くことはない。エリーはテレファックスを見つめた。気持の備えはできていた。

「伝送困難。SN10未満。待機」

テレファックスは通信衛星〈デフコム・アルファ〉で〈アーガス〉のコンピュータと結ばれている。衛星の姿勢制御システムが故障したか、さもなければ、コンピュータのプログラムに混乱が生じたのであろう。他に困難の原因は、と考えかけて、ふと気が付くとエリーはいつの間にか手紙の封を切っていた。

「アロウェイ金物店」の名入りの便箋だった。タイプの活字は紛れもなく、彼女の父親が店と自宅で愛用していた旧式のロイヤルだった。右肩の日付は「一九六四年六月十三日」エリーが十五の年である。手紙は父親が書いたものではない。当時、父親は故人となってすでに久しかった。

愛するエリーへ

あなたがこの手紙を読む時、わたしはもうこの世にいないでしょう。あなたが、せめて心の片隅でなりと、わたしを許す気持を抱いてくれたらと願っています。わたしはあなたに対して罪を犯しました。あなたに対してだけではありません。真実を知ったあなたにどんなに憎まれるかと思うとわたしはとても恐ろしくてたまりません。それでとうとう、生きている間に勇気を出して打ち明けることができなかったのです。あなたがどれほどテッド・アロウェイを愛していたか、わたしはよく知っています。これはわかってほしいのですが、わたしもあの人を愛していました。今もその気持は変りません。でも、あの人はあなたの本当の父親ではありません。あなたの本当の父親はジョン・ストートンです。わたしはとんでもない過ちを犯しました。あってはならないことです。わたしは弱い女でした。でも、わたしの過ちがなかったら、あなたは生れて来なかったことでしょう。ですから、わたしのことを思い出す時には、どうか優しくして下さい。テッドはわたしのしたことを知って、大きな心でわたしを赦してくれました。そして、わたしたちはこのことをあなたに伏せておくことにしたのです。わたしは今、裏庭にいるあなたを窓から見ながらこれを書いています。あなたはそこに坐って、夜空の星のことや、わたしにはとてもわかりそうもないむずかしいことを考えているのですね。わたしはあなたのことをとても誇りに思っています。真実を知ることは何よりも大切だとあな

たはいつも言います。それで、あなたは自分自身について真実を知った方がいい、とわたしは考えるようになりました。つまり、あなたの出生の秘密です。

ジョンが生きているなら、あなたはジョンの手からこれを受け取ったはずです。ジョンは必ずあなたにこの手紙を渡してくれるとわたしは信じています。エリー、ジョンはあなたが思っているよりもずっと良い人です。ジョンと再び出会ったわたしは幸いでした。あなたは、もしかすると、知らず知らずのうちに本当のことに気付いていて、それでジョンを嫌うのかもしれません。でも、わたしにはわかっています。あなたがジョンを嫌う本当の理由は、あの人がシオドア・アロウェイではないからです。

あなたはまだ裏庭に坐っています。わたしがこれを書きはじめてからずっと、あなたは身動きもせずに何かを考えています。あなたの捜し求めているものが何であれ、いつの日か、あなたがきっとそれを見付けるように、心から願ってやみません。わたしを赦して下さい。しょせん、わたしも人の子でした。

愛をこめて
母より

エリーは一気に手紙を走り読み、あらためてはじめから読み直した。息が乱れ、便箋を持つ手はふるえた。あなたの本当の父親はジョン・ストートンです……。今日まで半生のほとんどにわたって、彼女は自分がどんな仕打ちをしているかも知らずに、生みの父親を拒んで

来たのだ。彼女が思春期の反抗心に任せて、なさぬ仲と父を罵り、父親面であれこれ言われる筋はないと当り散らした時、ストートンは何と毅然としていたことだろう。

テレファックスのチャイムがまた二度鳴った。彼女に「リターン」キーを押すように催促しているのだ。しかし、エリーの腰は重かった。コンピュータは後回しだ。彼女は父親……いや、シオドア・アロウェイのことを思った。ジョン・ストートンと、母親のことを思った。三人とも、エリーのために多くを犠牲にしたのだ。彼女はそうとも気付かず、自分のことばかり考えていた。今、パーマーがここにいてくれたら、と彼女は思った。

もう一度チャイムが鳴って、印字用紙を繰り出すキャリッジがもどかしげに、小刻みに揺れた。エリーはコンピュータに、πの中に何か手応えのあるものを見付けた場合、執拗に、かつ、斬新な表現をもって彼女の関心に訴える体のプログラムを与えていた。にもかかわらず、彼女は自身の生涯の神話を解きほぐし、再構成することに忙しかった。母親は二階の大きな寝室でデスクに向い、訥々と手紙の文章を練りながら窓の外を見やった。その目に映ったのは、思春期にさしかかって気むずかしく、反抗的な十五歳のエリーの姿だった。

母親はエリーにもう一つの贈りものを残してくれた。エリーはこの手紙によって時間を遡り、少女時代の自分自身に出会ったのだ。以来今日まで、彼女は多くのことを学んだ。それ以上に、今後学ぶべきことは山とある。

テレファックスがせっつくような音を立てているテーブルに、鏡があった。エリーはその中に、若くもなく、老いてもいず、母親でも娘でもない一人の女の顔を見た。母親たちが彼

女に事実を伏せたことは正しかったのだ。未熟なエリーは、その事実に含まれた信号を読み取るどころか、感知することすらできなかったであろう。エリーは赤の他人や外国人の段ではない、自分とはこれ以上はないほど縁の遠い存在と接触を求めて半生の努力を傾けて来ながら、実人生においては、ほとんど誰とも接触することがなかった。他人の創世神話を論難することには急だったが、自身の生存の核心をなす偽りについては露いささかも知らなかった。これまでの生涯を宇宙の研究に打ち込みながら、エリーは宇宙からの何よりも明白なメッセージを見過していたのだ。われわれ人間ごとき卑小な存在にとって、果て知れぬ宇宙の大きさは、愛によってはじめて能くこれを負うことができるということである。

★

〈アーガス〉のコンピュータは執拗に、かつ、新奇な手法をもってエリナ・アロウェイに呼びかけた。あたかも、人間の感情を持つコンピュータが一刻も早く発見の驚異と歓喜を共に分かち合おうとしているかのようだった。

★

異変は十一進法の計算にありありと顕現した。あるところを境に、0と1以外の数字はいっさい姿を消していた。ヴェガから送信されたものにくらべれば、これは他愛もないほど単純なメッセージと言ってよかった。が、統計的に見るならば、その意味するところ浅からぬものがあった。コンピュータはこれらの0と1をスクウェア・ラスタに組み替えてスクリーンに表示した。すなわち、横一行の桁数を縦に取り、その数だけ行を重ねて、正方形の格子状に数字を配列したのである。第一行は左端から右端まで、ただ0の連続だった。第二行目は、正しく中央に置かれた1を挟んで左右は残らず0だった。同様にして、さらに行数を重ねるうちに、0の間に配された1は紛れもない円弧を描きはじめた。行数が進むに連れて、見る間に単純な、そして完璧な幾何学図形が浮かび上がった。もはや疑いの余地もなかった。最後の一行は中央に1を残して、左右は両端まで0が並んだ。次いでもう一行、0ばかりの連続が画面の縁を締め括った。

超越数πの奥深く、ある秩序に従って交互に登場する数字の中に、真円が一つ隠さ

れていた。その円は今、一面の0の中に配された1の点綴としてスクリーン上に表示されている。

宇宙には目的がある、とその円は語っていた。どの銀河系におけるかを問わず、円を一つ取り、その円周を能う限り正確に測定して、これを直径で割れば奇跡が現われる。小数点以下何キロメートルにもわたって計算を続けた先に、今一つの円が隠されているのだ。なおも計算を重ねれば、さらに意味深いメッセージに出会うことであろう。人はいかなる姿容であろうと、その肉体が何から作られていようと、また、どこの世界に生を受けようと、そんなことは問題ではない。この宇宙に生きている限り、ある程度の計算能力がありさえすれば、人は遅かれ早かれこの事実に立ち至るはずである。もとより眼前のことなのだ。あらゆる物の中にこの事実が潜んでいる。それを知るために、自分の住んでいる惑星を離れる必要はない。宇宙の構造に、物質の特性に、偉大な芸術作品におけると同様、小さく記された画家の署名がある。人間や、神々や、悪魔どもを厳しく監視し、管理人やトンネルを作った者たちをもその視野におさめて、ここに宇宙の歴史を超える一つの知性が働いているのである。

円は閉じた。

エリーはついに捜し求めていたものを見付けた。

著者あとがき

わたしが知友に多くを学んでいることは言うまでもないが、本書の登場人物は誰一人、実在の人物をモデルとしてはいない。そのことを断わった上でなお、本書はSETI（地球外知的生物探索）集団に負うところ大であると言わなくてはならない。SETIは時に困難な障害に阻まれながら、宇宙からの信号を探知することを共同の目的に研究、観測を進めている世界中の科学者のささやかな集団である。わたしは、とりわけSETIの先覚者であるフランク・ドレイク、フィリップ・モリスン、故I・S・シュクロフスキーの三氏に深甚なる感謝の意を表したい。SETIは今、新たな段階を迎えて、二つの大きな計画を進めている。一つはパサデナに本拠を置く惑星協会の後援を得てハーヴァード大学で行われている、八百万チャンネルMETA／センチネル探査計画、今一つはNASA（航空宇宙局）主導のより大規模かつ綿密な探査計画である。わたしは現実の科学調査研究が新しい発見をもたらし、本書が時代遅れになる日が来ることを願ってやまない。

何人もの友人、同僚がわたしの初期の原稿に快く目を通し、また、行き届いた助言を与えてくれた。彼らの意見や批評を採り入れて最終的にまとめたものが、すなわち本書である。フランク・ドレイク、パール・ドルーヤン、レスター・グリンスプーン、アーヴィング・グルーバー、ジョン・ロンバーグ、フィリップ・モリスン、ナンシー・パーマー、ウィル・プ

ロウァイン、スチュアート・シャピーロ、スティーヴン・ソーター、キップ・ソーン以下、協力を賜わった諸氏に鳴謝する。ソーン教授は本書に描かれている銀河系輸送システムを検証し、関連する重力理論に鑑みて、実に五十行におよぶ方程式を計算してくれた。小説の構成や文体については、スコット・メレディス、マイケル・コルダ、ジョン・ハーマン、グレゴリー・ウェバー、クリフトン・ファディマン、故シオドア・スタージョンの諸氏から貴重な助言をいただいた。本書が完成に漕ぎつけるまでにはいくつもの段階を経て、長い時間を要したが、シャーリー・アーデンの周到な配慮に助けられてわたしはこの仕事をしおおすことができた。シャーリーとケル・アーデンの二人に心から感謝する。ジョシュア・レーダーバーグにもわたしは感謝を表したい。もう何年も前に、おそらくは軽い気持からだったことと想像するが、銀河系の中心に地球よりはるかに進んだ異星文明が存在するという発想を、はじめてわたしに与えてくれたのがジョシュアである。何の世界にも同じことを考える人間はいるもので、この発想も新機軸ではなかった。一七五〇年頃に、トーマス・ライトがすでに似たような考えを抱いていたのである。ライトは銀河には中心があるのではないかと最初に示唆した人物で、本書（下巻六ページ）の扉の図版は銀河系の中心を描いたライト自身の手になる木版画である。

本書は一九八〇年から八一年にかけて、アン・ドルーヤンとわたしが携わった映像の仕事をめぐる方法論から生れた構想を発展させたものである。小説の企画が軌道に乗るまで、リンダ・オブストとジェントリー・リーは何かと便宜を図ってくれた。全体の構成を固めるこ

CamScannerでスキャン

とから、作中の人物造形、仕上げの校正に至るまで、執筆中の各段階でアン・ドルーヤンにどれほど世話になったか知れない。アン・ドルーヤンに学んだことこそ、本書の執筆からわたしが得たかけがえのない収穫である。

CamScannerでスキャン

高見　浩
池　央耿

宇宙からの呼びかけに応えて今しも未知の世界へ旅発とうとするヒロイン、エリー・アロウェイは、好奇心の塊だった少女時代そのままに胸をときめかせて考える。——自分を乗せたこの〈マシーン〉は汽笛を鳴らして夜の闇を驀進する貨物列車だ。これに乗れば、人は生れ故郷のみすぼらしい田舎町を後に、輝きに満ちた大都会へ行くことができる。地球よりもはるかに進んだ異星人は果してどのような文明を営んでいるのだろうか。

異星人——地球外知的生物——との接触は天文学者エリーの長いあいだの夢だった。夢見る心こそ、彼女にとっては生命の糧であり、喜びの源泉なのだ。誰に恥じることなく夢を求めて、今エリーはオズの魔法使いに会いに出掛ける……。

★

夢見る心に促されて、人類は今やおずおずとながら地球という揺籃の外へ歩き出すまでになった。ずいぶん長い時間がかかったようでもあるし、意外に早かったとも言える。早かっ

たと見る方が本当かもしれない。宇宙の誕生から現在までをカレンダーの一年に譬えてみると、人間が登場したのは大晦日の、それも夜十時を回ってからのことなのだ。そんなに遅くやって来た人間が、もう宇宙へ飛び出そうとしている。もし、一週間なり十日なり、あるいは、ひと月前なりに宇宙のどこかで別の誰かが生れていたとしたら、今頃どうしているだろうか。そういう誰かはどこにもいないのだろうか。それとも、大勢いて人間のすることを見ているのだろうか。もしいるのなら、先に生れた分だけ知恵も進んでいるだろう。片方では、人間より後から来る者だっているかもしれない。そういう仲間たちと、人間はどんなふうに付き合うことになるのだろうか。

誰でも一度はこんなことを考えた覚えがあるだろう。誰もが考えることだけに、それ以上には発展しない疑問だったかもしれない。ところが、現実に人間が宇宙に探査の目を向けるようになって、地球外知的生物は正統な研究対象として科学の世界に市民権を得た。

本書『コンタクト』の著者カール・セーガンは現代科学の最先端に立つ天体物理学者だが、早くから人間が地球外知的生物との接触に努めることの重要性を訴えて来た。地球外知的生物は存在するのか、もし存在するならば、人類はどのような手段で彼らと交信し、どんな対話ができるだろうか。それを考えるために第一線の科学者や技術者を集めて国際会議を組織したこともある。その会議の報告でセーガンは述べている。「惑星地球上での技術的進歩の水準はまことにめざましく、地球外知的生物との接触手段はやろうと思えば手の届くところにある。……（中略）……地球外知的生物の探査は、人類に関する宇宙的文脈の探査、われ

われが何者であるか、われわれがどこからやって来たのか、またわれわれの先祖がかつて夢想したよりも拡がりにおいても持続においてもはるかに巨大な宇宙の中にあって、われわれの未来にはどんな可能性があるかについての探査なのである」（『異星人との知的交信』金子務・佐竹誠也訳、河出書房新社）

つまり、地球という小さな世界から天を仰いで宇宙のことを考えるのではなく、宇宙全体の中で、人間の立場や生き方を考えようということだろう。コンタクトが実現するならば、その地球文明におよぼす影響は測り知れないほど大きなものに違いない。一つの類比を示すならば、歴史上の文化交流ということがある。鎖国を体験した日本では、これはよく理解されることではないだろうか。鎖国は日本の悲劇だとする歴史家もいる。黒船の衝撃は、今では語り種にすぎないかもしれないけれど、その後のことを考えれば、人間の視野は広い方が良いと知れるだろう。本書に描かれた宇宙軌道ステーション〈メトセラ〉号からの地球の眺めは、外側からこの惑星を一目におさめた人間の感動をよく伝えている。このくだりと、宇宙飛行士のインタヴューを集めた立花隆氏の『宇宙からの帰還』（中央公論社）を併せ読むと、人はいまだに無意識のうちに自分が天動説に縛られていることに驚かずにはいられないと思う。視野の拡がりは人間の世界観を変えるのだ。

コンタクトを実現させるのになくてはならないものは科学・技術だが、コンタクトによって最も直接的に影響を受けるのも科学・技術の分野だろう。コンタクトそのものは、決して今日明日の出来事ではないかもしれない。しかし、すでに人間は月面に立ったし、外惑星にま

で探査の枠を拡げている。そして、それを支えた技術は日常生活にどんどん採り入れられている。科学技術の世界ではもう、コンタクトへ向けて予行演習がはじまっている、という言い方だってできるかもしれない。科学にはそうした実利的な側面があるけれども、もとはと言えば、本当のことを知りたいという人間の極く自然な、素朴な気持から出発したのだ。エリーの夢見る心である。そうして、科学は宇宙に目を向け、宇宙と人間の生命が切っても切れない関係で結ばれていることを知るまでになった。気が付いてみると、人間は自分たち自身、宇宙人だったのだ。だから、宇宙について本当のことを知ろうとするのは、自分たちの本当の姿を知ろうとするのと同じことである。

かつてルネッサンスという時代があって、人間は進んで視野を拡げる努力をした。そのために、船を仕立てて遠いところへ出掛けたりもした。大航海時代という、冒険の世紀でもあったのだ。科学も冒険も、人間の夢見る心のあらわれである。宇宙に乗り出した人間は、今再びルネッサンスの時代を迎えている。宇宙大航海時代という新しい冒険の世紀である。

そう思ってみると、本書に登場する人々は、エリーに限らず、みな、それぞれにロマンを追う冒険家であることに読者は気が付くだろう。エリーのことを救い難い夢想家と極め付ける恩師ドラムリンにしてからが、六十を過ぎてハング・グライダーやスキューバ・ダイヴィングをこよなく愛する冒険家ではないか。技術の頂点をきわめたソル・ハッデンは、現代科学の、いや、古来人類の最大の夢である不死を求めて宇宙へ飛び立って行く。第三世界の覚醒を目指すデヴィも、秦始皇陵の発掘を志す西喬木も、みな、自分を駆り立てる夢を持って

いる。宗教家のパーマー・ジョスにとって、エリーたちの科学と自分の宗教を宇宙大航海時代の視野の中で統一することは、未踏の巨峰に挑む登山家の意気込みを要する冒険ではなかろうか。つまるところ、ロマンこそは人間のあらゆる進化の原動力であり、進化とはユートピアへの希求なのである。人類が新たなルネッサンスの時代を迎えた今、ロマンはもっと叫ばれていい。だから、カール・セーガンは本書で科学におけるロマンの復権を唱えているとも言える。

二十六光年の彼方から地球に呼びかけて来る声は、人類は宇宙の孤児ではない、と語っている。地球文明はそれに応えて船出しなくてはならない。潮は満ち、風は良し、あとは纜を解くばかりである。やがて、地球文明は兄弟たちの船団に伍して宇宙の新世界を目指すことになるだろう。

★

カール・セーガンは一九三四年ブルックリン生れ。少年時代から天文学に興味を示し、図書館へ行って星の本を借りたいと言ったところ、映画スターの名鑑を渡された逸話がある。SFを耽読するうちに科学そのものを志すようになり、十二歳の頃すでに天文学者になろうと決心していたという。シカゴ大学に進み、少年時代の夢を果して二十六歳で天体物理学の博士号を得た。いくつかの大学で教壇に立った後、一九六八年以降コーネル大学教授兼同大惑星研究所長。学究生活の傍らNASA（米航空宇宙局）顧問として各種の惑星探査計画に

参与し、多大な成果に対してNASAから功績賞を、航空宇宙学の分野では最も権威あるガラベール賞等を授与されているが、特に、一九七二年に打ち上げられた宇宙探査体パイオニア10、11号に地球外知的生物に宛てた金属板の銘板を積んだことはよく知られている。また、七四年にはプエルトリコのアレシボにある世界最大の電波望遠鏡を使って、地球外知的生物向けに紹介とも言うべきメッセージを発信した。これは素数を使った暗号電報で、その構造と解読手順は本書のメッセージにそのまま活かされている。

これらのことからも想像される通り、セーガンは学者とはいえ、象牙の塔のアカデミズムとはおよそ肌合いの違う行動派である。時はその八面六臂の活躍ぶりをやっかみ半分に、アメリカ学界の顰蹙の声ありと評されたとも伝えられている。それがとんだ的はずれな言い種であることは、セーガンの多くの著書を読めば明らかだろう。セーガンは、科学は宇宙時代に生きる人間の務めであるとする信念から、一般読者向けに解説書の筆を執り、科学知識の普及に力を注いでいる。人間の知性の進化を宇宙の尺度で論じた『エデンの恐竜』はピューリッツァ賞を贈られ、『宇宙との対話』『コスモス』は日本でも多数の読者を獲得した。いずれも、その広い視野と卓抜な発想は感銘深い。近くは『核の冬』『ハレー彗星』で世界的な反響を呼び、警世家の本領を発揮した。

本書『コンタクト』は、これらの業績を踏まえてのセーガン初の小説である。先に述べた通り、科学のリアリズムを踏まえた周到な約束事であり、また、コンピュータにおける模擬実験と同様、『コンタクト』という未知の事象を地球文明に投入して、政治、経済、科

な、文章を、文体を論ずるよりも人間の心の動きを描く読みでもあろう。特に、医学・心理学の世界へ今日ますます高まりつつある世界の動きに対するダンの目配りが随所に感じられる点は興味深い。読者諸賢が本書を糸口に、自由な想像の世界に遊んで下されば幸いである。翻訳には多々至らぬ点もあろうかと思う。大方の御叱正御教示を乞う次第である。

（一九八六年五月）